# 馬鹿勇者は世界を救う？～パラレルワールドだと思っていた世界が実は異世界だった～

ノア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
馬鹿勇者は世界を救う?～パラレルワールドだと思っていた世界が実は異世界だった～

【Ｎコード】
Ｎ１４８８Ｗ

【作者名】
ノア

【あらすじ】
「あの勇者は、この国を『馬鹿』にしてしまう様な、恐ろしい脅威となる『馬鹿』なのです！！」
異世界のとある王国『ミケガサキ』に召喚された最強の『馬鹿勇者』。
どうらやら当人は、本気でパラレルワールドだと思い込んでいるようだ。

『女神』の母に『奴隷』の父!?お隣のおじちゃんが、『魔王』!?
『兵隊』の皆さんは元同級生…だよね?

王国『ミケガサキ』で起こる領土争い。徐々に世界を巻き込んで行く…。
果たして、馬鹿は世界を救えるか!?

# 第一章　プロローグ

「此処に居られましたか。女神様」

薄暗い洞窟の中、ガチャンガチャンと金属の擦れる音が響き、やがて止まった。

ピチャンッ…と、雫が落ちて洞窟に響く。

「あぁ…！カイン！貴方でしたか！！」

女神様と呼ばれた女性が振り向いて、カインに近寄った。

艶やかな黒のウェーブがかかった髪がふわりと揺れる。

「どうしたのです？顔色が悪い。『例の儀式』は失敗してしまったのですか？」

カインは真面目な顔をして訊ねた。女神は力なく首を振る。

「いいえ…！成功しましたわ。あぁ！何て事なのでしょう！私は女神として失格だわ！」

顔を覆いながら泣く女神に、どう言葉を掛けて良いか分からず、カインは頭を掻く。

「何をお嘆きになる必要が御座いますか。貴女様はご立派にその大義を務めていらっしゃいます。

『例の儀式』が成功したのならば、さっそく式典の準備を整えましょう。我が『ミケガサキ王国』の復興の宴を」

「私とて、大義を果たせたことは誇りに思いましてよ、カイン。しかし、私は愚かです！よりによって、あんな『勇者』を呼びだすなんて！！」

取り乱す女神を、カインがなだめる。

「さっきから、どうしたというのです？一体、どんな『勇者』を召喚なさったのですか？

我が王国に置いて、脅威となりうるのですか？」

「えぇ…。あぁ、何て事…」
ごくりとカインは唾を呑み込む。
女神がこんなにも取り乱すほどの『勇者』とは一体、何者なのだ…？

「『馬鹿』なのです！！とてつもない…、今まで生き残れたのが奇跡の様な、絶滅希望種…。
あの勇者は、この国を『馬鹿』にしてしまう様な、恐ろしい脅威となる『馬鹿』なのです！！」

『馬鹿』を物凄く強調した女神の悲痛な叫びが、洞窟に木霊した。

＊＊＊＊＊

三嘉ヶ崎（みけがさき）市。

「くしゅんっ！おかしいな、風邪か？おぉ！生まれて初めてだ…」

ごく普通の毎日で、毎年変わらない夏休みだった。

田中優真。
高校三年生、誕生日は一月二日。十七歳。
ごく普通の何処にでもいる様なゲーム大好きの学生である。

「あれ、いつの間にこんな暗くなったんだ？あっ、夏だからか。冬は明るいよな、この時間帯」

そして、正真正銘の馬鹿だった。
当然補習生なわけで、今は帰宅途中。
学校から家までおよそ五分。坂が無ければ二分ほどで着ける近さだ。

現時刻七時くらい。
毎年呼ばれるのだが、何故か毎年覚えたことを忘れていると言うから先生方のストレスは留まることを知らない。
故に、一から教え直すと言うのも中々面倒な訳で、しかも相手が正真正銘の馬鹿であるから達が悪い。
毎日、朝早くに登校し夜遅くに下校するというのが彼の毎年やって来る夏休みの日課だった。
ちなみに留年今年で五回目。来年でレッドカード。
つまり、先生たちが待ち望んだ退場（そつぎょう）というわけだ。

彼の卒業式には過去彼と同じクラスだった五年間に及ぶ元同級生達が揃い、『正真正銘の馬鹿で証』を贈呈する手発になっている。
その後の二次会では『日ごろのストレス込めて☆顔面に思いっきりパイを投げましょう』が密かに企画され、先生方の惜しみない協力により実行へと移されようとしていた。

何だかんだで、人望ある馬鹿なのだ。

「ただいまーって、陽一さんまだなのか。じゃあ、ゲームでもやるか。折角居ないことだし。
あー、エアコンタイマー予約し忘れた。珍しー」
お前の頭の方が余程珍しい。

いつもの様にテレビの前に設置してあるゲーム機に、一礼してコントローラーを握る。
指定席と化してあるソファーに腰かけた。コントローラーを握る手に力が籠る。
優真が今やろうとしているゲームはつい先日発売したばかりの『勇者撲滅』というゲームだった。

「スイッチオン！」

ポチッとゲーム機の電源が押された。
それと同時に、ソファーの下に魔法陣が描かれる。
彼の言葉が合図だと言わんばかりに、眩い光を放つ。

ガタンッ…と、持ち主の居なくなったコントローラーは床に落ちた。
テレビ画面は、『勇者撲滅』が表示されている。

「ただいまーって、あれ？」
義父、陽一郎が帰宅。
しかし、辺りは静まり返っていた。
寝てしまったのかと首を傾げながらリビングへ向かい、その光景を目の当たりにして呟く。

「優真君とソファー、何処行ったんだろう？」

物足りないリビングを見まわし、陽一郎はオウムの様に首を傾げるのだった。

# 第一章　プロローグ（後書き）

思いついたんで、書いてみました。暇な時、更新していく予定です。

# 第一話　召喚はオプション付き

「……」

ゆっくりと、目を開く。

あっ、コンタクト落した。前が見えない…。

というか、何か物凄く視線を感じます。

状況を整理したいのですが、その前にもう一度。前が見えない。

取りあえず立ち上がって、服にひっついてないか確認しよう。

あっ、やべ。立ち眩みだ。えーと、こういう時は、頭を下にするんだっけ。

周りから歓声があがる。

あっ、何か蠢いているの人なんだね。良かった、良かった。

…いやいや、何一つ解決していないぞ。家はいつから霊が住み着くようになりましたか？

しかも、何か霊も家内も豪華になってるよ。変わってないの、僕とこのソファー。

亡者に負けたよ、惨めだね。

しかし、よくよく考えてみればそんなリフォームなんて金は一銭たりともない。

そんな金があったら、我が家は毎晩焼き肉パーティだよ。

定員二人だから、寂しいけど。盛り上がりの欠片も無い。

何か、此処にいる人々全てに負けた気がする。

ドッキリ！にしては看板が見当たらない。というか、あっても見えない。

僕は家でゲームをやろうとしていたはずだ。
ということは、この状況がそれなわけで。
つまりはだね。

これが最近流行りの『体験型アクション』なんだよ。
此処は、『勇者撲滅』の世界の中なのか。なんてハイクオリティーなんだ！

いや、待てよ…。ということは、怪我とかしたら結構痛いんじゃないか？
ヤバいな。何の装備も無い。普通のゲームだとボロい剣とか装備してるものだけどな。
唯一装備している物といえば、家のソファーだ。
敵に襲われたら確実に死ぬ。うわっ、絶対痛い！
コンタクト何処だよ？やっぱり眼鏡にするべきだったか？

…ん？制服に着いてた！やっぱ、日ごろの行いだね。
これで、一安心。今なら、無敵な様な気がする。

まぁ、ゲームの流れ的に。
召喚からのザコ敵出現、そして戦闘で勝利し仲間と出会う…ってところか。

『優真様、危ない！』

おー、名前まで自動登録されてるのか。
凄いな、最新作。

…って、え？危ない？というか、なんか向かって来てない？物凄い

速さで。
いや、コンタクトしてても目に追えないくらいの、とんでもないのが。

待て待て、落ち付け。アレは何？
というか、このままじゃ確実に…。わざわざ警告されたし。
難易度設定させて！簡単に設定させて！無理なら、せめて装備くれ！

「死ねぇぇぇぇーーー！！」

死ぬぅぅぅぅーーー！！

さっきの無敵発言撤回させて！
ザコどころの騒ぎじゃねぇ！
何アレ、絶対章の終りとかに登場するラスボスだから！本気で死ぬから！
ちょっ！丸腰相手を殺るなんて、あんたのポリシーはそれで良いのか！？
ほんとに待って！話せば分かるって！一秒くらい待てよ！え、えっと…こういう時は…。

あっ、そうだ！こういう時こそ、あの呪文だ！
ほら、鬼ごっこで使うアレだよ！十秒しか持たないあの呪文！
腕をバツ印に構えて…。

「た、タンマッ！！」

あっ…、けど、タンマ無しって言われたら確実にゲームオーバーだな。
完全死亡フラグ。乙。

優真の瞳がキラリと光る。
すると女の足元に魔法陣が浮かび、瞬時に火柱が上がる。

「あ、あれは…、あの魔法陣は『ビィーネの業炎』！
妖魔ビィーネが、罪人を焼き払う時に使われた地獄の業火…」
別の女が叫ぶ。

解説する暇あったら、助けろよ。

もう一つツッコミいれるなら、初期装備がすでに最強じゃねぇか。
『魔眼』でしょ、これ。

主人公とかがさ、二十から三十くらいのレベルで獲得するアレ。
最初、主人公『剣』しか使えないんだけど、『魔眼』によって相手の攻撃下げたり魔法使えたりする地味に便利なスキル。この場合は装備に分類される。

僕、説明読まない派だからさ。まさかこんなのが初期装備とは…。
今までの常識を覆したな。流石、最新作。

「って……誰か、水持ってきて！燃えてるって！火だるまになってるって！
ゲームの世界だけどリアルだな、おい！」

つまりこのゲームは、バーチャルリアルに分類するのか？

……。

ぎゃぁぁぁーーー！陽一郎さんに怒られる！

あれだけ、バーチャルリアルは止めろって言われたのに！
グッバイ、ゲーム機。中古屋に売られても達者でな…！

「大丈夫です、こいつは唯の幻影。元から命なんてない」
「え…、そうなんですか。ご親切に、どうも」

何か騎士っぽいのが来たな。というか、騎士だ。
鬱陶しくないのか？その長い髪。せめて結べよ。

なんか、流されてるけど…。
職務怠慢じゃね？

ドヤ顔で来るなよ。お前の手柄じゃないし。
アレですか、所詮は他人事ですよみたいな。脇役には関係ないみたいな。

「ご無事ですか、勇者様！」
「職務怠慢だな。カイン次期騎士長候補？」

あっ、一人増えた。
こっちの方が真面目そうだな。しかし、戦地では目立つだろ、そのツンツン赤毛。

「…申し訳ありません。ゼリア参謀長」
「ふんっ。それでは、式典を再開しましょう」
「…いいえ、女神さま直々の命により、式はこれにて閉幕だそうです。勇者様には私から説明しておきます」

ゼリア参謀長、眉間にしわを寄せて舌打ち。

くるりと向きを変えたかと思うと、深い青みがかった夜色の髪をなびかせて去って行った。
残されたカイン次期騎士長候補は深いため息をついて僕を見た。

「騎士隊長カイン・ベリアルと申します。よろしく」
「どうも。田中優真です」
カイン隊長は、うーんと唸ってからまじまじと僕を見た。
「馬鹿には見えないが…。歳はいくつだ？」

おっと、いきなり敬語外れましたね。隊長。
馬鹿に払う敬意はないと言語で示しましたか。何この世界、馬鹿に対する嫌がらせ？

「永遠の十七歳。来年でやっと十八に。ちなみに今年で留年五年目」
「正真正銘の馬鹿か。まぁ、良いか。説明始めるぞ」

「の前に、此処何処？なんて国なの」
「それを今から説明するんだろうが。此処は『ミケガサキ王国』。お前はこの国どころか、世界を滅ぼそうと目論む魔王を倒すべく召喚された勇者様なんだよ。馬鹿だけどな」
「りぴーとあふたーみぃー…じゃなくて、あぁ、いいや。もう一度」
「だ・か・ら、お前は魔王を倒すべく召喚された…」
「…の前。何処だって？」
「『ミケガサキ王国』だが…？」

『ミケガサキ王国』。
漢字に直すと、三嘉ヶ崎だよね。
つまりは、此処はゲームの中じゃない。

「パラレルワールドに、来たぁーーー！！」

「ほんと、馬鹿だな。お前」

# 第二話　形見を買いにＧｏｉｎｇ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｈｅｌｌ

どうも、田中優真です。
現在、市場へ向かっています。

ミケガサキには海がある。いや、三嘉ヶ崎にもあるよ。パラレルワールドなんだから、地形は同じだ。
まぁ、僕の家からは反対方向だから行ったこと無いけど。

毎週日曜は市場を開き、新鮮な魚とか果物とかその他色々売るらしい。
地域のお祭りしか行ったことのない僕にとっては新鮮な光景なんだろうな。

「カイン、私服他にないの？」
「何を言っている。いつ戦闘になっても良いように万全な装備でなくては危ないだろう」

ガチャン、ガシャン…と金属の擦れる音が響く。
うん、騎士だからね。別に良いんだよ。それは。
ただ単に、ワイシャツに制服のズボンで歩く自分の姿が惨めだっただけさ。…ふっ。

何故市場に行くか？
それはもちろん『勇者の形見』を買うために。
ゲーマーとしてはね、別にそれは良いんだ。
市場には興味あるし、勇者の遺物とか王の冠とか売っててもおかしくない。むしろ、嬉しい。だが、問題は此処からだ。

カインに聞いたけど、僕の前にも当然ながら勇者が召喚されていたらしい。
だが不慮の事故により命を落としたそうだ。
二日程前に。

売り払うの早くね？
普通なら大事に保管しておくと思うぞ。

「何、呪いでもかけられてたの？」
「…いや、まぁ、そんな感じた」

どんな感じだ？
二日で売り払うくらい達の悪い形見を使えと？

「ほら、着いたぞ。ミケガサキ王国第三十一区。巷では結構有名な市場だ」
「おぉ…！」

風に乗って運ばれてくる潮の匂い。何処からか聞こえてくる汽笛の音。
青い空に白い雲。風を斬るように羽ばたくカモメの鳴き声。
何処からか色とりどりの紙吹雪が舞い降りて市場を彩る。
白をモチーフとした建造物の数々に、その隙間から覗く広大な海。

所々に出店が並び、港町らしいマリン色のストライプ柄の屋根で統一されていた。
「もしかして、酒場とかもある？」
「そりゃ、港町だからな。当然ある。…だがお前、未成年だろ？酒は飲めないぞ」

ちっ…。流石パラレルワールド。その法律は健在か。

「いやいや、酒は飲めずとも写メは撮れる。一度でいいから拝みたい！」

「写メ？」

「こっち、携帯無いの？ほら、これこれ。此処にカメラが付いていて、どりゃ」

ピロリロ～ンという音が鳴り、シャッターが切れた。

さてさて、向こうでは何円で売れるか。

「ほれ」

「ほぉー…。映しの魔術か？凄いな…。機会に魔術が可能になるなんて。

何処に魔法陣を描いているんだ？」

カインが携帯の画面を覗きこみ、驚いた様に言う。

「魔法陣？いやいや、あー…説明できない。魔法じゃなくて、文明の利器。科学の進歩ってこと。

こっちでは、そういうの無いの？」

「そうだなぁ…。映しの魔術は無理だが。例えば…」

カインは少し考えた後、じっ…と腰に差してある自分の大剣を見つめた。そして、片手で持つ。

すると剣はたちまち紅蓮の炎に包まれた。

「この剣は『魔力魂』っていう結晶から作られた剣で、持ち主の意思でこういうことが可能になる。

ほら、あれ見てみろ」

「すげぇ。女なのに怪力だな」

カインが指差す先には、木箱を積み木のように積み上げてそれを片

手で運ぶ女性が居た。

「あれは、手の甲に増倍の陣を描いているから成せることだ。人には誰にでも魔力がある。それを魔方陣で以って具現する。そして、ああいう風に作用する。その魔力の塊が『魔力魂』ってわけだ。滅多に手に入らないから希少価値が高い」

「こっちのミケガサキは魔法とか非現実的なのが発展してるんだね」

「そっちの三嘉ヶ崎は科学が発展してるんだろう？こちらからしてみれば、そっちの方が非現実的だ。平行世界とお前は言っているが、これが未来の姿かもしれないぞ」

燃料資源が全て枯渇し、ミケガサキ王国を含める国々がパニックに陥った。

我先にと資源を強奪すべく争いが次々と起こり、新しい開発途中の資源である『魔力魂』という結晶を用いて戦争は幕を下ろし、人類は新たな一歩を踏み出した。

「未来ね…。けど元から超能力や魔法使いはいたんでしょ？今まで使っていた資源がなくなって一時的なパニックを起こしたに過ぎないよ。人は皆闘争心があって、そういうパニックとかが起こるとそれが剥き出しになる。だからこっちのミケガサキはさ、始めからそういう魔法が発展した世界としてあったんじゃない？」

僕なりの解答を述べてみたのだが、何故かカインがすげぇ驚いてるんだよね。

馬鹿だって哲学的な事も考えたりするんですよー。

「実は馬鹿な振りしているだけだろう？」

「頭良かったらとっくに卒業してるよ」

「馬鹿はあそこまで考えつかん」

「カインさ、僕のこと物凄く軽んじてるよね。カウンセラーの先生がそう言ってたんだよ」

ぱちくりとカインは瞬きを繰り返す。

「カウンセラーに掛かる程の事があったのか？」

「唯単に、僕が馬鹿だっただけさ。『馬鹿は風邪ひかない』ってことわざがあるでしょ？あれはさ、風邪ひいたのに気付かないだけで、ひいてないわけじゃない。それと同じだよ。

…にしても何処に売ったのさ、その形見」

「あー…、闇市」

ぼそりと呟く様に言われた言葉に硬直する。

聞きましたか、奥様。闇市ですって。連写の準備ですわ。

心霊写真はいくつ手に入るかしら？

「それは、つまりアレですか。そんな危険な代物を僕に持たせようとしてるわけですか」

「仕方がないだろう。勇者の形見じゃないと魔王は倒せない」

その発言は僕に死ねと言っているようなものだぞ。

「もしも死んだら元の世界に帰れたりするの？」

「いや、そのまま臨終だ」

捨て駒じゃね？

勇者の扱い軽くないか、こっちの世界。

「魔王倒した後のメリットは？」

「元の世界に帰れる」

うん、確信した。
勇者＝捨て駒。
いらなくなったらポイッ。

「ほら、これ被れ。あと、絶対逸れるな。…そして、魔眼は使うなよ。絶対に」
カインから渡されたのはボロ布のマント。
着心地はごわごわ。例えるなら、紙やすりだな。肌が切れるぞ、このごわごわ感。
まぁ、闇市だからね。奴隷商とかうようよといるもんね。

闇市の入口は果てしない闇に覆われていた。
隙間から通り抜ける風が不気味な唸り声をあげる。

「闇市は地獄と思え。生きて帰ってこれる運があるといいな」

ごくりと唾を飲み込み、汗ばんだ手の平でマントを掴む。
そして一歩踏み出した。

# 第三話　魔王召喚しちゃいました

ファァァーーーン！！

何処からか響くラッパなのかシンバルなのか分からない楽器の音が『闘犬場（コロセウム）』に響いた。
音が止むと同時に始まる歓声と言う名のデスコール。
僕の前に立ちはだかるのは、茶色のロングコートに身を包んだ顔にタトゥー入った筋肉ムキムキハゲ。

正直に言おう。
「勝てる要素無くね？」

何故僕がこんな所にいるかと言うと、時は一時間ほど前に遡る。

「カイン、何処に売ったのさ？」
「売ったのは俺じゃない。だが、噂によると、どうも『闘犬場』の優勝賞品にされたらしい。
だが、困ったことに『勇者の形見』は勇者であるお前じゃないと触れるのは無理だ」

いやいや、その設定は初めて聞いたぞ。
こじ付けだろ、そうだろ。
何だかんだで出たくないんだろ、お前。

「僕に出ろと？コントローラーしか握った事の無いこの僕に」
「自分の非力を自慢するな。ということで…、召喚の方法を教えまーす」

超棒読み。
カインは道端に落ちていた木の枝を握ると円を描き、その中に五芒星を描いた。

「そして自分の血を流し、『召喚』と言えば自身の魔力に相当するだけの何かが出てくるだろ。
ちなみにお前、勇者ってことでいきなり決勝戦だから」

そこまでやれるなら、賞品盗めよ。

「で、僕が死んだらどうなる？」
「その点なら心配するな。次の勇者を召喚するまでだ。潔く逝ってこい」

勇者の扱い酷いだろ。滅ぼすぞ、この世界。

で、今に至る訳。

「始めっ！！」

あぁ、始まっちゃった…。

「死ねぇ！」
「だが、断る！！」

円を描いて…、あっ、ブレた。まぁ、良いか。
五芒星…描いたことないな。唯の星で良いか。あぁ、星でもないな、これ。
最後にカインから貰った小刀で腕をえいっと…。

あわわわ…、思った以上の出血だ。この量ヤバくね？大量出血の部類じゃね？
だって、五芒星が見えなくなってるもの！！円一杯に並々と満たされてるもの！！

「おーっと！何と言うことだ！勇者の魔法陣が血塗れだぁー！一体何を召喚する気だ！？」

僕が聞きたいくらいだよ。
というか、何か召喚する前に僕が昇天する。

「とりあえず、何か『召喚』」

ははははっ！来れるものなら来てみろよ。…色々な意味で。

目の前まで来ていたハゲの姿が暗闇に飲まれる。
というか、『闘犬場（コロセウム）』全体が真っ暗だ。

ま、まさか…。照明落しただけ？
まぁ、僕に魔力なんてものは存在しないからね。多分。
照明消せただけでも良しとしよう。

「大丈夫ですか、勇者様」

鈴の様な声。
頭を上げると、黒髪の美女が立って僕に微笑みかけていた。

「はぁ…、大丈夫、だと思います」
「まぁ…。お顔が真っ白よ。けど、そこまでして下さったからこそ、私を呼びだせたのね。

私は『死の夜（ノワール）』。魔王の娘。勇者様に呼ばれるなんて驚いたわ」

透き通るような白い肌。紫色の瞳。上品な漆黒のドレス…ゴスロリだっけ？

微笑みかける姿は乙女の様に可憐で麗しい。…って、乙女だから当然か。

にしても、最後。

聞きづてならないことを聞いたぞ。

魔王の…娘？

「僕、ピーンチ！」

「あら、大丈夫よ。父さんじゃないから、殺したりしないわ。だって私、彼方のこと好きになってしまったんですもの！」

わぉ、いきなりの告白。

生涯初の告白が魔王の娘からとは…。やるな、僕。

「問題はここからよ。彼方は、父さんも呼びだしてしまったの。でも、私が何としても彼方を守ってみせるわ！」

何と勇ましい…。

けど、こういうタイプ割と好みです。はい。

「『死の夜（ノワール）』…。何処だ？」

「「！！！」」

こ、この声は……！！！

暗闇から『魔王』が姿を現す。
髑髏の首飾りにノワールと同じ漆黒の髪を後ろで一つ結びにしている。
威厳を表した鷹の様な鋭い金色の目。

「間違いない！吉田さん！！」
「…誰だ？」

訝しげに眉をひそめる吉田さん…じゃなくて、魔王。

そっかぁ…、こっちの世界の吉田さんは『魔王』かぁ。天職だね、僕個人の意見だけど。
母辺りを期待してたんだけど、これはこれで良い。
吉田さん、近所のおばさん達には評判いいからね。

吉田さんは僕の家のお隣さんで、陽一郎さんの酒飲み仲間。三十一歳のおじちゃん…いえ、お兄さん。
職業は宅配屋で煙草愛好家（ヘビースモーカー）。
仕事中はにこにこしてて怖さの欠片もないけど、一端オフモードに入ると超怖い。

「吉田さ…いえ、魔王様。写メ撮っても良いですか？ほら、ノワールも隣に並んで」
「写メ？…勇者にそんなことをお願いされたのは初めてだ」

困惑を隠しきれずにそっと娘を傍に寄せる魔…吉田さん。あっ、間違えた。魔王様。
うんうん、吉田さんに後でメールで送ってやろう。喜ぶ…か？
いや、しかし…念願の再会というか娘の成長が見れたわけだし。

ピロリロ～ン…。

「ありがとうございまーす」

保存してから、メール画面へ。本文書いて、ほい、送信。

…電波届いてんのか、こっち世界。

「用は済んだか？」

「あっ、大丈夫です。お忙しい所ありがとうございます」

ふぅ……、この勢いでお戻りください。吉田さ…いえ、魔王様。

「いいえ、お父様！まだ、済んでおりませんわっ！」

そう言って僕に駆け寄るノワール。

そしてぎゅぅぅぅーと抱きついてきた。

僅かに魔王様の眉間に皺が寄るのを僕は見逃さなかった。

やめて、やめて。空気呼んで！あれは吉田さんが少しイラついている時にする表情だから！

「私達、結婚しますっ！」

待て！それは僕が言うべきセリフでは！？

いや、そうじゃなくて、とにかくそうじゃないだろ！

何とか弁解するんだ、僕！お前はやれば出来る子だ！

「必ず幸せにしてみせます！」

だからそうじゃなーい！いや、そうなんだけど。セリフを間違えて

る！
何を口走っているんだ、僕！

「その死にかけの人間勇者がか？笑わせる」

にやりとノワールが笑う。
うわっ、素敵過ぎる。鼻血出るかも。

ノワールの顔が直ぐ側まで近付き、唇が重なった。

あれ、僕。今、キスしてる？

# 第四話　吉田雪

あれ、僕。今、キスしてる？

口の中、鉄の味する。

そーいや、僕の友達。初キスはトンカツの味がしたらしい。…どうでも良いけどね。

唾なのか血なのか分からない液体をそのまま飲み込む。

一気に血圧が上がった気がした。

「ほぉ…。娘に手を出すとは、余程死にたいようだな」

いやいや…見てたでしょ、吉田…いえ、魔王様。

あー、もう面倒いから吉田魔王様でいいや。

手を出したの、彼方の娘ですよー。

というか、意外に親馬鹿なんだな、吉田魔王様。

「さぁ、優真。剣を…」

「……。」

そしてもう一つ。

うーん、さっきからノワールの姿がやけにあやふやなんだよね。

はっ……、実は蜃気楼？

全部夢オチ？

いやいや、これだけ死にかけて夢オチはない。

なんだろ、このもやっと感。

「どうしたの？今、見ている姿が優真の望む姿なのよ？」

いや、そうなのかもしれないけど。
今、僕の目に映っているのは真っ黒な人型の影。

僕ってこれを望んでいたのかな…。何か悲しいね。
いや、元から地味だけど、影になりたいなんてことは断じてない。
空気にはなったけどね。

「『死の夜（ノワール）』、どうやら勇者は気付いた様だぞ。その魔眼もお飾りでは無い様だな」

マジで！？
何で分かるんだ、吉田魔王様！
うわー、恥ずい…。こんな姿が僕の願望なんて…。
他言無用でお願いしますよー。

…というか、『魔眼』がお飾りなんて、すげーファッションセンスだな。
こっちでは普通なのか？
それとも魔王クオリティーの高さから来るものか…。
うん、絶対そうだな。

「あら…残念ね。せっかくご馳走が頂けると思ったのに…。見た目より馬鹿じゃないみたいね」

いえいえ、馬鹿ですよ。喰っても美味しくない。きっと、カビの味がする。

まだ人面パンを食べたほうが良いと思う。あのヒーローは自ら進んで喰われに行くぞ。

見た目よりって、そんな一目で分かるほど馬鹿オーラ丸出しですか、僕。

「勇者に一目会えただけでも良しとするか。帰るぞ、『死の夜（ノワール）』」

会えただけでも…って、僕が召喚したんだけど…。

偶然だけど、故意ですよー。

そんなことはお構いなしに魔王達は黒い霧と共に去って行った。

さて、ハゲ筋肉君とその他諸々は無事かな。

無事じゃなかったら色々と困る。

ハゲに至っては無事だったら、僕が困る。

照明が会場を照らす。

あー、久しぶりの光だ。何か安心。

「うーん、これは皆さん無事なのか？やけにぐったりしてるぞ。ハゲは泡吹いてるし。

蟹なのかお前。水が無いと生きられないのにわざわざこんなところに腕試しに…。

何だかんだ言っても吉田魔王様、ちゃんと助けてくれるから偉いよな」

うんうんと一人納得していると、カインが入り口から猛スピードで向かってくる。

「これって勝ったことになる？」

「この馬鹿が！何処の世界に魔王を召喚する勇者がいる！？とっとと剣頂いて帰るぞ！」

此処に居るじゃないか。魔王を召喚した馬鹿な勇者が。
まぁ、この人達が記憶喪失になることを切に願うよ。…無理だけど。
いや、だけどマジで。

チカッ…。
瞳が光る。観客達の足元に魔法陣が浮かんだ。
あー…、やっちまった。
発動しちゃったよ、『魔眼』。

「まぁ、今回は大目に見てやろう。さっさと帰るぞ」
「あー…、何か凄く疲れた…。吉田魔王様とその娘召喚しちゃうし……。けど写真撮れて良かった」
「吉田魔王様？その娘って『死の夜（ノワール）』か？」

驚いた様にカインが僕を見てきた。
「そうそう。ノワールって言ってた。キスされちゃった。五分で別れたけど」
「お前、よく死ななかったな。あれ、死喰い人だから相手の望む人を見せて惑わせ、魂を吸うんだ。
本来の姿は人形の影と言ってたが見たことないから何とも言えないな」

わーお。
凄いな、僕。
にしても、昔から人じゃないものに好かれるよな、僕って。

「相手の望む姿かぁ…。道理で似てるわけだ。僕の記憶があやふや

だったから完全にその姿じゃなかっただけで…」
「おっ、何だ。彼女でも見たか？」
「うーん、彼女っていうか。初恋の人っていうか…。今はさ、行方不明なんだけどね。僕が中学の頃だったかな、突然居なくなった。吉田雪って言って、吉田さんとは全然似てない」

その名前が告げられた途端、カインが固まった。
「吉田、雪…。知り合いだったのか、お前」
「うん。お隣さん。カイン、知ってるの？もしかして、こっちの世界に来てたりする？」

「お前が来る前の『勇者』だ」

つまりは、この二日目に売却された剣の前の持ち主。
二日前に死んだ勇者。それは、雪ちゃんだったんだ…。

＊＊＊＊

「おいおい、お前が弱ってちゃ話にならないだろ」

カンッと缶ビールが机に乱暴に置かれる。

三嘉ヶ崎、吉田宅。

「誰も見てないって言うし、先生たちも補習から帰ったのが最後だって…。
けど、少し安心したのあ…優真君、ソファーごと居ないんだねー」
「大丈夫か、よーちゃん。あー、大分酔ってんな…。ほれ、これ優真から届いたメール。

一応は無事みたいだぞ」

本文

今、パラレルワールドに来てまーす。
ほら、証拠写真！結構似てるよね。

「あー…、コスプレしてる吉田さんだー。この隣の子、確かに、雪ちゃんに似てますねぇー」

にこにこと笑いながら写真を見る陽一郎。

「雪ちゃんもそこに居るんでしょうかね…？」
「此処、唯でさえ行方不明者多いからな…。優真の馬鹿が乗り移ったわけじゃないが…、本当に此処では無い世界に呑まれちまったんじゃないかって思う時がある…。早く帰って来るといいな…」
「優真君も雪ちゃんも、しっかりしてますから、大丈夫ですよ…。私達は、頑張って待ちましょう。歯がゆいですが…それしか出来ませんから」

## 第四話　吉田雪（後書き）

ちょこっとシリアスにしてみました。
次回は多分、ボケる。

# 第五話　優真武勇伝

「剣も手に入ったことだし、訓練でもするか」

まぁ、いつか言われると思ったさ。

何とか優遇してもらった僕の家。住み心地抜群です。
ゲーム機あればもっと良いんだけど…そこは仕方がない。

何か、初めてこの世界において勇者の優遇が起こった気がする。
というもの何の偶然か、この世界において我が家に住んでいた住民が二日程前に他界したらしい。

うん、雪ちゃん。君、此処に住んでたね？君のお家は隣だよ。

ゲーム機の置いていない我が家は実に殺風景だ。
取りあえず僕の指定地に、僕に巻き込まれて召喚されたソファーを置いてみる。
台所とか風呂とかは元からあるので一安心だ。

「別にそれは良いよ。だけど、どうしても解せない」
「何が？」

カインが不思議そうに僕を見る。
僕は溜息を吐いて、カインを二階の部屋に連れて行った。
奥の部屋の前に立ち、無言でドアを開ける。

「三嘉ヶ崎では、此処が僕の部屋なんだけど…」

「おかしな所なんて何もないぞ。ちと、殺風景だが…。普通の部屋だ」

「うん、普通の部屋。本来ならこの本棚にはゲームのカセットが並んでるのだけれど、集めようが無かったんだね…。ベッドの位置からカーテンの柄、本棚の角度まで見事に再現されてる。雪ちゃんが家に遊びに来ることはたまにあったけど、僕の部屋に入ったことないのに何で知ってるんだろうね…」

「……それは、恐いな…」

雪ちゃん、恐ろしい子っ……！

まぁ、そんなような会話をしながら傭兵所へと続く坂道を下る最中です。

此処ミケガサキは、唯一魔王の支配から逃れた国らしく、世界各国から我が物にしようと企む輩に狙われるらしい。

と言っても、ミケガサキの戦力は支配下にされて逃げてきた丸腰の兵たちが敵う程弱くは無い。

よって、市場がある場所とか、皆が住む住宅街とかを狙うらしい。

それらの小分けされた土地は『領土』と呼ばれ、場所により人気が異なり、警備の数が増減する。

今回向かうのはランクBの成り立ての兵士達の訓練場という訳だ。

ちなみにランクはD～S。

城とか王宮とかはもちろんSランク。兵士の数は万越えとか…。

おかしいな、そんなにミケガサキの人口って多かったっけ？

まぁ、それくらい多いってことだよね。

「傭兵場か…。ゲームでは見れない場所を拝めるなんて、夢みたいだ…！」

「撮影は禁止だぞ。目に焼き付けておけ。あそこの教官は怖いから大人しくしとけよ」
「了解！！」

ゲームによっては、鍛え方とか性格次第でステータスが異なるっていうシステムがあるじゃない？
そのシステムが生でしかも本物の鎧とか剣とかまで見られるんだよ？な、何てすばらしいことなんだ。

こっちのミケガサキはゲーマーの聖地だ！

「そういや、ゲーム好きなんだろ？どういうジャンルが好みなんだ？」
「アクション一筋だよ。ストーリー要素とかのやつはさ、皆、キャラ目当てとかストーリーを重視するでしょ？僕はそうじゃなくて、装備とかさ、どれだけダメージを与えられるかとか…何て言うんだろ、どれだけ設定が充実しているか、かな…。とにかくそういうやりがいのあるのが好き。
バーチャルリアル何て結構面白いんだけど、陽一郎さんああいうの嫌いみたいで…。禁止になった」

ちょっとしょんぼりしながら言うと、カインは苦笑する。

「お前、戦闘とか向いてそうだな。狂人者とか言われそう」
「うん。陽一郎さんもそう言ってた。目がマジだって。だから駄目だって…」

「…にしても、よく約束守ってるな。それだけ熱意があるのなら買い戻ししそうだが」
「そうしようと思ったけど…陽一郎さんの方が一枚上手だったよ。

ゲーム機を含めて全部売った」
「…本気を出したな」
「僕もそう思う」

あー、早く着かないかな。
傭兵所ってどんな場所か見てみたい。
やっぱり抜け出せない様にそれなりの警備がしてあって、柵とかに障ると電撃走ったり…。

「ほら、着いたぞ」
「こ、此処はっ……！！！」

もう、オチが分かって来たよ。
久しぶりだね、我が母校。

まぁ、確かにさ…校門とかの柵を跨いで入ると警報は鳴るし、火事とか起きたらスプリンクラーが稼働するよ？そうそう壊れるような建物じゃないし、非常食だってある。

「やけにテンションが低いな？」
「…何となく、坂道下る辺りから予想してたからね…」

カインが門の前に立っていた兵士に何か話し、兵士は敬礼すると快く門を開けてくれた。

これで兵士たちが制服とか着てたらどうしよう…。
シュール過ぎて泣く。

「さて、俺は教官に話してくるから、お前はこいつらにでも案内してもらえ」

カインはぽんっとすぐ横に居る兵士の頭に手を置く。
「案内頼んだぞ」
「は、はいっ！」

またもや敬礼してカインを送り出す兵士達。
人気あるんだな、カインって。そういや、次期騎士隊長候補って言ってたな。

「えっと、よろ……あああああああああっ！！！！」
「ど、どどどうしましたっ！？」
「右から順に、山田、佐藤、鈴木、伊東、安田ぁー！！」
「大変だっ！勇者様がご乱心ですっ！！」

懐かしい顔ぶれだな。
夏休みだから全然会ってないけど、この人達皆、僕のクラスメイトだよ。三年前のね。
五年留年してるけど、僕、身長小さいから全然問題ないんだ。ほんの少し童顔だし。

春になると必ずと言っていいほど、新入生が僕に会いに来る。
何でも、実在する学校の怪談の栄えある（？）一人なのだとか…。

一人も何も、僕しか居ねーよ。
しかも都市伝説じゃなくて怪談なんだよ。別に悲しくないもんね、ぐすっ。
怪談どころか、留年しても退学しない子が増えたんだよ！？僕の存在って偉くない！？
終いには先生たちも語り継ぐようになってさ…。この前話声が聞こえたんで、空き教室覗いた時…。

『残念ですが、この成績じゃ留年です…。来年は頑張るんだぞ？』
「りゅ、留年っ…？先生、俺、退学しようと思うんです…。親ともそういう約束だから」
「はい…。残念ですが、家業を継がせようと思うんです」

おぉ、三者面談か。あれは数学教師の山先生。若くてカッコいいから女子生徒に人気なんだよね。
気弱そうで、たまに胃痛で休む。

あー退学かぁ…。そうだよね、気不味いもんね…。
まぁ、僕はそんな視線に五年も耐えてるけど！！
…自業自得だけどさ。

『継ぐも何も、後一歩なんですよ…？来年、しっかり勉強すれば進級できます。
お母様も知っての通り、田中優真という五年間卒業できずにいる子だっているんです！
…希望を持って下さい』

何処に希望を持てる要素があるんですか、先生。
というか、生徒のプライバシー駄々漏れじゃないですか。

「そうですね、優真君が居ましたね…」
『そうです、お母様。彼のおかげで留年生に対して差別する生徒なんていません！
むしろ、留年生を応援する生徒しかいないと言っていいでしょう。
安心して下さい』
「分かりました…。そういうことなら、もう一年だけ…」

ぐっ…。

先生、静かにガッツポーズ。

色々と失礼だな、先生。
馬鹿は傷付かないと思ってんのか、思ってるだろ。

三嘉ヶ崎は広い様で狭いんだぞ！
またお礼の品が贈呈されるじゃないか！

ある年を境に、僕の自宅のポストや机に丁寧に包まれたお菓子とか、お菓子とか、お菓子とか…。
達の悪いのとしては、丁寧に包装されたプリントの束とか問題集とか。
中にはお礼の手紙だったり、提出期限だったり…。

つーか、先生方。悪乗りするなよ。ときめかないよ、こんなの貰ったって。

「それは色々な意味で凄いですねぇ…。尊敬します」

そんな様な事を話すというか愚痴りながら、傭兵所という名の学校を案内してもらっていたのだった。

# 第六話　英雄と屑

「一階はランクD～C。私達、見習い兵の部屋となっています。といっても、ベッドしかスペース無いんですけど…」

本来なら机が並ぶ教室は、三段ベッドがずらりと並んでいた。
物凄い違和感である。

「二階がランクB～Aを任される修練を積んだ兵の部屋で、今の私達の目標なんです」
「二階の人達はどれくらい居るの？」
「二十人くらいでしょうか…。此処の訓練所は予備部隊で、とても小規模なんです。
だから他の訓練所の兵には使い捨ての屑兵のごみ箱とか噂されるんですけど…。
此処の教官、とっても厳しい人で、容赦ないんです。だから僕達、結構腕には自信あるんです」

へー。そういや、カインもそんなこと言ってたな。
どんな人だろ…？

「噂と言えば、こっちの学…いや、訓練場に怪談話とかあったりする？」
「ありますよ！此処、二つ水練用のプールがあるんですけど…」

いや、知ってるよ。
僕の学校でもあるからね。水練はしないけど。

安田、やっぱりお前怪談話になるとテンション上がるな。
こっちの安田も性質は同じみたいだね。

「その内の一つが満月の晩、真っ黒くなって、そして、月明かりがプールに差し込むと、ぼんやりとですが中が見えるんだそうです」
「ほうほう…。で、どうなる？」
「中を覗こうとすると、真っ黒い手が水面から伸びて来てあの世に引きずり込まれるとか…。
結構信憑性ある話で、何人か行方不明になってるんですよ」

何か何処にでもありそうな怪談話だな。
あっちの学校にはないけど。

「怪談話って、ほら、自殺した生徒の亡霊とか、プールで足つっておぼれ死んだ子の呪いとかがよく言われるでしょ？この傭兵所には、そういう人とか居たの？」
「いえ…、分かりません」
「ふぅん…。じゃ、いつからその怪談あるの？昔から語り継がれて来たとか？」
「それが…、そうだったような気もするし、そうじゃなかったような気もするんですよね…。
いきなり流行ったというか、根源が誰なのか知りませんけど…」

珍しい。
安田が怪談話の根源が曖昧だというなんて。
安田は怪談話に異常な執着というか、そういう話を知り尽くした人だからな。
突然広まった可能性が高いかも。魔術アリな世界だし、記憶の操作とか簡単だろうな。

「何か、勇者様って探偵みたいですね！」
「その思い悩む姿がもろ、勉強できる人って感じです！」
鈴木と伊東が女子の様なテンションで騒ぐ。

「いやいや…僕、馬鹿だよ？留年五年目」
「…先輩って、きっと本当は頭良いんでしょう？わざと馬鹿な振りしてるだけで」

佐藤がじっと僕を見た。
君達、何か誤解してるよ。
何か、カインにもそんなこと言われたなぁ…。

「頭良かったらとっくに卒業してるよ…。その噂ってさぁ…、もしかして二日前に広まってない？」
「「「「「二日前…？」」」」」

おっ、反応アリ。
鳩が豆鉄砲食らった顔ってまさにこのことなんだろうな。

あー、本物が見てみたい。いや、駄目だけど。愛鳥保護団体に訴えられるけど。
この言葉を考えた人はさ、それを見たってことだよね。
で、ウケる～って思って言葉にした訳で…。見たってことだよね？

僕もね、超見てみたい。

あぁ、話逸れた。

「あははははっ…、二日前に広まったなんてそんなわけ無いじゃない

ですか～！」
「やっぱり、馬鹿か…」

イラッ…。

鈴木、お前の反応はとても癒される。
佐藤、お前の言葉はとてもイラつく。

仮にも先輩だぞ？年上だぞ？
まぁ、馬鹿なのは認めるけどっ！

「けど、曖昧なんでしょ。魔術で記憶操作とか出来るだろ？」
「出来ますけど、私達兵士は元々魔術がうまく使えない出来損ないで、国に貢献できないんです。
だから国の命令で魔術の使えない国民は兵になるんです。先輩たちも同じで、此処に居る兵達はそういう集まりなんです。他は違いますけど。階級なんて私達の比じゃありません。英雄扱いです」

ふーん…。
だから、使い捨ての屑兵のごみ箱か。
あぁ、そういうこと。
少なくても、こっちのミケガサキでは魔術が一般的に使えるのが当たり前で、必ずいると言っていいほどのエリート組は『英雄』扱いで、僕ら出来損ないは『屑』扱いですか。

今度から由香子政権と呼んでやる。

ちなみに、由香子とは蒸発した母。
春一番の暑さに耐えきれず、兄と金一緒に夜逃げしましたよ。
陽一郎さん、呆然。蛻の殻になった我が家と僕を交互に見てたね。

鳩の比じゃない表情してましたよ。

まぁ、全財産持ってかれれば絶望もするよなーって呑気に思ってた。
実際彼、エリートだから。あれでも次期社長だったんだよ。あの事件で絶縁されたけど。
これでも忠告はしてたんだよ。今回が初じゃないからね。これで五人目。

「置いて行かれちゃったね」

苦笑しながらそう言ったあの言葉は陽一郎さんに向けたのやら自分に向けたのやら。
うーん、何柄にもないことを思い出してるんだ。僕。

「魔術が使えるとなると、教官くらいか…。怪しいな、黒幕か？」
「ほぅ…。誰が黒幕だって？」

さらりと流れる長い金髪。片目は眼帯だけど、それがまたこの人の美しさを強調してるんだよね。
緑の瞳が僕を見ていた…なんて可愛いもんじゃない。睨んでますよ。思いっきり。
前世は鷹ですね？分かります。

ちなみに僕はミジンコと言われたよ。
最早人外生物。動物ですら無い。単細胞生物。…馬鹿だけにね。

いつのミジンコだろう？無性に気になる。
いや、気にするところそこじゃないのは分かってるよ。これでも。

「凄いな、アンナに喧嘩売った勇者はお前が初めてだ」

「あぁ、カイン。話は済んだ？」
「もちろん。教官直々に相手になるそうだ。良かったな。彼女はランクAを任されるエリート中のエリートだ。そして、次期騎士長候補の一人でもある。手強いぞ」
「今度こそ教官とカイン騎士隊長の戦いが見れると思ったんですけど、これはこれで見ごたえありそうですね！皆に知らせてきます！！」
「おう、行ってきな」

ヤバい。ヤバいぞ。
最初に言っておこう。つい訓練場が見れるってことで興奮しすぎて、剣…置いて来ちゃったんだよね。
どうなるんだろうね？僕。

# 第七話　勇者ＶＳ教官

「剣はどうした？勇者殿」

女とは思えないハスキーボイスがまた強そうなこと。

へっ、どうせ声変わりしても低くないですよーだ！

「剣無しじゃ駄目ですか？ぶ…」

「ほぅ…。私相手に剣無しか…。余程腕に自信があるようだな。…潰す」

待って、というか聞いて。僕の話を聞いて下さーい。

確かに腕…というか、指には自信あるよ？

一秒で五十回ボタン連打が出来る様になったくらいにね。此処じゃ役に立たないけどっ！

「いけー！教官、勇者を潰せー！」

教官しかお前ら応援してないのは何故？

実は君ら、魔王の手先なのか？

此処の住民達は何故か勇者を目の敵にしたがるな。

そういう風になってるのか？そういう世界なのかい、此処は！？

「仕方がない。唯一覚えている『召喚』で…」

「絶対、『召喚』でアレだけは出すなよ！」

ちゃんとした使い方教えてから物を言って下さい。

無理です、絶対無理。

「どうらや、秘策があるみたいだが…私の前で『召喚』を使う間など与えんっ！
いざ、参る！」

いやいや、こっちが参ります。止めて下さい。

「って、早！人とは思えない早さじゃないかっ！反則だ！法定速度を守れっ！それでも教官か！？」

暴走族も真っ青な早さ。
あっちの三嘉ヶ崎ではさぞ重宝されることだろう。

「何を訳の分からないことを言っている？隙だらけだぞっ！」
「ちなみに、教官は速度強化の魔法陣を足に刻み込んでるから時間稼ぎしても無駄だぞ」

いや、知らないよっ！魔方陣って消えるものだったの？時間で？

「じゃ、召喚って、僕が帰れって命令したら、いなくなるっ！？」

これでも必死に避けています。
今更だけど、あれ、本物だからね。切れ味よさそうだから。絶対切れるから。
「もちろん。召喚主の命令は絶対だ」
「あー！でも、吉田様、帰らな、そうだな！止めとく！」
「「「「吉田様？」」」」
そこにいた兵たち全員が首を傾げた。

「ちょこまかちょこまかと鬱陶しい！」

足元に魔法陣が浮かび上がる。
そこからツタが生えてきた。

「おわわっ…ってギャーーー！！ちょっと、待って！おりゃっ！」

鳩尾目掛けた僕の拳はあっさりと分厚い剣でガードされる。
ガキンッ…という鈍い音が響き、教官が五十メートル程を一歩で退いた。
この剣、カインのより一周り大きくて分厚い様だ。正直、痛い。

「…良い拳だな。しかし、この大剣クレイモアには通じん！」

ツタが絡み付いて身動きがとれない。
うーん、仕方がない！奴を召喚する！

「出でよ、安田ぁ！！」
「僕っ！？」

いやいや、テキトーに言っただけだから。青ざめないでー。

テキトーに円らしきものを描き、これまたテキトーに何かを描く。
うわっ、幼稚園生の方が上手いな、こりゃ。んでもって、血をえいっと…。
…さてさて何が出るかな？

流石に魔王召喚したら本気で僕の命無くなりそうなんで、別のを描いてみた。
これなら一安心だろう。まぁ、吉田様召喚してみるのも一興だけど。

魔法陣が白く光り出す。
おっ、何か良い感じだな。
今回は大丈夫っぽ……。

「む…。またお前…」
「退場ッ！！」

つーか、お前かーいっ！
見て無い見て無い…。僕は何も見ていない。
僕は何も『召喚』してない。
魔王なんて居なかった。僕は何も見なかった！！

「勇者様、今、何を召喚したんだ？」
「いや、何も見えなかった…。もしかしたら目眩しだったのかも…」
「なるほど…」

よーし、誰も見ていないっ。
カインが顔面押さえてるけど、気にしないっ！
教官が固まってるのも…気にします。

見えた？きゃっ、恥ずかしい！
何てボケてる暇は無いっ。

「ええいっ、こうなりゃ自棄だ！出て来れるもんなら出て来い！」

だって、直ぐそこまで教官来てるんですもの。
何か凄く怖いんですもの。

足を懸命に動かし、唯の五芒星を描き、血を垂らす。

円？そんなもの時間が無い！

五芒星に血が垂れる。
赤いはずの僕の血は、何故か真っ黒だった。
さっきのもそうだったのかな？覚えてないけど。

血は何故か溢れ出てくる。
そして五芒星を染め上げた。
それは生き物の様に一歩も五芒星の外へと漏れていない。

ぞくりを背筋が凍る。
冷や汗が流れた。

何か、生理的に無理。
えっ、僕の血って黒かったっけ？
あれかな、水分不足による…。

あー、何『召喚』する気なんだ？僕。

足元で、ぼうっ…と陣が黒く輝く。
あっ、ヤバい感じだな。
うん、決めた。ここは潔く。

「降参しまーす」

僕がそう言うのと、教官が掴みかかって来るのはどちらが早かったか。
正確に言えば、僕がそう言って、魔法陣が消滅するのと、彼女が足で魔方陣をもみ消すの…だろう。
同時だったかもしれない。

辺りの兵達の歓声が聞こえてくる。
横目で見ると、カインが静かに剣から手を離しているところだった。

どうやら、僕が思うよりとてつもないものだったらしい。
いやー、危ない危ない。巻き込むところだった。

きっと、血が黒かったのは気のせいだ。
教官が泣きそうなのも、きっと気のせい。
意識が薄れていくのも、きっと気のせい。
全部、気のせいだったんだ。

＊＊＊＊

「いいなー。父様、また召喚されたんだ？」
「一瞬で還されたが…。にしても、お前の血を飲んで生還した勇者はアレが初じゃないか？
前の勇者でさえ、アレで死んだというのに…」

くすりと『死の夜（ノワール）』は微笑む。
そして魔王の傍へ行き、子供の様に抱きついた。

「今回の勇者は案外『適性』があったのかも…。
それにね、前の勇者は死んだわけじゃないのよ？私、気に入っちゃったから。
彼女はね、深ーい眠りについたの。王子様のキスでも起きないくらいの、深い深淵へと誘（いざな）われて…。もし目を覚ますとしたら、精神（こころ）なんて壊れちゃってるよ。
眠り姫の見る夢は、昔から悪夢と決まってるんだから…」
「ならば、目覚めたら迎えを寄越さないとな。確か、新しい器が欲

しかったのだろう？」

不敵に笑う魔王とは異なり、『死の夜（ノワール）』は幼子の様な無垢な笑みを浮かべた。

「まぁ、素敵！早速、新しいドレスを繕うわ！
…そうね、次は深淵の様に黒く、血の似合う服が良いわね。
この服は可愛いけど、上品ではないもの。この器もそろそろ飽きたわ。勇者（ゆうま）様の好みは何かしらね？」

# 第八話　旧校舎の眠り姫

星屑が降り注ぐ。
どんどん流れて、何処かへ消えて。

此処は何処だっけ？
…あぁ、そうだ。夏休みだから昔に建てられたと噂の裏山の廃校に肝試しに出かけたんだ。
大人には内緒で、皆で集まって。
友達が連れてきた子とか、転校生を誘って行った。無口な子だったけど、参加してくれた。

廃校に着いたら、皆その不気味さにきゃーきゃー騒ぐ。
いつのまにか皆、思い思いの好きな人とくっついて二人一組で行動してた。

誰かが宝探ししようとかで、何故か肝試しではなくなっていた。

何でも、先に下見で忍びこんだ子が財布を落したとか。
楽しかったら別に良いのだけど。

廃校は古くて、至る所がギシギシと軋みんでいた。
その音が鳴るたび、誰かが悲鳴を上げてる。

横目で転校生を見てみれば、気味悪そうな目で悲鳴を上げながらも楽しんでいるペアを見ている。
顔が真っ青だ。良く見れば手が震えている。情けないな。…けど、可愛いかも。

そう思っていた時、誰かが地下へ続く階段を見つけた。
学校によっては地下もある。珍しい事じゃない。

けど、転校生の反応は違った。
一歩退く。顔は最早血の気がない。幽霊顔負けの蒼白さだった。
静かに外で待ってると告げると、すたすたと入口に向かって歩いて行く。

誰かが弱虫だとはやし立てる。
急いで転校生を引きとめた。
強引ではあったが、何とか出て行くのを止めさせた。

弱虫とはやし立てた子が、お前が行けと転校生の背中を押す。
転校生はその手を叩くと、ずかずかと先へ進んでいった。
その後を追う。元はと言えば誘ったのはこっちだ。

地下は大広間になっていた。
何か意外。普通は教室とかがあるのだけれど。

転校生は隅にいて、手に財布を握っていた。
駆け寄ろうとした時、景色がぐりゃりと歪んだ。

＊＊＊＊

「うむむ……。じゅげむっ！」

我ながら変な覚め方をしたものだ。
いやー良く寝たよ。今、何時？

「んのっ、馬鹿ものがぁ！驚かすなぁっ！」
ガンッと頭突きを受け、枕に突っ伏する。
お願い、夢なら覚めてー。

「アンナ曰く、まだ寝とけだとよ」
「カインっ！余計な事を言うなっ！」

仲良いねー。
付き合ってるの？爆発すれば良いと思うよ。

「だから、説明しろと言っている！」
「じゅげむじゅげむゴボウの擦り切れ食うところは台所以下省略して上級困難の寝ぼ助っていう名前の人がいるんです」
「いや、何かというか全然違うだろ。それ」
「そんなことはどうでも良いっ！何故、お前、魔王を召喚したっ！？何故、『贄』の陣を行おうとした…！？」

『贄』の陣というのか。
ってことは、あのまま発動すれば僕が贄として捧げられたわけで…。
何が出てくるんだ？見てみたい…とても見てみたい。

まぁ、オチは吉田魔王様だろうけどねっ！

「カインから大まかな流れは聞いてるでしょ。そのまんまだよ。偶然…」
「『魔眼』は持ち主の心を鮮明に映す鏡。『魔眼』自体が無限の魔法陣って訳だ。
だから最初お前が『ビィーネの業炎』を発動させたのは身を守るため。

二度目の『召喚』では、恐らくお前があそこにいた俺を除く人を滅ぼしたいとか思ったんだろ」

うん。勇者の扱い酷過ぎて確かにこの世界滅ぼすぞって思ったような気がする。

「けど、『贄』の陣の時は死にたいとか思ってないよ？むしろ、教官に殺されるかと思った」

「案外、心の何処かで死にたいと思ってるんじゃないのか？…前にカウンセラーがどうたら言ってただろ」

ぬぅ…覚えていたとは…。

騎士より探偵が向いてるんじゃないか？

「まぁ、前はあったけどさ…。とっさにそれが出てくるとは限らないでしょ。

今は人生を謳歌してると思うよ、これでも。…あれかな、血が黒かったことが原因かな？」

「血が黒い？魔族じゃあるまいし…」

「ほれ」

指を少しだけ傷つけて血を出す。

その血は黒かった。

「お前、確か『死の夜（ノワール）』にキスされたとか言ってたな。血を飲んだだろ。死ぬぞ」

「…マジで？」

「あぁ。マジだ。雪はそれで死んだ」

「潜伏期間は？」

「されて直ぐ。多くの勇者がそれで命を落とした。雪同様にな」

「さーせん、生きてますけど。一日経ってますけど。ピンピンしてますけど」

そんな気味の悪い冷めた目で見るなよ。
馬鹿だけど、未知の菌的なものは存在して無いから。…多分。

「もう良いっ！私は寝るっ！明日からは朝五時に起きろよ、勇者殿！」

「強化訓練をやらされるみたいだぞ。まぁ、頑張れ。それじゃ」

教官の後を追いかけるカイン。

頼みますから爆発して下さい。リア充はいらん。
どーせ、彼女なんていない歴二十…いや、十七ですけど何か？

寝る…ということは今は夜ってことで。
僕、さっき目が覚めたんだけど…。二度寝は当分不可能だ。

「さて、散歩にでも出かけますかね…？」

窓の外を覗けば、まん丸い月が照らしている。
こっちの月は、向こうのよりデカイな。迫力ある。なにより、綺麗だ。

『満月の夜、プールの水が…』

お化けとか、嫌いなんだよね。怖くないんだけどさ。
ちょっと、トラウマ。

大体怪談話とかさ、変な噂にはそれなりの真意がある。

その殆どが宝を隠した場所とかそんな感じ。
保健室の幽霊とかさ、あれは近付いてほしくないからそういう噂を誰かがたてた訳で…。

けど、案外そう言うところに本当に居たりする。
誰も見えないから黙っとくけど。

そういや、何か夢見たな。
そんな感じの夢。もう、忘れたけどね。

「という訳で、プールに来てみたけど…。誰も何もないな…。そういや、二つあるって言ってたっけ。
…探してみるか」

にしても広い。
こんなに広いのかというほど広い。

怪談に多いのは、大体旧校舎。
その可能性が高いな。けど、プールってあるのか？

「……わぉ。あったよ。まぁ、旧校舎内に入らなくて済むのはありがたい」

鍵は、どうかなっと…。
チッ。開いてないか。

だがしかし、『魔眼』というやつは無限の魔法陣って言ってたな。
ということは、この世界にも恐らく鍵を開ける魔法陣があるはず…。

僕が望めばその通りになるはずだ。

「開け、孫」

間違えた、ゴマだ。
孫は開けないな。人だし。…そういう問題じゃないか。

ギィィッ……と錆びた鉄の扉が開く。

そのまま一直線にプールサイドへ、レッツラゴー！
…勘違いしないでくれ。覗きだけど、下心ではない。断じて下心では無い。
覗くのなら女子更衣室だからっ。まぁ、そこまで出来るほど僕は勇者では無いのでしないけど。

「確かに黒いな…。誰だ、イカスミを流した奴」

といっても、イカスミほど真っ黒では無い。
夜空の様な、透き通った黒。
だから余計に気味が悪かった。

月明かりが中央に差し込み、辛うじて中が覗けるというくらい。
けど、何でかな。微かながらに、違和感を感じる。

まるで埃が溜まっているみたいな、僅かな薄い膜の様なものがプール全体を覆っている。

「指入れてみるか」

人差指を真っ黒な水へと入れる。

ぼちゃっ…。

「いっづっ…！！」

静電気にも似た痛みが走ったかと思えば、いきなり水が黒い手となって引きずり込もうとする。

ホラーだ。本物のホラー。迫力ヤバい。

まぁ、鈍間な僕が逃げ切れる筈も無く。

「僕、トンカチだから止めてー」

案外、あっさりと引きずり込まれました。うん、どうしようね。

ぶぁ、ぼんはぁぐとぼれば。（通訳：あっ、コンタクトとれた）

一瞬だけ。とてもぼんやりと。

薄れていても、ぼやけていても。確かにあれは。

「何で、いるんだよ。雪ちゃん…」

一気に水が入って来る。

夢か現か分からなくなりそうな程、思考は遮断されていて。

けど、僕は確かに見た。

旧校舎のプールの幽霊…眠ったままの、吉田雪の姿を。

# 第九話　眠り姫の目覚め

プールとは思えないほどの深さ。
その中心に雪ちゃん…いや、吉田雪が眠っていた。
長い黒髪は水中に漂い、お姫様の様に手を組んで眠っている。
全身黒で統一されたドレスは、その白い肌を際立たせていた。

…って、別に、変態的な目で見てないからねっ！！
あー…、そろそろ呼吸と意識がヤバいぞ。

この黒い手、何か魂的なものを吸ってる気がする。
けど、この手。雪ちゃんの方へ連れて行ってくれている気がする。
でも、着いた途端に僕、多分死ぬ。

「こんのぉ、大馬鹿者がぁ！！」

最初の走馬灯が、教官の声とは…。
ある意味、死んでも死にきれん。

ドンッと凄い衝撃が来て、黒い手がいきなり僕から離れた。

うん、此処で普通は浮くんだけど。
ほら。僕、トンカチだからさ。…沈むんだよね。

まぁ、良いか。助太刀はありがたいけど、雪ちゃん救助優先させてもらうよ。
後、あと少し…。手が届きそうなのに…。

でも、さっきの衝撃で、洗濯機の中みたいな感じに…。
流れるプールの比じゃない。回転掛かってますよー。気持ち悪いよー。
悪化させたよね。何、そんな気に入らなかったの？僕のこと。

あっ、あともう少し…。手が届きそう…。

だがその寸前で、ぐいっ…と手を引っ張られる。
そのまま引き上げられた。

「げほっ…、ごほっ…。あー、久しぶりの酸素…。ありがと、二人とも」

プールサイドに上がり、スゲー目で僕を見ている二人に取りあえず礼を言っておく。棒読みで。
でも、出来れば別の人をお願いしたかった。

怖いよー、お化けより怖いよー。
虫でも見る様な目で見下してるよー。

「何か、言い残したことはあるか？」

遺言ですね、分かります。

「えっと…、あのですね…僕、トンカチでして…」
「それを言うなら、カナヅチだろ」

ツッコミは健在だっ！けど、低いっ！声、低い！
教官に至っては、歯ぎしりがっ…。

「で、言い残したことは？」

カインー！待って、どうしたのー？ご機嫌斜めだねー？
ほら、早く教官止めようよー。剣、引き抜いてますぅ。

「えっと、ですねー…プールの中に、雪ちゃんが居たのは、何故でしょうか…？」

おぉぉぉぉ……。
二人の動きが止まった。

よし、死亡フラグを回避っ！

「「だから、どうした？」」

あれぇぇぇぇぇ……？
開き直られた。いや、困るんですけど。

「だから、何故プールに入り、出て来ない？…もう少しで死ぬところだったんだぞ！」
「いや、雪ちゃん救助が優先かなって…。僕が死んでも、いくらでも勇者の替えは利くでしょ」

ちらっと、二人を見てみる。
何故、拳を構えているのかな？
弱い者いじめは駄目ですよー。

「お前はっ、死者の為に命を捨てるというのかっ！」
「何故、自分を大事にしないッ！？」

現状をお伝えしますと。
カインのグーパンチが鳩尾にヒットし、教官のグーパンチで頬を殴られ、ノックアウト中。

で、説教受けてます。
何かシュールだ。親にもされたことないのにっ。…冗談だけど。半分、本当。
ほんと、情けない。

「「さて、帰るぞ」」
「……？何か、歌が聞こえない…？」
「「歌……？」」

その時、プールの水が黒から青へ変わっていく。
唯の青というよりは、透き通っていて、人を魅了するような輝きがあった。

そして、何処からか白い花が咲き乱れる。それはプールを花畑へと変えた。
その中心から吉田雪が姿を現す。
閉じた瞼が、ゆっくりと開かれる。その瞳は虚ろだ。

「携帯持ってくるの忘れてたっーーーーー！！！」
「「うるさいっ！」」

はい、すみません。

ん？何かうすら寒いものを感じる。
『闘犬場（コロシアム）』の時の様な禍々しい空気だ。

空が黒く染まり、雷鳴が轟く。
そして、雪ちゃん目掛けて紫色の光の柱が立った。

わー、ＵＦＯみたいだー。

その光の柱から誰かが降りてくる。
宇宙人ってこっちのミケガサキに存在するんだね。

「むっ…、またお前か」

こっちのセリフだ。子供の夢を壊すんじゃない。
『召喚』してないのに何しに来たんだ。

「吉田魔王様だ。どしたの？」
「姫君を迎えに来た。といっても、本当に用があるのは『死の夜（ノワール）』だが…。
迎えの兵がたまたま出張中でな。私が来る破目になった」

やれやれという風に吉田魔王様は首をすくめる。

「大変だね」

というか暇だね。そんなのが侵略してんの？この世界。
僕が言えることじゃないけど、大丈夫なの？この世界。

「あぁ、大変だ。だが、仕方がない。…という訳で、連れてくぞ。
もう、心（せいしん）なんて壊れている。これは唯の人形だ」
「あー…、ちょっと困るんだけど。それは…。『死の夜（ノワール）』に交渉できない？」
「…私も困る」

「おい、そこ。仲良く会話しない」

カインがぺしっと頭を叩く。

教官が一歩前に出て剣を構えた。

勇者なんていなくても、普通に倒せそうな雰囲気だよ。

「別に、戦いに来たわけじゃないのだが…。何とかしてくれ」

「…僕も困る。けど、まぁ、助けてもらった恩あるし…。

あっ、『死の夜（ノワール）』に言っておいて、後で取り返しに行くって」

よいこらせっと。

そっと二人から距離を取る。

気付かれない様に話しながらも何とか魔法陣を描く。

「分かった。伝えておこう」

「それじゃあ、交渉成立ってことで『召喚』っと…。それから、退場」

二人は分かってたのか、一歩も動かなかった。

まぁ、一つわがままというか、願いを言うなら僕もこの状況から退場したい。

お二人とも、頼みますから剣収めて、怒りをお鎮め下さい。

今にも斬り殺しそうな雰囲気止めてー。

あの後、五時間にも及ぶ説教を食らい、寝る間もなく朝に。

そんな毎日ですが、案外、僕は楽しくやっております。

＊＊＊＊

「田中さん、何か嬉しそうですね？良い事でもありましたか？」
「えへへ…。分かります？優真君からメールが来まして…。元気みたいで、良かった」

陽一郎は笑いながら携帯を閉じた。
そんな彼を三浦春菜は苦笑しながら見つめる。

「優真君って、確か家出したって言ってましたけど、消息はつかめたんですか？」
「消息っぽいのは何とか。いつもありがとうございます。三浦さん」
「いえいえ、お役に立てたのなら何より。失礼ですが、由香子の方はどうするんですか…？」

その問いに陽一郎は困った様に頭を掻いた。

「離婚届とか、無かったから…僕はまだ、由香子さんのこと信じてるんです…。
すみません。いつも愚痴を聞いて下さって…」
「私、由香子とは同級生で友達でした。昔から強引で勝手な所はあるんです。
けど、根は優しい子でした。…帰って来ると良いですね」
「はい。また、皆で暮らせる日が来ると良いんですが…」

# 第十話　小規模領土争い　前編

「ほら、剣持って来てやったぞ」

どうも、田中優真です。久しぶりだね、この下り。
現在、訓練所の木陰で一休み中。
お昼のギラギラ太陽が憎いです。

「勇者の素質はどうだ、アンナ？」
「飲み込みは早いな。だが、まだまだ甘いっ！行くぞっ！」
「ちょ、ちょっと待っ……ぎゃあああああ！！」

何でも新しい剣が手に入ったらしく、朝からずっとこんな調子。
背景に、ふはははははという効果音付きの吉田大魔王様が降臨しています。
案外、守護霊が同じなのかもね。

つまり、僕は丁度良い試し切り相手なわけで…。
まな板の上の魚の気持ちをこれまでかと思うほど味わっていた。

「というか、新しい剣なんて必要無いでしょうがっ！お気に入りの剣への愛着はそんなものだったのか！？浮気者っ」
「あー…、言ってなかったっけ？お前が壊したの、お気に入りの愛着の籠った剣」

なーぜー…？

「ほら、お前。アンナとやり合ったときに剣に一発入れただろ？見事に真っ二つ。

まだ説明して無かったが、此処に召喚された人々は身体能力が抜群に上がってる。
魔法なんぞ無くても、軽くジャンプしただけで鳥と同じ位上がれるぞ」
「空を自由に跳べるのねー、はい、分かりましたー。いっせいの…」
「上がってるのは身体能力だけで、跳べたは良いが骨だけは何の強化も無いから砕けるぞ？」

そういうことは先に言え。

「剣術より、魔術の方が才はあるかもしれんが、剣術はまだだからな。
秘めた才能があってもおかしくない。…一端、私は城へ戻り報告してくる。
一日空けるが、留守は頼んだぞ。しっかりやれよ」

サァァ…と長い金髪をなびかせて教官は消えた。
うわー、カッコいい。姉鬼…間違えた、姉貴って感じ。

「俺はちょっと野暮用があるんで少し外すぞ。素振りでもしとけ。
しっかりな。三時間時間程で戻る」

そう言ってカインも消えた。
おぉ…。僕、今、フリーダム。
久しぶりの自由。三時間で終わるけど。

さぁーて、寝ようかな。
お説教で寝れずじまいだ。暑いけど、木陰は涼しいし問題無い。

「勇者様っ！」

「ちゃんと、やってますっ！！」
「…大丈夫です。分かってますって。教官達居ませんものね。書庫整理任されたんですけど、人出が足りないうえに、上級生いないし、同期もついて行ってるから、僕達五人だけで…。皆だらけちゃって…仕事が捗らないんです。手伝ってもらえますよね？お休みされてましたものね？…体力は有り余ってますよね…？」

ヤダ、この子怖いっ。最後の間は何！？佐藤、僕何かした！？
勇者の弱み握って、何が楽しいんだっ！？
まだ一睡もしてねーよっ。

「まだ休んでないんですけど…」
「さっさと働いて下さい。ほら、皆待ってますよ」

背中を押されて、書庫に着く。
金箔なのか本物の金なのかは知ったところではないが、とにかく金色の豪華な建物が建っていた。
何、この校舎に不似合いな書庫は。城か？
風紀委員ー、校外の風紀が乱れております。直ちに取り壊しお願いします。

「これ全部…？」
「はい。勇者様担当です」
「僕一人で、全部？」
「人出不足なんで…お願いします。この箱の中の本をこのリストに書いてある本か確かめて並べて置いて下さい。教官、此処よくご利用なさるんで少しでも位置が違うと怒られますよ。一週間全員の掃除洗濯を全てやらねばなりません」

何処のクラスの苛めですか、それは。

後に集団リンチと呼ばれますよ、本当に。

だって、二階とかあるんだけど。
量が半端ないんだけど。
何故、螺旋階段があるか理解不能なんだけど。

「それじゃあ、頑張って下さい。僕達、図書室に居ますから。終わったら声かけて下さいね」

パタンッと扉が閉まる。
困ったな…。教官愛用の書庫じゃ、作業終わって無かったらかなり怒られそうだ。
寝るのはお預けということで、まぁ、ぼちぼち頑張ろう。

＊＊＊＊

「佐藤、勇者様は、何だってー？」
伊東の問いに、佐藤は読んでいた漫画から目を離す。
「ん、サボろうとしてたし、事情知らないから任せておいた。終わったら来るって」
「えー、駄目だよ。皆でやる約束だよ」
鈴木が少し困りながら言うと、佐藤は溜息を吐いた。
「なら、行って来い。僕は漫画読んでくつろいでるから」
「むぅ…。勇者様、すみません」

そんな兵士達の思惑に気付くはずも無く、優真は黙々と作業を続けていた。

あっ、魔法つかえば良いのか。
おぉ…、楽だな。これなら直ぐ終わる。

一時間経過…。

「一階、終わった…量多すぎる…。一人でやるとか、無理なんですけど…。あぁ、眠い…」

それから三十分経過…。

「…はっ。寝てた…。よし、あとちょっと…」

またまた三十分経過…。計二時間過ぎた。

「ＺＺＺ……」

完全に爆睡。

ピンポンポンポーン…。

書庫内に取りつけられたスピーカーから放送が入る。

『ゴラァ！！』

「ひぃ…！すみません！寝てません！」

よだれを拭きながら、枕代わりに積み立てた本を慌てて本棚に戻す。

きょろきょろと辺りを見回しても教官の姿は無かった。

『此処、ミケガサキ第二十三区ランクＢ魔法傭兵教育傭兵所は、我々、ラグド王国第三十二番騎士団が占拠させてもらった！！何処に隠れているか知らないが、アンナ・ベルディウス！降伏するなら大人しく我々の前に姿を表し、新たに召喚された勇者をこちらに引き渡せっ』

ふーん。教官の本名ってアンナ・ベルディウスって言うんだ。
初耳、初耳。
にしても、今喋ってんの誰？
外出中なんですけど。こういう時って、警察に連絡した方が良いのかな。

『早くしないと、兵達の命が無残に散ることとなるっ！お前の部下みたいだが、図書室で漫画を読みあさるとは弛んでるな！』
「「「「「勇者様、助けてー」」」」」

……おっと。今聞きづて成らないことを聞いたぞ？
図書室で漫画読んでただと？

ピー…ガチャンッ！

魔法陣でスピーカーを乗っ取る。
これで奴らにも聞こえるだろう。

『あー…あー…マイクテスト、マイクテスト…。聞こえてますかー？お返事どーぞ』
「なっ、誰だお前は！？」

聞こえてるみたいだ。なら良い。

『バァーカ、バァーカッ！！人をパシるからこんな目に遭うんだよ！ざまぁっ！』
「な、ななな…我が王国を愚弄するか！万死に値する！」

いや、人違いです。

君に言ったんじゃないから。
何、心当たりあるの？

そういえば、ラグド王国のどうたらとか言ってたな。
確かミケガサキの隣国で、魔軍に一番に領土にされた国らしい。
治安が悪く、奴隷商や娼婦が多かったとか。

にしても、助けに行かないと怒られるよな。
それじゃあ、助けに行くとしますか。僕、一応、勇者だからね。

# 第十一話　小規模領土争い　後編（前書き）

サブタイトル少し変更しました。

# 第十一話　小規模領土争い　後編

さて、どうしたものか。
僕、格闘技なんて全然無理だし、剣は置いて来ちゃった。

相手がどれくらいの人数とか全然そういう情報無いしな…。
思ったんだけど、いくら裏手にある場所に建ってるとしてもだよ、
これだけ目立てば誰か見に来るんじゃないかと思うんだよね。

まだ見に来ないということは、思うほど人数は多くないのかも。
というか、ランクBを狙うこと自体が雑魚の所業なんだよ。
ラスボスなら堂々と主人公の家破壊しに来るぞ。

第三十二番だか何だか知らないけど、たかが三十番代。
多分、大丈夫。十番代が来たら諦めるつもりだったから安心したよ。

「あー、けど、訓練積んでるからな。僕の場合まだ五時間程度。実力の差がなぁ…」

おぉ、良い事閃きましたよ。
馬鹿の一つ覚え。此処で使おうじゃないかっ！

「出でよ、吉田ぁ！」
『何だ、またお前か。何度も召喚するな。こっちだって、こっちなりの用がある。…そして、吉田ではない』

やっぱり、持つべきものは魔王だねっ！
これならあいつ等もイチコロさ。

「…ということで、占拠させられてしまったのだよ」
『自分で何とかしろ。勇者だろ』
「吉田魔王様にはプライドが無いのかっ！？何れは自分が占拠する予定だった場所が他に横取りされたんだぞ？」

すると吉田魔王様は呆れた目で僕を見ると、溜息を吐いた。
あー、その反応ほんとに吉田さんだ。いつも宿題の答え聞きに行くとそんな目で溜息を吐かれたよ。

『私は場所など狙わない。私が狙うは国のみ。そうすれば一気に手に入るだろう？』

あら、ヤダ。
この魔王、何て魔王らしい魔王なのかしらーって魔王だから当たり前か。

「そういや、何で此処狙わないの？残ったのこの国だけなんでしょ？」
『私とて、好きで他国を占拠しているのではない。そうせざるおえないからそうするまで。
お前に言ったところで無駄だかな』
「うん、全く分からん。まぁ、愚痴相手にはなるよ。あっ、最後にノワールは何て言ってた？」
『迎えに来るのなら、次の満月の晩に道が開く。後は好きにしろ』

そう言って吉田魔王様は還って行った。
未来のハイテクロボよりケチだな。

まぁ、いいや。周りに何の気配も感じないし、剣でも取りに行くか。

書庫室から出て、忍び足で物陰からさっき居た練習場を見た。
兵士が二、三人ほど木陰で休んでいた。

うーむ、弛んでるな。
おっ、あそこにあるのは僕の剣。
あー…駄目だ。兵士達が『勇者ごっこ』始め出した。
良い大人が何やってんだ。
仮にも本物の勇者の剣なんだから大切に扱えよ。

僕が物陰からそっと見守っていると、勇者の剣を振り回している兵士の一人が思いっきり剣を地面へ叩きつけた。

バキッ…。

そうですよねー。どんな剣でも、そんな扱いされれば折れますよねー。

「あああああああっ！！！」
「な、何だっ！？くそっ、まだ残って居やがったか！」

人の剣折っといて、何がくそだ。
そう思っている間に三人の兵士が僕を取り囲んだ。

「何だ、兵士にしては鎧も着てねぇぞ。…死ねぇっ！！」

まだ一回も使ってないのに…。
確かに二日で売却される程の剣だけどさ、一回は使っておきたかったのに…。

「そこに座れっ！！」

僕の感情の高ぶりにより『魔眼』が作用し、三人の兵はその場に正座する。

鳩が豆鉄砲食らったかの様なマヌケ面で。

「人の剣折っといて、何なんだお前らっ！親にそういう教育されなかったのか、馬鹿が！親不孝めっ！お前らが振り回して折った剣は正真正銘本物の勇者の剣なのにっ！

良い大人が勇者ごっこして遊んでんじゃねぇよっ！！どーしてくれるのさ！？お前らのせいで魔王倒せないんですけどっ！？世界、滅ぶんですけど。責任取れんですかぁー？」

倒す気元から無いけど。

何か良い人っぽいんだもの、吉田魔王様。

兵達は完全にうろたえてます。

お説教効果ありなのか、これは。

じゃあ、この勢いで案内頼みましょうか。

「お前らじゃ責任取れないよねー？責任者の所行こうか。穏便に話を進めようじゃないか。

あーあ、どうするんだろう？剣折れちゃったなー。魔王倒せないなー。世界滅んじゃうなー」

そんな感じで、そのまま魔力で作った紐で三人を縛り、案内させている。

こんなんで良いのか、僕。

勇者なら敵をなぎ倒して進むものだけど。

まぁ、剣、折れたけどね。

「こ、此処です…。ごめんなさい、本当にごめんなさい…」

近くの柱に三人を縛り付けて、恐らくは教官室であろう部屋の前まで来た。

奇跡的なのかは知らないが、一人として兵隊に会ってないんだよね。どーしたものか。

「たのもー」

バンッと扉を開ける。

次の瞬間、物凄い数の兵達が武器を突き付けて来ましたよ。

何これ、サプライズ？

「お前がスピーカーの声の主か」

違うって言ったらどうするんだろうね？

恐らく此処のお偉いさんだと思われる中年の男は黒い軍服を着ていた。

目はぎょろりとこちらを見ている。

「まぁ…そうですけど。勇者直々の演説なんてそうそう聞けるものじゃないですよ。良かったですね」

「なっ、こんな馬鹿そうなのが勇者だと…？この世界、終わったな。まぁ、一応名乗っておこう。ラグド王国第三十二番騎士団副団長ゲシュト・ナジェロだ」

酷くね？何て言うか、勇者というより、僕の扱い酷くね？

しみじみ言うなよ、地味に響くんだからな。

「どうも、田中優真です。
…いやいや、救いたくても、お宅の兵士三名が僕の剣壊しやがりましてね?どうしようかということで…。どう責任を取るんですか、バカヤロー」
「…どうやら何も知らない様だな。まぁ、馬鹿は馬鹿でも勇者だ。洗脳するには丁度良い。ひっ捕えろっ!」

えっ、待とうよ。
タンマ無し?オーケー、分かった。

降参だ。

「さっきから後輩の姿が見えないんだけど。…安否は?」

御報告すると、魔力の縄で縛られて何処かへ連行されてる途中ですね。
先程まで縛られていた三人がドヤ顔で見て来ますよ。
僕が魔眼持ちであることをチクった為、魔眼封じの目隠しまでされてます。
うむ、屈辱だ。

声さえ聞こえないってどういうこと?猿轡されてたって少しは声出すでしょ。
別の部屋に居るのか。…それにしても何の気配も感じない。人が多すぎるせいか?

「ふんっ…まぁ、良いだろう。それにしてもあまりにも手応えが無いな。この兵達は。

やはり、強いのはアンナ・ベルディウスだけか。何故こんな屑兵の集まりに身を置くのか理解出来ん。
…余りも手応えが無さ過ぎてつい苛め過ぎたよ。もう、死んでるか虫の息だろう」

外に出た様で、蒸暑い空気が肌に纏わりつく。
ドゴッ…と何かが蹴られる音がして、続けてうめき声が聞こえた。

「お前っ…」
「身の程を知れ！お前が勇者だろうと何だろうと、剣(ぶき)も魔眼(ちから)も無ければ唯の屑だ！
お前のその無能さ、いや、存在自体がそもそもの間違いであり、お前の無能さが、招く結果何だよっ」

『アンタなんて、産まなければ良かった』

母の声が聞こえた気がした。

＊＊＊＊

「優真君、これからはバーチャルリアルのゲームは禁止だよ。絶対に。
あの時…いや、それに限らずあれをやる時の君の目は、本当に僕は嫌いだから…。
約束だよ、絶対破っちゃ駄目だよ」

陽一郎さんが、空っぽになった部屋を見回して言う。
物足りなく思うのは、昨日まで散乱していたゲーム機やらソフトが無いからだ。

「もし破ったら…？」
「……どうしようね？僕も、分からないよ…。約束できる？」

あの時、父は泣きそうだった。
今なら、何となくだけどあの人が何でそんな約束を言いだしたのか分かる。
そして、何故破った後のことを答えられなかったのかも、分かる。

＊＊＊＊

「なっ…、魔眼封じを上回る力を出しただと…？ありえん」

黒い魔力が身体から溢れ出てくる。それは自身を包み、黒い鎧となった。
共鳴してるのかは知らないが、カタカタと折れた剣が魔力によって元に戻り、姿を変える。

そのままゲシュトとかいう奴をぶん殴った。
校門に当たってうめき声をあげている。

「勇者様っ、危ない！」

息も絶え絶えに誰かが叫んだ。
あっ、そういえば、この子達の怪我ないとな。

そう思った時、身体を何かが貫いた。
そのまま蹴りをいれられて、数メートル吹っ飛ぶ。

「その姿、『勇者』というよりは、『魔王』ですね…？
申し遅れました。ラグド王国第三十二番騎団騎士隊長ミハエル・ラ

グドネスと申します」

何か、増えたー。
というのが率直な感想です。はい。

さっきのよりは品がよさそうだ。けど、何か無理。

「お手合わせ願います」

お引き取り願います。
もう帰れ。何だ、お前ら。暇なのか。

足に力を入れ、そのまま地を蹴った。
剣と剣が金属音を奏でるその前に、誰かが割り込んできて鳩尾を蹴られる。

「ちょっと、待った。誰の許可あって此処に居るんだ?ミハエル・ラグドネス?
…お前も、何やってんだ」

赤髪の騎士、カインの呆れ声が聞こえた様な気がして、兵士達から安堵の声が上がる。
視界にカインがぼんやりと映って、後輩たちに替わった。

「ミケガサキ王国騎士長候補カイン・ベリアル…。勇者様に貴方ですか…。分が悪いですね。
一端、引くとしましょう。さようなら、勇者様。それとも、次期魔王様?…クスッ、冗談ですが。半分ね」

煙幕の様なものが辺りに立ち込める。

緊張の糸が切れたのか、ただ単に魔力が尽きたのか。
僕は意識を手放した。

## 第十一話　小規模領土争い　後編（後書き）

歯切れの悪い終わりですねー。
すみません。次回から頑張ります。

# 第十二話　女神降臨！あと義父も

「状況説明求む」

はいはい、田中優真です。えっ、怪我はって？ぴんぴんしてるよ。
前世、ミジンコをなめてもらっては困る。

あの後、三日間昏睡状態だったらしいけど。

勇者は倒れるわ、占拠されかけたわ、色々と後の対応が面倒らしく
今も二人は対応に追われてます。
聞いた話なんだけど、もしかしたら降格させられるかもっていう噂。

そんなことさせるかーと思って、飛び出そうとしたら思わぬ敵に出
くわしてしまったのだよ。

「えっ、ですから…」
「ノンノン。いいから降ろせ。そして、何をやってるのですか、陽
一郎さん。いつ召喚されました？」

そう、僕の義父。田中陽一郎。
何してんですか、アンタ。とっとと働きに行け。

「陽一郎…？いえ、僕は女神様の僕。オズと申します」

つまりは、こっちの陽一郎さんってことか。
ちっ、こんな奴を寄越すとは…。女神、何者だ。

今どこにいるかというと…。何処だと思う？カンパニー…間違えた、バルコニー。…で合ってる？
目覚めたら、お外で日干しになって、ふかふかの椅子に座ってましたよ。どういうこと？
正直、僕にも分からない。

観客らしき人達がキャーキャー言ってるのが確認できた。
あー、僕高いところ苦手なのに…。

「で、陽一郎さん。僕は如何すれば良い？」
「オズです。取りあえず、これ、音読して下さい。あっ、音読の意味分かります？」

ウゼッ！我が義父ながら、ウザい！
僕はそこまで馬鹿じゃないっ。
この人、腹黒だから嫌なんだよ。母の前ではへらへら惚気てるのに！

「読み終わったら？」
「いいから、さっさと読んで下さい」

はーい。はいはい。
良いよ、全棒読みだ。
畜生、言いかえせない自分が情けない。

「私、新しい五代目勇者となりました。田中優真です。
今回、ランクB…」

ん…？
僕ったらやけに饒舌じゃないか。

僕の舌の機能なんぞ、とっくの昔に衰えている筈なんだけど。
ちなみに中二の時、あまりにも音読が出来ないから国語の成績は1だった。

先生曰く、論外。

案外いつもよりは饒舌だなと思った後のご感想が、『舌、退化しとる。医者行って来い』
先生。舌の退化は、医者で治せるものでしょうか？

「責任につきましては、傭兵所最高責任者であるアンナ・ベルディウスと、カイン・ベリアルに厳重なる処罰として、女神直々の命により処刑となりました」

ん？何だって。僕、今何て言った？
『処刑』。
うーーーーん？

おかしくね？
厳重なる処罰の後。まぁ、此処までは良しとしよう。
女神直々の命により、『処刑』。
何故、此処で女神？どっから生えてきた？何故、処刑。

一回のミスは取り返しのつかないものなのでしたか？
全然大丈夫だよねー。追い払ったものねー。問題ないよねー？

「ミケガサキの永久の富と名誉、栄光を祈ります」

わーっと観客というか、国民が盛り上がる。

お黙りっというのが僕の感想なのだが、口が開かない。多分、魔術。
どっかに、『縫いつけの陣』と『朗読の陣』が描かれているはず。

ミケガサキに富と名誉と栄光ね…。
まさに、由香子政権。
金に目が無い。

そのままバルコニーを後にし、陽一郎…じゃなくてオズさんに連れられて部屋へ戻る。
そういや、最初は喋れたよな。ということは、仕掛けたのは、陽一郎…オズさんということだ。

ということはだね。つまり。
陽一郎さん倒せば、解決。そのまま二人を助けにいける。

「よ…オズさん、あれ何ですか?」
「どれです?」

オズさんが後ろを振り向く。
今がチャンスッ!倒すのは無理そうなんで、逃げる!喋れなくても、多分、何とか…って、喋れたね。
なら、問題ない。

「せーぇのっ!」

視界が暗転して、床にたたきつけられる。
何が起こった?今。

「こう見えても、格闘技も魔術も得意なんです。逃げたら困ります。私が怒られるじゃありませんか」

怒られれば良い。
そういえば陽一郎さん、昔何かの大会で全国行ったって言ってたな。

「諦めて、勇者を全うして下さい。魔王さえ倒せば、彼方は元の世界に帰れる。何一つとして悪い事はありません。少しの犠牲など付き物ですよ」

一つ、分かったことがある。
この世界は、ミケガサキでパラレルワールドだ。
僕の良く知る人物がいて、魔法が使える。

違う。
確かにミケガサキで、パラレルワールドだけど。
僕の良く知る人達とそっくりだけど、違う。

陽一郎さんは、こんな冷めた人じゃないし、佐藤はあんなキャラじゃない。彼はツンデレだ。
鈴木は確かに癒しキャラだけど、天然具合が比じゃない。山田はあんなに影薄くない。
伊東は…どうなんだろ。ごめん、知らん。案外、合ってるかも。

確かに似てるけど、別人だ。
姿は陽一郎さんだけど、名前が違う。それだけで既に別人だ。…と思う。

きっと、この人が崇拝しているのも同じ人だ。
多分、そうならないことを願うけど、これから待つ結末も多分同じだ。

パラレルワールドだから。
どれ程すれ違おうと、最初から決められてた運命は変えられない。

「オズさん。女神様は優しいですか」
「えっ…そうですね。優しくはありませんが、私はそんな彼女に拾われ、一目惚れしたんです。
どんな扱いだろうと、僕は平気です」

次の満月まで、多分、後四日。
それまでに終わらせられる自信無いけど。

「必ず、捨てられます」

この人を倒せる唯一の方法。
打倒精神。
惚気には一番有効な手だ。

「な、何を言っているのですか。あなたに何が分かるというのですか。知らないでしょうけど、優しい時だってあるんです…。あんな表情で笑う人が、捨てるなんて有り得ない」

もしかしたら、陽一郎さんはこんな風に思っていたんじゃないだろうか。
言葉に出さないだけで、表情に出さないだけで、そう思っていたのではないだろうか。

けど、ごめん。
僕、ちゃんと忠告したから。
怨まないでね、すみません。

「『転移』」

はい、案外あっさり。
最初からそうすればよかったんじゃないかなと思うが、結果オーライ。
後ろは振り向かないのが僕のポリシーだ。

しかし、だ。
道が分からんよ。

誰か通りがかってー。陽一郎さん以外ー。

しょうがない。最終手段。
「吉田魔王様はケチだから、ノワールで」

いざ、召喚…と思ったのだが、予想外にカーペットがふかふかで陣が描けない。
ちっ、予防は万全か。

「あれ、優真様？」
「いえ、違いますです、よっ！」

肩トントン、振り向けば…。
「ノワールっ！」

ナイスっ！流石、ノワール！
ドケチは格が違う。マジ、女神。

「どうして、此処に？」
「私、優真様専用の女神ですから！」

それはとても嬉しいんだけど、何故、鎧？中身は空っぽみたいだけど。
等価交換に失敗したの？
…そういえば、カインがノワールの正体は黒い靄だとか何とか。

「中身がないのは、気持ち悪いですか…？」
「ううん。ノワールは黒い靄でも何でも可愛いから大丈夫。で、ノワール女神様。カイン達何処に居るか分かる？」
「まぁ…口が上手ですね。案内は出来ませんが、場所なら。此処をまっすぐ歩くと、広間に出ます。そこを真っ直ぐ行って下さい」

要するに真っ直ぐ行けということか。

「優真様、もし姫君を返してほしくば、それと同じ価値のある器を下さい。そうすれば、直ぐにでも返してあげましょう。…そういえば、優真様はゲームがお好きなんですよね。勇者らしく、カッコよく来て下さいよ…？うふふふ…」

黒い靄となって、ノワールは消えた。
鎧が崩れ落ちる。
しょうがない。この前の二の舞は嫌だからな。

＊＊＊＊

「言い訳は聞きませんよ。お二人とも。私はアレを処分しろと言ったのですよ？
だれも、助けろとは言っていません。折角、ラグドの兵を借り、襲わせたのに…。
アレは国の塵。脅威です。馬鹿だとしても。いえ、馬鹿でも。馬鹿

だから」

扉の隙間から辺りを窺う。
幸いな事に、広間には誰も居なかった。

というか、馬鹿言いすぎじゃありませんか。お母様。ご乱心ですね。
それじゃあ、行くとしますか。

「たのもー」

『構えっ！』

扉を開けた瞬間、兵達に取り囲まれる。
ちょ、ちょっと…。刺さってる、鎧に当たってるって…。

何だろうね？この光景、前も見たことがあるよ？

# 第十三話　決別

「ち、ちょっと待ってってば。仲間割れ良くない。ほら、君達と同じ変態…じゃなかった。兵隊」
「構いません。殺るのです」

女神の声が木霊する。

結構広い部屋で、恐らくは女神専用だ。
天井にはクリスタルのシャンデリアがぶら下がっている。
ちらりと辺りを見回せば、金で出来た手すりや、高そうな宝石が確認できた。

王座に座るは、やはり女神こと由香子様。
長いウェーブがかった黒髪に、見るからに高そうな赤いドレス。
頭のてっぺんには小さな冠が乗っかっている。指にはプラチナの指輪がはまっていた。
手には月をモチーフにしたクリスタルと金の杖が握られている。

待て待て。召喚したの貴女なんだから責任持て。

まぁ、そんなこと言っても聞くような人じゃないからほっとこう。

そのまま気付かれない様にゴキブリの如くカサコソと壁を伝い歩く。
一回で良いからやってみたかったんだよね。ほら、忍者ってそんな感じじゃん。
カインがそれに気づいて眉をひそめているが、気にしない。気にしない。

僕だって、好きで壁を渡ってるわけじゃない。
あの人数じゃ通れないから仕方がなく壁をな歩いてるんだよ。
庶民なら誰だって、レッドカーペッドを歩きたいさ。

あの鎧は囮で、中に『入魂の陣』を描いてあるから自動で動く。
自我を与えられた鎧というわけだ。
親が馬鹿だけに鎧も馬鹿になったよ。恐ろしいね。
馬鹿は遺伝するらしい。しかも、死んでも直らないらしいから余計に達が悪いね。

ん?視線を感じるぞ?
何処から?
はい、下の方から。

あらら、兵隊達がこっちガン見。
よくよく見れば、女神由香子も気味の悪いものを見るような目で見ている。

キャッ、僕って人気者っ!
…何て反応が出来れば苦労しない。

カインは目を手で覆って溜息吐いてるし。
教官は…、姿が見えない。別の所に居るのかな?

ポゥッ…と足元が光った。
おっ、この陣、見たことある。

最初に『召喚』された時、暗殺者みたいのがいて、そいつに使ったんだ。

確か、『ビィーネの業炎』…ってアレ？

炭を越えて、塵になりますよね。
由香子様容赦なし。女神というより、女帝だよ。

「死になさいっ！」
「だが、断る！ジンギスカンになるつもりは無いっ！」
「お黙りっ！」

お申し込みはキッパリとお断りします。
それが、意味不明の優真クオリティー。

陣が光り、火柱が上がる。
『魔眼』発動して、『瞬間移動の陣』を思い描いたから大丈夫。
何だかんだで、やっと使い方が分かって来たよ。
もう、何も怖くない…はず。

「お前が気付くから皆が気付くんだろうが…！」
「馬鹿か、お前。人が壁伝って来たら、誰だって分かる」

何とかカインの傍に到着。
特にこれといった仕組みはなく、カインも剣はおろか、外傷ひとつ無かった。

「何故、ジンギスカン何だ？」
「僕、やぎ座」
「ジンギスカンは羊だぞ？」

「…で、カイン。どうすれば良いのかな？ピクリとも身体が動かんのは何故？」

「それは足元に『封じの陣』が描いてあるからな。警告するの忘れてた」
「…助けに来なければ良かったと、これ程後悔したことは無いよ」
その時、扉が勢いよく開いた。二人の人影が見える。
長い金髪の髪に、眼帯。
教官が立っていた。
何だ、無事じゃないか。
その隣のは、お懐かしゅうございます。陽一郎さんことオズさんではないか。
あらま、スゲー睨んでる。そんな警戒しなくても。けど、一応気にしてるみたいだな。
「何だ、無事じゃないか。カイン、良かったね？」
「バーカ。アンナが執行人なんだよ。見事に売られた」
やーいやーい、バーカ！
リア充してるからそうなるんだよっ！…関係ないけど。
「こうなれば、最後の手段だな」
「…良いの、やっても。こんな公の場で」
「誰だって、自分が可愛いものさ」
なるほど、この男末期です。
そうだけどさ、そんな人じゃないだろ君は。
教官は否定しないけどね。まぁ、かく言う僕も自分が可愛いので。
「おいでませっ、吉田っ！」

『魔眼』は無限の魔法陣ということは、『召喚』だって大丈夫なはず。
血は既に流れてるから問題ない。

「血は、どうしたんだ…？まさか、怪我が治ってないのに無理を…」
「壁に張り付いてた時に皮剥けた。地味に痛い」
「…心配した俺が馬鹿だった」

辺りが黒い靄に包まれる。
そして、あの禍々しい気配を感じた。

『ドケチに何か用か、馬鹿勇者』

あれー？何かご機嫌斜め。
さてはノワール、僕の心の内を伝えたな。

「吉田様の手も借りたい事態になってしまってね。遊びに行っても良い？」
『散らかってるぞ？それに『死の夜（ノワール）』が何て言うか…』
「事態は急を要するんだ。とっとと行くぞ」

魔法陣が白く輝きだす。
『召喚』の逆、『送還』の光だ。

多分、この魔法陣の中に入れば自ずと送還対象になる。
闇を光が完全に呑み込んだその時、ふと影が過る。

その正体が一応分かっていたから、とりあえず何も言わずに陣を拡大させる。

「さようなら。母さん」

たった一言、そう言っておいた。
ほんの一瞬。光の中で、驚愕の表情を浮かべる女神の姿を見た気がする。

これが、あの人に対する最大の礼儀で、決別。
ほら、僕、馬鹿だから。
いくら勇者でも、絶っ対にこの国も、あの人も救えない。

貴女は、僕を見ようとしなかった。此処でも、向こうでも。
だから、貴女の言う通りにはならないし、救わない。救おうとも思わない。

それで良いと、やっと思える様になったから。

# 第十四話　未知との遭遇…？

「教官は分かってたけど、オズさんまでついて来るとは…。国家反逆罪を着せられますよ？」

「私は、監視役です。勘違いしないで下さい」

どうも、田中優真です。

とりあえず、皆で『魔城』にお邪魔しております。

案外、明るいし綺麗だ。というか、普通の城だな。

もっとお化け屋敷的なものを想像というか、期待してたんだけど。

「あっ、おかえりなさ…優真様！？何故、此処に！？」

長い螺旋階段から、少女姿のノワールが降りて来る。

そしてすぐさま、吉田魔王様の後ろへ隠れた。

「大丈夫だよ。ノワールは何でも、何着ても可愛いから。ちょっと色々あってね。とりあえず、暫くお邪魔します」

「むぅぅぅ…。それじゃあ意味ないじゃありませんかぁ…」

ぷくーと子供の様に頬を膨らませるノワール。

『というか、前から気になっていたのだが、何故吉田魔王様？』

突っ込むとこそこなのか？

「ん、向こうの魔王様のそっくりさんが吉田って言う人なの。前勇者吉田雪のお父さん」

『ほう…。それはそれで見てみたいな』
「では、陽一郎とは…？」

オズさんがひょこっと会話に入ってきた。

「陽一郎さんは僕の義父。ちなみに母親は由香子さん。今の女神様」
「あ、ありえない。あんな聡明なお方からこんな馬鹿が生まれるなんて…！！」

一発、殴っても良いですか？良いですよね。よし、殴ろう。

「父に似たんじゃないの？知らないけど」
「元の父親はどんな人なんだ？」

カインが興味心身に聞いてきた。
教官も聞き耳立てている。気になるなら素直に言えば良いのに。

「さぁ…？覚えてないな…。僕が三歳くらいに家の金全て持って蒸発したからね。
あの時の母の錯乱ぶりったらもう。挙句の果てには、由香子さんも同じ道を辿るという逆奇跡を起こさせた人としか僕の記憶にはない」

皆が一斉に黙る。
えっ、ホラー要素何処だった？

そんな空白の時間が続き、耐えきれなくなった僕は何かを言おうとした。
すると、何処からかドタバタと走って来る音がする。

「王様…じゃなかった、魔王様！勇者を連れてくるなんてどういう

…何か沢山いるな。
失礼ながら、誰が勇者？」

全速力で飛び出してきた灰色のスーツを着た青年が飛び出してきた。

『ノーイ…。まぁ、心配ない。色々あってだな、友人になった』
「一体、何が！？」

ノーイというらしいが、中々のツッコミ役だ。
とりあえず、挙手してみる。

「どうも、僕がゆ…」
「死ねぇっぇぇぇ！！！」

待ってぇぇぇぇぇぇ！話を聞けぇぇぇぇぇ！

錯乱しながら、ノーイはスーツの袖からナイフを取り出して、僕に向かって投げた。
ノワールが飛び出し、全部はたき落とす。

「ノーイ！私の婚約者に何てことするのっ？大丈夫、優真は良い勇者よ」
「あ、貴女まで…。一体何があったというのです…？」

懇願するような目でノーイは二人を見る。
何の悪びれも無く、吉田魔王様は言った。

『『召喚』された。ノーワル込みで』
「前代未聞だっ！何処の勇者が、そんな不可能を可能にするというのですっ？！一体どんなプログラムがインストールされているので

すか!?奴には?
きっと、洗脳されたに違いない!おのれ、何て事を…!ミリェニス王国の第一騎士隊長ノーイ、命尽きようと貴様などに負けは…」
『ノーイ。洗脳もされてないし、言っただろう。友人だと。お前は、私に何か不満でもあるのか?
あるなら今すぐに爆死しろ。なければ、客人を応接室へ案内するのだ』
「あああああっ!仕方がない、そこまで王様…いえ、魔王様が言うのなら信じましょう。
だが、ミリェニス王国の名誉にかけてお前らの王国など…げふっ!」
吉田魔王様と、ノワールが二人同時にノーイを殴った。

『こっちだ。行くぞ』
「ノーイ、ぐずぐずしてないで、客人にお茶を出しなさい。優真様に何かしたらタダじゃ済まないからね?」
床でぴくぴくと倒れているノーイをノワールが引きづり、吉田様が応接室へ案内する。

何か楽しそうだな。というか、平和だな。この世界。
こんなのが魔族で良いのか、本当。

僕は微笑ましく見ているが、カイン達は眉をひそめている。
一体何が不満なのかな。

応接室は何となく居心地のいい部屋だった。
由香子様の部屋ほどではないが、嫌みじゃない程度の物々が置いてある。
高価なものだろうと思うが、見る人が見れば価値のあるものと言っ

たところだろう。

「地味に凄いね、この部屋」

『ほう…価値が分かるか？』

部屋に盆栽と日本刀が置いてある辺り、見る価値のある部屋だと思うよ。

和風にしたいのか、洋風にしたいのか良く分からない部屋だ。

吉田さん、意外に趣味渋いんだよな。骨董品集めとか、盆栽とか、茶道とか、弓道とか、将棋とか…。

きっと、じいちゃんってこんな感じなんだろうなーって思った。

「…ぼちぼちね。で、これからどうするの。というか、どうなるの？」

「さぁな。女神様のことだから、絶対に行動を起こすと思うが…。何をしてくるのか今一な…。

今日は、一端休んで、明日考えよう。空いてる部屋ってあるか？」

『二部屋なら空いてるが…』

その答えに、ノワールが勢いよく手を上げる。

「優真様は、私の部屋ねっ！良いでしょ？お父様」

『仕方がない…。くれぐれも、何事も無くしろよ…？』

吉田様、声低い！

何で、そんな笑顔で脅迫するんだ、僕に！

「なななな、なりませんっ！一国の姫君と、あんな人畜ひど…ぐぎゃっ！」

『良いからお前は戻りなさい』

何処からか生えてきたんですか、ノーイさん。
顔面にパンチを食らったうえに、吉田様に怒られたノーイさんは渋々何処かへ去って行った。
何も無いと良いけど…どうだろうね？

「カイン、さっさと行くぞ」
「ア、アンナ…？俺は応接室で寝るからお前は…」
「良いから行くぞ！ついてこいっ！」

やや困り顔を浮かべるカインをずるずると引っ張って何処かへ去っていく教官。
大丈夫かな、部屋の場所分かるのか？
まぁ、人の心配している場合じゃないのかもしれないけど…。

「じゃあ、そういうことで…。吉田様、トイレって何処？」
『ノワール、案内してやってくれ』
「分かりましたわ。優真様、こちらです」
「あっ、ちょっと待って。携帯置いて行く。電話とか来たらテキトーに出といて」

パタパタと二人が応接室を出た。

丁度、携帯が着信音を鳴らす。

『出た方が、良いのか…？』
「出といてということは、出た方が良いのでしょうね」

残された二人は、携帯をじっと見つめた。
吉田魔王様が携帯を手にとって、困惑した表情でボタンを押す。

ちなみに、ディスプレイに表示された名前は、『吉田さん』。

「もしもし、優真か？」

『おぉ……。向こうの私か…』

静かに感嘆する吉田魔王様。しかし、会話がかみ合ってない。

「…誰だ？」

『生憎、優真はトイレだ』

「…そうか。で、誰だ」

『…名乗る名などない。…で、どうすれば良い？何か用があるのではないか？』

ふと、沈黙が訪れる。

「そうか…だが、直ぐ帰って来るんだろう？大した様じゃないんだが、よーちゃんが話したいらしい」

『ほう。そうか。しばし待て』

「そっちは本当にパラレルワールドなのか？」

『そうと言えばそうだし、違うと言えば異なる』

しばらくした間の後、声が変わった。

恐らく、よーちゃんとかいう人の声だろう。

「もしもし…。優真君のお義父さんです。そっちの吉田さんですか？」

『むっ…。お前が勇者の義父か。確か、陽一郎』

「はい。一、二つお尋ねしたいのですが…。優真君、まさかと思いますけど危ない事とかやってませんよね？」
『……。危ない事、とは？』

「そうですね…。勇者とかパラレルワールドとか、信じないわけじゃないですけど、例えば『闘犬場（コロシアム）』とかに出場したりとか、人を殴って物を破壊したりとか…？…無いですよね？」

軽く、殺気が伝わって来るのは何故だろうかと吉田魔王様は思いをはせる。

『……。』
「あ・り・ま・せ・ん・よ・ね？」

まさか勇者以外の者に脅される日が来ようとは…。
恐るべし、陽一郎。

「無言は肯定と判断しますが…。異論はありますか？
『……いや、あの、何と言うか…』
「優真君に、一つ伝言を頼んでもよろしいでしょうか？」
『何でしょうか』

思わず敬語。
怒らせてはいけないと吉田魔王様は悟りました。

「次、帰った時…部屋は綺麗に片付いていますと、お伝え下さい」
『了解いたしました』

「そして、向こうの吉田さんこと魔王さん。優真君がダークサイドに堕ちる様なことがあれば…ふふっ。続きは、言わずとも知れます

よね…？」
『……』

その時、丁度優真が帰って来た。

『…勇者。お父上からお電話だ』

しかし、手渡された携帯は通話時間を示していた。
吉田魔王様に、何か聞くとかつて見たこと無い冷や汗を浮かべる吉田魔王様の表情が見える。

『お父上から伝言を頼まれたんだが…』
「あれ、何て言ってた？」

『次、帰った時…部屋は綺麗に片付いているらしいぞ？』
「……」

撤回しよう。

由香子政権の比じゃないぞ。
凄いな陽一郎さん。

魔王に恐怖を植えつけたよ。
女神なんて比じゃない。あの人さえやる気を出せば、本気で世界侵略できる。

黙り込む二人を、オズさんは不思議そうな目で見ていた。

未知との遭遇を果たした吉田魔王様。
しばらく着信音に怯える日が続いたという。

# 第十五話　指名手配

どうも、またまた田中優真です。
そろそろこの下りにも飽きてきた今日この頃。

「姫様ぁぁぁー！」
「きゃあああっ！」

事件発生です。

ノーイさんが、乙女の部屋に侵入。
数秒後、謎の変態死を遂げた。

顔は蜂の巣のように腫れ上がり、体には無数の痣が確認された。

しかし、その城に居合わせた全員にアリバイあり。
結局、凶器は見つからず、犯人の目星はたっていないまま、事件は未解決のまま幕を閉じた。

「コラコラ、人で遊ぶな。しかも、変態死じゃなくて変死体だろ」
「この場合、二つとも当て嵌まるから良いんじゃないの？」

そうだなと、あっさり頷くカイン。

『ノーイ、朝から何を騒いでいるんだ』

部屋の前で騒いでいると、吉田魔王様がやってきた。

「ロリコン夜遣い未遂事件とでも題しとく？」

『ほぅ…。娘に手を出したか。ノーイよ』
「ち、違…」

「連続変態死事件にした方がしっくりくるな」
カインが一人でに呟き、悲痛な悲鳴が響いた。

『実に清々しい朝だな。なぁ、ノーイよ』
「はい。そうでございますね…」

清々しさの欠片も無い顔面でノーイさんが言う。
そうだな、例えるならお菊さんと言ったところか。
お化け屋敷の作業員として文句なしの顔である。

『さて、勇者よ。国のことはどれくらいご存じだ?』
「何で、敬語なの。…全くと言って良いほど知らないかな。まだ来て一週間くらいだからね」

……というわけで、どういう訳か図書室にいます。
まずは各国のことを知れということらしい。
しかし、各国のことを知るも何も、君が殆ど侵略しちゃったでしょうが。

何故か、カインもついてきました。
僕ってそんなに信用ない?

ちなみに教官とオズさんは城内の見回りとか、ノワールと一緒に買い物とか。
既に敵地であることを忘れ、満喫してますよ。
…敵地というよりかは適地なのかもしれないけど。

まぁ、ぼちぼち進めて行きましょうか。

＊＊＊＊

国は、五つあった。

『ラグド王国』

独裁政治で、治安が悪く、内部崩壊も時間の問題だったらしい。
軍事国家で、武器の扱いには長けていたとか。
最初に魔武器を作ったのはラグド王国だった。

『フェラ王国』

どいつもナルシスト。常に他国を下等の人種だと思い、それは酷い扱いだったそうだ。
美形が多いらしい。魔術に長けていた。

『ミリェニス王国』

『魔力魂』を開発した国。国民全員が魔族。
科学やオカルトが発展した国で、今は闇に堕ちた。つまり、今いる国こそ元・ミリェニス王国という訳だ。

『マフィネス王国』

『魔力魂』を武力を持って奪おうとした国で、ミリェニス王国を攻撃したことから長きにわたる他国を巻き込んだ資源戦争開戦の火種。
今でも恨む者が多いが、魔軍によって滅ぼされた。

『ミケガサキ王国』

打倒魔族を掲げ他国と同盟を結び、急激な発展を遂げた国。
『勇者召喚』や、女神の誕生はつい数年前のことらしい。

ミケガサキを除く四国を簡単に言ってしまえば、独政、ナルシー、開発、開戦か。

事の始まりは、やはり『資源の枯渇』。
新エネルギー開発が思う様に進まなかった各国は、ついにその事態に直面してしまったらしい。

此処での『資源』は、僕の世界の様に鉄とかそういう類では無い様だ。
どうにも、此処での『資源』は良く分からないが魔力同等の何からしい。

しかし、ミリェニス王国は新たな資源の開発に成功していたらしいが、何故がそれを活用しようとしなかった。どうやら、新資源の独占だろうということで、それを知ったマフィネス王国を筆頭に全世界を巻き込んだ『資源戦争』が始まる。

最初に仕掛けたのは、マフィネス王国だが返り討ちに遭い、全て滅ぼされた。
しかし、他国と連合を組んだミケガサキ王国により、資源の一部…つまり『魔力魂』を奪われたということらしい。

しかし、そのおかげで今のミケガサキが成り立っている訳だし。
だが、あの吉田魔王魔が理由なしに資源の独占なんてする筈がない。

「カイン、この『資源戦争』って、何が理由で幕引きしたの？」
「『魔力魂』さえ手に入れば、これ以上の戦は無益だろ？だからじゃないか？まぁ、戦力が尽きてきたというのも一あるかもしれないが…」

「この時の国のリーダーって誰？」
「丁度、同盟を結んだし、ミケガサキの前国王様が何処かに逃げたんでな。フェラ王国の預言者を国王としたんだ。今の女神様の母だったかな…」

うむむむ…。やけに引き際があっさりじゃないか。有り得ない。
『完膚なきまでに叩きのめす』があの血筋の性なのに。

「優真様ー、大変です！」
「ん？どうしたの、ノワール」

ノワールが血相を変えて走って来た。
後から紙袋をたくさん持ったノーイさんと、教官が現れる。

そのまま引っ張られる様にして広間へ着いた。

「で、何が大変なの？」
『これを見ろ』

水晶の様な丸い透明な玉が光を放っている。
その光の差す方向には涎を垂らし、寝ている僕の顔がでかでかと映し出されていた。

いつ撮った、こんな写真。
あぁ、生徒手帳からか。
……まさか、これ、全国放送？

「勇者は、闇へ堕ちました。私は、女神の名のもとに責任を持って彼を始末せねばなりませんっ！
皆さま、御協力下さい！今こそ、悪を潰す時。時は満ちたのです…

！」

そこには、何故か武装した由香子様が立っていた。
…にしても、悪を潰す時と来ましたか。せめて倒すにしてほしかった。

「……つまり、これ指名手配？僕だけ？」
『あぁ。お前だけ。今、この時を以って、お前は全国民の敵となった。良かったな、仲間だ』
「当初の目的と大分ズレていると感じるのは僕だけだろうか…？」

そんな感じで、勇者は指名手配されました。

「ちなみに、懸賞金とかってあるの？」
『いや、お前の場合、捕まえてもタダだ』
「……わーい、お金で買えない価値がある」

少し、虚しいとも思う今日この頃です。

# 第十六話　絶滅希望種？世界最強の哺乳類～やはり召喚はオプション付き～

「…まぁ、こうなった以上、全国から猛者がお前を探しにやって来るだろうが、まず此処に来る心配はないと言って良い」
「何で？」

昼下がり。魔城の庭でお絵かき中。
いやいや、唯の『召喚』練習だけど。
流石に、吉田魔王様だけ召喚出来ても、折角『召喚』が使えるんだし、もう少し色んなのを『召喚』したいじゃないか。

「お前が知っての通り、この国はオカルト学と科学が発展していた。かつての戦争では、姿は見えても蜃気楼のように消え、指一本たりともこの国に入らせなかったらしい。しばらくは安全だろ。それにアンナ曰く、女神様はお前が魔王を召喚したことなど全然信用して無いらしいから」
「そりゃ、良かった。それにしても、やっぱり力押しは向いてないみたいなんだよね。魔術の方が良いかも…って、吉田魔王様が言ってた。物凄い剣幕で」

あの日からというもの、着信音に怯えている。
一体何があったんだか…。
というか、世界を統べる魔王がそれでいいのか？
畏怖の対象が、向こうの一般人の脅迫に畏怖を抱いちゃ駄目でしょ。

「お前はそれで良いのか？」
「吉田魔王様直々の頼みだし、良いんじゃないの？…此処でばっくれたら後で大変な事になると思うし。被害はせめてゲームだけに留

めたい…。無血開城が一番だよ」
「最後、意味分からんぞ」
「…さて、基本の形式は描いたけど後は如何すればいいの？」
「『召喚』は自分の魔力と相性の良いものが選ばれるが、それでは数に限りがあるだろう？
理由があるらしいが、まだ分かっていないな。だが、それでは困る。だから、その為の陣の構成なんだよ。ちゃんと描かないと、同じものしか『召喚』出来ない。そうだな、まず何を『召喚』したいか思い浮かべろ」

そんなこと急に言われても…。

そうだな、癒しが欲しい。それが無理なら、同じバのつく種族（なかま）が良いな。

多分、動物なら猫だろう。

根拠？

僕をあまり見くびらないで欲しいな。
こう見えて唯のゲーマーだけど、本だって読む。
何を隠そう、文学少年とはこの僕のことなのだ！…冗談だけど。

何処の世界においても今や王道と呼べるに至る世界最強の生物『猫』。
まぁ、外身は猫。正体は虎とかそれ自体が伝説の生き物っていう設定が最近は多いかな。
ゲーマーとしては、一度はお目にかかりたいものだ。

余談だけどさ、勇者モノとかさ、主人公が悪を倒すゲームって、最

後に悪の親玉との対戦になるじゃない。
僕の体験談だけどさ、必ず他のパーティーメンバーが倒さない？
主人公が他の敵倒して、攻撃力の高い、主人公よりちょっとイケメンなキャラが止め刺すよね。

まぁ、操作してるの自分だけど。

別に良いけどさ、一番ありがちなパターンは、魔術師が『召喚』した意外に攻撃力高い召喚獣が親玉倒すやつ。

勇者（しゅじんこう）の意味なくね？

最初からそいつ『召喚』しろよって思うわけだよ。

「だからカイン、絶対に倒すなよ」
「何をだ？」
「この世の悪の親玉」
「それを倒す為の騎士だろう。仕事にならないじゃないか。…で、思い浮かんだのなら描け。多分、それが吉田魔王以外の『召喚』になると思う。お前は『魔眼』持ちだし、召喚以外の陣なら余裕だろ」

ふーん。
それじゃあ、やるとしますか。
さて、吉と出るか凶と出るか。何が出るか。

「『召喚』」

黒い血が一滴、陣に落ちた。白い光が辺りを包む。

「ニア」

「おっ、何だ。田中じゃねぇか」

おおっと！

半分失望したよ！

猫だけど猫じゃない生き物と、昔の馴染みが召喚されたね！

お前、何でランプ持ってんの？

「何だ、慌てん坊で唯の馬鹿不良のサンタさんじゃないか。相変わらず、幼稚園でアルバイト？」

「優真、誰だ？」

カインが真顔で聞いてきた。何だ、いつもの呆れ顔じゃないのか。

「こちら、僕の後輩。岸辺太郎。誕生日は四月。今は確か幼稚園のアルバイトやってて、昔はよく不良やってた」

「ハーフ？」

「いや、髪染めてる。にしても、お前、白髪に赤い紐はないだろ。第一な、白髪に染めるくらいなら爺でも出来る」

「それは老けただけだろ。お前は爺センだから、いつまで経っても彼女出来ないんだよ。バァーカ」

「四年留年してた奴が何を言うか。馬鹿は認めるけど、お前よりはマシだからな。

カイン、さっきからやけに真顔だけどどうしたの。知り合いにでも似てた？」

カインは表情を崩さないまま頷いた。

猫の様な猫じゃない生き物が、ニアと鳴く。

「二つほど、ツッコミたい」

「どうぞ」

「何でどいつもこいつも『召喚』された時に家具が付いて来るんだ？二つ目は、お前、何をそんなにたくさん『召喚』する必要があった？」

そう言われましても、困るのですよ。

だって、結果論としてそうなっちゃったとしか言いようが無いでしょ。

「猫については言わないんだね」

「にしても、田中。此処何処？俺、停電直しに行かなきゃならないんだけど」

「あっ、そう。じゃ、帰れ」

陣が光る。

何かを岸辺が何か言おうとして、その姿がかき消えた。

ゲーム機大量に持った親父さんが店に来たぞって聞こえた気がするけど、幻聴に違いない。

さて、残るは猫か。いや、猫じゃないけどね。

中々可愛いじゃないか。

黒猫も良いが、白猫も中々だ。美人さんだな。こいつ。

オスかな、メスかな。

「お前、何で角と羽根生えてんの。イッカクにでもなりたかったの？前世はプテラヌドンだったの？」

わしゃわしゃと頭を撫でてやる。案外無抵抗だ。

飼い猫…いや、飼い猫モドキなのか。

真っ白なつやつやの毛並みに、不釣り合いな赤と黄の目。
これが噂のオッドアイってやつか。

背にはファンタジー小説に出て来るような、ドラゴンの羽根白バージョンが生えており、時折ふわふわと浮いている。額には何故かご立派な丁度良い長さの白い角が生えている。

「ユニ・コーン？」

「何故、区切る。それは、プラチニオンの幼竜だな。絶滅したと聞いていたが、まだ生き残りが居たとは…。俺も生で見るのは初めてだ。何でも、古来からこのミケガサキに居たらしく、この国のシンボルマークでもその姿が描かれている。平和の象徴らしい」

僕のところは、白い鳩ですよ。

「へぇ…。案外、大人しいじゃないか。竜のくせに」

幼竜が欠伸する。
こんなのが竜を名乗って良いのか？

ボォォォォ…。

燃えているんでしょうか。
はい、その通り。

「火ぃ吹いたぁー！あちちちっ。何処が平和の象徴だ。めちゃくちゃ好戦的じゃないか！！」
「詳しい事は知らされてないからな。恐らく、大丈夫だろうというのが科学者の見解だ。

だが、別の生物者曰く、プラチニオンは人より知力が高く、好戦的で、絶滅原因は共食いらしいぞ。
かつて、人より秀でていた為、食物連鎖の頂点に君臨し、『人間不味！』ってなったから共食いを始めたらしい。世界最強の生物と言っても過言じゃない」

何処のどいつだ、そんな見解を発表したろくでなしは！？

見た目に騙されてるよ！
こいつは、羊の皮を被った狼だ！
しかも、絶滅した理由は共食いかいっ！

「つーか、最初に発表したの科学者かよ！何故、首を突っ込んだ！？最初から生物学者に任せろよ！」
『私が飼っていたプラチニオンはおっとりしてたからな。大丈夫だと思ったんだ』

いつの間にか吉田魔王様が立っていた。
発表したのアンタか！

「確かに強いんだろうけどさ…。大丈夫なの？けど、可愛いな…。このふかふか感が堪らん…！
こいつ、飼えるの？つーか、何類？」
「飼う気満々だな」
『哺乳類だ。主に肉を喰う。だが、好みはマタタビ酒と、枝豆、燻製、唐揚げ、冷奴など』

まるっきりオヤジじゃねーか。

きゅうううう…と抱きしめる。

次は炎を吐くこともなく、素直にされるがままだ。
猫は気紛れだっていうしな…。猫じゃないけど。
まぁ、可愛いから許す。

『おい、小僧。鮭の燻製よこせ』

「「うわあああああああああっ……！！」」

あっ、ちなみに、叫んだの僕とカインね。
だって、喋ったんだもの。
意外に渋い声だったんだもの。
鮭の燻製要求してきたんだもの。…こいつ、オヤジか。

そのふかふかで可愛らしい容姿に似合わずの声と、要求。
夢をぶち壊してますねー。いろんな意味で、子供マジ泣きだよ。

唯の猫を期待した僕が馬鹿だった。
此処は、普通じゃありえないことがごく普通に起こる世界だ。

伝説の猫とか、実はものスゲー強い虎で済む筈がない。
ファンタジー界における永遠の王道をすっかり忘れていたよ。

竜（ドラゴン）と囚われの姫君は、絶対要素だ。
この世の神も仏も誰の味方もしない。
だから、皆さま。僕はこの生物の絶滅を希望します。

# 第十七話　不吉の予兆

おはよう、こんにちは、こんばんは。
どうも田中優真です。

つーか、無理して僕が挨拶しなくても良いと思うんだけど。

…まぁ、挨拶は大事だからね。

取りあえず、今のところ何事もない日々が続いていた…ら良いんだけど。

えっ、何処にも刺客が来た様な描写がないって？

いやいや、居るじゃない。一人だけ。刺客に似た奴がさ。
ナイフを投げつけるこの前変態死した…。まぁ、だれとは言わないけどさ。

朝。天候は曇り。少し風が強い。
現在、魔城地下にて迷子中でございます。

いやー、書庫に行きたかったんだけど、案外此処広くてさ。

けど一つ良かったことは、猫モドキのおかげで辛うじて辺りは照らされてるってこと。

プラチニオンってのは、暗い所に行くと、毛が光るみたいで、今もぼうっ…と淡い白の光が辺りを照らしている。

「ニアッ…！」
「ごめんって…。けど本当のことじゃないか」
がぶがぶと容赦無く噛んでくる猫モドキ。
そろそろ名前を考えてやろうじゃないか。猫モドキ。
…これで良いんじゃないか？『猫モドキ』。
「命名、猫モドキだ」
決定だと言わんばかりに、持ち上げてみる。
…何か、がんもどきみたいだと思ったのは僕だけかな。
「フシャァァァ！！」
超威嚇。
だが、猫モドキに臆する様な人間は一人としてこの世にいない！
チカッ…。
猫モドキの赤い目が光る。
ん？もしかして『魔眼』だったりするのかな？
まぁ、ゲームの世界でも召喚獣がそういう機能持ってたって不思議じゃないからね。
結構レベル上げしないと無理だけど。
「…けど、二重構成式なのは何故かな？」

『死ねッ』

うわっ、こういう時だけ喋るの止めて！
身体的にも精神的にも結構キツイから！
僕の心はこれでも繊細だから！

えげつない。由香子様並みにえげつないぞ、この猫モドキ。

全く、何が気に入らないのか。
結構な自信作だぞ、がんもど…いえ、猫モドキ。

段々ややこしくなってきたな。
しかし、この二重構成式。どうやって？
どのゲームでもジョブチェンジしたところで、二重魔法は無理なのに。
いーなー。僕もやってみたいなー。何段までいけるか挑戦したいなー。

「ニア…！」
（人間如きに名など付けられて溜まるか。だが、仕方がない。受け入れようじゃないか）

おぉ…。この陣、猫モドキの言葉が分かる様にしているのか。
翻訳の陣と言ったところかな。

つか、何このツンデレ。
正直、反応に困ります。何、素直に喜ぶべきなの、これ。

「ども、よろしく。あっ。此処かな、書庫は」

目の前に立たずむ鉄の扉。
ギギィィィ…という音が響き、ゆっくりと扉が開く。

凄いな、一応自動だ。
此処の国は、何故か魔法に頼らないみたいなんだよね。
重い荷物の持ち運びは、二人とか三人とかで行ってるし。
見ていると、どうにも魔法が使えない訳ではないらしいが。

辺りは暗く、視力の悪い僕には何も見えない。
うわー、暗いよ。僕、暗いの苦手。

とりあえず、猫モドキを抱きかかえる。
だが、光が淡すぎてあまり役には立っていないが、無いよりマシだ。

見る限り、何かの実験室の様だ。
所々にフラスコやら、何か良く分からない液体の入ったビーカーが並んでいる。
そして、壁には恐らくは黒魔術であろう陣が描かれていたり、古びた紙に記されていたり…。
壁の一角には棺桶まであるし、標本なのか骸骨で置いてある。

こういうの、本当に無理。
大体、いるんだよ。こういうところに。本物が。

その時。ふと、何かが横切ったような感覚に襲われる。
証拠に、壁に人影が現れて消えた。髪が長かったから女性かな。

あわわわわ…。
無理、こういうのホント無理！
見えない奴らが羨ましいし、恨めしい！

『むっ…。また、お前か。どうしたんだ、こんなところに何か用か？』

お前か、吉田魔王様！
けど、今はありがとう！

「いや、書庫に行きたかったんだけど…。この部屋、何？」
『……研究室』

何、今の間は何！？
何の研究ですか、魔王様！？

「ノワールは？」
『あぁ、体調が優れないらしい…。元から身体が弱いからな』

…身体が弱いも何も、元は霧のようなものじゃないか。

その時、ガタンッ…と棺桶のふたが開く。
そこから白い手が伸びた。

「あああああ！！ごめんなさい！」
「何ですか、やけに騒々しいと思ったら…。まだ居たのですか、勇者殿」

何だ、ノーイさんか。
いやいや、何も解決して無いんだけど。
何で、そんな所に居るんだい？

「何してるんですか？」

「見たらわかるでしょう。寝てたんですよ。魔族は、光に弱いですからね。私も此処で生活している間に、そういう体質になった様で…」

呑気に欠伸をするノーイさん。
一般的に、それは退化というのですよ。
そのまま永眠すれば良いと思います。

どうやら、彼は朝に弱いということだ。
道理で、ナイフとか投げて来ないと思ったよ。

「しかし、さっきから何を騒いでいるのです…？」
「いや１（ワン）ＯＢＫが見えたもので…」
『此処は普通に３ＬＤＫだ』
「いや、お化けだって…。うわー、マジで帰りたい」

しばし、沈黙。
あれ、何か不味いこと言った？
もしかして、皆お化け嫌いとか？

「ほぅ…。お化けが嫌い、ですか…。なら、この棺桶。蓋を取ったら何が出てくるか分かります…？」
『ノーイ、止めなさい』

にやぁ…と笑いながら、棺桶の蓋を横にずらすノーイさん。
そんなこと言っても、何か嫌な感じがするからパスしたいし、吉田魔王様も止めてるじゃないか。

棺桶の蓋が、誰の力も借りずに横にずれた。
そこにノーイさんの手が添えられているが、彼が動かしたのではな

いことがはっきりと分かる。

ノーイさんの表情が少しだけ硬くなったし、魔王様の表情が厳しい。
そうだな…。決定打を言うとするなら…雪ちゃんの所で見た様な真っ黒の手が、隙間から見えたってところ、かな…。

その手は、あっという間に僕の目の前まで来た。
吉田魔王様が、腰を浮かす。遅いだろ、今更。

思わず、『魔眼』を発動させる。
部屋全体に、三重の魔法陣が浮かび上がった。

部屋がカメラのフラッシュを浴びたかの様に激しく点滅する。

「ぎゃあああああ!!」

そんな、プライドとかありませんから!
安全第一!命は大事にしよう!
見えたことで、何度危険にさらされたか!!

猫モドキを放って、一目散に部屋を出る。後先考えずに全力疾走。
その姿を、二人と一匹は黙って見ていた。

「…まさか、本当に見えるとは。驚きました…」
『だから、止めろと言っただろ。あれは、馬鹿でも選ばれし勇者なのだから』
『才能はあるようだな。先程、二重魔法陣を見せてやったが、見ただけで三重魔法陣を構成するとは…。見た目より馬鹿では無いらしい』

どこまでも馬鹿にされる主人公。
今は、一体どこにいるのやら。

「しかし、姫がいないと困りますね…。最近は、こいつらも活発になっていますし…。
やはり、姫が弱っているのが原因でしょうか」
『そうだな…。前勇者が目を覚ますのも時間の問題だ。こんな時、何も無いと良いのだが、そう言う訳にもいかないだろうな。この状況は女神にとって好機に他ならない』

ふぅ…と溜息を吐く魔王を余所に、ノワールはじっと儚く輝く白猫モドキを見つめる。

「まさか、彼方がまだ生きていたとは驚きました…。お久しぶりですね、アインス。
二千年ぶりでしょうか」

ぽりぽりと、白猫は後ろ足で耳を掻く。
その様は、猫そのものだ。あくまで、角と羽根がなければだが。

『今は、猫モドキだ。ノーイというのは、そこの王に付けてもらったのか』
「えぇ。ノーイ・ヌル・フランクリン。良い名でしょう？」

アインス、いや、猫モドキは大して興味が無いという様に棺桶を見ている。
プラチニオンにとって、数字こそが我が名。
誇り高き、神の化身が人に名を貰うなど恥であると、従来の彼なら思っただろう。

『たまには、良いのかもしれないな』

「えぇ。そうせ、直ぐに消えるものですからね。良くも、悪くも…ね。さて、私達は作業に戻ります。あの馬鹿についてはあなたに任せますよ」

こくりと頷き、猫モドキは鉄の扉をすり抜けて主の元へと去っていく。

天候はいつの間にか悪化し、雷鳴が轟き激しい雨が窓を叩く。

不吉の予兆のように、薄気味悪い甲高い笑い声が研究室に響いた。

# 第十八話　僕と彼女の午後

「ぎゃあああ…！」

ども、田中優真です。
前回からあんまり時間経ってないから挨拶いらないと思うけど、少しでも気を紛らわしたい一心で。

話変わるけど、僕、今日厄日なんだよね。
携帯ってさ、星座占いとか見れるじゃない。
携帯ニュースとかでさ。

山羊座最下位なんだ。

現在、逃走中。
敵はいないけど。…多分。
振り向けば…何てオチが無いなんて誰が言い切れる？

誰か、誰か徐霊の出来る人は居ませんかー！？

取りあえず、近くにあった部屋に乱入。
幸いにも鍵は掛かっていない。
…教官の部屋だったら即死だな。

「ゆ、優真様…」

そこには可憐な少女の姿…って、着替え中でしたか。
「うわぁあ！すみません！何も見てません！ごめんなさい！」

「ゆ、優真様なら大丈夫ですけど…。お父様にバレれば大変ですわ」

急いで真っ白な寝間着であろう服を着るノワール。

第二の変態死を遂げた被害者にならなければいけないなんて。

どうしようか…。選択肢なんて一つしかないけど。

あいむ、デッド。

ちなみに名前じゃないよ。

「だから、私と優真様だけの秘密です。ねっ？」

ノワール、マジ天使。

ゲーマー以外の新たな理性が目覚めそうだぜ。

照れ隠しに辺りを見回してみる。

ゴシックの小物で統一された部屋は少し殺風景に見える。

ノワールは少し恥じらうように、ティーカップにお湯を注ぐ。

何か、この雰囲気。

初めて彼女の部屋にあがった嬉し恥ずかしのどうしていいのか迷うじれったいあの空気じゃね？

うわっ、意識したら余計恥ずかしい！

ちらりとノワールを見てみる。

目が合うと、ノワールもくすりと笑みを浮かべてくれた。

「……ノワール、女の子にこんなことというのは失礼かもしれないけ

ど…やつれた？」
「最近、いろいろとありましたからね。少し、疲れたのかもしれませんわ」

ふぅ…と息をはくノワール。
無言で紅茶が前に置かれる。
お辞儀をして、ティーカップを手に取る。
きっと、家にあるやつの何倍の値段するんだろうな。

「女の子とお茶するのは初めてかも…。ノワールは、淹れるの美味いね」
「有り難うございます。けど、私。女じゃないのですよ、優真様。彼方もご存じの通り、肉体を持たない影。何も持たない唯のまやかし」

カタンッ…とノワールがティーカップを置くその音がただ虚しく響いた。
長いまつげが儚く揺れる。

「ノワールは、肉体を持たない唯の影なのかもしれない。けど、影でも、とても美しく可憐だと…今まで見てきたどの子よりも可愛らしいよ」

その言葉に、俯いていたノワールが顔を上げる。
今にも泣きそうな、しかしどこか嬉しそうに笑っていた。本当に、花の様な笑みだった。

「ふふふ…。優真様はお優しいのね…。女口説きがお上手だわ」
「本心なんだけど…」
「優真様は、こっちの世界は好き？」

唐突にノワールが訊ねる。
「そうだな…案外、嫌いじゃないかも。今のところは。ただ、居心地が良いというだけだから」
「じゃあ、私が城下を案内しますわ。気分転換には丁度良いでしょう？」

そういえば、それが目的で走ってたんだ。
そう思っている間にノワールは僕の手を引いてどんどん進んで行った。

魔城の地下へ続く階段を降り、僕が進んだのとは違う方向へと駆けて行く。
置いて行かれないようにと必死に走り、トンネルの様な長い廊下を駆け抜け、出口へ向かう。

「どうです？我がミリェニス王国へようこそ、勇者様」

ノワールが、両手を広げる。
その先には、大人から子供まで様々な人たちが行きかっていた。

ミリェニス王国は、そもそもそこまで人口の多い国では無い。
そして、城の地下に街を作り、魔法陣によって動く自動の城で場所を転々としてきたらしい。

何だか、ミケガサキより此処の方が平和だ。
闇市も無ければ、無駄な諍いもない。
身分なんてものは無いし、何より幸せそうだ。

「良い国だね」
「そうでしょう？私もそう思いますわ。此処は、誰であろうと受け

入れてくれる。
国王の決めたことには、皆が協力するし、誰一人として不満を言いません。素晴らしい国です」

あっ、姫様だ！
何処かの子供がノワールを指さし、母親が嬉しそうに笑って会釈する。
ノワールも、小さく手を振った。
老人が近付いて来て、僕とノワールにリンゴを渡す。
何でも、家の庭で採れたとか。

行き交う人々一人ひとりがノワールに挨拶をして過ぎて行く。
やがて、僕達は街が一望出来る場所へと辿りついた。

辺りはいつの間にか、茜色に染まっていた。
「ねっ、良い気分転換になったでしょう？私、この国が大好き。此処は何でも誰でも受け入れてくれる。優しくて、温かい街。だから、私はこの国を守りたい。それが、私の唯一の願い」
「…ノワール、体調は大丈夫なの？」
「えぇ。最近、私の力を闇が凌いでしまって抑えが効かないの。一刻も早く回復して、事無きことにしたいのに…。優真様」
「ん？」

ちゅっ…と軽く頬に何かが触れる。
「ありがとうございますね。それじゃ、先に戻ります。…今のは、皆には内緒ですよ？」

恥ずかしそうに照れ笑いを浮かべながらノワールは走っていく。
だが、一度だけ止まって、振り向かずに言った。

「前勇者には、負けません」

一人残された僕は、頬に軽く触れてみる。

『この、ムッツリスケベめ』

「うわっ！猫モドキ、居たならいたと言ってくれ」

足元で、ごろごろと転がる猫モドキを抱きかかえる。

「ニアッ！」

だから分からないって、それじゃ。

＊＊＊＊

コンコンッ。

ノワールの部屋のドアが控えめに叩かれる。

「どうぞ」

「ノーイです。姫様。お体、大丈夫ですか」

ドアを開けると、ノーイが伏せ目がちに立っていた。

「あら、いつぞやの変態死の変死体だわ」

「そ、そんな…」

あからさまにショックを受けているノーイに、くすくすとノワールは笑みをこぼす。

「別に、優真様のせいで、弱った訳ではないのよ？半分正解で、半分不正解だわ」

「ですが…」

「優真様のおかげで、恋が出来た。人になれた。…認めてもらえた。それで、十分。

おかげで、光には弱くなってしまったけれど、生きれないというほどじゃないの。

ねぇ…、ノーイは知っているかしら？ある影の童話を。

昔、影で出来た女が居たの。日を浴びると死んでしまうし、皆気味悪がるからいつも一人、洞窟の中で暮らしていたわ。しかし、ある時怪我をした青年が洞窟で倒れているの見つけて彼を助けるのよ。

そして、次第に惹かれあって、恋をするの。素敵だと思わない？

彼に連れられて外の世界を見て、日を浴びて、この世の素晴らしさを知るのよ。

最後は弱って死んでしまうけれど、きっと彼女は後悔なんてしてないわ。だから、私も良かったと思えるの。幸せなのよ、凄く。この国に貢献できないのは悲しいけれど…。お父様は偉大な方よ。優真様もきっと手伝ってくれるわ…！」

くまの浮かんだ目で、ノワールは言った。心底嬉しそうに。

ノーイは複雑そうな目でそれを見た。

「姫様…。私は、いえ、私達残される側の身にもなってください…」

「ノーイ、大丈夫よ。もう、あなたは一人じゃないわ。もちろん、私も。

それに、弱ってるだけで死ぬわけじゃないもの。昔から、本当に心配症は治ってないのね」

よしよしと、ノワールはノーイの頭を優しく撫でた。

そして、月の様に静かに微笑む。

ノーイは、泣き顔を見られまいと、ずっと俯いたままだった。

# 第十九話　戦線布告

蒼い月が照らす、美しい夜。
一面に、蒼い薔薇が咲き誇る。

何故か、僕はそんな場所に立っていた。
中央には、不釣り合いな棺桶が置いてあり、月がその表面を照らしている。

カタンっ…と蓋が開いて、蒼い薔薇の敷布に落ちた。

月明かりに照らされ、棺に横たわる少女が目を開く。
その蒼白な肌には赤みが増し、人形の様にぎこちない動作で立ち上がり、夜空を見上げた。

すっ…と息を吸いこみ、その小さな唇から音が発せられる。
ふと、彼女は歌うのを止め、こちらを見た。

彼女から冷たい笑みが零れる。
長い黒髪が風に揺れて、薔薇の花弁が散って視界を覆った。

次に視界が開けた時、少女は何処にもいない。

「うわあああああ……何アレ」
冷たい汗が流れ落ちる。外を見れば、まだ夕暮れ。
ベッドの周りや、床下に魔術書が散乱していた。

そう言えば、新しい魔法陣以外のものを試してみたくて読み漁って

たんだった。
おかげで面白いもの出来たけど。さて、誰にあげようか。
窓は開けっ放し。風に吹かれて何処からか薔薇の良い香りがする。

「ニアッ！」
「ごめんごめん、煩かったね。いやー、変な夢を見たよ。妙にリアルでさぁ……」

ふと、手に何かを握っていることに気付き、そっと手を開く。
それは、蒼い薔薇の花弁だった。

深呼吸して、もう一度。
…やっぱり握ってる。

「あああああああああ！！！！」

猛ダッシュで部屋を出る。
猫モドキも何故かついて来た。
というか、何処へ行けば良いのやら。

「じゅげむじゅげむ南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華経ぅぅうわあああああああ！！！」
「煩い」

廊下に出ていたカインが、タイミング良く頭を叩く。
おぉ、何か久しぶりだね。教官は元気？

「あああああ」
「さっきから『あ』しか言ってないぞ。遂に退化したのか」

「夢だけど、夢じゃなかった!!」
「…意味が分からん」

とりあえず、そのまま吉田魔王様の部屋へ。

『夕餉ならまだだぞ』

第一声がそれで良いのか!?
見て、僕の錯乱ぶり。伝わってる?明らかに、夕餉気にして駆けこんでるようには見えないだろっ!

「で、何の用です?こっちは忙しいのですよ」

ノーイさんも呆れたように僕を見ている。

「此処って、バラ園あるか?」
カインの問いに、吉田魔王様は静かに首を振る。
『バラ園…?そんなものは、無いぞ?』
「全く、人騒がせですね…」
「良かったな、無いそうだ」

いやいやいや、何にしても、何で僕花弁持ってんの!?
何一つとして解決して無いよ。

「蒼い薔薇がたくさん咲いてる場所で、真ん中に棺があって…」

ぴくりと、二人がその言葉に反応した。
『その後は…?』
「えっ…。棺が開いて、雪ちゃん出て来て、歌たって消えた」
「幼稚園児レベルの説明だな」

カインが溜息を吐きながら言う。ノーイさんも無言で頷いてるし。
失礼なといかえせない自分の脳が憎いよ。

『ノワールの様子が心配だな。行ってみるか』

読んでいた書類を机の上に戻し、吉田魔王様が立ち上がる。
しかし、それをノーイさんが制した。

「書類を片付けてからにしてください。今夜中には、この山。処理してもらいますよ」
『チッ…。絶対抜け出して見せる』
そんな野望を一人ボヤく吉田魔王様だった。

＊＊＊＊

一度深呼吸すると、控えめにノックする。

「ノワール、無事？」
「あら…、優真様。一体如何したんですの？」

きょとんっと首を傾げるノワール。
とりあえず、先程見た夢の話をしてみた。

「…まぁ。前勇者様の目覚めですか…。しかし、まだ呪いが解けてはいませんわよ？」
「そっか…。あっ、ノワール。これ、あげる」
ポケットを漁って、お目当ての品を取り出す。
「何ですの？」
「うーん。お守り…かな。うまく作用するか分からないけど。多分、

大丈夫。だけど、作用しないことを願うよ」
「ニア…？」
足元で小首を傾げる猫モドキをそっと抱きかかえる。
「作ってはみたけど、ブレスレットにしかならなくてさ。これでも結構頑張ったんだ。
ほら、付けてあげる。腕出して」

ノワールが、その白く細い腕を差し出す。
あっ、別に変態的な目で見ているわけでも、ロリコンでもないからね。

「はい、どうぞ」
赤いブレスレットは、魅惑的な光を放ち血の様に透き通った赤黒い輝きを放つ。
その色は、ノワールの白い腕にとてもよく似合っていた。
「次は指輪でお願いしますよ。もちろん、左手の薬指に」
「ははは…頑張るよ。婚約指輪は今は無理だけど…。これが、僕なりに人を守る手段なんだ」

そっと甲にキスを落す。
わー、初めてやったけど恥ずかしい。こっちの世界限定だな。向こうだったらモロひかれてる。

「お姫様、貴女にご多幸が訪れますように」
「ふふっ…浮気は駄目ですよ？」
『ほぅ…。結婚は、私を倒してからにしろよ』

何時の間に…。
僕の横でとびっきりの笑顔を浮かべて、仁王立ちする吉田魔王様。
後でノーイさんに怒られますよ。…僕もかもしれないけど。

「二つの意味で怖い事を言わないで下さいよ」
『私は本気だが…？』
「まぁまぁ。優真様、頑張って下さいね」

そんな取りとめのない会話をして、時間が経って、別れた。
辺りはすっかり暗くなり、独りでに蝋燭に火がともる。
星は瞬き、太陽を月が追いやる。

楽しい午後だったから、全部忘れてたんだ。
さっき見た悪夢も、この国が狙われていることも、全部。

＊＊＊＊

「優真様の夢…少し気になりますね。何も無いと良いのですが…」

蝋燭を片手に、ノワールだけが行き来出来る秘密の園へと足を運ぶ。
彼女こそが、この国の要。影は入り口であり、出口。彼女こそが『門』。

良い夜風が吹く。
蒼い薔薇の花弁が舞い、月明かりが中央に置かれた棺を照らす。

そう言えば、今日は、満月だったわ。

ふと、何処も欠けていない月を見てノワールは思う。
『器』を手に入れられる絶好の機会。
短剣を片手に、そっと蓋を開ける。

そこには、蝋人形な美しい少女が眠っていた。

ノワールはほっと息を吐く。

此処で、『器』を手に入れるべきか、入れざるべきか。
短剣を掲げる手が、静かに震える。

自分の身を案ずるなら、此処で『器』を手に入れるべきだ。
しかし、心を案ずるのならこの『器』を諦めるべき。

「ふぅ……。困りましたわね。
しかし、この女だけは止めておきましょう。恋は、ライバルがいてこそですわ」

ノワールは、静かに短剣を降ろす。トサッ…と敷き詰められた蒼い薔薇の絨毯に短剣は埋もれた。
くるりと踵を返し、棺から降りると出口に向かって歩こうとした。

恋は人を変える。
だから、それ故の過ちが彼女を襲うのだ。

人形の様な、ぎこちない動作で女が立った。
長い黒髪は夜風に揺れ、瞳は蒼い光を宿す。

その手には、先程落した短剣が握られている。

「あっ…」
ノワールの目が大きく見開かれる。
気付くには、遅すぎた。

容赦なく、剣は振り下ろされ。
容赦なく、胸を黒い鮮血に染め上げた。

ドサッ…と、糸の切れた操り人形の様にノワールは力なく倒れる。

「良い所ね…。さて、援軍を呼ばなくちゃ」

吉田雪は棺から降りると、特定の人物にしか聞こえない声で唄う。

「さぁ戦争を始めましょう。魔軍の皆さま。この世の、平和の為に」

# 第二十話　魔城侵略

……。

……。

返事はない。

唯の死体の様だ。

「…どうする？連れて行くか？」

「いくら強大な力を持っていたとしても所詮は死体だ。動くはずもない。行くぞ」

＊＊＊＊

『結界が破れた…だと？』

「お久しぶりです。父さんに良く似た魔王様」

沢山の兵を引き連れた吉田雪が無邪気に笑う。

『さてと、どうやって入ったのか…そもそも、何故呪いが解けたのか教えてもらえると有り難い』

皮肉げな笑みを浮かべる魔王に対し、吉田雪は優等生の様にすらすらと言う。

「あら、簡単な話です。呪いは『死の夜』にかけられたものではないから。

…結界は、『死の夜』が死んだから。ただ、それだけです」

『目的は…？他の者達はどうするつもりだ』

「心配性なところも本当に嫌になるくらい似てる…。

さぁ…、女神様次第かな？私の知るところじゃない。私は貴方を倒

して元の世界に戻る。そのためにいる。目的は…領土争いといったところじゃないですか？あの国は新資源が欲しいだけ。だから貴方、生かしてもらえるんじゃないかと思いますよ？レシピが手に入ったら捨てられるかもだけど」

『そんな事は判りきっている』

ふぅ…と重い溜息をつく。

吉田雪は剣を片手に、近くにあった椅子に座る。

『随分と余裕だな。…その剣、何処で手に入れた？』

「剣ですか？オズさんが預かっててくれました」

吉田雪は静かに、壁の隅に寄り掛かるオズに目配せした。

ふと、この前のやり取りを思い出す。

魔城に騎士の間という鎧を並べてある部屋があるのだが、そこに何故か優真がいた。

挙動不審に辺りを見回し、一番奥の端っこの鎧を見つけると、そっと剣を外す。

『何をやっている？』

「おわっ！あっ、吉田魔王様か…。ビックリした。いやー、ほら、この剣隠した方が良いんじゃないかなと思って…。ほら、僕、魔術専門だからいらないでしょ？木を隠すなら森の中だよ」

よいしょ…と、『勇者の形見』改め、『勇者の剣』を鎧に持たせる優真。

あの時はその考えに至ったことに感心して見落としていたが、あれらの鎧が持っているのは、全てフェンシング用の細い剣。

それに比べ、『勇者の剣』は大剣の様に大きく太い。そして黒い。

いくら隅の方だろうと、誰であろうと一目見れば分かる。
その最大の矛盾を忠告するのをすっかり忘れていた。

『結果がこれか。ふはははははっ…死にたい』
「大丈夫ですよ。どの道死にます」

「勇者様、城内の反乱軍を捕らえました！」
ドタドタと数人の兵が駆けあがって来て、ドアを勢い良く開く。
兵士たちに、剣を突き付けられたカイン達がぞろぞろと歩いていた。

「すまん。流石に、この人数は無理だった。後から増兵するみたいだしな」
「この軟弱者がっ！剣さえ折れなければこちらが勝っていたというのに…」

アンナが悔しそうに言う。
一番後ろで、ノワールを抱えたノーイはずっと無言だ。

『ノーイ…、『死の夜（ノワール）』は？』

ノーイは静かに首を振る。
その時、ドアの隙間から猫に似た生物が入って来た。猫モドキだ。
吉田雪がそれに気付き、手招きした。

「変なの。お前、猫じゃないのね。……イタッ！！」

吉田雪の指から血が流れる。
思いっきり猫モドキが噛んだからだ。
フシャァァァ……！！とそのまま威嚇する。

「このっ！勇者様に何て事を…！」

下っ端であろう兵士の一人が、剣を振るう。
赤い鮮血が飛び散り、猫モドキの身体が壁に当たった。
もし、この光景を優真が見たらどう思うだろうか。ふと、そんなことを考える。

「お前ら、たったそれだけの事で斬るのか？…兵士の屑だな。
そういや、優真は何処だ？姿が見えないぞ。…まさか、この期に及んで部屋で寝てんじゃないだろな」
「優真…？それが、私の次の勇者の名前？彼方たち、見てない？」

吉田雪が兵達に聞く。兵達はお互い顔を見合わせ首を振った。
だが、その中で二人の兵が小さく言う。

「多分、そいつ。部屋で死んでましたよ」
「……は？」

カインが思わず間抜けた声を上げる。

「死んでたんですって…。ベッドの上で、血塗れで」
「せっかく同じ境遇の人に会えると思ったのに…。それにしても、皆さん随分遅いわね。せっかく結界を解いてあげた言うのに」
「そんなことより、何で死んでんだよ！お前らの内の誰かが斬ったとしか言いようがないだろうがっ！」
「どんなに抵抗しようと、一応生かすわ。…けど、指名手配人だから殺されても仕方がないとしか言いようがない。此処は、生ぬるい考えで生き残れるほど優しい世界じゃないのだから。そんなに気になるなら、見てみましょう。その、優真君が死んだかどうかを。…

オズさん、お願い」

オズが壁に陣を描く。
その陣が光り出し、壁に優真の部屋を映しだした。
床に散乱した魔法の書の数々。壁には何やらメモ書きのようなものが張ってある。

しかし、どれも真っ黒な血が付いていて。
ベッドシーツは真っ黒に染まっていた。
胸には刺された様な傷跡があった。目は見開かれ、手はベッドからずり落ちている。
その肌色は白く、血が通っていなかった。

「田中…優真君…？」

吉田雪の口からそんな言葉が漏れた。
そういえば、知り合いだと言っていたな。

その時、床に突然、陣が描かれ、女神の声が響いた。
『初めまして、前勇者。仕事が早くて助かるわ。今から、魔城に総攻撃を開始します。
『魔力魂』はあるだけ貰ったし、その国に用は無いわ。もちろん、貴女にも…と言いたい所だけど、まだまだ仕事は尽きないわ。これからも手伝ってもらうわよ。…早く、元の制に帰りたいものね？
あぁ、それとそこにいる反乱軍とかそうでない兵達は放っておいて。魔力の無駄よ。
そうね、筋書きとしては『勇者と共に魔王を倒しに行った兵達は魔王のあまりの強さに生き残った者は居なかったが、勇者は授けられた力により、見事魔王を倒した』ってところかしら？』
「…そんな、女神様っ！私を捨てるおつもりですか！？」

オズが叫ぶ。
女神はあざ笑うかのように言った。

『今までありがとう、オズ。おかげで上手くいったわ。前勇者は復活したし、もう彼方に用は無いわ。
さようなら』

床に描かれた陣が消え失せ、オズはその場に崩れ落ちる。
それと同時に、吉田雪の足元に移動の魔法陣が描かれた。
そしてその場から姿を消す。

兵達は、唯唖然としていた。

その時である。
「…ノーイ?泣いているの?」

か細い声が聞こえた。
全員が、ノーイの方を見る。
そこには、うっすらと眠たそうにノーイを見るノワールの姿があった。

# 第二十一話　勇者復活！

「姫様…！！よくぞ、御無事で！！」
「私、確か…前勇者に刺されて…。その後、どうしたのかしら…？
というか、ノーイ。状況を説明してちょうだい」
『仮死状態だった訳か…。だが…、状況は何一つ変わっておらん。
『死の夜（ノワール）』が弱っている以上転移は無理だ』

うーんと唸る吉田魔王様。
その間にも、兵達はパニックを起こしていた。

「うわぁぁぁ！！俺達、どうなっちまうんだ！？」
「死ぬに決まってんだろ！！」
「助けれくれぇ！」
「ええぃっ！煩いっ！仮にも兵士だろう！！」
アンナが叫び、兵士たちがびくりと肩を震わす。

「なぁ…吉田魔王様。魔力魂とノワールの力が無いとして転移は不可能なのか？俺達全員の魔力を合わせてば、もしくは…」
『可能性としては否定できないが、唯、時間がかかる。だが、やらない手はないだろう。皆、とりあえず地下に集まれ』

全ての事情を知り、顔を蒼白にするノワールを、ノーイが抱き抱えて後に続く。
ぞろぞろと、皆部屋を後にし、吉田魔王様を筆頭に地下へ歩み出す。
アンナも部屋を出てこうとし、ふと壁の隅に蹲るカインの姿を見つけた。

「どうした?さっさと行くぞ」
「あぁ…。この猫も連れてってやらないと思ってな。…ほら、もう少しだ。頑張れ」
「……ふん。目に見えて落ち込むな。それが騎士の役目だ。例え、誰が死のうとも…」
「アンナも十分、涙声だ。…お互いさまってことで。さぁ、行こう」

腕の中で苦しそうに呼吸している猫モドキを抱え、カイン達も後に続く。
だが、途中優真の部屋を通り過ぎると、猫モドキはカインの腕から抜け出し、ドアの前へ座る。ドアは固く閉ざされ、入る隙間がないからだろう。
「お前のご主人様はな、もう起きないんだ。…そのくらい分かるだろ」
「フシャァァァ…!」
猫モドキは弱々しく威嚇する。
アンナがカインの肩に手を置き首を振った。
カインはドアを少し開けてり、猫モドキが中へ入るのを見届けると、アンナと共に、地下へ向かった。

地下の都市では国民が不安そうな目で空を見ていた。国民を見張っていたであろう兵達も地面に座り込んでいる。
どうやら、女神の声は城内の地下まで届いていたようだ。
だが、国民は誰もパニックを起こしていないようで、指示を待つように、強い瞳で吉田魔王様を見ている。
そして、一人の体格の良い女性が吉田魔王様の前に立ち、静かに言った。

私達に出来ることはありますか?…と。

吉田魔王様はその女性の瞳を真っ直ぐに見つめ、力強く頷く。そして、全員に聞こえる様な朗々とした力強い声で言った。
『このような事態になって済まない。皆が知っての通り、事は一刻を争う。ノワールが弱っている以上、直ぐに転移することは不可能だ。そして、私一人の力を持ってしても不可能である。
…皆の力を借りたい。この通りだ』

吉田魔王様はその場で土下座した。

「国王様、お顔をお上げ下さい。事は一刻を争うのでしょう?貴方は私達の王。王の決め事に口を挟む市民何てこの国に存在しませんわ。…さぁ、皆!そうと決まればありったけの塗料を運びましょう!」
『ありがとう…』
吉田魔王様は泣きそうな顔で微笑んだ。
国民達は笑顔で返し、吉田魔王様に手を差し延べる。そして、各々の作業に取り掛かった。

「ノーイ、私達もやるわよ。陣の大きさを計算しましょう」
「分かりました」

「アンナ、俺達も運ぶのを手伝おう」
アンナはこくりと頷き、近くにいた女性が運ぶ塗料を半分持って中央へ走っていく。
中央では、既に陣の形成が始まっていた。

…感傷に浸っている暇はない。

カインも、塗料を運ぶ為走り出した。

＊＊＊＊

「貴女が前勇者様ね？さて、『魔力魂』の回収も終わったことだし、そろそろ始めようかしら…」

「女神様…、魔王を倒したら元の世界に還していただける約束は、どうなったんですか」

吉田雪の問いに、女神はにっこりと微笑んだ。

何を言っているのというように小首を傾げて。

「それは前の女神との約束でしょう？魔王は後三体。大丈夫、貴女の実力なら直ぐに片付くわ」

拳が震えた。

怒りのためではない。恐怖故にだ。

後、三人。

いや、それ以外にも絶対に斬らねばならないだろう。そう思うと、身体に力が入らなかった。

あの光景が脳裏に焼き付いて離れない。

「ごめんなさい、優真君…」

女神はそれを一瞥すると、声をあげた。

「総攻撃開始ッ！」

辺りに描かれた魔法陣が光だし、無数の炎の球が魔城目掛けて跳んでいく。

「あの薄気味悪い魔城が燃え盛る姿は、さぞ美しいのでしょうね」
恍惚とした表情を浮かべ、女神は冷ややかに笑った。

＊＊＊＊

「国王様！描けました！」
ノーイが声を上げる。
吉田魔王様は頷くと、皆に陣に触れる様に言った。
やがて、陣いっぱいに人が集まる。
『子供と老人は陣の真ん中へ。何があっても、魔力注入を心掛けてくれ。例え無理でも、陣が消え無ければいい。それじゃあ、いくぞ』

ぼぅっ…と身体から魔力が流れ、陣へ吸い込まれていく。
まるで、砂漠に水を染み込ませるかの様に、陣へ膨大な魔力を注ぎ込んでいった。

それと同時に轟音が響き、炎の球が降ってきて、近くの民家に当たり、たちまち家は火だるまになる。

『始まったか…！』
「お父様、此処は私にお任せをっ！」

ノワールが両手を広げると、ドーム状に透明な結界が現れる。
流星群の様に炎の球が所々当たって、少し地面が揺れた。

「蜂の巣にでもする気か！？」
誰かが叫び、子供が泣き叫ぶ。
天井は今にも崩れそうだ。
「うっ…。も、もう限界ですわ…！！」
『ちっ…。まだ魔力が足りないっ！もう少し何とか持ちこたえられ

ないかっ…？』

そのやり取りに、皆無言で家族を抱き寄せた。
彼らの魔力もそろそろ限界なのだ。中にはとっくに尽きている者もいる。

一段と大きな炎の球が魔城に当たって、天井が崩れるのと、結界が壊れるのは同時だった。

その場にいた全員が目をつぶる。
しかし、天井はいつになっても落ちて来なかった。

「何が起きたんだ…？奇跡か？」
『攻撃も止んだ様だな。一体、何が起こった？』

ノーイと、吉田魔王様が唖然とした表情で天井を見上げた。
落ちてくるはずの天井は、一メートル程の所で制止している。

『はいはーい。魔法（が使える）少女、少年、その他の皆様方。絶望に負けてはいませんよー』
気の抜けた声が地下に木霊する。
その声に、カイン達が顔を綻ばした。

落ちてくるはずの天井には、いつの間にか陣が描かれている。

「お前、死んだんじゃ…」
『カインはそんなに僕を亡き者にしたいのかい？
…まぁ、冗談だよ。いやー聞いてたよ？珍しく取り乱してたねー。
録音出来なかったのが残念だ』

「貴方も仮死状態だったのですか？」
『いや、本当に死にかけたよ。この前、ノワールにお守りをあげたんだけどさ、あれは、相手が受けたダメージがお守りをあげた人物が肩代わり出来るハイテクアイテムでね？
まぁ、結果的にノワールと血の契りして魔族になってなきゃ、お陀仏だったけどね』
ノーイさんの問いに、僕は冗談っぽく言う。

「兵が来た時は、本当に焦ったよ。タイミング分からなくて、ずっと死んだフリしてたら猫モドキが来てくれて、此処まで案内してくれたってわけ」
「優真様っ…！良かった」
やっとの思いで陣の前に立つ僕に、ノワールは安堵したように、その場に崩れ落ちる。
ノーイさんがそれを支え、ゆっくりと膝の上で寝かせた。

「来るのが遅いぞ、馬鹿者…」

教官が泣きそうな笑みを浮かべて言う。

「勇者は、遅れて登場するものさ。
…さて、巻き返しと行こうじゃないか」

ということで、どうも皆さま。
馬鹿勇者こと田中優真、堂々の復活です…一応ね。

## 第二十二話　逃げるが勝ち

「…だから言ったでしょ。僕、嘘付かないから」

打ちひしがれるオズさんを一瞥し、猫モドキを泣いている子供たちに抱えさせる。

あっ、逆効果とかにならないよね？

次に携帯を取り出し、電話を掛ける。

これが成功してくれないと、後々困ると思うんだよね。

『はい、もしもし…』

「あっ、陽一郎さん？吉田さん、近くに居る？…いや、まだかわらなくて良いけど。色々あってね。一人鬱になってる人がいるから適当に愚痴っといて」

僕、医者じゃないんだけどというコメントは無視し、オズさんに携帯を持たせる。

「…で、お前はこれから何を？」

「逃げるが勝ちだよ、カイン。…さて、結界で防ぐのも中々辛いな…。向こうが攻撃止めてくれれば助かるんだけど。とりあえず、応援呼ぼうか」

小脇に抱えていた書を開き、指でなぞる。

その仕草に、吉田魔王様が眉間に皺を寄せた。

今持っている本は何かって？

正直、僕にも分かんないんだよね。魔城に来た時、いつのまにか、ベッドの下に落ちてた。

言っておくけど、エロのつく本じゃないからね？
こんな状況の中、そんなもの読む余裕があったら、この窮地をとっくのとうに抜け出してる。

けど、この本。唯の本じゃないみたいでさ。
触れていると、魔法陣が溢れて来るんだよね。

馬鹿にお優しい、なぞるだけのワークブックとでも言えば良いんだろうか。
とにかく、血で本に描いてある陣をなぞるだけ。普通に地面とかに描くのもあるけど。

けど、複雑過ぎて魔眼で発動出来ないのが悩みの種だ。

「『召喚』」

黒煙が辺りに立ち込める。

だが、それだけだった。

何も起こらない。
あれー、確かに召喚したはずなんだけど。

「おい、何も召喚されてないぞ？」
カインがやや呆れ顔で言う。
「うん、そう……あ」
「どうした？」

今召喚したものと、一つの疑問が見事に一致した。

「僕、とっくのとうに、結界張るの止めたんだけどさ。…何で、攻撃されてないの？」

「……。責任とって、外見て来なさい」

「はい…」

何て、漫才をしている場合ではないのだけれど、カインの言うことも一理ある。

だが、見なくても分かるんだよね。だって、召喚主だもの。

『どうせ、立て直すんだ。壁を壊せ』

何か魔王様完全にくつろいでますね？

さっきのやる気は一体何処へ？

子供達は猫モドキと遊んでるし、ご婦人方は井戸端会議を開いてるよ。

何、この体たらく。

ねぇ、僕来ない方が良かった？良かったよね？シリアスな雰囲気が台無しだよね？

「まぁ、そういうことなら遠慮なく」

指を鳴らす。

同時に天井の一部が吹っ飛んだ。

そこから見える青空。

あら、まぁ…良い天気。

…の筈がないじゃないか。

やべぇよ、地獄だよ。召喚したの、僕だけど。

くるりと踵を返し、カイン達の元へ戻る。

「どうだった？」

「……今すぐ、逃げよう。侵略されるのも時間の問題だ」

真顔で言うと、カインは驚いた様な表情を浮かべる。

教官も怪訝そうな顔をした。

『そうだな、それが良さそうだ』

同じく壊れた天井の一部から空を見上げていた吉田魔王様がぽつりと呟いた。

「そ、そんなに押されているのですか…！？」

ノーイさんが声を荒げる。

僕と吉田魔王様は同時に頷いた。

「押されてる」

『あぁ、いつ潰されてもおかしくないな。さて、勇者。責任とって、お前一人で移動させろ』

「へイホー」

陣に手を置き、ありったけの魔力を流し込む。

その間にノーイさんとカイン達は慌てて天井を覗きこむ。
そして無言で帰って来た。
そのまま無言でカインが僕の頭を叩く。

「何をどうすれば、あんな大惨事になるんだ？」
「僕も予想不可能だったよ。召喚しといていいうのも何だけど、何アレ。魔人大戦争？」

お外の状況をご説明いたしますと。

天井の一部が吹っ飛んだ。

そこから見える青空。
あら、まぁ…良い天気。

…の筈がない。

お空からドラゴーン！！

なんですよ。
いや、それだけで済めば良いんですけど。

お空からドラゴーン！

お空からゴースト！

お空から魔っ人ー！（何故か骸骨）

あと、その他諸々がわんさか出て来るんですよ。
魔人なんか、今にも此処を手すり代わりに使ってきそうな雰囲気で、

だから、城が押しつぶされるのも時間の問題ってこと。
今は一応夜の筈なんだけど、空が朱染め…なんて可愛いものじゃない。
マジで赤黒い。血でも零しましたかってくらい。
兵士達悲鳴ったら、もう。
心中お察しします。

僕なら、全速力で逃げるよ。
とりあえず陣を形成して、外の様子を見ているけどいたたまれないな。

流石の女神由香子の顔も真っ青。うわー、超写真撮りてぇ。
城の中で大人しくしてればいいものを、わざわざ出向くからこういうことになるんだよ。
いけ、良いぞ、もっとやれ。

さて、雪ちゃんはっと…。
おっ、いたいた。よし、女神由香子からは離れてるな。けど、目が死んでます。
…そろそろ、頃合いか。ホームシックなお嬢さんに、救いの手を差し伸べてあげようじゃないか。

何やら物凄く話し込んでいるオズさんから携帯を何とか取り戻し、陽一郎さんに吉田さんに替わる様命令する。
ふてくされた様なちょっと待っててという声がし、日曜の国民的家族アニメのメロディーが流れだす。

今のうちに、雪ちゃんの位置を計算してっと。

そして、陣を形成する。僕の足元と、雪ちゃんの足元に。
ちゃんと、この声が届くように。

ポゥ…陣が密やかに光り出す。

チャラララチャンチャチャラチャラララ～ン。

その秘密を暴くかのように、大音量で日曜の国民的家族アニメのメロディーが木霊した。

僕は無言で、顔を覆う。
こんなはずじゃなかったんだけど。

だが、状況が状況故に向こう側は誰一人として気にする者はいない。
こっちは皆が冷めた目で見て来るのにね…。

『もしもし、優真か？何か用か？』

僕の足元の魔法陣が光り、次に雪ちゃんの足元の陣が光る。
弾かれた様に、雪ちゃんが顔を上げた。

「お父さん…？」

次に雪ちゃんの足元の陣が光り、少し遅れて僕の足元の陣が光る。
そう、この陣はお互いの声を陣越しに届けてくれる電話回線みたいなもの。

『その声…雪かっ！？優真、一体何がどうなって…夢なのか、これは…』
「非現実的な現実だよ。少ししか会話できないかもしれないけど、

後は二人だけで話してね。僕は、色々忙しいから」
「優真君、ごめんなさい。後、ありがとう…」
そんな声が伝わって来て、照れ隠しに頭を掻く。

「別に…吉田さんの為じゃないし。元気でね。…ちゃんと生きて元の世界へ帰ろう？
ほら、吉田父。後は二人だけで話してね」

後ろでカイン達がにやけているが気にしない。奥様方がウブねとか呟いてるのも気にしない。
吉田魔王様とかが青春だなとか言ってるのも気にしない！
今は集中して移動の陣を完成させるんだっ。
つーか、お前ら真面目に手伝えよ！責任取るとか言ったけど、一人で出来る訳ないだろうが。

徐々に陣が光を放つ。
時折吉田さん達の嬉しそうな会話が耳に入り、ほんの少し手を止めた。

家族ねぇ。どうせ、僕には希薄な存在ですよーだ。

「……手伝います。ぐすっ…色々あったんですね、彼方も…」
横からオズさんが顔を出す。
何で泣いてるの、君。ていうか、今、何て言ったよ？

「はいはい、同情するならゲームくれ」

全く…陽一郎さん、一体、何を吹き込んだ？

「たっぷり休憩したし、俺らもやるか」
教官も頷いて、陣に手を置く。

……。

「…皆さ、慰めたいのは分かるけど、これっぽっちも魔力陣に注入されてないんだよね。手伝う気があるなら邪魔だから陣の隅っこにでも座ってなさい。正直、狭いんだよ。全く、もうっ！」

ありったけの、今出せる全て魔力を一気に注ぎ込んだ。
移動の陣が黄金に光り出し、周りがどよめく。

「『送還』」

本が光り、外の悲鳴が止んだ。
そして。

「移動開始」

# 第二十三話　指名手配２

「移動終了って…此処、何処？」

蒼い空に、カモメが鳴く。海風が髪を揺らした。狭いが白煉瓦で統一された路地には出店が並ぶ。

前行ったミケガサキの市場より店構えが豪華で、高そうな品々が並んでいた。

その狭い路地の先をずっと目で追って行っていたら、おそらく中心都市であろうものがずっと遠くにあり、その先に不似合いな黄金の塔なのかビルなのか良く分からない建物が太陽の光を浴びて輝いている。

その建物の中心には大きな横長の水晶がはめ込んであり、アナウンサーらしき女の人が何かを実況していた。

『フェラ王国の第四地区オルデェアの市場と言ったところか。随分遠くまで飛んだな』

ふーん。此処があの有名なナルシスト王国か。

あぁ、行き交う人々の顔面のクオリティーの高さったらもう。イケメンなんて二次元だけだと思ってたよ。滅べ。皆、滅んでしまえ。

「…皆は？」

さっきから声は聞こえるけど姿が見えない。

『『透明の陣』で姿を隠してるだけだ。すぐ近くに居る。さっさと行くぞ』

ぐいっと袖を引っ張られたまま移動。
にしても、のどかだな。ミケガサキは魔力魂の略奪に忙しいというのに。
魔術に長けているそうだが、『魔力魂』無しでも普通に生活できるだけの魔力を持った国なのか？

「…良いか、絶対に誰とも喋るなよ。此処の住民は関わると色々面倒だ」
直ぐ横からカインの声が聞こえた。
「その直ぐ隣には教官がいるよね？」
「あぁ。良く分かったな」
まぁね。だって、気配が隠れていませんよ。物凄くイライラしてますね？伝わってきます。
カインの声も心無しが上ずっている。

「ニア！」
「ん、何？猫モドキ…って、わっ！！」

前から来た人と派手にぶつかり、双方地面に尻もちをつく。
その拍子に本が腕からすり抜け、相手の足元に落ちた。

「あー、すみません。大丈夫ですか？」

よく見れば、金髪碧眼の子供というか、少年というか。
僕より年下なのは間違いないけど、僕より身長がでかいのが何かムカつくね。縮んでしまえ。じゃなきゃ、四分の一程ください。

「さっきから見ていたが、お前、誰と話しているのだ？」

あれ、こっちの気遣い無視ですか？

もしかして言葉通じてない？
アーユージャパニーズ？ノーノー、アイム、ナルシー！…みたいな？いや、どんな感じか知らんけど。

「いや…独り言ですかね」
「お前、一人か？何しに来た？」

あっ、通じてない。オーケー、分かった。もう知らん。

「人待たせてますんで、さようなら」
「ちょっと、待てって…！」

ちょうど、本の見開きに足が乗っかる。

「あ」

突然立ち止まる僕に、向こうもカイン達も訝しげな顔で見つめている。
そんなことより、おいこら子供。何て事してくれたんだ。
まだ、契約解除して無いんだぞ。そんなことしたら…そんなことしたら…どうなるんだろうね？

予想、後でエライ目に遭う。
結果。胸の傷口が開き、シャツが黒く染まった。…いや、ちょっと待って。空気読んで下さい。

「踏まれたぐらいで…そんな、怒ることないじゃん…」

これが僕の最後の言葉となった。…というのはもちろん、冗談だ。
こんなんで死にたくないよ。と言うか、死にきれない。

「おぉ…！何だ？この本がお前の体なのか？」

僕の人体＝本。

人権を無視しした斬人なアイデアだな。せめて感覚神経とかにして。

つか、足退けて。

薄れゆく意識の中で、そんなことを考えていた。

＊＊＊＊

差し込む白い光。太陽の光にしてはやけに強い。

ぬっ…と何かの影がその光を遮った。

「ニアッ！！」

ガツン。

頭に凄まじい衝撃が走って、思わず跳び起きる。その拍子に何かが落ちた。

「いってぇ…。あっ、猫モドキ。おはよう」

と言っても、姿は見えないのだけれども。気配は感じたので挨拶しておく。

それにしても、此処は一体何処なのだろうか。

辺り一面、白く仄暗い部屋だ。蛍光灯の様なものが白い光を発す。

寝台と言うには中々簡素な造りのベットに寝かされていた。

というか、ベッドというにも疑問を感じるな、この造りは。

とりあえず立ち上がり、先程落ちたものを拾う。白いハンカチの様な絹の布だった。

起き上がった拍子に落ちたということは、顔に被せてあったということだろう。

……考えられることは一つ。
だが、その前にまず感想を。

「扱いが酷過ぎるというか…それ以前に、まだ死んでねぇよ」

おそらく霊安室の様な所なのだろう。病院内なのかどうかは知らないが。
しかし、火葬される前で目覚めて良かった。猫モドキ、ありがとう。

その時ドアが開き、誰かが顔を出す。
残念ながら、顔は分からない。運ばれる途中にでもコンタクトが取れたのだろう。しかし、さっきの少年でないことは確かだ。身長と髪色が違う。

「あっ、生きてる」

第一声がそれだった。
そもそも死んでませんよ。

「皇子ー、生きてましたよー。立ってますー」

しかし、皇子って誰？僕、そんな人に助けてもらっちゃったの？

「おぉ。生きてたか！思ったより頑丈に出来てるんだな」
感心しながらひょこっと先程の少年が顔を出した。手にはあの本が握られている。

…世も末というか。教育がしっかりしてないとか。この国終わったなとか。
色々な感想が頭の中で渦巻く。
何はともあれ、いくら原因がこいつでも助けてもらったことに変わりない。

「助けて下さって、ありがとうございます」

日本人っぽく、律儀にお辞儀してみた。
「さて、ノイズ。お茶の用意だ。そろそろおやつの時間だからな」

神様、僕はこの国に嫌われるようなことしたんでしょうか。
さっきから放置されてます。

「分かりました、少々お待ち下さいませ。にしても、これはどうするんですか？」
「ん？もちろん、宮殿に連れて行け。こいつ、中々面白いからな。友人にしてやった」

何処に友達要素がありましたか？つか、何で上から目線なわけ？

「こっちから願い下げだ、バーカ。ジャイアントチャイルドめ。空地でも守ってろ、バーカ」
小声で呟いてみる。どうせ聞こえてないだろ。

「ノイズ、やれ」
「かしこまりましたー」

何をやるのかと思いきや、皇子がノイズとかいう男に僕の本を手渡した。

ノイズが指を鳴らすと、その手から炎が発せられる。
本をその炎の上に…って、あれ？炙り出し？そんなことしても文字は浮かんできませんよー。
…何てボケている余裕はない。あの本が燃えたりなんかしたら傷口が開く程度の事じゃ済まされないぞ。
こんな仕返しをされるとは、ノビ助も真っ青なことだろう。

「猫モドキ、そこにいるなら本こっちに弾いてくれ」
「二アッ！」

猫モドキの声がして、次の瞬間ノイズの手から本が弾かれる様にしてこっちへ飛んで来た。
それを素早くキャッチする。猫モドキも僕の足元にいるようだ。

「『移動の陣』」

『魔眼』を発動させ、何とか脱出。
さらば、ナルシー共。二度と会わないことを願うよ。

＊＊＊＊

海の匂い。緩やかな風が髪を揺らす。
どうやら、さっきの市場に戻ってきたようだ。すると猫モドキが何処かへ駆けて行く。
その後を追うと、カジノと思われてもおかしくない酒場に辿りつく。
何と、猫モドキはその豪華な店の中へ入っていくではないか。

「ちょっ、待ってよー」
店の中にはいると、魔族の皆さまがくつろいでいた。

店の隅っこで立っていたカインが僕に気付き駆け寄って来る。

「よく無事だったな。お前がこの国の皇子と接触したときには本当に焦った」

「で、置いて行ったと」

「仕方がないだろう。あんな者と関わったら精神崩壊も考えられる」

奥から吉田魔王様とノーイさんが出て来て、僕の姿を見るなり少し驚いた様な顔をする。

どうやら、皆本気で戻らないものと考えていたらしい。

「あぁ、良かった。無事でしたか。てっきり帰って来ないかと思ってましたよ。

もう少し経てば捜索にでも行こうかと相談してたのですが、手間が省けて良かったです」

「ノワールの調子はどう？というか、教官は？」

「ノワールならしばらく魔城で安静にしているらしい。アンナはノワールと一緒に魔城の守りをするらしい」

呆れ顔で言うカインに、余程この国に来たくなかっただろうなと教官に同情してみた。

『何はともあれ、無事でよかったな。さて、これからどうしたものか…』

その時、大音量でニュース速報が流れた。

おそらく、あのバカでかい水晶からだろう。

『さて、王国第一皇子からの直々の言葉だ。ありがたく思え、愚民共』

「カイン、幻聴が聞こえるよ。僕、少し疲れてるみたい」

「あぁ。お前の気持ちは痛いほど分かる。だが、残念なことに現実だ」

外へ出て、水晶テレビを見ると画面いっぱいにあの皇子の姿が映しだされている。

「わー、コンタクト無くてもよく見えるやー」
「おいおい、正気に戻れ。そして、頑張れ」

つぎに、画面に涎を垂らし、寝ている僕の写真が映し出された。
僕達の動きが一気に固まる。

『この男、ミケガサキ国内では既に指名手配されているらしい』

「どうしよ、カイン。この先が想像できて聞きたくない」
「ドンマイ。捕まっても達者でな」

『先程、この男を我がフェラ王国で見かけた。しかし、いくら同盟を結ぼうとミケガサキの指名手配犯はミケガサキで捕られるべきだ』

「おっ、ちょっと風向きが変わったな」
「無理無理。僕には全てが見えるよ。あは、あははは」
「駄目だ、完全に壊れた」

『よって、我がフェラ王国でもこの男を国内手配する！見つけた者は直ちに王宮に報告せよ！以上！』

ぽんっ、とカインが肩に手を乗せる。その目は同情に満ちていた。

『…そうだな、出来るだけこの国から去れるよう準備を整えること

にしよう』

吉田魔王様も、いつのまにか僕の傍に立ちそう呟く。
その隣でノーイさんも憐れみの目で僕を見ている。

どうやら、僕には指名手配される素質があるようです。

## 第二十三話　指名手配２（後書き）

次から女子の出番を増やしたいと思います。

# 第二十四話　女装

「…目撃情報が此処でありました故、調べさせてもらってもよろしいですね？宜しければご案内していただけますか？」
「も、もちろんですわ…。おほほほ」

長い黒髪が動作にあわせて揺れる。フリルををこれまでかというほどあしらった丈の短すぎるゴスロリでくるりと向きを変えると、ふわりとスカートが揺れ、日を浴びたことのない様な白い太腿が垣間見えた。
店の至る所から視線が集中する。

「失礼、申し遅れました。私、第一皇子側近のメイドをやっております、メアリですわ。レディ」

手を差し出される。

…何ですか、この手は。いや、そりゃ意味は分かるよ。挨拶でしょ。漫画で皇子様が姫によくやる。けど、君、女でしょ！？その差し出し方おかしいから！何、オカマなの？
店の奥から必死に笑いを堪えて、もがくカイン達の姿が目に入る。

「まぁ…。けど、此処のお店にまた来てくれるというなら案内して差し上げてよ？」

一生来るな。内心そう思いつつ、やや引き攣った笑みを浮かべた。

周りから何やら奇声という名の雄たけびというか、歓声が飛ぶ。
くすりとメアリが笑う。

「良いでしょう、望むところです…」
その間が、名前を教えなければならないという空気だったので取りあえず名乗ることにする。

「たにゃ…いえ、ターニャ・ユロワですわ、メアリさん。親しい友にはユウコと呼ばれておりますの。良かったら、そうお呼び下さい」

危ない、危ない…。もう少しで本名名乗るところだったよ。
ちょっと待て、僕。何故、その名前から優子(ユウコ)となった?何処にもそう呼ばれる要素ないだろ。

何はともあれ、どうも皆さん。
田中優真改め、ターニャ・ユロワ。愛称、優子(ユウコ)。
只今、女装中ですわ。

何故このような事態になったかというと、一時間程前まで遡る。

早朝。
次の転移は、情報が集まってからということで、しばらくの滞在が余儀なくされた。
ということで、しばらく隠れ家であるこの店で営業をするらしい。
珍しく、ノワールの姿もあった。カインと僕、そしてノワールさんは机を囲んで朝食を取る。

「…此処が何かあった時の隠れ店ってことは分かっただが、国民全

員情報収集に回すんだろ?店員はどうするつもりなんだ?」

何か、文化祭の出し物決めるみたいだなとか思いながらコーヒーを啜る。

「どうせ客はそんなに来ませんよ。私達だけでどうにかなるでしょう…と言いたいところですが、猫の手も借りたい程の忙しさになることでしょう」

床でご飯を食べていた猫モドキが、不安そうに顔を上げた。

うん、大丈夫だよ。君、猫じゃないから。

猫モドキだから。

「して、その理由は?」

「魔王様が料理の達人だからです。一度は何かの特集に組まれた程なんですよ。隠れ家といっても酒場なので、魔王様は仕事の合間とかに息抜きに働いています」

カインの問いに、ノーイさんは胸を張って答えた。

へー、魔王なのに?それとも魔王を名乗る前かな。

こっそりとノワールに聞いてみる。するとノワールもこっそりと返してくれた。

「魔王を名乗る前ですわ。…まだ当時の記事なら取っといてありますが、見ます?」

「ぜひ見たいのだけれど、また今度、時間がある時にするよ」

二人で顔を見合わせて、そっと耳を澄ましてみる。

店の奥でトントンと狂うことのない一定の包丁音が聞こえてきた。

吉田魔王様、料理に没頭中。

ねっ？とノワールが笑う。
…流石というべきか。あの人、何事にも熱心に取り組むもんな。邪魔しないでおこう。

「…そうとなると、二人じゃなかなかキツイんじゃない？まぁ、僕には関係ないけど。事態が事態だからね。何か騒ぎがあったりして店潰れたりしたら、吉田魔王様目に見えて落ち込むよ」
「そう、そこなんですよ。どうしましょうか？姫様には、会計を頼もうかと思っているんですが、大丈夫ですか？」
「えぇ。会計くらいなら大丈夫よ」

それまでずっと黙っていたカインが不意に口を開く。
そう、それこそが僕にとっての悲劇の始まりだった。

「一つ、確認したいのだが」
「どうぞ」
「バレなきゃ、良いんだよな？」

少しの沈黙。
ノーイさんがえぇ、まぁ…と曖昧に頷く。

「そして、優真。一つ確認しておくが、吉田雪はお前のストーカーとっても良い程のファンだな？」
「さぁ…、僕としては違うと言いたいところだけど、僕の部屋の内部構造全部知ってたからね。否定できない」

カインは、うむと頷いた。
そして静かに目を開く。

「バレなきゃいいんだよな」

何回言うつもりだ。
まるで悪ガキが先生に見つからない様に話すかのようにカインは言う。
悪ガキらしく、けろりとした表情で。

「女装すれば良いんじゃないか」
「…カイン、コーヒーに毒でも盛ってあった？」

ツッコミ役がボケに転じるなんて！君からそれを消したら一体何が残るというんだい！？

周りも、あぁと納得していた。まるで鶴の一声を聞いたかのような感心した表情で。
おいおい、納得しちゃ駄目だろ。

「仕方がないだろ。仮にも世話になってる身だ。…がんばれ」
「じゃあ、化粧は私がしますね」
「じゃ、そういうですので」

無言でショックを受け、惚ける僕に、猫モドキが膝上に飛び乗って丸くなり、安らかな寝息と共にその身体が上下に膨らむ。
トントン…と、小刻みに何かを切る音が延々と木霊した。

そして、トランクに収まりきらない程、大量の服を持ってきたノワールとその助手を勤める教官によって、田中優子ちゃんは生み出されたのである。

「優真様…洒落にならないくらいよく似合ってますわね…。我ながら、少し妬いちゃいそうです」

「あぁ、本当によくにあっているぞ。優真…いや、優子。カインもよく頑張った」
腕組して満足そうに頷く教官。
「何で、俺まで？」
「ついでだ」

カインは、赤く長い鬘に薄桃色の豪快にフリルをあしらったワンピースの様な服を着せられていた。
騎士だけに、筋肉のひしきまった体格がそれを拒んでいる。
正直、異質だ。
「…そうか。まぁ、最初に提案したのは俺だしな。
ほら、優真。出てこい。恥ずかしいのは皆同じだ。なぁ？猫モドキ」
カインが僕の足元で震えている猫モドキを抱き上げようとしたが、猫モドキは素早く身を引っ込めた。そして僕の足元でじっと様子を伺っている。
「心に深い傷を負ったようだな…」
「大丈夫だよ、猫モドキは両生類だから。良く似合ってるよ、猫モドキ。
…そうだよな、いきなりだったもんな。寝ている時の奇襲で、一瞬の出来事だったもんな。怖かったよな」
「…こいつが一番の重症だな」
呆れと同情の混じった目でカインは僕を見た。
一体、誰のせいだと思っているんだ。
「あっ、出来ました？あはは、騎士長は全然ですね」腹を抱えて笑うノーイに、カインはうるせーと返事をする。
隣には吉田魔王様が立っていて、摩訶不思議な生命物体に遭遇したかのような唖然と困惑の表情を浮かべていた。
「さてさて、お馬鹿な勇者の姿が見えませんが、どうしたんです？」
ノーイさんが意地の悪い笑みを浮かべて辺りを見回した。
ノワールが、興奮しながら早口に喋る。まるで、格好いい車を見つ

けた子供の様に。
「ノーイ、お父様、見て下さい！私達の珠玉の作をっ！」
カインに背中を押されて、吉田魔王様達の前へと飛び出す。
「えと、どうも…」
「あなた、女に生まれれば良かったんじゃないですか…？」
『よく似合ってるぞ。そろそろ店を開けるから全員配置につけ。そして、お前は元に戻れ』
ぽかーんとしながらノーイさんが言い、吉田魔王様はカインを指差しながら指示を出す。
「はーい」

こうして、僕の悲劇は幕を開けたのだった。

# 第二十五話　厄介な来客

開店と同時に客が吸い込まれる様にご来店。すぐに満席となった。
酒場だからいつかの筋肉ハゲとかを想像してたけど、流石、国民が美形の国。
凄くお上品だ。

そんな男女問わずの視線がすごく刺さるんだよね。
酒場って、こんなんだろうけど何か違う様な、そうでもないような妙な気分だ。

幸いにも、僕が指名手配犯だとは夢にも思っていないようで、会話に花を咲かせている。
かと言って、気を抜く訳にはいかないんだよな。状況的に。

「ニア…」
「うん。今は集中しなきゃね。終わったら鮭の薫製あげるから元気だしな」
さっきからずっとしょんぼりとしてる猫モドキに、声を掛ける。
バイト経験のない僕が、そう簡単に注文と客席を覚えられる筈がない。
だから、僕が食事を運び、猫モドキがそれを客の所まで案内してくれるという連携プレーだ。

「グリアンのソテーです」
それにしても、注文の品名を言う度に思う。
本当に此処はパラレルワールドなのかと。
いや、確かに魔法は使えるし、顔は同じでも性格は違ったりする。

けど、三嘉ヶ崎の地形もそっくりそのままだ。
魔法が使えるということ、つまり魔力が生物に何らかの影響を与えて、新種というか珍種の生物を生み出しているのかもしれない。

グリアン…聞いたことのない生物だけど、お魚とかの進化形かな？
真緑で、やけに大きな鱗の様なものを備えた生物だったであろう物体がフランス料理の様な美しさで皿に盛られている。

「カイン、グリアンって何？」
「グリアン？何だ、お前の世界にはいないのか。そうだなぁ…ミミズ、いや、百足に近い生物だ。世界三大珍味の一つで、結構美味いぞ。後で朝食として出されるから是非食うといい」
嬉しそうに笑うカインを横に、僕は一人呟く。

…真緑の、ムカデ。

つまり、鱗みたいのは甲羅みたいなあの部分ってことで、きっと無数の足が生えていたことだろう。
しかも、皿に盛られていたのはその一部分。あれで一部分というなら一体、元の大きさはどれ程なのか。

「カイン、僕の分も食べていいよ。一気に食力無くなった…」

その時、キィッ…と扉が開く。客から歓声というか寄声があがった。

「ちょっと、お邪魔しますね」

上品で落ち着きのある声。
「いらっしゃいませ」
「……」

とりあえず挨拶すると、来客である白いワンピース姿の女性が僕の方を見た。

カインは何故か黙って店の奥に引っ込んだ。ノーイさんもさりげなく引っ込み済である。
ノワールも静かに会計の席を離れてカイン達の後に続く。

「あら、可愛いわね…新入りさん？」
「えぇ、まぁ…」

曖昧に返事をする。
いつもなら可愛いと言われたことに苛立ちを覚えるのだが、そんなことより、カイン達が引っ込んだことの方が気になっていた。

この国に極力関わりたくないというカイン達。
一般客と普通に接することが最低限の譲歩だとするならば、考えられることは一つしかない。

結構な国の権力者だということ。
国民のあの反応といい、カインのこの反応といい、偉い人だろう。
恐らく。
カイン達が無言で去ったということは、店を放棄してでも関わりたくない偉人にして異人というわけだ。

どーしよ、僕。
っていうか、指名手配犯の僕に任せてどうする。誰か犠牲になれよ。
ノワールは許すけど。

「あのぉ、席はご自由にお座り下さい」

さっきからガン見されてるんだよね。無言で。
僕がしどろもどろになりながら言うと、女性は静かに微笑んだ。

「ふふっ…本当に可愛いわね。今日は客として来たんじゃなくて、仕事で来たのよ。もうご存知かと思うけど、先に指名手配された青少年を捜してるの。田中優真をね」

はい。ご存知も何も張本人ですから。

女性は急に、名探偵が事件に挑む時の様な好奇心と、勝ち気の入り混じった目で僕を見た。

「…目撃情報が此処でありました故、調べさせてもらってもよろしいですね？宜しければご案内していただけますか？」
「も、もちろんですわ…。おほほほ」

きっと、犯人は早く帰れと思っているに違いない。
現に僕がそうだからだ。

だから、どうせ捕まるのなら、この挑発に乗ってみるのも悪くないというのも、きっと犯人は思っていることだろう。

だから、僕はお返しと言わんばかりに不適な笑みを零す。

相手もそれに気付いたのか笑みを浮かべていた。

「失礼、申し遅れました。私、第一皇子側近のメイドをやっております、メアリですわ。レディ」

手を差し出される。

成る程。道理でカイン達が逃げ出すはずだ。あの面倒な皇子の側近となれば話は別。
これ程の地位を持っているということは、つい最近やってきた僕よりカイン達の方が熟知していると言っていいだろう。いや、断言する。

見た目はまともだが、あのノワールが逃げ出すくらい達の悪い変人さんに違いない。

だから、僕は。
今、とても逃げたい。

出あって数分だけど、僕でも分かる。
この人、変人だ。
目がね。目が女子を見るエロオヤジの目と同じだもの。

「まぁ…。けど、此処のお店にまた来てくれるというなら案内して差し上げてよ？」
「良いでしょう、望むところです…」

ゾクゾクしますわ…。
と恍惚そうに呟いた言葉を聞かなかったことにして、取りあえず二、三歩後ずさった。
カイン達がオーケーサインを出す。僕も頷いて返した。

「たにゃ…いえ、ターニャ・ユロワですわ、メアリさん。親しい友にはユウコと呼ばれておりますの。良かったら、そうお呼び下さい」

うふふふふ！親しい友…！うふふ、うふふふふふ…！

一人悶えるメアリさんの姿を敢えて見なかったことにし、十歩程後ずさる。

猫モドキが不安そうな顔で僕を見上げた。状況が状況なので、抱き上げてやる。

僕だって不安だし、とてつもなく怖いよ。猫モドキ。…この人、友達いないのかな？

「では、お独り様ご案内しまーす」

地獄に。とかだったら嬉しいんだけど。

取りあえず、さっさと終わらそう。

僕はそう心に決めて、歩き始めた。後ろから熱視線が注がれるのを感じながら。

# 第二十六話　昨日の敵は今日の友

「やっと、二人きりになれましたね。ターニャ・ユロワこと、田中優真君」

店案内が終わり、少し店から離れた公園に居る。

メアリさんは大人びた笑みを浮かべ、楽しそうに言った。

うー…、やはりバレていたか。

「いつから気付いてましたか…？」

「そうですね、最初から…と言ったところでしょうか。だって、今、彼方は魔王と行動しているでしょう？あの人の料理、本当に美味しいんですよ。グルメ雑誌にも掲載された程の腕です。魔王になっても酒場は続けてくれていたので、ファンは結構大喜びなんです」

「つまり…吉田魔王様が魔王でもこの国は大して気にしていないと…？」

「はい。だって、台所で料理する魔王なんて前代未聞ですよ」

楽しそうに笑いながらメアリさんは言った。

…恐らくは常連であろうメアリさんが最初に言ったあの言葉は、確認だろう。

彼方、新入り？とはそういう意味か。カイン達はこの人が変人だというのは知っているから逃げ出した。

つまり、何も知らないで此処に突っ立っている人こそ、指名手配犯というわけか。

にしても、吉田魔王様。
彼方、皆の優しさに生かされてるな。
この国位じゃない？魔王を敵視しないの。しかも理由は、料理が美味しいし、魔王っぽくないから。
趣味が自分を救ったんだね。

「…で、どうしますか。メアリさん。僕を連行したりします？」
「そうですね。けど、そう簡単に連れて行かせてはくれないでしょう？」
「勿論」

鬘を剥ぎ取る。
服もどうにかしたいのだが、背に腹は変えられない。

…というか、初めてだな。まともに話を聞いてくれる国民。

「あら、鬘をとってもやはり可愛いですね。男の子には到底見えませんよ。
けど、彼方、救世主なんでしょう？…私一人ではちょっとキツイと思うんですよ」

諦めて帰って下さい。

「だから、応援呼びますね。『召喚』」

白い光が辺りを包む。
その光が完全に消えた時、一人の男性が立っていた。確か、ノイズさんだっけ？
あー、良かった。やっぱり人って『召喚』出来るんだ。そういや、僕も召喚されたんだっけ。

「公園…？何だ、メアリか。何か用？」
「はい。指名手配犯の逮捕に協力して下さい。全ては皇子様の為に」
「そういうことなら。…あー、めんどくさい」

ちらりと猫モドキを見る。
猫モドキはこくりと頷くと、走って逃げた。

……？走って、逃げた…？

「えっ、ちょっと、待っ…」
「随分と、余裕じゃありませんか！行きますよ！」
メアリさんが叫ぶ。

えぇ。来ましたね、ノイズさんが。
しょうがない。僕の平穏の為に、やるしかないか。

そっと、僕は自身の影に手を伸ばす。
ズブッ…と手が影に呑まれ、そしてまた出た。その手には黒い本が握られている。
けどね、描く暇が無いの。
今避けているのも奇跡の様な、怒涛の蹴りが来るんですもの。

「ちょっ、まっ…」

不意に足元が光った。
本当に、待って下さい。

水が僕の身体を簡単に宙へ放る。
あー、この先が容易に想像出来るよ。どうせ、蹴り落とされんだろ？

それは嫌なので、指を噛む。黒い血が溢れだす。
さてさて、どっちが早いのかな。

素早く本を開き、目に入った陣をなぞる。
と同時に、ノイズさんは人間とは思えない脚力で僕を蹴り落とした。

『跳ね返しの陣』と、あともう一つ。
この本で、唯一『魔眼』で構成可能な陣。

派手な音が響き、砂埃が舞う。
二匹の蝙蝠が僕の周りを飛んでいた。
何とも愛敬のある蝙蝠で、デフォルメで描かれたかのような赤い目と三日月の様な笑みを浮かべた口。
女子高生とかが鞄に付けていそうな奴だ。

『クケケケッ！『跳ね返しの陣』か。案外、えげつないな。影の王』

だが、どうにも口が悪いんだよね。
何とかならないのかな。

先程、派手な音を響かせ地面に激突したノイズさんの姿を見て、流石に反省。
呻いていることから、辛うじて息はあるようだ。良かった、良かったって…そういう問題じゃないか。

「つーか、影の王じゃないから。僕に中二病設定を押し付けないでくれ」
『クケケッ！闇の統治者の方が良いかぁ～？』

「そっちの方がカッコいいけど、却下。僕は普通の高校生です。ちょっと、お馬鹿な」

なんて呑気な会話をしていたら、小さなメアリさんの悲鳴が聞こえた。

いや、悲鳴と言うよりは息を呑む音と言った方がいいかもしれない。

「ノイズっ…。流石ですわね、勇者の力をはこれ程の…しかし、その姿。まさか、悪魔と契約した人がいるなんて…」

自嘲の様にメアリさんが顔を歪めて言う。

止めて下さい、皆して中二病押し付けるのは。

『クケッ！しょうがないだろ、本当のことなんだからさぁ～。だが、まだ本契約はなされていない。

まぁ、頑張れよぉ～馬鹿な勇者』

「折角、『召喚』してやったのに、何でお前しか出て来ないんだよ」

『それは、契約が完全ではないからダ。召喚の陣。それは門である。契約が鎖、魔力がその鍵とするならば、今の仮契約者であるお前は門を半開きにしか出来ない訳ダ、クケケケッ！バーカ！』

ウゼー、この蝙蝠達、ウゼー。今すぐ送還してやる。

ちなみに、語尾を伸ばすのがアイゼル、『ダ』とか必ず最後が片言になるのがヘブライ。

蝙蝠のくせに、中々カッコいい名前だ。…見た目にあってないけど。

「何処の世界に、闇だか影だかの力を借りて世界を救う馬鹿な勇者がいるんだ」

『救いは破壊。破壊は救い。同列にして異質。異質にして同列。お前はそう言うが、この世界に二人程その馬鹿がいたゾ』

マジでか。

『一人は一番初めの勇者。少し歳をとった若い男だったゾ』

『二人は、勇者でない唯の男だ。だ～が、素質が無い為に、命を落とし、その息子が我々とはまた違う方法を用いて混沌を世界に生んだ』

へぇー。最初の勇者は大人なのか。

てっきり、僕らくらいの歳の子を選んでいるのとばかり思っていたよ。

いや、それを僕が言っても説得力の欠片もないな。何だかんだで僕も一応は成人だし。

けどさ、ゲームとかってそういうお年頃の少年少女ばかり召喚しない？

いや、大人だと盛り上がりに欠けるっていうのもあるかもしれないけど、それはそれでちょっとおもしろそうだとか思ってみたり。

にしても、さっきからメアリさんが何も仕掛けて来ないのは何故？

ちらりと見てみると、メアリさんは何やらぶつぶつ呟いている。

長い茶色の髪が魔力で、浮かんでいた。

「…何かさ、ヤバくない？」

『クケケッ！バーカ！気付くの遅せー！』

『あんなに魔力と時間を消費するってことは、勝負に出たナ。ほら見ろ、あの陣。お前が何時も描く様なへなちょこの小さい陣でなく、結構大きな陣だろウ？ありゃ、そうとうな大物を『召喚』するゼ！』

「いちいち余計なんだよ、お前らは！お前達、何とか出来ないの！？」

ぴたりと蝙蝠達の動きが止まった。
そして近くにあった僕の後ろの木に止まる。

『出来るゾ！』
『だが、少々…いや、もしかしたら死ぬぜ～！』
「いや、だったら止めとく…って、何やってんの？」

ボォ…と木に止まる蝙蝠達の口が赤く輝きだす。
待てぇいっ！誰が許可したよ？つーか、さりげなく僕まで巻き込もうとしてないか？

嘘だよね？頼む、嘘だと言ってくれ。

『ちなみに、嘘じゃないゾ』
『潔く死に晒せ～え』

黙らっしゃい。

「何、召喚主をぶっ殺すわけ？仮にも契約者だし、召喚主よ？僕。殺すでない」
ノンノンと手を振る。
蝙蝠達は、クケケッと笑った。目もいつの間にか三日月に歪んでいる。

『ヴァルベル様の言い付けだゼ！』
『何としても本契～約！じゃないと俺達に明日はな～い！！』

お人形、お人形と叫ぶ蝙蝠達を一瞥する。
ほほう、読めたぞ。ヴァルベル様っていう吸血鬼の女王様がいるん

だけど、そいつに抹殺命じられたのか。出来ないと、めでたくお人形デビューとな。
ちなみに、ヴァルベルというのは、僕がこの蝙蝠達の代わりに召喚したかった悪魔じゃないけど闇の魔力を持つ吸血鬼のお嬢様。というか、女王様。まぁ、それは次回ら辺に話すとして。

僕は思いついてしまったのです。
なーんだ、簡単じゃないか。つまり、この状況を打破するには…。

「『送還』っ！やーい、バ～カ！」

蝙蝠達の足元（？）に陣が浮かぶ。
蝙蝠達の姿が陣に吸い込まれる…のを蝙蝠達は踏ん張って耐えた。
は…？耐えた？

「マジかっ！？『送還』って踏ん張って耐えられるものなの！？掃除機とか、トイレの比じゃねぇんだぞ、多分！」

メアリさんは詠唱が終わったのか陣が盛大に光った。白い光が辺りを照らし、天使だかよく分からないとにかく羽根の生えた人型の生物が白い光線を放つ。それに、蝙蝠真っ赤な光線が発射されるのは同時だった。

「うっそ～ん」

退路も進路もないな。ついでに時間もない。どうしよう。
つーか、メアリさん鬼だな。ノイズさんに当たるぞ。
…と思っていたのだが、ノイズさんの足元に『瞬間移動の陣』が浮かぶ。その姿はすぐにかき消え、メアリさんの横に現れる。

いや、別にノイズさんが居なくても居ても、僕は困るのですよ。
もし、蝙蝠達の力が強ければメアリさん達が塵になる。メアリさんの力が強ければ蝙蝠達が塵になる。
それは少し可哀想だ。
…一か八か。もし当たったらゴメン。

「『跳ね返しの陣』レボリューション！」

唯の二つ重ねた陣だけど。
一度は言ってみたかったんだよね。

両手に『跳ね返しの陣』が浮かび上がる。
ちと、大きさが小さいのが心もとないが、そこは勇者の底力でなんとかなってほしい。

まぁ、仮に失敗したらこの両方向から来る攻撃により僕は木端微塵、塵など残れば良いねなんて具合に消滅しかねない。…それはとても。

「怖っくな～いっ！！」

正直、足ガクガク。冷や汗ダラダラ。
ちくしょー、恐いじゃないかっ！いつもの癖で肩を抱きたいのだが、そんなことをしている暇はない。

二つの光が僕目掛けて直撃。
メアリさんよ、連行とかのレベルじゃないよね？最早殺す気だよね？死体を連れ帰るつもりだね？

「いでてって……骨、折れる！ストップ、待って、タンマ！」

『逝け～』

「だからっ…！」

ホントに、痛いんだってば！

「いい加減にしろッ…！」

魔眼が一瞬光る。

瞬間、目に激痛が走った。

身体の底から黒い魔力が溢れると同時に、空に、二本の黒い光の光線が走る。

初だと思う、逆ギレして形勢逆転する勇者。

蝙蝠達はそそくさと陣に吸い込まれて行った。

ちっ…、逃げられたか。まぁ、いいや。そんなことより。

「ほんと、ウチの子達がすみません」

未だ状況が掴めず、呆然とするメアリさんを余所に僕はノイズさんに駆け寄る。

僕だって状況つかめてないし。…まぁ、当初の目的とはズレているのは分かってるけど。

手はボロボロだった。

変な方向に折れ曲がっているというべきか。腫れあがったかのように赤い。実際、腫れてるのかもしれない。

『治癒の陣』でノイズさんの回復を待つ。

奇妙な沈黙が続いた。

「おーい、優真！生きてるかー？」

カインの声が遠くから聞こえて来たかと思うと、茂みから猫モドキとカインが飛び出してきた。
後からノワールや、教官、ノーイさんに吉田魔王様が続く。

「生きてるよー。どしたの、皆。お店、放棄？」
「どうしたもこうしたもないだろ。さっきの轟音と、黒い光を見た瞬間全員興味心身に外に飛び出して行ったよ」
「優真様、目から血が出てますわよ！大丈夫ですか！？」
ノワールがあたふたと慌てる。
地面に座り込む僕に、猫モドキがぬっと顔を出し、目から滴る血を舐めてくれた。

「お前、よくも逃げたな」
わしゃわしゃと猫モドキの頭を撫でてやる。その手に皆、息を呑んだ。
『猫モドキは、助けを呼ぼうとして去ったんだが、誰も言葉が分からなくてな。ノーイがそれに気付いて事の次第を聞いていたら、外の方で轟音が聞こえてきたかと思うと、黒い光線が空に向かって放たれていたので慌てて向かったという訳だ』
「というか、お前。その手はどうしたんだ？」
「手荒れとか…？そんなことより…ぐふぇっ」

容赦ない教官の蹴りが、胸にヒット。
ブーツで蹴るのは止めて下さい。先の方が固いので痛いんです、結構。

「先に帰るっ！」

教官はすたすたと元来た道を歩き出す。
「はぁ…それじゃあ、帰りましょうか。今日は閉店ですね…全く人騒がせな」

ノーイさんが、地面に移動の陣を描き始める。
未だ戸惑いの色を浮かべるメアリさんに、とりあえず言っておく。

「…お相こってことで、良いでしょうか…？」
その物言いに、メアリさんは苦々しく微笑んだ。
「…そうですね。いえ、勝負は彼方の勝ちです。だからまた、挑戦しに来ます。そうですね…明後日くらいに」
「そりゃまた、随分と急ですね」
「その時には、穏便に飲み比べとか、食べ比べにしましょう。皇子も連れて来て。皆で」
ふふっ…と笑いながらメアリさんは素早く陣を描き、ノイズさんと共に姿を消した。

「結局、何がしたかったんだろうな…？」
「それを言わないでよ。怪我した僕が馬鹿みたいだ」
「大丈夫だ、お前は馬鹿だから。こら、動くなって」

ノーイさんが陣を描き終わり、白い輝きが僕を包む。
鳥肌が立ったのはきっと、先の事がトラウマになっているからかな。

「…まぁ、昨日の敵は今日の友ってことで、良いんじゃないの」
「ホント、骨折り損の草臥れ儲けだな」

返す言葉が無かったのは、言うまでもない。

# 第二十七話　説明しよう

一難あって、夜。
救急箱を抱えたまま仁王立ちして待つ教官に説教付きの手当てを受けてから、風呂に入る。
部屋に戻る途中、ふと思い立ち、陣を思い描く。目の前に鏡が現れた。
つい、いつもの癖で、背伸びしながら鏡を見てしまう。

そこには普通の何処にでもいるようなパジャマ姿の青少年が映っていた。
「身長伸びないかなぁ」
『無理だね』

ぐにゃりと鏡に映る僕が歪んだ笑みを浮かべる。
それを見て、僕は長い溜息をついた。
その反応が面白くなかったのか、鏡の中の僕は渋面を浮かべた。
うーん、僕そんな顔したこと無いから流石に様になってないな。

「僕が言えることじゃないかもだけど、君たちは自重と言う言葉を知っているかな？」

もう一度、短い溜息。
幽霊が見えて毎日騒動に巻き込まれる主人公の如く、恨めしく鏡を見る。
それをあざ笑うかのように、答えとして黒い手がぺたぺたと鏡に映る僕の前に現れた。

思わず尻もちをついた僕に、通りかかった猫モドキが不審者を見る様な目で見て鼻で笑う。
そして通り過ぎて行く。

うわー、猫に馬鹿にされたよ。

「…仮にしても、この契約に期限あるの？」
『んー、生きてる間は有効。仮なら寿命を迎えれば地獄に堕ちることはない。まぁ、本契約しても地獄には堕ちないけど』
「そりゃ良かった。何にせよ、もう死ぬのは懲り懲りだ」

返事はない。唯の鏡の様だ。

『つまりは、一回死んだのか』
「何言ってんの。それで悪徳高利貸しの様に契約押し付けてきたのは…」

そっちでしょ。という言葉は、唾と共に呑み込まれた。
鏡には、気まずそうに相手の言葉を待つ僕の顔と、恐らくはお見舞いに行く途中だったと思われる皆様方の堂々たる顔触れが映っている。

罪人の如く、教官とカインに挟まれ連行された。
吉田魔王様とノーイさんが先に僕の部屋へ上がる。

消えゆく陣には、まだ人が映っている。
鏡に映った僕は、とても楽しそうに口元を歪めていた。

「…と言っても、何処から話せば良いのやら」
「もちろん、全部ですわ。優真様」

いつもは味方をしてくれる筈のノワールも、引き攣った笑みを浮かべて僕を見てる。
ドアは完全に立ち塞がれ、円を描く様に中心に座る僕を皆が囲む。

僕は息を大きく吸い、吐き出す。
そして、いつもはしない様な真剣な面持ちで話し始めた。

「今の僕は…そう、幽霊みたいなもので、この姿は魂の残滓というべきかもしれない」
「本当に死んだのか？」

カインの問いに、僕はゆっくりと頷く。

「あぁ。実は僕、前世の僕の未練を消し、成仏する為にいる浮遊霊みたいなもので、此処に召喚されたのは偶然ではないのかもしれないし、そうでなくないのかもしれない」
「どっちかにしろよという突っ込みは置いておくとして、何で死んだんだ？お前の前世とは一体…」

組んでいた腕を解き、僕はしっかりを前を見据えた。

「実は僕…」
「実は…？」

ごくりと唾を呑み、一呼吸置く。

「実は、僕…前世はミジン…ぐぁっ！」

教官の蹴りが脳天に直撃する。

一番のオチが台無しじゃないか。
カインはと言えば、状況が呑み込めておらず、口をはの字にしていたが教官の蹴りを食らった僕を見て現実に引き戻されたらしく、怒りに拳をぷるぷると震わせている。

「結論の前に、僕がノワールの身代わりになって死んだのは皆納得してるよね？」
「まぁ…実感はないが」
「結論から言えば、僕も何で生き帰れたのか不思議なんだよね。だから、こいつらに聞いてみよう」

僕は立ち上がると、自分の影に手を置く。
床に触れる筈の手は、そのまま影に呑みこまれる。

影から手を戻した時、その手には例の如く黒い本が握られていた。

『まさかと思うが、契約したのか…』
「あれ、知り合い？そういや、何時ぞやかにこの本見て、眉間に皺寄せてたもんね。
まぁ、結論から言わせてもらうと、この本が助けてくれたんだよ。仮契約とか高利貸し並みに達の悪いものを結ばされたけど」
「唯の本じゃないか」
カインがじろじろと本を見る。ノーイさんは気味の悪いものを見るかのような目つきで本を見ていた。

「『悪魔の知恵』、『禁書』…色々、呼び名があるらしいけど、一応『沈黙の書』って僕は呼んでる」

その場の空気がいきなり変わる。
口調と声色一つで、こんなにシリアスになったことが、かつてあっ

ただろうか。
多分、無い。

『契約が出来たということは…そうか、悪運強いな』
「褒め言葉と受け取っておこう。別に、僕としては不満はないんだよ。最初から」
「…何やら不穏な空気を感じるんだが…？」
「あっ、大丈夫。唯の演出だから。ほら、たまにはシリアスがあった方が良いじゃん。
僕が『沈黙の書』の主を召喚する力はまだないから何とも説明しづらいけど、とにかく僕は一回死んで、復活するには仮契約が必要だった。たったそれだけの話」

簡単にまとめて終わらそうとする僕に、ノーイさんが呆れた様な声で言う。
「勇者が悪の力に頼ってどうするんですか」
「その点においては多分問題ない。…と思う。良いじゃん、黒魔術が使える主人公。憧れない？
…そう言えば、『召喚』を補強する魔具とかないの？雪ちゃんにだって勇者の剣があるんだよ？
僕にだって僕専用の武器があっても良い頃だと思うんだけど。…あぁ、ちゃんと『送還』出来る奴ね」
「優真様、『送還』は召喚主であれば、誰でも可能ですよ？」
「いや…反抗が起きてね。還ってくれなかった。あいつら踏ん張って耐えたんだよ！？出来るの、そんなこと！？」

必死になって言う僕に、教官は無言で一発殴る。
「そういうことなら、自分で作ればいい。…そんな事より、もっとも大切な事を忘れていないか？」

大切な事…？
にしても、何故そんなに怒っているのかな？教官。
僕、彼方の機嫌を損ねる様な自爆行為しました？

「あー、魔力魂のこととか？」
「それもあるが、今はもっと優先させるべきことがあるだろう」

カイン達も首を傾げている。
僕にも分からんよ。
「……ギブ」
「明後日に何が起こる？」

明後日…ねぇ…。
「皇子達のご来店…が起こりますね…まさか、大切な事ってそんなこと？」
「最重要事項だ。あんな奴らと同じ空気を吸うこと自体おかしいと思わんのか、お前は！？」

「まぁ…そうかもしれませんけど。そこは我慢して下さい」

そういや、そんな約束をしたなーとか無責任な事を思いながら、ふと思う。
いつもの展開から行くとさ。
絶対、それだけじゃ済まないよね？

## 第二十七話　説明しよう（後書き）

次回からはもっとはっちゃける予定。

# 第二十八話　召喚？形成？結果は幽霊

残暑もようやく影も形もなくなったある秋の朝方。
悲鳴…というよりか奇声が響き渡り、近くの鳥達が驚いて飛び立つ。

「ちょ、ちょっ、ちょっと待て！落ち着こう？話し合おう！！」
「というか、あいつ等話せるのか！？」
「問題ないっ！一応、口があった！」
「そもそも、あれは本当に口なのか！？」
「知らんっ！」
「開き直んなっ！」

僕の背丈くらいまで生い茂る草木をかき分け、ひたすら走る。
時に後ろを振り返り、加速する。
走ってどれくらい経つだろうか？額には玉の様な汗が浮かび、走る振動により地面に吸収されて行く。

えっ、今、何をやっているかって？ちょっと早い持久走（マラソン）？
それだったらどんなに良い事か。

そうだなぁ…リアルな鬼ごっこってところかな？
ある意味、青春だね。…あっ、違う？

まぁ、毎度恒例のご挨拶ということで。

田中優真。状態異常『混乱』。装備、木の棒。主人公と、勇者やってます。
そんな優真と、愉快な仲間（ヘタレ）達を紹介しておこう。

カイン・ベリアル。状態異常『混乱』。装備、折れたというか、溶けた剣。
猫モドキ。状態異常『混乱』。装備（？）、羽根。

「何、アレ？というか、何で逃げてんの！？僕ら！？」
「そりゃ、アレだ！生理的に受け付けないのと、追いかけて来るからだなっ！」
「案外、フレンドリーかもよっ！？」
「なら、今すぐ立ち止まって餌食にでもなれっ」

何十回も後ろを振り向くが、状況は何一つとして変わらない。
ムンクの叫びの様な、ボロボロの黒い布を纏った幽霊が巨大な鎌を持って追いかけて来る。

そういや、何でこんな事態になっているんだっけ？
僕は、ふと憎々しいほど蒼い空を仰ぎ、思いに耽る。…要するに、現実逃避だけど。

＊＊＊＊

早朝。
欠伸をしながら『移動の陣』で店から少し離れた人気の無い野原に来ていた。

「いやー、大収穫だったね。猫モドキ。後は、これが本物であることを祈ろう」

僕は地面に落ちていた木の棒を装備し、猫モドキはぎっしりと物が詰まった風呂敷を背に抱え、羽根を広げて僕の傍を飛んでいた。

何処に行って来たと聞かれると、非常に困るのだが敢えて答えるとすれば、闇市に行って来ました。
うん、いつぞやかに行った闇市ね。
こんな早朝だから、誰も気に留めないし、寝静まっていた。
誰も外に居ないの。ちょっと、怖かった。闇市国民もいないから余計に気味が悪かった。

何しに行って来たのか？
正直言うと、僕達ドロボーしてきた。あっ、良い子も悪い子も真似しないでね。
罪悪感も、もちろんあるよ？ほんの少し。
いやー、だって僕国内指名手配の悪人だよ？故意じゃないけど。だったら今更そこに盗難が加わっても問題ないよね？

「由香子様は後悔は役立たずだと言うし、後ろは振り向かないのが僕の主義だ。さて、やるか」

ごりごりと木の棒で陣を描いて行く。
猫モドキは、風呂敷包みを解き、陣の中央に物を並べて行く。

今描いている陣は、五連星陣と呼ばれる陣で、中央に小さな陣を一つ。それを囲むように三つの中くらいの陣を描き、さらに四方に一周り大きな陣を描く。

作業は十分程で終わった。
満足げな笑みを浮かべて陣の中心に立つ。
そして、自身の影から例の書を取り出し、最終確認。

「多分、大丈夫だと思う」

「二アッ！」
「あー、そうだね。武器が出来ると良いけど、絶対、吉田様関連の物が出て来るよね。それはそれで楽しみだ。銅像とかだったら、店の前にでも置いておく？」

そんなことを笑いながら話し、小刀を取り出すと、肌に滑らせる。
黒い血が滴り、地面に…正確には陣に吸収される。

ワクワク。
だが、反応なし。

僕と猫モドキはオウムのように首を傾げる。

「量が足りなかった…とか？よし、もう一度…」
「よっ！こんな朝っぱらから何やってんだ…って、大丈夫か！？」

いきなり声を掛けてきたカインに、思わず手が滑り思ったより深い傷になってしまった。
あらら、大変。吉田様初登場以来の大量出血だ。こんなに切れ味良かったっけ？
猫モドキが心配そうに僕を見ている。大丈夫だよと声を掛けて陣を再度見た。

陣は一瞬光った。
そして、黒い粒子を発生させる。

「何、召喚するつもりなんだ？」
「いや、『召喚』じゃなくて、『形成』かな…。ほら、僕専用の武器、あった方が良いじゃん」

「案外、コントローラーが出てきたりしてな」
「間違いなく最強になるよ」

黒い粒子は煙へと変貌を遂げる。
綺麗だが、気味の悪い。そんな奇妙な感覚が鳥肌を起こす。

「おいおい、火の無い所に煙は立たずだぞ？」
「いや、そうなんだけどさ…。燃えてるわけじゃないし…」

何だろね？という言葉は、喉の奥に引っかかって出て来なかった。
猫モドキは羽根を広げ、宙に浮いている。
心なしか、その毛は逆立っていた。

陣から発生した粒子は、煙となり、音を発し始めた。
悲鳴の様な息苦しい音を。
まるで、唸り声の様な奇妙な音を。
そう、それは次第にはっきりし、完全な『声』を発していた。

粒子は煙となり、煙は、良く分からない生物になった。
僕の最も嫌う幽霊と言う名の死物に。

「ぎゃあああああ！！！」

悲鳴が秋晴れの空に響く。

「カ、カイン…！あれ、斬れる？どっちでもいいから退治してくれ」
「俺は陰陽師でも何でもないっての。まぁ…行って来るか」

ずかずかと幽霊に近付くカイン。
腰に差していた大剣を引き抜くと、幽霊にえいっと振りかざす。

空を斬る音がして、パキンッ…と金属が折れた乾いた音がした。
ゴポゴポと鍋の煮え立つ様な音がしたかと思うと、幽霊が活発に動き始める。

カインは暫く立ち止まっていたが、すぐさまこちらへ逃げて来る。
大量の幽霊を引き連れて。

「こっち、来んなっー！！！」
「んなこと言ってる暇無いぞ！どーしてくれんだ！剣折れたというか、溶けたぞ！？」

ほれっと言いながら折れた剣を見せて来るカイン。
「あの幽霊が暖炉だとすると、お前のやった行為は火に薪をくべるという最悪な行為だったんだよ！」
「お前がやれって言ったんだろ！」

その時、僕らの前を何かが駆け抜けて行った。
飛行機雲の様に、光の軌跡が空に残像として残る。

「こんな、早朝から、流れ星…？」
「プラチニ、オンは、光の、早さで、飛べる、らしい！」

光の速さというか、光そのものじゃねぇかっ！
というか、必死だな！

「…見ろ。必死にも、なるぞ」

カインが後ろを見る。
僕もスピードを緩めない様に気を付けながらも振り向く。

そこには、曇り空になれそうなくらい無数の幽霊が追いかけて来ていた。

「何、あいつ等！雨でも降らす気！？それともテル坊志願者なのか！？」

「雨は雨でも血の雨だぞ…。鎌持ってる奴が、テル坊なんてなれる訳ないだろ。寧ろ、俺達がそうなるのかもしれない。そうだ、お前…『送還』やってみろ。あの陣から出てきたってことは、逆も然りだ」

「な、成程…。『送還』っ」

立ち止まって後ろを振り向く。

そして、全力で走りだした。

「反抗期じゃねーかっ！」

「何をどうしたらあんなものが出て来るんだ！？お前、一応は召喚主だろ」

「多分、契約が中途半端だから、奴らを拘束というか、従わすの、出来ません、みたいな、ことじゃないの？」

「じゃあ、ずっと走ってろってことか！？」

体力は既に限界に近い。

足が縺れて転ぶのも時間の問題だろう。

「おーっと、足が滑った！」

「は？…ってうわっ！」

なので、カインを囮にします。

死にたくないんで。大丈夫、君の死は無駄にならない。…はずだ。

足を引っ掛けてカインを転ばす。
見事にこけて、生い茂る草むらの中に姿が消える。
幽霊の内の一人がそれに気付いて草むらに姿を消した。
だが、残り何百という幽霊たちは僕目掛けて一直線でございます。

「ちっ…奴ら、よくもカインをっ！彼の無念は教官が晴らしてくれるぞ！…って、おわ！」

誰に向かって言ってるんだか分からないことを言っている最中に、
僕まで倒れた。
別に足が縺れたとか、そういう理由でもなく、石ころにつまずいたわけでもない。

じゃあ、何か？

「いててて…何だよ、もうっ」

足首を誰かの手が掴んでいました。
でも、叫ばないよ。生だから。

「何だ、カインか。よく、無事だったね」

匍匐前進（ほふくぜんしん）で進んできたカインは、何も答えない。

「さて、どうしようか。すっかり囲まれてしまったわけだけど…そろそろ手、離してくれない？
立てないんですけど…っうわあああああああ！！」

だって、いつものカインじゃないんですものー。
何か、いきなり死人チックになってますよ？

何それ、生きてんの?死んでるの?乗り移られてんの?
トリック・オア・トリート。何もあげないけど、カインを返しなさい。

「どっちでも良いけど、どっちかにしろよ!!怖いじゃないかっ」

まぁ、そんなわけで、次回に続く。

# 第二十九話　困った時は召喚を

「ちょ、ちょっ、ちょっと待て！落ち着こう？話し合おう！！」

同じようなセリフを少し前に言ったなとか思いながら、またひたすら走る。

後ろを振り向けば、カイン（？）と幽霊達が追いかけて来る。

あー、それにしても。

カインは乗り移られたのか、死んだのか、態とああいう演技をしているのか。

どれも有り得そうで怖いな。

乗り移られたにしてもさ、絶対やり取りがあったと思うんだよね。

「はっ？…ってうわ！」

そう、この時。

幽霊の一人が駆け寄ったじゃない？

実はさ、案外フレンドリーな奴で、カインを心配してくれたんじゃないかと思うんだよね。

よし、名前はフレディ（仮）にしよう。

フレディ曰く。

「転びましたけど、大丈夫ですか？」

「うわっ！…喋れるのか？」

驚くカインに、フレディはこう言うに違いない。

「唸ることが出来るんですから喋れますよ」
「成程…。にしてもあいつ、よくも餌にしようとしたな…」
「復讐、手伝いましょうか？」

＊＊＊＊

「こっから死亡フラグに突入したのか、二人のドッキリ大作戦なのか…。どちらにしても達が悪いな」
「よく分かりませんが、一応私の名前、フレディになってるんですね。やけに幽霊というか、私達をフレンドリーな設定にさせようとしてますね」
「そうでも考えとかないと、やってけないんだよ！…って、君、何か速くない？そんな、足速かったっけ？」

肩を並べて走る偽カインを見て、目を瞬かせる。
偽カインは気にする風でもなく、平然と答えた。

「はい。鎧脱ぎました。重かったので」
「成程。その勢いで還ってくれないか？君がリーダー格だろ」
「いえいえ…皆、下っ端です。我が本の主に、大総統から御忠告を頼まれまして…。驚かしついでに」

因みに大総統は、僕が持っている『沈黙の書』の一番偉く強い本の悪魔。
大総統と呼ばれ、親しまれている。
…此処の住民達は、何故かそういうのに親しみを持つんだよね。吉田魔王様然り、大総統然り。

「選択の時が来た。ということでして…」
「ごめん。話内容と、君の今の行動がいまいち分からない。攻撃するのか、伝言伝えるのかどっちかにしてくれ」
偽カインは普通に話しながら魔方陣で僕を消しかけようとしてくる。話しながら、攻撃なんて器用だな。フレディ。
「だから、自分が如何に無力だと思い知れ…だとか何とか。他にも何か言ってたけど、忘れました」
「伝言はしっかり覚えとこうか、フレディ」
「実は僕、ディスビアという名前があるとか、ないとか…」
「そういう事は先に言おう!?フレディより全然カッコいいじゃないかっ！」
「いや…折角主に名を貰ったんで、改名しようかと…」
「止めてっ！からかわれるから、絶対！」
それじゃあ、さようなら〜とフレディことディスビアは姿を消した。ガタンッ…と真っ黒な杖が落ちる。
如何にも魔術師が使ってますよーみたいな、人を呪い殺せそうな杖だ。
先端が三日月型になっており、どういう原理で浮いているのか不明だが、赤い水晶の様なものがある。
「あー、杖、出来たんだー」
「何が、あー、杖、出来たんだーだよ！人を餌にしやがって！」
「良かった良かった、カイン、乗り移られてただけなんだね。一件落着じゃない」
カインが重い溜息を吐く。

そして、呆れたように僕を見た。僕もドヤ顔で返す。

「…何が、一件落着だ。何で、寝起き早々囲まれてるんだ？」
「ふっふっふっ…。僕もさっき気付いた。皆さん、ミケガサキ兵だよね？…ご臨終済みの」

追いかけっこで全然視界に入らなかったけど、ずっと息を潜めて草原に隠れていたのは何となく分かってた。まぁ、確認のためカインを転ばせてみたんだけど。

「じゃあ、何故、死体兵が動いてんだ？お前みたいに黒魔術が使える魔術師はいないぞ？
…にしても、よく悲鳴あげないな。見直したぞ」
「あまり僕をなめないでくれたまえ。怖くて叫ぶことが出来ない。それ以前に、足に力が入らない」
「今すぐ前言撤回して、見下してやる。バーカ」

死体兵さん達は、剣を握ってじりじりと近付いて来る。
何で朝からこんなに怖い思いしなきゃいけないんだろね。

「…死んで、動いてるってことは何らかの術が施されてるわけだよな。それ以前に、俺達の所に来てるってことは、当然吉田様達のところにも行ってる訳か」
「『魔眼』で見る限りは、特に術を施された訳じゃないみたい。けど、中心に魔力に似てるけど少し違う…いや、混じってるのか。遥かに力の強い結晶がある。それが動かしてるんだね。桑原、桑原…。そんじゃ、杖のでき具合を確かめるとしますか」

とりあえず、もう少しで手が届きそうなくらい近付いてきた死体兵を杖で突く。

場所が悪かったのか、勢いが強すぎたのか。…もしかしたら、両方かもしれない。頭がもげた。

「ぎゃあああああっ！とれた！ひぃいぃいぃいぃいぃ…！動いてる！」

「煩い！頭なんぞ突くからそうなるんだ！死体なんだからそうなるだろ！」

「分かってんだったら、言えよ！夢に出てきたらどうしてくれんだ！いや、絶対に出るだろ！」

ポロって！あっさりと！案外、繊細だった！敵だけど何か、ごめんね！？

ボウッ…と杖の先端の玉が淡く光る。

不気味で、綺麗な赤色に。生命の色に。死の色に。

「『ビィーネの業炎』！！」

カンッ…と杖を振り上げ、地面を突く。

そこから魔法陣『ビィーネの業炎』が発生して、辺りを火の海へと還した。

死体兵も灰となり、火の粉と踊り狂って何処かへ消える。

あー、真っ赤だわー。

「おい、馬鹿」

「へい、何でしょ？」

「どうやって此処から脱出するおつもりで？」

辺りは火の海。

当然、僕らもその中にいる。つまりは、閉じ込められてる訳でして。

「飛んでみるとか…？」

「天国までか？よし、今すぐ逝け。そして天使か何か呼んできて俺を助けろ」

その言葉に僕は不敵に笑う。

そう。僕の十八番があるじゃないか。

「それじゃあ、困った時の吉田頼みと行きますか」

# 第三十話　猛獣使いにご注意を

三嘉ヶ崎、田中宅。

「…此処が田中さんの家ですか。案外、殺風景ですね」
「いえいえ。ついこの前、そうなったんです。あっ、ソファー無いですけど椅子はあるので、そちらに座って下さい」

三浦春菜は辺りを物珍しそうに見物し、机の上に置いてあるゲームソフトを手に取り、声を上げた。
陽一郎は気にすることなく、台所で緑茶を出すべきか紅茶にするべきか迷っていた。

「『勇者撲滅』じゃないですか！私達の世代では一部に人気がありましたが、最近では結構流行ってますよね」
「『勇者撲滅』。運命変換型革命ＲＰＧ…ね。それ、捨てに行く予定なんです。
壊れてますし…全ての元凶は、これですから。あの、緑茶と紅茶どっちが良いですか？」
「ほうじ茶で」

にこりと笑う春菜に、陽一郎は困った様に頭を掻いた。

＊＊＊＊

「火の七日間を俺はやる！」

「目覚めての第一声がそれか。いきなりどうした？…まぁ、お前なら不可能ではないな。意気込んでる時に悪いが、最後は餓死だぞ？陽一郎さんにも怒られるし」

「あー、その心配は無いけど…それでも嫌だな。止めとく」

げっそりと僕が言うと、呆れた様にカインは溜息を吐く。

現在、真夜中。ミケガサキ王国上空です。いやー絶景かな、絶景かな。

因みに、絶望的景色の略だから。

赤い龍の背に乗って…なら良いんだけど、僕は鷲掴みにされてるんです。

カインは服が引っ掛かってぶら下がり状態。

黒い血がぽたぽたと生気のない死に絶えた王国へと落ちる。

現在のこの状態を含め、何故こうなっているかは僕も理解不能だ。

なので、聞いてみる。

「カインよ。僕等は何故、栄えあるドラゴンの足に鷲掴みにされているんだい？」

「何だ、覚えてないのか。まぁ、無理もない。ならば振り返ってみよう」

僕は後ろを振り向く。

ドラゴンの鉄臭い固い鱗が見えた。

「何も無いけど…何かあるの？」
「おさらいという意味でだったんだが…」
「あのさ、ドラゴンに鷲掴みされながらもこうやってボケられる僕らって素晴らしいと思う」
まぁ、そんな訳で記憶をおさらいしてみる。

＊＊＊＊

「それじゃあ、困った時の吉田頼みと行きますか」
自信満々というか、好奇心で僕は無い心何が出るかなと楽しみに陣を描き、杖を振りかざした。
「猫モドキとさ、杖じゃなくて吉田魔王様の銅像をひそかに期待してたんだけど、外れたなぁ」
「良いじゃないか。これで、『沈黙の書』とやらを思う存分こき使える訳だろ」
「うーん、どうだろね…。あくまで、幅を広くしたに違いないからな…。まぁ、フレディくらいは喚べるかも」
そう、確かそんな会話をして杖を陣に付けようとして…どうなったんだ？
「あの後、杖振りかざしただろ？いざ、『召喚』って時にドラゴンの奇襲が来てだな。お前の頭を爪でガツ～ンとしたわけだ」
「ガツ～ンじゃないよ！音は可愛らしいけど、内容としては恐ろしいじゃないかっ！普通、頭吹っ飛ばない！？」

「良かったな。召喚されて肉体が強化されてなかったら、お前が頭を吹っ飛ばした死体兵の様に何処かへ飛んで行っていたに違いない。証拠に、出血してるだろ？」
「骨まで強くなるのか…。その勢いで伸びろ、骨」
「最後まで聞け！」

「煩せぇ！この猛獣使いドグラ様の鞭の餌食になりたいのかいっ！？」
「ドグラ様の無知の餌食になる…？馬鹿同士ならその攻撃の効果はいまひとつだ」

黒い紐の様なものが頭にぶち当たる。そう、ちょうどガツ～ンしたと思われる所に。

ボタボタと止まっていた血がまた流れ出す。灯りの無い国の中へと吸い込まれて行く。
それを見届け、そっと人差指を動かし円を描く仕草をする。幸い、気付いていない。安堵の息を吐くと、空に出現した杖をそのまま地へ落とした。漆黒の杖は、同じ死の色を纏う国に吸い込まれて行く。

「いでででっ…！おまっ、キレるの早っ！気性荒っ！」
「殺されるぞ、お前」

カインがド突く仕草をする。
そして、小声でMなのか…？と呟くのを僕の耳は聞き逃さなかった。

「いやいや、違うから。そうかもしれないけど、取りあえず違うから。えーと、ドグラ様ー！質問宜しいですかぁー？僕達、どうなっちゃうんですかねー」
「勇者は女神様の所へ。それ以外はキャンディの餌となる」

あっ、律儀だ。この人。

「キャンディーとは、何でしょうかぁー？ペットの名ですかぁ～？」
「お前らを運んでいるのがキャンディーだが？」

赤いドラゴン。
恐らくはメスなのだろう。けど、ドラゴンって基本両生類じゃないのっ！？

にしても、キャンディーって！！
ドラゴンなのにキャンディーって！！ふ、腹筋が…！割れるを通り越して裂けそうだ！
チャームポイントは何処ですか？鋭いおめめですか！？鋭いおめめがチャーミングなんですか！？

「プラチニオンに猫モドキと名付けたお前が笑えることじゃないと思うが…？」

はぁ…と溜息を吐いたカインはふと気付く。
そして、他人に伝えたくて仕方が無かった。

「ゆ、優真…。ドラッ…ドラゴッ…爪…頭…っぐ」
笑いをかみ殺すカインに教えられた通り、爪を見た。

「ま、マニキュア…！！」

情けない声で何とかそれを発し、笑いをかみ殺すと、腹を抱える。
視線は頭へと向かった。

ドラゴンというか、中華の器とか絵本に描いてありそうな異国の龍と言ったところか。
立派な細長い髭に、立派なに、二本の…角…。
ちょうど僕の位置からはドグラの姿も見えた。二十代後半くらいのふっくらした体格の女性だ。
目つきは鋭く、髪は赤…おでこを見せる様に…前髪をちょんまげ結びにして…。

だから。
この湧き上がる笑いを抑えることなど不可能だった。

「り、リボンで止めてる…！し、しかも…おそろっ！何アレ！？今流行りのペアルック！？髪型も同じでこ見せだし！クオリティ高けぇ！あは、ははははっは…！！」
「馬鹿っ！皆同じで皆良いんだよっ！そっとしとけっ！ふふっ…ははははっ！！」

当然、鞭が直撃したのは言うまでもない。
そして、その衝撃でカインが落ちるのも、また必然だった。

「おわっ…！」
「何っ！？キャンディー！捕らえろ！」

カインの身体が、闇へと吸い込まれていく。

血は既に落した。杖も同じ。
上手くいったかは正直、分からない。

もう一度、人差指で自分の側に二三度折り曲げる。
直後、黒い光の玉が街からドラゴン…正確には僕目掛けて飛んでき

た。
それは見事に直撃して、身体は空へと放りだされる。

「『召喚』っ！」

成功していることを願う。
ほら、じゃないと僕達確実に死ぬから。

キャンディーはあからさまに怯んで、動きが鈍い。
これで『召喚』が成功していれば、助かるんだけど。

あー、頼むから余計なことしないで。

「くそっ！イチゴ！行けっ！」

……ゴメン、突っ込む気力が無い。

ヒュン…とキャンディーの背から人形サイズのドラゴンが放たれる。
ちっ。早いな。

イチゴはあっという間に僕に追い付く。
ガシッ…と鋭利な爪が僕の脇腹を掴んだ。

「『ビィーネの業炎』ッ！」

『魔眼』でイチゴの足を焼く。
抉られる様な形で、イチゴは僕の脇腹を離す。欲しくもないスピンを掛けて。

この話も僕の人生も次回に続く…と良いね。

# 第三十話　猛獣使いにご注意を（後書き）

優「三十話だねー。というわけで、唯の後書きじゃつまらねーので、出てみたよ」

カ「俺達が出たとこで何も変わらないが？」

優「大丈夫。唯の自己満。一度はやってみたいじゃない。まぁ、本題に入ろうか。お気に入りが十件になりました！どうもありがとうございます！これを励みに頑張っていきたいと思います！此処までお読み下さってありがとうございました！今後ともご愛読よろしくお願いします！」

カ「…まぁ、明日には夢オチとして処理されてんじゃないのか？覚めない夢は無いからな」

優「……。今後とも、よろしくお願いします！」

# 第三十一話　第二次新資源戦争の序曲

目を開ける。

わぉ、天国。…かどうかは知らないが、僕は、美しい場所に居た。

見たことのない花々が咲き乱れ、甘い香りの風が髪を揺らす。
青々しい草花を踏み潰さない様に歩いて行くと、古いがその神々しさを損なっていない神殿があった。
その中央には小型テレビとコントローラーがあり、ゲームソフトが既にセットされている。
何処からか天使の様な綺麗な歌声と音楽が、ゲームのＢＧＭを奏でていた。

「マジ、天国じゃん」

がばりと身を起こすと、アイゼルとヘブライがぱたぱたと僕の頭上で喚く。
というか、やはり君等が召喚されるわけか。
「起きやがったゼ、こいつ！」
「臨終は此処じゃね～ようだな！」
「大丈夫か…？助かった、ありがとよ」
カインが手を差し出す。困った様に笑うと、その手を取らず自力で立ち上がる。
幸い、何処も折れて無い様だ。

「にしても、お前の天国はゲーム機があれば成り立つのか。
つーか、天使に讃美歌じゃなくて背景音楽歌わせるって扱い酷過ぎ

だろ」
「禁断症状が今まで出なかったのが、僕は不思議でならないと思うんだけど。で、此処、何処？」
「パン屋だ」
「そうか、パン屋か。アイゼル、ヘブライもパン食う？」

もひもひとパンを食べながら僕は蝙蝠達にパン屑を放る。
食ねぇヨ！と言いながらしっかりとキャッチし、がつがつと食べていた。

「食うのか…というか、お前も何食ってんだ。泥棒だぞ」
「今更強盗が罪に加えられたとしても国内指名手配にまでなってんだから痛くも痒くもないね」
「そういうところは母親似だな、お前…」
「僕はそれを無視して次の行動に出るっと…さて、皆助けに行かないとね。にしても、何で人いないの。怖いんだけど。まさか、皆死体兵になったわけじゃないよね？」

クケケケッ…と蝙蝠が笑い、ばたばたとせわしなく羽根を動かし始めた。
カインが神妙な面持ちで話す。

「それがだな…全員ではないが、死体兵にはなってたぞ。女神様は『魔力魂』を手に入れたことにより、他国との同盟をもみ消したらしい。まぁ、簡単に言えば『新資源の独占』ということになるんだが…」
「何にせよ、武器が必要だね。僕は要らんけど。カインの剣は折れちゃったし…。
ということでだね、はい、プレゼント」

ほいっと潰れたあんパンを手渡す。
折れたんじゃない、お前が原因で折れたんだと呟いていたカインは口をはの字にしていた。

「本当はフランスパンが理想だったんだけど…。無いからそれで頑張れ。ほら、ナックル代わり。大丈夫、魔法陣でちゃんと加工したから」
「そういう問題じゃないんだが…何をどう頑張ればいい？馬鹿にしてるのか？」
「そういうことで、実践練習！」

肯定して受け流す。
優真は新たなスキルを覚えた！

「たのもー」

バンッと勢いよく扉を開ける。
まぁ、予想通り死体兵が囲んでいた。
…死体兵はともかく、このパターンに、ちょっとトラウマになるかもしれない。

「カイン、ちょっと借りるよ！これが菓子パンの底力だ！」

潰れたアンパンを握り締め、向かって来た死体兵をぶん殴る。

バキンッ…！

「ぎゃあああああ！」

僕の拳は死体兵の顔面にクリーンヒットし、例の如く頭がもげた。

断じて、あんパンが使い物にならなくなった訳でも、僕の骨が折れた訳ではない。

「こ、こここうなったら…あんパン最終形態！食らえッ！」

「なっ…！まさか、内部に魔方陣を仕込んでいたのか！？」

ふっ…と僕は笑う。

そんなわけねーじゃん。

そしてパイ投げの原理で、僕はあんパンを死体兵の顔面にぶち込んだ。

例の如く顔がもげた。

別にね、それは予想出来てたんだ。もげるかなって。だから心の準備もしておいた。

問題は此処からだった。

パイ投げの原理で、あんパンを死体兵の顔面にぶち込む。

そう、そこまでは良かったんだ。

その後、あんパン見てみたらさ、くっきりと死体兵の顔がプリントされてんの。少し頬が吊りあがってるから笑ってんのかな？

あんパンが顔面スタンプに早変わりだよ。嫌がやせとして正月辺り年賀状に押したいくらいのリアルなハイクオリティーだ。…岸辺に百枚くらい送っておこう。

いざ、携帯を取り出そうとポケットを探ると、何も入っていなかった。

「ぎゃあああ！こわっ！大丈夫…怖いけど、怖くないッ！さぁ食

らうがいい！賞味期限余裕で過ぎた餡子を！死ぬぞ！」
「こいつに期待した俺を心底呪いたいっ！…というか、腹壊したんだな？」
「…僕じゃなくて、蝙蝠達が」

ちらりと横目で蝙蝠達を確認すると、地面すれすれの超低空飛行飛行で右往左往に動き回っている。
その間にもカインは自らの拳で死体兵をなぎ倒していた。
だが、次から次へと死体兵は湧いて来る。

「成程！だから、さっきから動きが活発なわけか！にしても、こいつら不死身だな！湧いて出て来るとはまさにこの事だ！」
「カインってさ、騎士より学問の道に進めば良かったんじゃない？色々とことわざ知ってるし…！」
「馬鹿言えっ！俺の様な孤児が学問の道なんて歩めるはずがないだろっ！アンナも俺も先の戦争で家族を亡くした。だが、最初の勇者様が俺らを導いてくれたからこそ、生き延びられたんだよ。…お前みたいな、変わり者だったがなっ！お前こそ、いい加減その下手な演技は止めた方が良いんじゃないのか！？」
「大きなお世話だとだけ言っておくっ！あー、埒が明かない！『召喚』ッ！」

体力もそろそろきつくなってきたので、『魔眼』を発動する。
辺りが黒い霧に包まれた。

「…お呼びですか？影の王。フレディです。おかげで二階級特進しました」
「何、死んだの！？」

現れたのはフレディことディスビアと無数の幽霊軍団なのだが、今

日のフレディは人型だった。
好青年という言葉がぴったりで、何とも死神らしい恰好をしていた。
手にはあの大型鎌が握られている。
…そして、僕より背が高い。ちっ。これだから最近の若者は。

「いえいえ、意外にこの名前好評でして…。次期影の王に名付けてもらったんですからね…。
僕の今までの功績も評価され、大総統様からは器を与えられまして…。これからはフレディとお呼び下さい。…で、我々は何をすれば？」
「いや、こういう死体分野は君達の方が詳しいと思って。何とか出来る？」
「…つまりは、片付けろと言う事ですよね。分かりました」

そんじゃ、よろしくと言って『瞬間移動の陣』を形成すると、城へ飛んだ。
僕等が去った後、フレディは外套から懐中時計を取り出すと時刻を確認する。

「…御武運を。あと、三時間二分四十四秒でお亡くなりになりますがね…。知らぬが華と言うこともあるでしょうし。その余生を悔いなくお過ごしください…無理でしょうけど」

# 第三十二話　死体兵のささやかな夢

「『魔力魂』の力…思ったより強力ね。死なずの兵を造れるなんて…また徴兵令でも開始させようかしら…？ねぇ、偉大な研究者様の息子さん」

『何が目的か知らないが、そんなことをすれば必ずそれ相応の裁きが下る。…必ずだ』

『縛りの陣』により、動きを封じられ芋虫の様に床に這いずる。自らの現状より、これから起こる無慈悲な行いに魔王は激昂していた。

女神はそれを物ともせず、笑みを浮かべる。

「うふふ…まぁ、何とでも負け惜しみを言えばいいわ。…さぁて、あのお馬鹿さんはいつ来るのかしら？早くしないと、可愛いお姫様が消えてしまうと言うのにね…！あぁ、そうなったらあの子はどんな表情を浮かべ、その心はどんな色に染まるのかしら？高みの見物と行きましょう？無力な魔王様」

そう言って女神は巨大水晶に映る『死の夜（ノワール）』の姿を見る。

そして、自らの腕にはめた血の様に赤黒いブレスネットを見た。

大きなワイングラスに並々を注がれた真っ赤なワインを高々と掲げ侮蔑を込めて言う。

「乾杯」

ワイングラスをひっくり返し、床に這う様にして女神を見上げる魔王に全てかかる。

「きっと、このワインの様に赤く、『死の夜（ノワール）』にあげたブレスネットより黒く、今の彼方の様に歪んだ瞳で笑死を見るに違いないわ。まぁ、刺客を全て倒せたらの話ですけれど！」

無力で優しい若き王は、唯、この無慈悲で残酷な女神を睨むことしか出来なかった。

＊＊＊＊

あと、三時間二分四秒…。

頭の中で誰かの声と、時計の針が動く音が木霊する。

一体、何のカウントダウンなんだ？

「…ハッピーニューイヤー？」

「大晦日は当分先だぞ。城内に入れたは良いが、皆が何処に幽閉されてるのか分かってんのか？」

ミケガサキ城内部。

廊下なのか、辺りは薄暗く、仄かな蝋燭の明かりで辛うじて足場が見える程度だ。

とりあえず、蝋燭を拝借し先を進む。

「それなら問題ない。ノワールにあげたブレスネットで辛うじて居場所が分かるよ。お化け屋敷とかダンジョンってこんな感じだよね。突き当たりでさ、お化けとかが…」

ぴたりと足を止める。カインが訝しそうに僕を見た。

ヤバい。自分でフラグ立たせてしまった…。
どうしよう、曲がり角。超怖い。

「戻る？」
「案外、後ろから来るかもしれんぞ」
「うわっ！止めろよ、そういうフラグ立たせんの！」

そして、遂に来ました。曲がり角。

「うわ、うわ、うわー…。後ろに誰も立たせんなよ？驚かさないでよ？よし、レッツ…」

ゴーと言おうとした時、白銀の光が煌めき、咄嗟に避けた頬に何かが通る。
続いて人影らしき物が飛び出してきた。

「曲がり角フラグ成立ぅうあああああああ！来んな！見んな！寄るな！触るな！成仏して天国行けよ！」

案外コメントが優しいなという突っ込みは無視してがむしゃらに拳を振るう。
それは何かに当たり、バキッ…というよりはドゴッ…と言う感じだろうか。
重い音が廊下に木霊した。
あっ、僕が殴った音なんだけどね。そしてカインを置いて一目散に先へ進む。

「おいおい、置いて行くなよ」

少し先へ進むと、灯りが完全に普及していて気味悪さの欠片もない

廊下に変わる。
相手が追って来ないことを確認すると、僕は一息ついた。

「カインのせいでフラグ成立したじゃん」
「幽霊じゃ無かったぞ？よく見えなかったが、女だな。あれは。強化されたお前の加減無し拳なんて気絶して当然だ。もしかしたら、曲がり角でのドッキドキな出会いというアレをやろうとしてたのかもしれん。食パンくわえて、曲がり角待機。ベタな出会い展開としては王道じゃないか。女子の夢だぞ」
「マジで？それは…悪いことしたなぁ。カビたパンで良ければたくさんあるけど…お供えとお詫び代わりに置いておこうか。此処に」
「戻るのは断固拒否か。…まぁ、良いか。重要な事でもないし」

まぁ、当然あれが刺客の一人なんて知る由もない訳で。
カインが壁に手を着く。

ガコンッ…！

と言う音がして、壁の一部が凹んだ。

「「ん？」」

二人して顔を見合わせる。

「ガコンッ…って言ったけど…？」
「ダンジョンをこの状況に置きかえるとして、一番来てほしくないパターンは何だ？」

カインが言わんとすることを察し、先程走って来た道を振り向く。
予想違わず、大玉が転がって来た。

「誰だ、城をダンジョン風に造った奴」
「仕方がない。怨むなら好奇心旺盛な初代勇者を怨め。だが、良く作動したな。素人が作ったトラップだ。碌に稼働しないと思っていたが…」
「見ろ、カイン。自動じゃない。手動だ」

首を傾げるカインに、指さして教える。
本当にくだらないので『魔眼』などこんなところで使いたくないのだが、しょうがない。
『透かしの陣』で、玉を転がしている主犯を見せてやった。

「死体兵をこんなことに使うなよっ！」
「良いじゃないか。彼だって好きで転がしてるんだ。
そうか…。奴らがあの運動会の日、親じゃないのに必ず現れる『運動会の玉転がし』と恐れられた伝説の玉転がしオヤジトリオか…。
噂では全ての小学校と幼稚園の運動会予定全てを把握しているらしい…。
見なよ、あの無駄のない動きと転がし慣れた手を。あれは素人が出来る業じゃない。熟練されたプロの業だ…」
「…唯のロリコンだろうが！もう勝手にしろっ！」

そう。三人ほどの死体兵が大玉転がしの様にせっせと玉を転がしている。
大変微笑ましいのだが、相手が相手故に引き攣った笑みしか出て来ない。

「彼等のやる気は相当だな…恐らく、僕等を倒せば年間行事に運動会を入れてやると言われたんだろう…。見ろ、闘志を燃やすあの眼差しを。その中に純粋な子供の様なキラキラとした目があるのを」

「すまん。俺には唯の骸骨にか見えん。…そんなに怖いなら何とかしろ。遅かれ早かれ、潰されるぞ俺達。こんな悠長に漫才してる暇無いだろ」

ちっ。ロマンの無い奴はこれだから困る。
まぁ、カインの言うことも一理あるので僕は指をパキンッと鳴らした。

「玉が来るなら床を消せば良いじゃない」

こうして、『運動会の玉転がし』の夢は儚く散ったのであった。

「なぁ、こんなところでぐずぐずしてないで、とっとと先に進まないか？」

カインの言葉に頷き、廊下を走っていく。
その時、頭の中で音が聞こえて、身体の隅々に反響する。
その響きに、不安を覚えずにはいられなかった。

カチリ…。
時計の針が一針動く。

あと、二時間十七分五十六秒…。

# 第三十三話　自己中共の野望

あと、一時間五十分二十秒…。

ギィィィ…と錆びた鉄の扉が開く。

僕が部屋の中へ入った途端、扉は閉まった。

カインはどうしたって？

囚われの教官とその他の子分達を救出しに行ったよ。思ったんだけどさ、あいつ勇者で良いんじゃね？

何だかんだで、僕がかっぱらってきたパン全部使って『あんパン無双』なさってた。

カインが最強と言うより、パンが最強だと僕は思う。蹴散らされる死体兵達が少し哀れに見えたよ。

ミケガサキ城最上階の一番奥の大きな部屋。

どうやら、ＶＩＰ専用では無いらしい。ちょっと期待してたんだけどなぁ…残念。

「にしても、あのドア。…自動ドア？普通、プラスチックで作らない？」

「…よく分かりませんが、硝子だと思います。

まぁ、そういう問題じゃないと思いますが…。優真様、お久しぶりです」

苦笑を浮かべつつも、ノワールは楽しそうに微笑む。

ちょっと照れくさくなったんで、誤魔化し代わりに僕は辺りを見回した。

「大丈夫？酷い事されてない？怪我とかは？」
「私の事なら心配要りませんわ。…そんなことより、大変なんです！優真様から頂いたあのブレスレットが…女神の手に渡ってしまったんですっ！」

僕の、そんな事よりも資源戦争リターンズが始まるみたいなんだけどという言葉は、轟音と地響きによってかき消された。
僕の言葉は天変地異にさえ拒否られるのでしょうか？一言も喋らせてもらってないよ。
城が大きく揺れる。

「…地震っ！？」

すると、ぼうっ…と水晶モニターが浮かび上がった。
倒壊した街の様子が映し出される。赤々と燃える民家から逃げて来る人は誰も居なかった。
その異常な光景に、ノワールが目を伏せる。

『ラグド王国第三十二番騎団出動っ！女神の首を討ち取れぇっ！ミケガサキを我が領土に収めよ！』

何時ぞやのラグド王国第三十二番騎団騎士隊長ミハエル何とかが、そんな事を叫んでいた。
うわー、遂に乗り込んできやがったよ。しかも、どさくさに紛れてとんでもない発言までしている。

「あの人、絶対フェラ行った方が良いと思う。まさに理想郷だと思うよ」
「…それは名案ですわね！しかし、私達も此処に居ると巻き添えを

食らいますわよ？」

水晶モニターに、女神由香子様の姿が映し出された。よくよく見れば、吉田魔王様の姿もある。
それもそうだねと相づちを打とうとした僕に、女神由香子様の声が見事に邪魔をした。
もういい。僕は何も喋らない。…やっぱり喋る。タイミングは今だ。

「これは…」
『新資源戦争…、そして領土争い…。実に分かりやすいですわね。弱肉強食。勝ったものが王座に座る。単純明快。素晴らしい事です。『領土革命』とでも名付けましょうか』
これは領土争いなのか、はたまた新資源戦争とした方が良いのか。どっちだと思う？って言いたいんですけど。何、嫌がらせ？イジメ？もう良いよ、絶対喋らない。

「ぐすんっ…」
「まぁまぁ…。大丈夫ですよ、私にはちゃんと届いてますから」
「あり…」
『『領土革命』…素晴らしい響きですね。ですが、それを起こせるのは我がラグド王国と貴国ミケガサキ王国…どちらが世界を統べるに相応しいか』

またしても僕の発言を遮って、ミハエル何とかが、剣を構える。
何、この人。何、このカメラ意識した目線。何、このドヤ顔。
他の三国忘れてますよー。気付いてー、君達だけの問題じゃないから。
君達二人で決められるほど甘くないことに気付いてくださーい！

『うふふっ…魔武器如きが我が王国に勝てるとお思いですか！？こ

っちには『魔力魂』もある。兵も大量に…いえ、腐る程いる！それでも勝ち目があるとお思いで？』

ある程度の差こそあれ、本当に腐ってますよ？

「何と言うか、もう手に負えない。ツッコミも追い付きそうにない」

「…その意見には同感ですわ」

『この動く屍が兵士？ちゃんちゃら可笑しいですね！頭さえ切り落とせば唯のゴミだ！』

憐れむ様な目でミハエルが笑う。

刹那、金属音が響いた。

「死体兵が不足なら、私がお相手いたします」

長い黒髪が揺れる。

騎士の鎧が妙に似合っている女勇者は静かに淡々と言う。

手には滑り止め用の白い皮の手袋。細い腕には不釣り合いな大剣を、吉田雪は使いこなしていた。

剣の持ち手には『魔力魂』が填められている。

『くっ…なかなかの腕ですね…』

モニターから苦笑を浮かべるミハエル何とかの表情が映り、画面が切り替わる。

僕がドアップで映し出された。

「何これ、映ってるの？イェーイ」

画面がまた切り替わり、女神由香子様が呆れたように溜息を吐く。
そして、唇の端をくいと上げて微笑んだ。

あー、この人がこういう表情をしている時、碌な事が無いんだよな。

『時間が長いとはいえ、『魔力魂』も所詮は消耗品。要領を超えれば消える。それなら、もっと大きな『魔力魂』を形成すればいい話じゃありませんこと？』
『馬鹿っ…！さっさとその部屋から出ろっ…！』

吉田魔王様の声が一瞬だけ聞こえて、直ぐに途切れた。

『『魔力魂』は生命力と魔力の両方のつり合いが取れなければ意味が無い。
…しかし、勇者はその両方を十分すぎるほど揃えています。
今まで、粗雑な扱いをして悪かったわ。彼方は言わば金の卵ね。だから、この国を救って下さいな。
…私の可愛い、勇者様』

不覚にも、嬉しいと思う自分がいた。
ずっと、ずっと待ってたんだ。この人が、僕を見てくれるのを。

だから、僕の答えは既に決まっている。

「だが、断る」

## 第三十三話　自己中共の野望（後書き）

ちょっと次回の更新遅れる予定。
次回の更新は２２日を予定しております。

# 第三十四話　異世界の三種の神器＝武器＝パン？

『三種の神器』。

神より与えられし、至高の物であり、古来より皇位の印として歴代の天皇が受け継いだとされる三つの宝物。

八咫鏡、天叢雲剣。そして、八尺瓊勾玉。

三嘉ヶ崎を含む一般知識として、この神器があるのはご存知だと思う。

ならば、ゲーム界においての三種の神器とは何か？

勇者の形見とか、魔王の形見とか、魔王撃破のクリア記念で貰えるあの武器とか？

「否、それはパンである。ｂｙヒューマン」

「人間ですか…？」

「いや、ちょっとミスった。あー、ド忘れ。あれだよ、重力の人。あれ？全然違うかも…。

まぁ、何にせよ人間には違いないんだし良いか。そんなことより、この赤い稲妻。何とかならないの？」

パンでガードしながら僕等は壁の隅に寄る。

恐らく触れた瞬間に僕等は新資源へと望まずの転生を果たすだろう。

「何処かにある魔力魂を壊さない限り無理ですわ。というか、パンで防げるものなんですのね。

ちょっと意外ですわ」

「イースト菌の力は偉大だね。…だが、この八咫鏡こと、レーズンパンもそろそろ限界の様だ。
八尺瓊勾玉こと、あんパンを君に授けておこう」
「優真様…何か生き生きしてらっしゃいますね。子供みたい」
くすくすと笑うノワールに、僕はむっとした表情で返す。
「いーの。まだ子供なの、僕は。十七歳をまだまだ謳歌しきれてないんだ」
「自分の存在が母に認められるまで？それとも、誰かに甘えられるその時まで？」
ノワールが意地悪く微笑む。
うーむ。これでも一応ピンチ的な状況なんだけどな。この子に限らず、ミケガサキ住民にはシリアス精神が欠けてると思う。
「本っ当、君って意地悪だよね」
「それが『死の夜』の特権ですわ。…よく、断りましたね。優真様」
「…ごめん、よく聞こえなかった」
トンっとノワールが僕の背中にもたれかかる。
温かくも冷たくも無かった。…かと言って、ぬるくもないのだが。
いや、そう言う問題じゃないか。
「優真様の心は、いつだって空っぽですね」
「奴は大変な物を奪って行きました。…私の心です！
きゃあ、心が空き巣に入られ、ハートを撃ち抜かれたようだわ。まさしく、恋のスナイパー…がくっ。ジェニー、しっかりするんだ！
ジェニー！
…ノワール、そろそろツッコミが欲しいんだけど？ジェニーって誰

だよとか、そんなんで良いから」
「あら、ごめんなさい。続きが気になって」
仏の顔も三度までというが、いつまでもこの状況だと僕が困るな。
僕は自らの影に手を突っ込み、『沈黙の書』を取りだす。
そしてノワールに八咫鏡こと、レーズンパンを放った。
「ノワール、パス。…食べないでよ。後で大変な目に遭うから。ちょっと、時間稼いで。直ぐ終わらせるから」
「良いですけど…いくらなんでも、そこまで食い意地はってませんよ」
そんなノワールの言葉は、集中した僕の耳には届いていない。
書を開いた瞬間から魔力が身体から静電気の様に迸る。
あと、一時間零秒…。
「――っ…！！」
無意識に、何だかよく分からない呪文を唱える。何処の言葉でもない気がした。
吐息は統合され、音となり、声となる。
初めて聞いた言葉のだが、昔から知ってたような、…既視感というべきだろうか。それに似た感覚というより錯覚が襲う。
辺りが静まり返り、暗闇が支配する。
声も、外の轟音も聞こえない。世界の全て音を拒絶してしまったかの様に静かだ。
「優真様、しっかり！」

「…ノワール？赤い稲妻は？消えた？」
「…覚えてないんですか？…あの、こんなこと言うのは非常に失礼ですが、あまり書の力に頼らない方が良いですよ。そして、やり過ぎですわ」

はぁ…とノワールが溜息をつく。
僕等がいた塔の最上階の部屋は半分ほど瓦礫が吹っ飛んでおり、国をぐるりと見渡せそうだ。

「あー…。まぁ、良い…かな？こっちだって、好きで書に頼っているわけではないんだけど。
だったら未来の猫ロボに頼りきりの、のび助はどうなってしまうんだ」
「書を使い過ぎた者は皆、碌な事になってませんよ。…地獄に堕ちます。あるいは…」

「残念ながら正統後継者と言うか、ちゃんと素質がありますからご心配なく…。久しぶりですね、『死の夜』…と、影の王」

いつの間にか空中に浮いていたフレディは、軽やかに僕らの前に降り立った。
ノワールは少し警戒したように一歩退く。
僕としては、何かおまけみたいに挨拶されたのが引っかかったが、不問としよう。

「あっ、フレディだ。仕事お疲れ様」
「いえいえ…、まだ終わってないんですけど。一時間切ったので」
「ずっと気になってるんだけど、何のカウントダウンなのこれ？」

その問いに、フレディは空を仰いだ。

そして、何か思いついた様にこちらを見る。

「…えっと、新世界の幕開けですかね？」

「…石油王に俺はなれる？」

「石油はとっくの昔に無くなりましたわよ、優真様」

そういや、そうだった。

とりあえず僕等は崩れかかった城の塔から脱出した。

「あっ…カイン達置いて来ちゃった」

ぽんっと柏手を打つ。

すると、後ろで物音がしたかと思うと、頭に衝撃が走る。

「何が置いて来ちゃっただ。…で、一体誰のせいで俺達を置いて行く羽目になり、誰のせいで城があんなに崩れてんだ？」

「ははははっ、分かってるのに聞く？それ…。いやぁ、僕なんだけど、僕もよく分からないから、ノワールに子細は聞いてね。そうだ、パン、役に立った？」

「聞くところは其処なのか？…悔しいが、凄く役立った」

心底悔しそうに頷くカインをドヤ顔で見返し、今後の事を振ってみる。

「…で、この状況はどう止めたら良い？簡単には止めてくれないよね、多分。はい、意見出してー」

「この前のアレ…やればいいじゃないか」

意見は案外あっさり出た。

つまり、教官曰く、いつぞやにやった『魔人大戦争』を起こせということらしい。

もう誰が悪だか分からないじゃないか。
というより、明らか僕が悪にされるじゃないか。…いや、もうされてるか。

「…いや、それは最後の最後にしよう。今はちょっと…。とにかく、行動あるのみだ！」
「で、どうするんですか？」

ノーイさんが訊ねる。
僕は静かに頷く。

「とりあえず、安全な所に逃げる」

「……。」

沈黙が訪れる。
アレ？てっきり、そんな場所ねぇよ！みたいな感じで皆に蹴られることを期待…いや、覚悟してたんだけど。予想外の反応だ。

「はぁ…。いや、お前がヘタレなのは分かってるし、馬鹿なのは尚更よく知ってる。
怒気を越して呆れたよ、俺は」
「雪が戦っているんだ。助けようとかそういう精神はないのか、貴様には」
「…最低ですわ」

……まさかの言葉の暴力を振るってきましたわ、こいつら。

「いや、何と言うか…、マジ、すみません…」
「よく頑張りましたよ、王…」

フレディに慰められながら、僕等は吉田雪の元へと向かう。
ふと思いつき、後ろを振り返った。
フレディがどうかしましたか…と怪訝そうな顔を浮かべる。
「…いや、女神由香子様は無事なのかなって。城、あんな状態だけど。まぁ、あの人しぶとそうだし大丈夫か」
「そうですね…」
フレディに背を押され、僕は崩壊しかけた城を後にし、皆の背を追う。
フレディはもう一度後ろを振り向き、口の端を吊りあげる。

「あと、三十分四十四秒…」

「ん？何か言った？」
「いえ…、ほら、置いて行かれますよ。行きましょう？」

# 第三十五話　ゲームオーバー

「にしても、多勢に無勢とは…なんつーか、弱い者イジメ？実に大人げない」
「口動かしてる暇があるなら、さっさと歩けっ！」

ドラゴン使いだったか、猛獣使いだったか、唯の危険な動物愛好家だったか忘れたが、ピンマゲの女が後ろで鞭を振るう。
てか、貴女ミケガサキ兵じゃなかったの？

はいはい、どうも。毎度お馴染み田中です。
只今、実はラグドの兵のスパイだったピンマゲに捕らえられ、連行され中。
え？雪ちゃんを助ける為にカッコよく飛び出したんじゃなかったのかって？

…何の事かな？
いや、そうなんだけど。そうも上手くいく訳ないのが現実ってもんですよ。
第一、今回の件に関しては僕は悪くない。全ては奴のせいでございます。…いや、責任転嫁とかじゃなくて。

「ピンマゲってなんだよ」
「ピンクリボンの髷頭の略。ピンデコの方が良かったかな？けど、それだと嫌だなー。センスと言うより、美しくない。
…ところで、カイン。前回あれ程意気込んで雪ちゃんを追いかけて行ったのに、一体誰のせいで僕等は拘束される羽目になり、誰のせいで公開処刑されようとなってんの」

「はいはい。どうせ俺のせいですよー。さーせん」

いやいや、どうせじゃなくて実際、お前のせいでこうなってんだから。

開き直られても困る。

この件に関しては、僕、微塵も悪くないから。

「『はい』は一回」

「はー」

「…ゴメン、どうツッコめば良いか量り兼ねた。にしても、何だかんだ言って、皆逃げてんじゃん。何、あの手際の良さ。打ち合わせでもした？」

「いやいや、普通逃げるだろ。あの武器なら」

てきぱきと処刑準備が整っている間に、僕等は回想に思いを巡らせる。

＊＊＊＊

それはつい先ほどの事である。

僕は雪ちゃんを追いかける皆を追いかけていた。

「皆ー、早いよー」

「影の王が遅いだけですよ」

そうバッサリと切り捨てたフレディはふよふよと浮かびながら移動している。

追い着いた時は、皆様大乱闘中。

ノーイさんとノワールは死体兵と他国の兵を相手に、オズさんはミハ何とかを雪ちゃんと共に抑え込もうとしている。
教官は人とは思えない脚力で空から炎の玉を吐き出してくる巨大ドラゴンに跨がると切り掛かっていた。

つか、皆武器パンってシュールな光景だわ。
いや、シュールを通り越してカオスだ。
何の闘いですか？パン屋の一揆ですか？米ならぬ、小麦騒動なんですか？

…携帯、携帯。やっぱりないか。何処行ったかな？
恐らく、オズさんが借りパクしてるはずだ。
あー…超撮りたい。連写したい。出来るなら動画も撮りたい。
こんな光景、滅多に見れない。二度とない。

にしても、皆強いなー。
…今回は僕の出番無いかなー。

「おい、優真！暇ならこっち手伝えっ！」

ちょっと皆があまりにも強すぎて、手助けとかいらねぇかなって思って挫折しかけていた僕に救いの声が掛かる。

「…一体何をすれば？」
「取りあえず、全部追い払え」

カインがパンを振りかざして、空を仰ぐ。
だが、そんなことをしなくても、それは視界に入ってくる。

僕等は大量のドラゴンが取り囲まれていた。

大きさはまちまち。
小さいのも大きいのも獲物を狙う狼の様に段々と低空飛行になっていき、しかも確実に逃げ場が無くなる様に彼らの渦の中心へと追い詰めていく。
数が数だけに十分な威圧感がある。

「…あっ、こいつらパン食おうとしてるぞ。ほら、中くらいのが食った」

んな、鳩じゃあるまいし。伝説上の生き物なんと心得る。
って本当に食べてるな。良いのか、お前のプライドはそれで。
…いや、案外猫モドキもそんな感じだから特に誇りはないのかもしれない。

「両方にドンマイと言っておく」

じりじりと距離が縮まって行く。
すぐ隣では、パンが食いちぎられる音が何ともリズミカルに聞こえてきた。

そういや、昔。
海に由香子様達が僕を置いて行ってたので、行けないから、一人寂しくお手製弁当を公園で食べたっけ。
海では鳶が弁当のおかずを盗っていくらしいが、公園ではカラスと鳩の猛襲に遭ったな。
こっちでは城の近くでパンを振りかざしているとドラゴンがくるらしい。

ふと、頭に過ぎった考えを僕は実行に移す。

天叢雲剣ことレーズンパンをドラゴン達に向かって放り投げる。
直後、それを食ったと思われる奴らがバタバタと落ちてきた。

「毒でも盛ったのか？」
「そんなことしたら、動物愛護団体に叱られるよ。
魔力魂の稲妻をたっぷりと浴びたこのパンを食えば魔力吸い取られて力尽きるかなって」
「…毒より達が悪いじゃないか。だが、まだうじゃうじゃといるぞ？」

ふぅ…と僕は溜息をつく。

「正直な話。餌があるからじゃない？手頃な位置に」
「……。あぁ、こっちか」

カインが納得したように、自分の握るパンを見た。
おい、お前。さっきの僅かな沈黙何だ？僕だと思っただろ、手頃な大きさ＝身長で考えただろ。

「唯、一つ問題が」
「何だ？」
「せんせー、属性が同じですー」
「つまり？」

つまり？じゃねぇよ。お前の方が知ってるだろ。元々、この世界の住民なんだから。

術にはどれにも属性がある。
僕が得意とするのは一般的に無属性とされる瞬間移動などと、闇属

性であり、同属のこいつらには無効というわけだ。

「降参と言う事で」

その他諸々あったのだが、まぁそこはどうでも良いのでほっとこう。しょうがないじゃん。だって、皆。僕等が竜に囲まれた辺りから全力疾走して逃げ出したんだもの。

そんな感じで回想を終えた僕達に声がかかる。

「…またお会いしましたね。カイン・ベリアルと、次期魔王様」

「出た、ハエ・ナルシス」

「足りませんよっ！誰が蠅ですか！ミハエルっ！ラグド王国第三十二番騎士隊長ミハエル・ラグドネスですよっ！…まぁ何にせよ、彼方たちの御蔭で城は崩壊し、我々が勝ったも同然になってしまった」

つまり、ナルシーは認めるのか。

「…何か、言い残したことは？」

「それは私のセリフです！あぁ、もうっ！どうせ、碌な事言い残さないのですから、処刑を開催しますよ！」

「恐ろしや。こいつ、何てノリがいい」

「…俺としては、お前に加勢を頼んだ過去の俺が恨めしや」

「闇市にある飲食店は？」

「…なるほど、裏飯屋ですか。そうとも言いますね…って、そうじゃないっ！良いからお黙りなさい！」

ほら、ノリ良いでしょ？と僕等は呑気に喋る。

何としても時間は稼がないとマジで助けが来る前に始まっちゃうからねっ！
それだけは避けたいのですよ。

「…おい、何か話題提供しろ」
「ゴメン。何も思いつかない」

小声で言うカインに、僕は小さく首を振る。
「そういや、女神様は？」
「ん？…あぁ、あの愚かな女は、もうすぐ隣に来ますよ。順番としては執行人次第ですが、私としては、女神、魔王、そして馬鹿チビと、赤毛の順序が望ましいですね」
「…こいつ、嫌みを混ぜ込んできたぞ。心の狭い奴だな、友達いないだろ？」
「ふんっ。何とでも言いなさい。所詮は負け犬の遠吠え。…まぁ、良い。おや、準備が整った様なので、始めましょうか。ドグラ、辺りの警護、頼みますよ」

僕らの体は地面に深く刺された丸太に縛り付けられる。
ラッパとシンバルの中間の様なけたたましい音が鳴り響き、頭から血を流してぐったりしている女神が兵士二人に運ばれて来た。
赤いドレスは、血で黒く染まり、所々破れている。だらりと垂れ下がった手は白く人形の様だ。
吉田魔王様は、手傷を負っていはいるが、そこまで命にかかわる様なものでは無かった。
恐らく、吉田魔王様は大人しく投降し、女神由香子は抵抗し続けたのだろう。

「…えーと、久しぶり？皆に会ったりした？」
『会っていたら、こんな状況になってないと思うが？…すまんな、

守ってやれなくて』

ちらりと吉田魔王様は女神を見た。
僕は肩をすくめ、自業自得の結果だよと呟いた。

ちなみに、右から順に、女神、僕、吉田魔王様、カインになっている。
後ろには逃げない様に見張っているのか、女神を運んで来た兵士が二人立っていた。

それにしても、ナルシーめ。僕がカインと無駄口を叩かない様に采配したな。

もう一度、けたたましい音が鳴ったと思ったら、僕等から少し距離を置いたところに魔法陣が形成され、
『執行人』が姿を現す。

「あー、君まで寝返ったか…。吉田雪」
何となく予想はしていたんだけどね。
ということは、雪ちゃんは皆とは別行動をとったわけだ。

「…処刑を開始致します」

雪ちゃんはそう告げると、駆け足程度の速さで向かってくる。徐々にスピードは上がっていく。
その手には大剣が握られていた。

その時、頭の中で時計の針が煩いほど大きく音を立て、動く。

「あと、五秒ですよ…。影の王」

何時の間にか、僕の影から半分顔を覗かせたフレディが言う。学校の怪談みたいな不気味さがあり、背筋が凍った。
骨の手をパチンッと鳴らすと、僕等を縛っていた縄が解けた。
それが合図の様に、後ろに居た兵士も動き出した。

あと、四秒。

その時には雪ちゃんは確実に吉田魔王様の元へと近付いていた。
止めようと駆け寄ろうとした時、それが違うことに気づく。
彼女は徐々に右に寄って行っている。

…そう、女神の元へと。

ゆっくり、ゆっくりと。
辺りがスローモーションの様に動く。

「馬鹿っ！そいつは『魔王』じゃないっ！」

君が倒すべき相手は、吉田魔王様でも、無慈悲過ぎる女神由香子様でもない。
君が倒すべきは『魔王』であって、それ以外の、此処に生きる…、ミケガサキにいる人じゃない。

今にも、剣が女神の体に突き刺さりそうな、その僅かの間に身体を捻じ込んだ。
だって、君が斬るべきなのはこの僕だから。

あと、三秒。

カインが何かを言って、視界の端に皆の姿が映る。誰かが悲鳴を上げた。多分、ノワール。
あぁ、来てくれたのか。…ふと、そんなことを思う。

鈍い痛み。
雪ちゃんの驚愕に歪んだ顔。
自分の体を見てみれば、二本の剣が突き刺さっている。

錆びたロボットの様にぎこちない動きで、首を後ろに回す。
兵士の一人が、僕を背を刺していた。…正確に言えば、彼が刺したかったのは、吉田雪だ。

…ざまぁみろと、そいつの顔を見る。
僕がもう少し成長したらこうなるだろうと思われるよく似た顔の青年を。久しぶりに見る兄の顔を。

身体は前に倒れ、刺さった剣がさらに深く刺さる。
黒い血が水溜りを作り、力が抜けて行く。
雪ちゃんは僕の身体を揺すっている。何か言っているが、声が聞こえない。

…死ぬんだろうな。

そう思った。
まぁ、良いか。雪ちゃん、救えるんだし。母さん、守れたし…。
そう思うと、少しだけ誇らしくなった。
きっと、魔王との戦いで合い討ちになった勇者とかはこんな気持ちなんだろうな。

あと、二秒。

乾いた音が響き、上から新たな赤い水しぶきが降って来た。
後ろで何かが倒れる音がした。

あと、一秒。

息を呑む音。
何となく分かってしまって、瞼を閉じた。
テレビの電源が切れる様に、ブツンッ…と僕の思考は途絶える。

「零秒…。さてさて、彼方はどう選択するのでしょうかね…？まぁ、それは良いとして。
とりあえず、御愁傷様です…また、お会いできると思いますけど…」

## 第三十五話　ゲームオーバー（後書き）

次回は舞台が少し変わり、三嘉ヶ崎だけど、三嘉ヶ崎じゃない世界となります。

# 第三十六話　三嘉ヶ崎…？

『ゲームオーバー』

暗い部屋を、小型テレビの明かりだけが照らす。
暗い画面に赤い文字。地の底から響く様な重苦しい音楽が鳴っている。

うーむ、これで二度目のゲームオーバーか…。
僕は、パッケージを手に取り、もう一度説明書を読み直す。
まぁ、そんなことしても攻略なんてできないだろうけど。

「おーい、優真ー！起きろー、朝だぞー」

階段を上がって来る音が聞こえ、ドアが開く。
顔を覗かせた兄は怪訝そうな顔をし、思い溜息を吐いた。

「夜通しで、ゲームか…。そんなんで、大学卒業できるのか？第一、彼女だって出来ないぞ」
「別に要りませんよーだ。そんなことより、今何時？」

兄はずかずかと部屋へ入って来て、カーテンを開けた。
部屋に光が差し込む。

「九時二十三分。早くしないと大変な事になるぞ。今日は昼からだろ？それじゃ、先行ってるからな。
…あぁ、明けましておめでとう。とっくに正月は終わったが…」
「…あけおめ、ことよろ」

去り際に頭を叩いて、兄は大学へと向かった。
僕もいそいそと着替えて、リュックを背負うと部屋を後にした。
階段を下りると、母由香子が上機嫌で弁当を大事そうに抱えて待っている。

あぁ、一歩遅かった。
無事、今日と言う日を終えられるのかが、たまらなく不安だ。…人生そのものが終わる気がする。

「明けましておめでとう、優真。これ、おせち。頑張って作ったのよ。味わって食べてね。行ってらっしゃい。帰る時はメールしてね？」
「随分前だけど…明けましておめでとうございます。じゃ、逝ってきます」
「字が違うわよ、優真」

玄関の靴棚の上に飾られた父の写真に手を合わせ、小声で近々そっちに行くかもしれませんと挨拶しておく。
父、明真（あすま）は僕が三歳くらいの時に行方を眩ました。
現在も行方不明中なのだが、ウチでは死人扱いである。まぁ、母の酸味の効いた冗談なのだが。
…たまに、供え物までしてあるけど。恐らく、多分、冗談だ。ちょっと酸味の効き過ぎた。

さてさて、どうやってあのゲームをクリアするか。
そんな事を考えながら駅目指して歩く。
曲がり角を曲がった時、ドンっと何かにぶつかって尻もちをつく。

何これ、ラブコメ？

「あっ、優真君。大丈夫？」
「あー…、雪ちゃんか。あけましておめでとう」

吉田雪。黒髪の綺麗なそう、美少女といって差し支えない気品溢れる女子である。
お隣さんであり、同い年であるが、けして幼馴染では無い。僕等は引っ越してきたからね。五、六年前ほどに。

「…そんなに慌ててどしたの？」
「えっ…ほら、絵具忘れちゃって…」
「今日は美術専攻者は室内でデッサン練習だよ？」
「あっ…そうだったわねっ。…その、優真君、良かったら一緒に行かない？」

それが目的でわざわざ待機していたわけか。…いや、考え過ぎだな。
雪ちゃんとは同じ大学である。
といっても、此処三嘉ヶ崎は都会と田舎の中間的都市であり、広い様で狭い。
市街地を抜ければ森だし、大学は二校しかない。田舎というには店は充実しており、活気がある。
…引っ越したと言っても、都内であり、三嘉ヶ崎生まれ、三嘉ヶ崎育ちな僕は実のところ都会を知らない。いや、どうでもいいけど。
だってさ、変に充実してるから良いかなって。
不自由も、便利さも中途半端なこの都市は、何だかんだで居心地がいい。
…他の所行ったこと無いから知らないけどね。
今まで通り、朝起きて大学へ行き、バイトをして七時くらいに帰宅し、ゲームをする。

ニートすれすれかも知れない生活を送る。

その一日は、きっとこれからも変わらないと思う。

変わり映えのないつまらねー人生だな。ゲーム好きなら、冒険の一つや二つ、しても良いんじゃねぇの？

…と余計なコメントを貰ったが、僕としてはこの状況に満足している。

だから変えるつもりもないし、また、それが続くことを願う。

「優真君、何考えてるの？」

「……んー、嫌いな物をどうやって残さず食べるか、とか？」

「鼻摘んで食べると味しないよ？」

「…マジか」

＊＊＊＊

僕等の通う大学には、顔見知りな奴らがうじゃうじゃといる。

まぁ、どいつもこいつも、都会を夢見ない内気っ子だからしょうがない。

むしろ、東京とかへ上京した奴は英雄扱いだな。

雪ちゃんとは専門学科が違うので途中で別れた。

…お昼一緒に食べる約束をさせられて。

講堂の一番隅の場所が空いていたので座ると、同じタイミングで隣に人が座る。

僕は重い溜息を吐いた。

「明けまして終わりましょう。岸辺の人生」

「今年も終わりました。松下の頭脳」

岸辺太郎。
説明は以下省略だ。こいつの為に酸素を消費しなければならないなんて、非エコロジーだから。

「いや、存在が地球温暖化要因に言われる筋合いねぇし」
「何言ってんだ。俺、平和の象徴だから」
「…二人とも、仲良いわね。でもレベルが小学生」

扉から入って来た女講師がくすくすと笑って、講義を始めた。
僕らもノートやらを取り出して、ただひたすらにメモる。

そんなことを繰り返して、お昼になって、何だかんだで岸辺もついて来て三人で食べて、また授業を受けて一日の大半が終わった。
帰る支度をし、校門へと向かう。
ふと、冷たいものが当たり、空を仰いだ。

「うわ…。雪だ…」

曇天の空からは、白い光がゆっくりと舞い降りる。
そういや、降るって天気予報が言ってたな。

そう思いながら、僕は帰路へと着く。
そういや、そろそろ進路を決めなきゃな。大抵の人は、此処(みけがさき)で働くんだろうけ…どぅ。

ズルッと、見事にマンホールに滑る。
うわぉ。絵にかいた様な、見事な傾斜なんじゃないのか、今の僕。
世界はぐるりと一回転して、重力に引きづり込まれて。僕の頭は地面に激突した。

意識を手放す最中、偶然通りかかったのであろう女性が驚きと喜びの表情を浮かべて僕を見ていた。
…何と言うか。物凄く恥ずかしいんで、見ないで下さい。
マンホールに滑って、頭打って、気絶するとか…ありえないから。
もう、二十二だよ?

＊＊＊＊

「ほんと、馬鹿だな。お前」

「あら…残念ね。せっかくご馳走が頂けると思ったのに…。見た目より馬鹿じゃないみたいね」

『ドケチに何か用か、馬鹿勇者』

「来るのが遅いぞ、馬鹿者…」

「何ですか、やけに騒々しいと思ったら…。まだ居たのですか、勇者殿」

呆れた様な、安心した様な、意地悪さがにじみ出た様々な声、様々な言葉が浮かんでは消えて行く。
初めて聞いたはずだ。だが、懐かしい。…あぁ、そうか。思い出した。
それにしても、一つ言わせて貰って良いかな?

「皆して馬鹿って言うなよ」

がばりと身を起こす。
一瞬何処か分からなかったが、聞こえてきた声の主により、何処に

居るのかが分かった。
「まぁまぁ…優君、大丈夫?派手に滑ってたわね。私、あんな漫画チックな豪快な滑り見たこと無いわっ。次はバナナの皮でお願いね」
柔らかな、聞いていて心地いい声。
吉田雪乃。雪ちゃんのお母さんである。ほわほわした人で、警戒心とかそういう言葉に無縁な人である。
何より天然ボケだ。

「……雪乃さん?生きてる?」
何度も目を擦り、さっき自分の自分の思考を疑う。
雪乃さんは気にする風でもなく、和やかな笑みを浮かべてぴんぴよ〜とガッツポーズをしていた。

辺りを見回す。ソファーから飛び起きて、窓を開けた。
子供達の笑い声、学校へと続く長い坂道、遠くに見える森。

「三嘉…ヶ崎…?」

僕はミケガサキに居た筈で、大学どころか、高校だって卒業して無い永遠の十七歳のはず。
雪乃さんだって、写真でしか知らない。雪ちゃんが生まれてすぐに亡くなったらしいから。

なのに僕はどうして此処に居て、どうして少し背が伸びて、普通の二十二歳になってるわけ?
畜生、どこのどいつだ!?身長に関しては感謝したい…!というか、一言で良いからお礼を言わせて下さい!

「優君。お兄さん、帰ってきたみたいよ。優君もお家帰らないと、

閉め出されちゃうわっ」

ドアの隙間から兄の様子を窺う雪乃さん。
さては、『家政婦は見ちゃった』を見ましたね?そしてハマったでしょ。

「そんなに熱心に拓誠を見て…、嫉妬するぞ?」
「まぁ…!お帰りなさい、誠さん。駄目よ、私達は、その…ロミオとジュリエットだから…。嫉妬は良くないわ。ね…?許して?」

最早、意味不明。電波の領域です。
吉田さんは苦笑すると雪乃さんにキスをした。唇に。

こ、子供の目の前で…何て事をっ!いや、もう大人だけど!ベタ甘だな、吉田家。
家には無縁だよ、この光景。

「何だ、優真居たのか。どうした?」
「優君、マンホールよっ!私、初めてみたわっ!つるって!綺麗な斜めで、気絶したのっ」

嬉しそうに笑う雪乃さんと対照的に、僕の顔は青ざめる。
吉田さんが事を理解する前に脱兎の如く僕は逃げ出した。

無事に卒業し、三嘉ヶ崎で暮らす『僕』の記憶と、ミケガサキで暮らしていた『僕』の記憶は最早不安要素でしかない。狐に抓まれた様とはまさにこの事だ。

深呼吸一つ。
三嘉ヶ崎特有の甘い空気を肺一杯に吸い込み、吐き出す。

分かっているのは、僕は今大学生で、二十二歳であるということだ。
家の塀には、『松下』と書かれた表札がはめ込まれている。
『松下』は、由香子さんが陽一郎さんと結婚する前の名字だ。つまり、不明中の父である明真の名字。

だから、今の僕は田中優真でなく、松下優真。
ごく普通の、家庭に恵まれた大学生。何処にでもいる平凡な奴だ。

何故こうなったのか。考えれば考える程分からない。

とにかく僕は、ただいまと緊張で少し上ずった声で、住み慣れた松下優真の我が家へと帰ったのであった。

# 第三十七話　望みの代償

「あら、お帰り。メールしてって言ったじゃない。おせち弁当、どう？
私的には、渋みと苦みと酸味が足りないと思ったんだけど…ちょっと、優真？」

ドアを開けると、丁度由香子さんが立っていた。
にこにこというよりは、意地悪の様な知的な笑みで、お弁当の感想を求めて来る。

僕は、開けたドアを再び閉める。
深呼吸をして、ぼそりと真顔で言った。

「…誰、あれ」

いや、由香子さんなんだけど。
僕の知ってる由香子さんは、食事？ゴミでも拾って食べれば？な人のはず…。
しかし、松下優真の記憶の中には由香子さんは何処にでもいる唯の母親だ。

「優真、如何したの？」

ドアが開き、由香子さんが顔を覗かせる。
愛想笑いを浮かべると、逃げるようにして自分の部屋へと駆けこんだ。

久しぶりに戻って来た自分の部屋は相変わらずである。

本棚にはゲームソフトのパッケージが隙間なく並び、窓側の壁にはベッド。
部屋の中心には小型テレビが置いてあり、ゲーム機がセットされていた。

「懐かしー！あぁ…この手触り、この程良い重さ…！本物のゲーム機だ。
やべぇ、血がたぎる…。絶対興奮して寝れないな、今日…」

背負っていたリュックをベッドに放り、テレビとゲーム機の電源を付けると、コントローラーを握る。
その時、ふと疑問が浮かぶ。

いつぞやかに、岸辺が陽一郎さんがゲーム機を売りに来たとか何とか言ってなかったか？
そもそも、僕は田中優真であって松下優真ではない。それに、ミケガサキにいたはずだ。

テレビ画面は僕の意思とは関係なくオープニングを流し、タイトルを表示する。
ＢＧＭが大音量で僕の頭に響く。それはまるで笑い声の様に、僕を嘲笑っている様だった。

『勇者撲滅』

問題の答えの様に。
その文字を見た途端、頭の中に電撃が走る。
不意に、部屋の明かりが点滅を繰り返しす。
画面が白黒の砂嵐を起こし、ほんの一瞬、画面が変わる。

黒い水溜り。真っ白なYシャツは、黒く染まっている。
血の失せた蒼白の肌は黒い血を浴び、華奢な身体には二本の剣が突き刺さっていた。

雨の様に、ザァァー…と砂嵐は悲鳴を上げる。
その雑音に混じって、ちらほらと声が聞こえて来た。

誰か特定出来ないほどの、たくさんの声がしきりに僕の名前を呼ぶ。
画面へ手を伸ばす。
途端、ブツリッ…と呆気なく電源は切れ、一夜の夢の様に、素知らぬ顔で『勇者撲滅』のタイトルが表示された。照明が復活し、また部屋は光に満ちる。

「…っ大総統！」

思わず大声で叫び、辺りを見回す。
だが、辺りには誰もいない。唯、窓の外で溜息の様な木枯しが通り過ぎて行った。

「…優真、どうかしたのか？」

ばたばたと足音が聞こえ、兄が上がって来たかと思うと、ノックも無しにドアが開く。
「えっ…いや、あの…、別に、何でも…」
「そうか。なら、良いが。お前が怒鳴るなんて…そんなこともあるんだな。…相談になら、いつでも乗るから、辛くなった時は頼れよ」
兄は、と大人びているが優しさに満ちた笑みを浮かべて、部屋を後にする。
直ぐ隣からパタン…とドアの閉まる音が聞こえた。隣が兄の部屋ら

しい。
ただ、ぽかーんと間抜けた顔を浮かべた僕は一人呟いた。

「…誰、あれ」

僕の知ってる兄は、何か、もっとこう…由香子さんの子ですねっていうのを惜しみなく受け継いだ生意気の域を超えたどうしようもなく、強制不可能な性格の持ち主じゃなかったっけ？

ベッドに突っ伏して目をつぶる。
意識は深淵へと堕ちた。
身体が死んだように冷くなっていく。

＊＊＊＊

「…ろ、起きろって。さっさと起きろ！馬鹿っ」
「痛…！カイン、何か用…？って、あれ？元に戻ってる…」

その呟きに、カインは呆れた様に溜息を着いた。
布団の中では、猫モドキが小さな寝息を立てて寝ている。

「優真様、今日はデートの約束したじゃないですかっ！忘れたんですか？」
「でで、デートォォォっ！？こんな奴とっ？姫様、お考えを改め下さいっ！それだったら、このノーイめがお供致しますっ！」
「えぇ。ノーイは荷物持ちよ」

くすくすと楽しそうにノワールが笑い、ノーイは戸惑い半分、嬉しさ半分と言った感じに笑っていた。
いつの間にか、良い匂いが部屋に漂って来る。

お腹空いただのと皆で口々に言い合いながら、階段を下りると、吉田魔王様が厨房で調理していて、オズさんが皿を運んでいる。
教官は庭で、剣の素振りをしていた。
カインが駆け寄って、教官に声を掛ける。それをノワールとはやし立てて、教官は顔を真っ赤にして怒り、ノーイさんはやれやれと言った様子で傍観して、吉田魔王様は苦笑を浮かべながら食事を運んでくる。

自分勝手で個性豊かな仲間達。

その姿が、徐々に薄れ、ぼやけていく。

「…っ！！」

手を伸ばし、掴もうとしても、ただ空を掻くだけだった。

身を起こす。
冷や汗が流れた。
いつもの、僕の部屋。
まだ、僕は『みけがさき』に留まっていた。

「…影の王（仮）は、そんなに『ミケガサキ』に戻りたいんですね…？」

聞き慣れたけだるそうな声が降ってくる。ほんの僅かに、怒気の籠った。
そう高くない天井を見上げれば、フレディが面白くなさそうに見下していた。

「（仮）って何だよ、仮って…」

「全く、我が儘な主を持つと大変です…。アナタにその覚悟があるなら、お教えしましょう…。実行するも、しないも好きにしなさい」

はぁ…とフレディは明後日の方を向いて溜息を吐く。

何かやけに不機嫌だな。

僕、何かした？

「…で、その方法は？」

僕の問いに、フレディは真顔になる。

小さな唇から言葉が発せられた。

その言葉に頭が真っ白になる。

「…え？」

僕のその態度に、フレディは少しイラついた様にぶっきらぼうに言う。

自嘲の様に歪んだ笑みを浮かべて。

「今の彼方が松下優真なら、彼方が『田中優真』になれば良い。松下優真の人生をぶち壊して、出来る限り『田中優真』の人生に近付けて、あの時と同じようにするんです。…運が良ければ、『ミケガサキ』に還れますよ？失敗すればそれっきり、母親に冷たい目で見られ、兄には蔑まれる人生に逆戻りです。それが嫌なら、大人しく松下優真として生きれば良い…」

憐れむ様な視線を僕に向けて、フレディはぼそりと呟く。

僕はただ黙っていた。

「代償無しに、願いは叶えられませんよ…。どんなことにも、不正を行えば、それなりの代償ってものを払う。それが世界の理なんですから…。

だから、彼方は、『松下優真』の人生を代償にして、自分の望みを叶えるのです。彼方にその覚悟があるのなら、私達はいつでも彼方を王として迎え、その願いを叶えましょう。我々の願いと引き換えに…。

では、彼方が自分に有意義な選択を選ぶことを願って…ｂｙ大総統」

ｂｙ大総統をやけに強調して、フレディはそれだけ言うと、夕靄の様に溶ける様にして消えた。

残された僕は、一人ぼやく。

「…大総統、自分で言いに来いよ」

# 第三十八話　ゲームに仕組まれた罠

僕が『みけがさき』に留まって、早三年。
桃栗共に実る年月を、何の実りも無く、朽ちる若者の青春があった。
まぁ、二十五になった大人に青春は不要か。

別に何の収穫も無く三年間過ごした訳じゃない。
だが、三年という年月は、良くも悪くも、重しに過ぎなかった。

誰かに『ミケガサキ』の話をした事は一度も無い。

三人程、勝手に勘づいて愚痴染みた説教を受けた事はしばしばあったが。
いや、説教染みた愚痴なのかもしれない。

現在、『みけがさき』。
季節は夏。時刻は夜七時。

家へと続く急な坂道をゆっくりと歩いて行く。

空を仰げば、満天の星空と白い月。
時に風が髪を揺らし、木の葉と砂埃が舞う。
何処からか、風鈴の音と蝉時雨が夏を奏でていた。
昼間でも無いのに、汗が滴り落ちて、コンクリートに吸収される。

「あれ、いつの間にこんな暗くなったんだ?あっ、夏だからか。冬は明るいよな、この時間帯。
…懐かしいな、この台詞。実に三年ぶりだ」

三年と半年。
帰路僅か五分が、今では一時間と長引く。

他に変わった事と言えば、会社員になった。
陽一郎さんが務める田中カンパニーの平社員として。

そうこう思いを馳せている間に、家の前に到着した。
松下という苗字の表札は剥がれ落ち、田中の表札が掛かっている。

あれから三年が経った。
季節は巡って、夏。

今日、僕は『みけがさき』に戻る。
正真正銘、『田中優真』になったから。

詳しい仔細は、後々機会がある時に話そうと思う。
今、主観となるべき舞台は此処『みけがさき』ではなく、『ミケガサキ』なのだから。

…単に、説明が面倒なだけだが。
しかし、手向けの花束代わりに少し話でもするとしよう。

＊＊＊＊

フレディというか、大総統から忠告を受け、途方に暮れる僕とは正反対に、軽快なメロディーが鳴る。
画面を確認せず、ボタンを押した。

「ハロー。僕、マイケル。ジェニーは行方不明だ。他当たれ」

ブツンッ…と一方的に電話を切る。
しかし向こうも諦めが悪く、何度も掛けて来る。
そんなやり取りが十回ほど続き、僕が折れた。

「…もしもし？どちら様？生憎、松下優真なら行方不明だ」
「優真君、やっと話せたね。僕だよ、僕」

ほぅ。これが巷で噂の『僕僕詐欺』か…。
ネーム、いまいちだな。

「確かに優真だけど…で、誰？返答次第では切る」
「僕だよ。田中優真の義父。田中陽一郎」

電話越しから苦笑が聞こえてきた。

「ふーん、生憎だけど…って、えええええええ！？よ、陽一郎さん！？な、何で…？いや、ミケガサキに繋がるくらいだ。不思議じゃない…のか？」
「今、『みけがさき』の駅前に居るんだけど…。今、出れる？」

「…何処に？」
「家の外。もう下に居るんだけど…」
「…の前。って、今、何て言った？ワンモア」
「もう下に居るんだけど…？」

そっとカーテンを開けて、家の外を窺う。
成程、人影確認。ストーカーだと勘違いされないか？だが、僕の目は誤魔化されないぞ。

「メリーさん、成仏せよ」
「うふふ…、僕、陽一郎さん。今、彼方の後ろに居るの」

ぽんっと肩に手が置かれる。
振り向くと、陽一郎さんが立っていた。

「…せめて、ノックはしよう？」
「突っ込みどころ、間違ってないかい？優真君」
「不法侵入？」
「…に変わりはないけど、普通は何処から入って来たとかが無難じゃない？」

成程。ツッコミとは難しい。
つまりは、こういう事か？

「メリーさん、成仏できない？」
「随分と根本的なところに戻るんだね」
「さっきから全部疑問形？」
「ギブアンドテイクを試みても、もう何も提供しないよ」

ちっ、思惑が外れたかっ…！冗談だが。

「久しぶり。何も出せないけどゆっくりして、行って。何か用があるんでしょ？用件話してさっさと帰れば？」
「矛盾を感じずにはいられないんだけど？というか、遠巻きに帰れって言ってるでしょ。
折角『ミケガサキ』について教えてあげようと思ったのに…」

その言葉に少なからず反応を見せると、陽一郎さんは困った様な、曖昧な笑みを浮かべた。

「…余程、気に行ったんだね。『ミケガサキ』が。
別に、止めようとかそういう訳じゃないから。その選択が君とって有意義なものか…。
これから話すのはね、ちょっとした僕の体験談。それを聞いて尚、何に変えても、行くという覚悟があるなら、僕は何も言わない。
…今から、何年くらい前かな。僕等が中学生の頃、あるゲームが流行った」

そう言って、陽一郎さんは近くのベッドに腰掛けた。ちらりとゲームを一瞥する。
そして昔を懐かしむ老人の様な目で、静かに語りだした。

今、君がハマっている運命変換型革命ＲＰＧ『勇者撲滅』。
有名なゲーム会社の大作って派手に宣伝されてたから、大人子供構わず皆が買った。
僕も、その一人。

「けど、唯のゲームじゃなかったんだ」
「確かに、唯のゲームじゃないよね。クリア出来ない。超難しい」
「…そういう問題じゃないんだけどね。そもそも、クリアなんて想定されて作られてないんだよ」

そう。誰もが攻略出来なかった。
だが、誰も不平を言う者はいない。何故なら、プレイヤーの殆どが、三嘉ヶ崎から姿を消した。

「社会現象じゃん」
「そうだよね。普通、そう思うだろう?だが、誰一人として気にする者はいなかった。

まるで、その人が直ぐそこに居るかの様に振舞っているんだ。いや、本気でそう思っている。
けど、時間が経つと魔法の様に行方不明だったプレイヤーが帰ってきたりした」
「何だ、戻って来たんだ。良かったじゃん」
僕のその答えに、陽一郎さんは先程と同じような笑みを浮かべた。
そうでも無かったんだよと小さく呟く。

「僕も、その行方不明者の中の一人。僕も、一度は『ミケガサキ』に行った事があるんだ。二番目の『勇者』としてね。此処まで言えば、君でも分かるはずだ。
君が吉田雪にそうさせた様に、このゲームの一部…つまり、『魔王』と『勇者』に選ばれた特殊プレイヤーと呼ばれるプレイヤーだけは、ゲームの意思により目的を達成しなければ還る事を許されなかった」

『特殊プレイヤー』。
ある程度の時差こそあれ、必ず、二人『召喚』される。
一人は、ゲームの世界を救う『勇者』。残る一人は、この世を我が物にせんと企み、目障りな勇者を滅ぼさんと企む『魔王』。

『勇者』プレイヤーは魔王を倒せば、元の世界へ還る事が出来る。
『魔王』プレイヤーは、元の世界に還ることは出来ない。つまり、ゲームを盛り上げる為の捨て駒。
…或は、人柱と言ったところだろう。

「それは分かってるんだけど、特殊プレイヤーと、普通のプレイヤーはどちらも『召喚』されてくるものじゃないの？」
「鶏が卵を産むのが先か、卵が鶏を生むのが先か…よく覚えてないけど、そんな例えがあるじゃない。

だからさ、こうは考えられない？プレイヤーがゲームを選ぶんじゃなくてさ、ゲームがプレイヤーを選ぶんだ。ゲームにとっては特殊プレイヤーさえ手に入れば良い。だから、他のプレイヤーはついでなんじゃないかって。実際、僕も何人かに訊ねてはみたけど、『刷り込み』の可能性が高い」

「刷り込みって事は、いつの間にかゲームのプレイヤーとして『ミケガサキ』で暮らしてたっけ訳？じゃあ、何で還ってこれたの？そのままゲームに取りこまれる可能性だって無くはないでしょ」

僕の問いに、陽一郎さんは小さく頷いた。

「それについても、一応は答えられるんだ。『勇者』が『魔王』を倒せば還ることが出来るように、プレイヤーも条件さえ満たせば還る事が出来たんだよ。商人なら金持ちに。村人なら結婚と言う風にね。

だから、本当に必要なのは『特殊プレイヤー』と呼ばれる二人だけなんだ。

それが一体何の目的で必要なのかは分からないけど」

「…陽一郎さん、二代目『勇者』なんでしょ？こう言っちゃ失礼だけど、誰を殺したの」

陽一郎さんは一瞬、息を詰まらせる。

しかし、直ぐに話を続けた。

「その前に、『魔王』プレイヤーについて話しておこう。

『魔王』プレイヤーは、元の世界に還ることは出来ないことは君も薄々感じてたと思う。

なら、魔王プレイヤーにはデメリットしかないのかと言うと、そういうわけでもないらしい。

魔王プレイヤーになった者には必ず特殊能力が授けられた。切り札とも言うべき、一度だけの能力が。

それはプレイヤーによって違うんだけど、それがあることは僕が一番よく分かってる。
ねぇ、優真君。レベルアップと道具とか武器以外でプレイヤーを強くするとしたら、どうする？」
「『クラスチェンジ』とか、最悪…『転生』かな？」
その答えに、陽一郎さんは満足した様に微笑んだ。
わしゃわしゃと頭を撫でられる。
「よく出来ました。…じゃあ、さっきの問いに答えよう。僕が二代目『勇者』として…、『勇者』プレイヤーとして誰を殺したのか？…他でもない。僕は、君を殺したんだ」
「生きてますけど？」
陽一郎さんは弱弱しく微笑んだ。今にも泣きそうで、触れると崩れてしまいそうな脆さを滲ませて。
「そりゃ、転生したんだから、覚えてないのも無理ないよ。寧ろ当たり前だ。
けどね、僕は確かに君を殺した。そして君は、そうなるよう業と仕向けた。お互い、ウンザリしていたのかもしれない。少なくとも、僕はこの世界に留まっていること自体が嫌だった。…君は、何が嫌だったんだろうね？けど、君は言ったんだ。『殺してくれ』って」
「…もしかして、罪悪感感じてる？」
窺う様に僕が陽一郎さんを見ると、陽一郎さんは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべていた。
そして憎々しげに吐き捨てる。
この人でも、そんな感情を抱く事があったんだと少し感心した。

「だって、君がそう望んでいようと望んでいまいと、例え異世界だとしても、僕のやったことは人殺しに過ぎない。君を殺して元の世界に還って来た僕はね、あまりの理不尽さに思わず死にたくなっちゃったよ。何故かって？…何でだと思う？誰一人として気にする者はいなかったって、さっき言ったよね。

それはね、プレイヤーが還って来たからこその結果論に過ぎない。還って来たからこそ、誰も気にしなかった。なら、還って来れなかった…例えば、死んでしまったとか。

そんなプレイヤーはどうなるのか？どうなったと思う？」

「…問題になってないって事は、誰も気にしてないってことじゃないの」

「半分正解、かな。気にしないか…確かにそうだね。したくても、出来ないんだよ。その人の記憶、存在そのものが消されているのだから。償いたくても、誰も覚えていないんだ…一部を除いてね」

陽一郎さんが頭を抱えて蹲る。

ガタガタと窓が揺れる。ふと、窓を見れば、雪が雨の様に激しく降り続いていた。

まるで、陽一郎さんの静かな激情を表すかのように。

## 第三十八話　ゲームに仕組まれた罠（後書き）

ツッコミ係とボケ要素がない『みけがさき』から早く抜け出したい一心で書いてます。ちょくちょく話が飛ぶかもしれませんが、後々書けたらいいかと思ってます。

此処まで読んで下さり、ありがとうございます！まだまだ続きます。

# 第三十九話　夢から覚めて

「…けどさ、陽一郎さんは僕を殺したんでしょ？仮に前の僕の能力が、『転生』だと仮定したとする。
普通は、三嘉ヶ崎じゃなくて、ミケガサキの住民として存在すると思うんだけど…。何にせよ、ゲームの中で死んじゃったんだし」
「…ゲームの中でさ、三嘉ヶ崎での顔見知りとかに会ったでしょう？例えば吉田さん。実際はゲーム上のコンピュータプレイヤーとなってるんだけどね。
結論から言ってしまえば、『リンク』してるんだよ。顔見知りのコンピュータプレイヤーは全員、過去にこのゲームに関わった事のある人物。一度遊んだことがあるとか、製作者とかね。一度関わってしまえば、『リンク』が発生する」

ゲームの話かと思いきや、パソコン用語まで入って来たな。
正直、理解　できるか自信ない。

「『リンク』って、どういう事？」
「穏やかじゃないけど、例えば、ゲーム上のコンピュータプレイヤーが死んだとしよう。
それが、『リンク』で繋がっているコンピュータプレイヤーだとすると、三嘉ヶ崎に生きる元と言うべきプレイヤーも死んでしまうんだ。その逆も然り。
例えば、吉田が不慮の事故にあったとする。すると、『リンク』で繋がっている向こうの吉田魔王様も何らかの形で事故に遭う。
しかし、元々ゲーム上で設定されたオリジナルプレイヤー…つまり、元々設定されていたコンピュータプレイヤーだけは『リンク』が発生しないというわけさ」

つまり、カインや教官はオリジナルプレイヤーという訳か。
じゃあ、ノワールはどうなんだろ。雪ちゃん　に似てるけど、『器』がどうこう言ってたし、あれが本当の姿じゃないから、オリジナルなのかな。

「それじゃあ、僕とか、ゲームに関わりある特殊プレイヤーはどうなの？
陽一郎さんが言う様に、僕が『転生』で第二の人生歩んでるんだったら、僕なんかは関わりあるんだから、ミケガサキにも僕そっくりのプレイヤーが居ると思うんだけど」
「うん。実際は居ると思うよ。確かにいるんだけど、君の場合何故か『リンク切れ』になってるんだよね。何かしたの？ゲーム側からして有意義な存在とされたのか、それとも、特殊能力によるものか…」

ゲーム側から有意義な存在か。…無縁だな。
寧ろ、国際指名手配犯という邪魔者以外の何者でもない。
…いや、『魔王』プレイヤーだか　ら良いのかな？けど、何だかんだで勇者紛いのことをしてるし…。

「そういや、陽一郎さん。どうやって、此処来たの？」
「ゲーム上のミケガサキも、このみけがさきも、僕らの居た三嘉ヶ崎を元にしたパラレルワールドみたいでしょ？ゲーム上のミケガサキだって、製作者が造ったものだし。だったら、此処も同じなんじゃないの？見た所、此処は、優真君とは限らず、皆のの望みを叶えた世界。誰かによってこの世界も造られたんだよ。三嘉ヶ崎を元にね。
僕の話は此処まで。それじゃあ、話を元に戻そうか。…ミケガサキがどういうものか分かった上で、君はまだ、行きたいと思う？」

「うん。戻りたいけどさ、陽一郎さん、どうやって此処に来たの？」

陽一郎さんは、曖昧な笑みを浮かべたまま無言。

話すつもりは無いらしい。

「僕は、君に謝りたかった。ただ、それだけだよ。

…進むと決めたなら、どうか後悔だけはしないでほしい」

陽一郎さんの姿が徐々に薄れていく。

彼自身もそれに気付き、いつもの様に微笑むと、小さく手を振った。

「…話のお礼に一つ、言っておく。

僕は、陽一郎さんの謝るべき相手じゃない。何故なら貴方が謝るべき相手は何処にもいないから。

だからこれは、貴方の自己満足でしかない」

陽一郎さんが、驚いた様に目を見張り、小さく口を開く。

「けど、だからこそ僕は、今の今まで生きれたんだ。償い相手じゃないけど、僕は貴方を赦すよ」

「そっか…。ありがとう、優真君。それで十分だ。

僕に出来る事はもうないだろうけど、頑張ってね。それじゃ、さようならだ。またね」

そう言うと、陽一郎さんの姿は跡形もなく消えた。

＊＊＊＊

まぁ、そんな訳で回想終わり。

そんなこんながあって、今に至るのです。

これから、僕が行うこと。それは、最低最悪、最終最後の手段だ。
この世界が三嘉ヶ崎を元にした、パラレルワールドの内の一つだとしよう。

分かりやすく例えるなら、縦一列に並ぶオセロを想像してほしい。
まぁ、何でも良いのだが。
端に黒駒を一つ。これを『田中優真』の存在する三嘉ヶ崎とし、他のパラレルワールドを全て白にしよう。

今、僕はその内の一つにいる。そうだな、一番最後列の方が分かりやすいから、最終尾としよう。
『田中優真』に戻るということは、駒をひっくり返して黒に変えるということ。当然、そんなことをすれば前に並ぶ…つまりは原点まで続く無数の白い駒も黒に変わってしまう。
自分勝手な、僕の意志によって。

そんなことは、ゲームをバグらせることと同じ。
つまり『禁忌』ってわけ。だから、どんなことが起きようと覚悟を決めておく必要がある。
大総統達が言いたかったのはこういう事だ。

ドアを開ける。家の中は真っ暗だった。

「ただいまーって、陽一さんまだなのか。じゃあ、ゲームでもやるか。折角居ないことだし。
あー、エアコンタイマー予約し忘れた。珍しー」

靴を乱暴に脱ぎ棄て、早足で廊下を抜ける。

嬉しくて涙が出そうだった。条件が揃っていても、何かしらの不祥事で還れないこともあった。
日付、季節、天気…一つでも欠ければ、また来年。だが、三年目で成功するのであればまだ良い方か。

テレビとゲームの電源を入れ、ゲーム機に一礼するとコントローラーを握り、指定席に座る。

「スイッチオン！」

床に魔方陣は浮かび上がらない。
代わりに、小さな溜息が聞こえてきた。

「…僕の覚悟、分かってくれた？」

誰も居ない暗闇に問いかける。
「…本当に、後悔しませんね？何があっても。…もし、仲間達が全員死んでいたらどうするんです？彼方が、還る意味はあるんですか」

フレディの声が聞こえてきた。
振り向けば、後ろに立っている。

「…大丈夫。覚悟できてる。全部、何があっても大丈夫だよ。だから、僕を…僕を、『ミケガサキ』に還して下さい」
「そうですか。では、大総統。よろしくお願いしますね。それでは、私は失礼します」

すっ…とフレディの姿が消える。
また、静寂が部屋を包んだ。

「大総統、ついでにもう一つ。頼み事していい？代償はちゃんと払うから」
『願いは何だ？』
何処からか声が聞こえて来る。幾重にも重なった重い声だ。
「『魔王』は、僕一人で良いと思うんだ」
『お前はその為に、何を犠牲にする？』
「三嘉ヶ崎での、『田中優真』の存在を代償に、僕はそれを望むよ。流石に、プレイヤーを送り込めないようにしろは無理だと思うから」
『それがどういうことか、分かっているんだな？』
小さく頷いた。
「だってさ…、このまま進んだら、僕のせいで人生滅茶苦茶にされた松下…いや、『田中優真』が報われないじゃないか…。僕はね、ずっと考えてた。もし、僕が最初からいなかったらどうなるんだろうって…。ずっとね、母が何で僕を邪険に扱うのかが分からなかった。今も、分からない。もし、僕がいなかったら母は…、松下由香子は幸せなのかなって。親孝行なんて今までしたこと無いから、最後くらいね。
…邪魔者は消えるべきだ」
大総統は何か言いたそうな雰囲気だったが、何も言わなかった。
たった一言。
『我らが王よ。彼方の望みを叶えましょう』
僕の足元が、黒く光る。
ふと思って、訊ねてみた。

「思ったんだけどさ、僕の死体って火葬されてないよね？」
『お前が死んで数秒経った時に還すから心配ないだろ』
大総統の声が遠くなる。
目を閉じる。どうか悪夢となりませんようにと、それだけを願って。
＊＊＊＊
「…っ、……い。…おいっ！」
血の匂い。生ぬるい風。蒸暑い気温。
あぁ、戻ってこれたのかな。久しぶり、『ミケガサキ』。
「うーん…、あぁ、皆。久しぶり？」
目を開ければ、皆が取り囲むようにして僕を見ていた。
その姿をみて、ノワールが僕に飛びつくと共に、泣き崩れる。
「全く、無茶しますね…」
『無事でなにより』
ノーイさんと、吉田魔王様が苦笑を浮かべて微笑んだ。
教官はカインの後ろで号泣している。
辺りを見渡せば、火の海。
ラグド兵の皆さまは茫然としているというか、驚愕しているというか。
「…ノワール、ちょっと良い？立ちたいんだけど…」

「ぜ、絶対駄目ですっ…！行かせませんっ！」

泣きながらも、ノワールは頑なに首を振る。
困った様に吉田魔王様に視線を向けると、困った様に視線をそらされた。

「大丈夫。ちゃんと、分かってるから。心配しなくて良いから。…ありがとう」

そっとノワールを退かす。
未だふらつく足で立ち上がると、ゆっくりと歩く。
そして、目を開けたまま血だまりに沈む母と寄り添う様にして横たわる兄の傍へ寄った。

「雪ちゃんと、決めていたんですね…復讐を。オズさん」

陽一郎さんそっくりなその人に、静かに問いかける。
後ろに居た兵士の内、一人は変装したオズさんだ。その片手には弾切れになった銃が握られていた。

もし弾が残っていたとするならば、この人はきっと死んでいたことだろう。

「恨みますか？」

オズさんは何処か投げやりに問いかけて来る。
僕は小さく首を振った。

「生きててくれて、何よりです」

その答えに、オズさんは驚いた様な顔をした。
そしてその場で泣き崩れる。きっと、向こうの陽一郎さんも母に殺意を抱いていたのかもしれない。
これもまた、自業自得の結果だ。いや、因果応報かな？

そう、全部分かっていた。
だから、今更『田中優真』の存在を消したところで松下由香子と兄の命は、救えない。
運命は既に決まってしまったのだ。

『田中優真』の存在を消したところで、駒は進んでしまっている。
こればかりはどうしようも出来ない。

『リンク』で定められた運命により、次期が来れば母と兄は必然的な『不慮の事故』で命を落とす。
いや、事故というより殺人か。…陽一郎さんに、なるのかな。犯人は。

カインが僕の肩に手を置いた。
ノワールも、心配そうに僕の傍に寄る。

「…泣きたいときは、泣いて良いんだぞ？」

進むと決めたなら、どうか後悔だけはしないでほしい。
そう言った陽一郎さんの言葉が頭の中に浮かぶ。

あの人は分かっていたから、そう言ったのか。僕には分からない。

「大丈夫。…分かってたんだ。だから、僕は…。これは、ただの『逃げ』だよ。自己満足の代償で、願いなんだ」

だから、泣く資格も、誰かを怨む資格もない。
これは、僕が招いた結果だ。

全部背負って生きる覚悟を、僕は決めたから。
全てを天秤にかけてでも、僕は此処へ還りたかった。

だから、後悔なんてしていない。

## 第三十九話　夢から覚めて（後書き）

ミケガサキにスピード送還を果たさせました。ええ、やりましたとも。
シリアスムードは変わらずです。
まだまだ続きます。お読み下さりありがとうございます。

# 第四十話　罪の清算

「勇者に剣で貫かれてなお、生きているとは…。魔王というよりは化物ですね、彼方…」
「お誉めの言葉として頂戴しておくよ」
引き攣った笑みを浮かべて、ミハエル何とかは言う。
そんなこと言われてもねー、そうだからしょうがないじゃんとは流石に言えない。
僕、そこまでＫＹじゃないから。…懐かしいね、この言葉。
「というか、化物より魔王の方が強くない？」
「知るか、そんな事。それより…どうするんだ、これから。まぁ、選択肢は一つだろうが」
カインが至って真面目な口調で言う。
どうやら突っ込んでいる暇はないようだ。
「…逃がしはしませんよ？我がラグド王国がこのミケガサキを滅ぼすまでは。
魔王を倒したとなれば、後々有利に立てますからね。どちらにせよ、こんなに倒壊してしまった国、建て直すのも不可能でしょう。唯一の権力ともいうべき女神と勇者はもういないんですから」
「勇者はどうかなぁー…。案外、これからバンバン来ちゃうかもよ？」
「減らず口を…」

ミハエルは腰に差してある剣を引き抜くと、僕に向ける。
あー、僕も剣の一つや二つ持つべきなのか？
そう思っていた僕の前に、皆が立ちふさがる。
うん、物凄く嬉しいんだけどさ。皆、そろそろ恥を知ろう？
「皆、お気持ちは大っ変嬉しい。だが、武器を変えて出直してくれ」
折れたパンとかパンとかパンとか真顔で構えながら目の前に立たないでほしい。
シュール過ぎて笑っちゃう。
「しょうがないだろ、武器がこれしかないんだから」
「はいはい。皆、疲れてるんだから、休んだ休んだ。僕の代わりに女神様達見といて」
「優真様の方が遥かに重症ですが？寧ろ休んで下さい！」
そうこう言っているうちに、剣を構えたミハエル何とかが突進してきた。
意外に早い。教官といい勝負だ。
手を差し出す。黒い霧が集まり、黒い本が現れる。
ノーイさんと吉田魔王様は何かを悟ったのか、カインとノワールを僕から離した。
「何をするか知りませんが、読む暇など与えませんよっ！」
ですよねー！けど、それは困るんです。…昔の僕ならね。
「本は読む為だけのものじゃないと証明してやるよっ！」

「…やけに強気だが、大丈夫なのか？」
『さぁ…』

カイン達が遠くからそんな事を呟く。
さりげなく酷いな、お前ら。少しは信用してくれても良いんじゃないの？

「戯言をっ…！」
剣が僕目掛けて近付いて来る。
こう言う時こそ、本を使うのだ。

ザクッ…といい音がして、剣が刺さる。
流石早さが凄いだけに、深く刺さったな。そう簡単には抜けなさそうだ。いやー、危ない危ない…。

「本に差した…だと？くっ、抜けん！」
「馬ー鹿、馬ー鹿！本の分厚さ舐めんなよ！こうしてやる、えいっ」

バキッと鈍い音が響き、剣が中心から折れた。
遠くからカイン達が溜息を吐く。

『低レベルな争いだな』
「…いつもの事だから良いんじゃないか？それより、『沈黙の書』が受けたダメージはお前も受けるんじゃなかったのか？」

「その点については、色々あって大丈夫になった。さて、ミハエル何とか。降参するなら今の内だよ」
「残念ですが、彼方は我が王国が何に秀でているかお忘れなご様子。思い知りなさいっ」

ミハエルは魔力を脚に集め地を蹴ると、僕から距離を取る。
そして『瞬間移動の陣』で、辛うじて僕の目に見える場所へ移動した。
その魔力に反応したのか、剣が光った。
うーん、何かヤバい感じ。

「…もしかして、爆発？」
「馬鹿っ、さっさと逃げろっ！」

君等もねーと言う暇なく派手な爆音がして、黒煙が辺りに立ち込める。

「…案外、あっけないですね。しかし、これで最終兵器を出す手間が省けた…」

ほぅ…とミハエルは息を吐く。
そして辺りを注意深く見渡す。だが、煙が邪魔で見えそうもない。
果たしてこれは煙なのか？
そう、煙というよりは余りにも濃い。日の光さえ遮断しているかのようだ。

訓練で特化された五感で、暗闇でも目が効くはずだ。なのに何故見えない？
焦りを覚え、ミハエルは陣を形成する。しかし、何の反応もない。

「危ないな、もう少しで皆も巻き込まれちゃうところだったじゃないか」

暗闇から声が聞こえてきた。
ミハエルは自嘲を浮かべる。魔王ともあろう者が、あんな猫騙し染みた玩具で死ぬはずがないと。

「空間固定ですか…。成程、流石ですね」
「今度こそ、お誉めの言葉として頂戴しておくよ。
闇討ちは趣味じゃないけど、これ以上危険に晒されるのは困る。皆の為にも、僕の為にも、ね…。
それじゃあ、さよなら」

何の感情も含まれていない声色。
詠唱が暗闇に響く。

それが止んだ時。
身体のありとあらゆる感覚が遮断された。

『…何処が闇討ちなんだ?』

笑いを含んだ楽しそうな声色が聞こえて来る。幾重にも重なった深く暗い声。

「いやー、流石にさ、空間ごと君を潰しますとは言えないじゃない。だから闇討ちってことで。知らない方が良い事って、世の中にはたくさんあるよ?…さっきから楽しそうだね、大総統」

ずっと笑い声の様な空間の震えが伝わって来る。
何処からか生温かい風が吹き、長くなった髪を揺らす。

何故か書の力を使うと伸びるんだよね、髪が。その方が悪っぽいからかな。まぁ、背が伸びてるから文句は無いけど。

そして手に持っていた本を閉じる。
パタンッ…と小さな音が一つ。それが合図の様に、元の場所へと戻った。
どうやら僕の姿も元に戻っているようだ。せめて身長だけはそのままにしてほしかったな。

「馬鹿っ、さっさと逃げろ…って、何とも無いな？ナルシスも見当たらないし、何処行ったんだ？」
「まぁ、居なくなったらそれはそれで良いじゃん。一件落着っと…」

流石に、空間の中に閉じ込めて潰しちゃったとは言えないし。

指先から炎を出し、書を燃やす。
パキバキと燃えているが、灰は出ない。

『燃やして良いのか？』
「それが約束だから、叶えてあげなくちゃ。それが条件だ」

完全に炎に呑まれた書を、自身の影に落とす。
それは地面に当たることなく、影にゆっくりと吸収されて行った。

「…さてと、どう立て直してみる？」
「この状況の事か？それとも、国？…あるいは両方？」

やや面倒な調子でカインが返す。
辺りには上司（？）を失って尚闘志を燃やすラグドの皆々様。いや、上司失ったんだから当たり前か。

「けど、正直面倒」

「答えになってませんよ」

ノーイさんが近付いて来て隣に並ぶ。吉田魔王様もオズさんもノワールも教官も笑みとか、泣き顔とか、色々な表情を浮かべて側に立っていた。

「そこで、一つ。提案が」

「最初からそれを言いたかったんなら、さっさとしろ。ほら、ハチの巣にされるぞ?」

銃やら何やらを構えたラグド兵が狼の様な鋭い目つきで睨んでいる。今にも撃ちそうだなとかそんな事を考えながら、言った。

「『魔人大戦争』でなんとかなるかな?」

皆さま、覚えていらっしゃるでしょうか。
いつかのあの、無茶苦茶な一活召喚です。

『成程。…止められる自信は?』

「それは、この争いのこと?それとも魔人大戦争?」

吉田魔王様の問いに恍ける僕だったが、ノーイさんが真顔で答えた。

「両方に決まっています」

「…何でも良いが、早くやった方が良さそうだ。今にも撃ちそうだぞ」

「はーい。それじゃあ、出来るだけ離れた方が良いかもって…無理だね。まぁ、大丈夫でしょ。人数は減らしておこう」

静かに目を閉じる。
それだけで何か視えない力が働きかけるのが分かる。

「我、ファウストの王。暗黒の使者、破壊の限りを尽くす者。美しき貴女、我が盟約の友よ、我が声に答えよ…」
「詠唱ということは、この前の比じゃないと思うが…本当に大丈夫なのか？」

巨大な魔方陣が足元を中心に形成される。
黒く光ったかと思うと、黒い光の柱が空を裂く。
辺りは暗闇に包まれ、兵士達は戸惑いの表情を浮かべて辺りを見ていた。

「これは……。違う」
「何が違うんだ？召喚に失敗したのか？」

僕は暗闇に包まれた空を仰ぐ。カイン達もつられて上を見た。

「確かに召喚したけど、これは僕が召喚した相手じゃないよ。どういう事だ…？」
『この感じ…魔力魂の魔力と似ている…。人の魔力と生命の混じった歪な魔力…。まさか思うが、魔力魂が独自の意思を持ったのか？』
「ちょっと待て、何でそうなるんだ？訳が分からない」

戸惑いの表情を浮かべるカインに、ノワールが説明した。
「『魔力魂』というのは、前にも行ったかも知れませんが、人の生命と魔力を結晶化した代物です。
そして、女神はそれを悪用し、多くの人を犠牲に魔力魂を造りました。
ある特定の場所で多くの生命が失われれば、当然その場所に、人の残す感情によって膨大な力が生みだされるんです。一時的なものですが…。『魔力魂』は言わば人の想い…魂の結晶。

私達は人の生命を犠牲にしたくはないので流出を拒んだのです。一人につき一つ。中には結晶にならないでそのまま命を落す者もいました。

女神の場合、複数に一つを造っていた様です。複数の意思が統合し、もしこの場に溜まる犠牲になった人々の想いに反応し、共鳴したのならば…。意思を持つまでになっても不思議じゃありません。元は、意思がある唯の、人間だったんですから…」

空が裂ける音。その間から甲高い悲鳴が聞こえてきた。
赤い光が稲妻の様に轟く。

その裂け目から真っ赤な目が覗く。
ぎょろぎょろと蠢き、僕等に視線を固定する。

ギャァァァァァァァァーーーーーーーー…！！！！

地を震わす悲痛な叫び声。
あまりの声量と悲痛さに、ノワールや教官が耳を塞ぐ。

「…何と言うか、ラグドの兵を追いかえせそうな雰囲気だけどさ、こっちにも火の粉が飛んできそうだね？」
「明らか、巻き込まれるだろうな。何が起こるか知らないが…」

呑気に呟く僕に、カインが真剣に返す。
一方、吉田魔王様とノーイさん達は沈んだ表情でうつむいている。

『これが、私達のしたことへの代償なのかもしれないな…』
ぽつりとそんな事を呟く。

勇者でない唯の男。素質が無い為に、命を落とし、その息子が我々とはまた違う方法を用いて混沌を世界に生んだ。

もし、ヘブライ達の言う混沌が『魔力魂』で、その息子というのが吉田魔王様なら色々と辻褄が合うな。

なら、素質が無い為命を落としたのは吉田さんのお父さんということか。

三嘉ヶ崎の吉田さんはどうだったんだろう？…確かめる術はもう無いけど。

「だったらさ、清算すれば良い。赦されない罪なんて多分、無いよ。僕はそう信じてる。

…流石に僕一人じゃ、これはキツそうだ。皆、手伝って」

「「当たり前だ」」

教官とカインが声を揃えて言い、僕の前に立つ。

ノワールも静かに隣に寄り添い、オズさんもさり気なく側に寄ってくれた。ノーイさんは呆れたように僕を見ているが、その顔には笑みが浮かんでいる。吉田魔王様は暫く呆気に取られていたが、観念した様に首をすくめて笑う。

「あははは っ、皆で戦えばお化けなんて怖くないっ！」

「…要するに、怖い訳だな？」

「……正直、夢に出て来そうなほど怖いんだけど」

## 第四十話　罪の清算（後書き）

そろそろ『新資源騒動編』も終盤でございます。
長くなりましたが、お読み下さりありがとうございます。
全体的な話はまだまだ続きます。

# 第四十一話　魔力魂の意志

地鳴りが響いて、辺りが一瞬だけ黒一色なる。
皆、無言で寄り添う様に一か所に集まった。

何処からか肌を刺す様な冷たい風が吹き抜け、赤い稲妻が轟き、空の裂け目から鮮やかで不気味な赤い一つ目が覗く。辺りが暗いだけに、それはより一層不気味に見えた。

『空間固定か…？いや、まだ廃墟だな』
「恐らく、ミケガサキ全体の空間を囲もうとしているから時間がかかってるんだと思いますわ。
けど、相手は魔力の塊…。そうは掛からないでしょう…」

吉田魔王様が辺りを見回し、ノワールは空の裂け目から覗く『魔力魂の意志』を見つめた。
そして、祈る様に胸に手を当てて、目を閉じる。

「何と言うか、普通の攻撃は届きそうにないな？」
「あー…、未練というか祟られない？倒しても大丈夫なの？嫌だよー…」
「真面目に考えて下さいっ！どうするつもりです？明らかに物理攻撃は無理でしょうね…」
「…それについては、時間が経てば可能なんじゃない…？ほら、ゆっくりだけど迫って来てる」

ズズズッ…と微睡から覚める様に、ゆっくり『魔力魂の意志』は地に近付いている。

時に胸が張り裂けそうな悲鳴を上げながら。

「総員、攻撃ッーー！！」

野太い声が響き、紫色の光の弾が空の裂け目目掛けて飛んで行った。
ラグドの兵も流石に身の危険を感じたのだろう。『魔力魂の意志』を攻撃して行く。

『ギャァァァァァァァッツーーーーーー！！！！』

耳を劈く悲鳴が響き、赤い目玉がぎょろぎょろと右往左往に動く。
その悲鳴に呼応し、赤い雷が轟いたかと思うと、複数の雷がこちらに向かって落ちた。

「…来るぞっ！」

教官が叫び、歯がゆそうに空を見上げる。

「さてさて、防げるかな…？」

僕は溜息を吐くと、指を鳴らす。
目玉に負けないくらいの巨大な黒い陣が二重に展開され、そこに雷が落ちる。
しかし、全て防げる訳じゃない。ラグド兵の方に落ちた雷までは防げず、悲鳴が聞こえてきた。
そして、蛍火の様に小さく儚い光が空の裂け目に向かって上がっていく。

「……っ！あれに当たったら魔力魂に成る訳ね…。しょうがない、まだいる奴は助けてやるか…」

「おぉっ！たまにはやるな」

「感心してる暇あったら、何とかしてよ…結構、疲れるんだから…

せーのっ！」

ぐぐっと陣が大きくなり、一瞬凹んだ。そして膨れ上がる。その衝撃で雷は、四方八方に散った。

「うへー…疲れた。吉田魔王様、何か策無い？出来れば穏便なの」

『どちらにせよ、このままじゃ空間を固定されて死ぬ。一端、倒すのは諦め、アレを押し込むことに専念した方が良いだろうな。ノーイ、行けるか？』

「えぇ。この場合、仕方がありません」

吉田魔王様がノーイさんを見て、仕方なさそうにノーイさんは頷く。

「…つまり、あれを何とかして裂け目の中に押し込んで、その中で倒すってこと？別に良いけどさ、雷被害で大変な目に遭うんじゃない？僕らも、ラグドの奴らも…。無理じゃね？」

『死ぬか結晶となるかの選択しかなくなるが？』

「どちらにせよ、同じ事じゃな～い？うふふっ、我が主。お久しぶり。遅れちゃってごめんね～？

女の声が響いたかと思うと、蝙蝠の大群が僕の影から飛び出してきた。

そしてぐいっと後ろに引き寄せられる。

「わわっ。その声…、ヴァルベル？」

「うふふっ、正～解。お呼び出し、光栄でございま～す。それにしても、丁度良い大きさね、主様は。

大人主様も凛々しくて素敵だけど、覚醒前の主様も可愛いわ」

ぎゅうーと抱きしめて来るヴァルベルからどう逃げようかと視線を彷徨わせる。
気のせいかな？女子から殺気を感じるんだ。

血の通っていない様な白い蒼白の肌。長い白銀の髪を後ろで束ね、奇抜とも言えるメイクをしたこの女性こそ、ヘブライ達の主。気高き吸血鬼の女王…いや、お嬢様。ヴァルベル・バルデン。
闇の女王と呼ばれ、大総統の十三の側近の一人でもある。

『…他に策があると？』
吉田魔王様が困惑と疑問を混ぜた挑発的な口調でヴァルベルに問う。
ヴァルベルは妖艶とも言える大人びた笑みを浮かべ、微笑んだ。

「我が主と、『死の夜』がアレを何とかすれば良い。意志の疎通なら今なら可能でしょうし。
残りは…そうねぇ…。脱出の準備でもしてれば丁度良いんじゃない？そこの人は、さっきから色々と下準備してくれてるし」

ヴァルベルはオズさんをちらりと見た。
オズさんが何かを言う前に、ノーイさんがヴァルベルに普段は見せない様な剣幕で詰め寄った。

喧嘩かな？何でも良いけど、僕を解放してからやってくれ。

「お前が、姫様の何を知っていると言うのですっ！？」
「あら、逆に彼方が何を知っているというの？元々、『魔力魂』になれなかった残りカスが集まったのが、『死の夜』なんだから。あれにとっては、成功して結晶になってしまった事よりね、失敗した奴らが集まり一つの意志となって生きている事が許せないのよ。自分達はあんなに醜い姿にされ、人の願望の為だけに利用されると言

うのに…」

ヴァルベルの言う事に、ノーイさんは目を伏せる。
そんなノーイさんに、ノワールは静かに近寄ると抱きついた。

「ノーイ…、私は大丈夫よ。心配してくれて有り難う。優真様…。お供、お願いできますか？」
「勿論、僕で良ければ何なりと」
「…私は、乗せませんからね。絶対…」

静かに呟くノーイさんに、吉田魔王様は、半ば困った様な、最初から分かっていた様な曖昧な表情を浮かべてみていた。

「優真、俺達はどうすれば…？」
「荷物ってほどじゃないけど、ちょっと色々と困るかも。だから、ラグドの奴の面倒見といて。
売れる時に恩は売っておかなくちゃ。一端は退いてくれると思うよ。
空間固定って、結構脱出するの難しいから、吉田魔王様はオズさんのサポートに。教官はカインと同じくラグドに一喝入れてあげて」

教官は頷くと、カインを片手で掴みあげそのまま引きづって行く。
吉田魔王様達は僕を見るだけで動こうとしなかった。不満というよりかは、僕の次なる行動を待っているようだ。

「『召喚』」

魔眼を発動させ、召喚の陣を形成させる。
白い光が辺りを包み、勢いよく何かが飛び出て来た。

「二アッ！」

「久しぶりだね、猫モドキ。お前…、あの時はよくも逃げたな？ははは。見ないうちにでかくなったなぁ！強そうだ！」
「優真様、でかいの域を超えてますわ…。しかも、一目見て強いって断定できます…」

ズシンッ…と猫モドキは地に降り立つと嬉しそうに僕を見る。
真っ白でふかふかだった毛は、純白の堅そうな鱗へと。赤と黄の目は、漫画とかで見る竜以上に迫力があった。額の角はカジキの様に長く伸び、先端が槍の様に尖っている。背中の羽根は透明度が増し、養成の羽根の様だが、触ってみると甲羅の様に堅い。その姿は猫というよりは、正真正銘の竜そのものだ。
そして竜より神々しく、日の光の様な輝きを放っていた。プラチニオンと呼ばれるのも、頷ける。

「一つ言いたいのですが、プラチニオンの角と、カジキの角で比較してしまうとロマンがありませんわ…」
「いやー、他に言い例えが見つからなかったから…。ごめん。早速で悪いけど、猫モドキ。あそこまで乗せてくれる？」
「二アッ」
「ありがとう、助かるよ。僕は猫モドキに乗るから、ノワールはノーイさんに乗せてもらって」
「なっ、何を勝手な事をっ…」

怒気と困惑が混じった声色でノーイさんはそっぽを向く。
うわー、大人が拗ねるのって面倒だ。

「別に、ヴァルベルは一言もノワールに死ねとは言ってないよ。意志の疎通が出来るなら、もしかしたら…っていうことを言っただけ。嫌なら置いていく。ただ、僕一人じゃ何かあった時ノワールを守れないからね？」

呟くように言って、僕は猫モドキの背中に乗る。ノーイさんは弾かれたように顔を上げた。
それにしても竜の背中か…。うん、堅いな。座布団敷きたい。というか、僕は何処に捕まれば良いのかな。急降下とか、急上昇したら確実に落ちるよ？

「我が主。私が支えてるから大丈夫よ～？」
「助かるよ、ヴァルベル。結果がどうであれ、やるしかないんだろう？大丈夫なの？」
「その為に私が遅れて来る破目になったのよ～。サポートはするけど、どうなるかは分からないわね」

僕等は空を仰ぐ。
赤い目は確実に迫って来ていた。
圧倒的な魔力のせいで、思う様に身体が動かない。

キュォォォーーン……。

笛の様な透き通った声。
見れば、猫モドキともう一人。真っ黒な竜が鳴いている。
その背にはノワールが乗っていた。

「ま、まさか…ノーイさん？カッコいいーー！何あれ！あの人、竜だったの？ねぇ、吉田魔王様」
『ノーイはプラチニオンの亜種だ。本人は嫌っていつも人の姿でいたが。ほら、さっさと行きなさい』

吉田魔王様が苦笑を浮かべる。不意に、三嘉ヶ崎の吉田さんと陽一郎さんの残像が見えた気がした。

…寝不足かな？

「…行ってきます」

その声と同時に、猫モドキが羽根を広げ空へ飛び立つ。
直ぐに上空へと上がり、隣にノーイさんが並んだ。

「…何、泣いてるんですか？」
「優真様、どうかしましたか…？」
「い、いや…何でもないよ。あはは、変だね。僕…。うん、大丈夫…。大丈夫だ」

涙を拭う。後ろでヴァルベルが痛みと悲しみの混じった優しい目で見ている。
静かに抱き寄せてくれた。

「生きて帰りますよ、必ず。…皆が待ってます」
「そうだね。それじゃあ、第一関門突破と行こうか」
「二アッ」

空の裂け目へと僕等は全速力で向かっていった。
赤い雷が大蛇の様にうねりを上げて僕等を迎える。

「…という事で此処からは別行動という事で」
「ちょっ…、お供の意味、分かってるんですか！？」
「困った時はいつでも呼んでくれ。独自の判断でピンチっぽい時だけ駆け付けるから」

そう言うと、分厚い雲の中へと身を眩ます。
ノーイは溜息を吐いた。

「相変わらず、勝手な男ですね…」

「ふふふっ…。その方が優真様らしいわ。さて、行きましょう。『魔力魂の意志』の元へ。

それが終わったら、皆で優真様の為に大説教会でも開きましょう」

うふふふ…と腹黒い笑みを浮かべるノワールに、ノーイは少しだけ優真を哀れんだ。

# 第四十二話　真の標的

「いやー、急に大人に戻ったから驚いた…。せめて予告が欲しいよね」
「にしても、我が主。いつ、書の力をお使いに？書の眷属を召喚したところで、その姿には戻らないでしょう？」
長い黒髪を風が揺らす。
ヴァルベルが気を利かせて後ろで一つ結びにしてくれた。
「話すにしても、あの雷は邪魔でしょ？それに素直に行って『魔力魂の意志』が攻撃してこないとは限らないし。だから、少しだけ話し合いの場を作ってあげただけ。猫モドキ、僕が合図したら『魔力魂の意志』の元まで運んでくれ」
少し低くなった声に、猫モドキは困惑しながらも一鳴きした。
少しもたれかかるようにして座る。その背をヴァルベルが支えてくれた。
既に額には弾の様な汗が浮かんでいた。ヴァルベルはそっと手を当てる。母親を見つけた時の様な安心しきった笑みを浮かべて、僕は目を閉じる。
「けど、変装とか正体がバレなかった主人公はいないからな～。きっと早々にバレるよね」
「要するに、それが心配なんですね」
「期待と心配…半分半分かな？」
＊＊＊＊

「…にしても、雷が落ちて来ませんわね？向こうの意志によるものかしら？
いえ、違うみたいね。攻撃したいのに出来ない様だわ。一体、何故…」

ノワールは『魔力魂の意志』を見て言う。
『魔力魂の意志』は一つしかない大きな目を色んな所へ動かしていた。どうやら困惑している様だ。

「姫様には見えていないでしょうが…、恐ろしく巨大な魔力が『魔力魂の意志』そのものの動きを抑え、辺りの雷は『時間停止の陣』でせき止めているようです。証拠に、『魔力魂の意志』が全く落ちて来ないでしょう？」
「けど、そんな膨大な魔力をこれ程までに完璧に隠せるなんて…」

困惑したようにノワールが言い、ノーイは溜息を吐く。

「まさに、『火事場の馬鹿力』この事ですね…。もう、人の域を越してます。我々竜でさえ、不可能ではありませんが、若輩者には無理です。是非とも大説教会を開くべきですね。賛同します。
何にせよ、急ぎましょう。これはリスクが大き過ぎる…」
「魔力の消耗が激しいから命に関わるのですか？」
「いえ、根本的に雷を止めている陣の力と『魔力魂の意志』を抑える力…どちらかが無くなった時点で、意志の傍にいる我々より、攻撃を邪魔したアレの方が目障りとされるでしょうね。即魔力魂の仲間入りとなりますよ。全く…、変なプレッシャーの掛け方をする。
…嫌な奴ですね、恐らく友人は少ないでしょうね」
「時間内に説得できないのなら諦めて戻ってこいと言うことですか…。とにかく急ぎましょう」

ノーイが黒い翼を大きく羽ばたかせ、一気に『魔力魂の意志』の元へと詰め寄った。
ノワールは立ち上がって、手を伸ばす。

バチンッ…と大きな音がして、手が弾かれた。
それが『魔力魂の意志』によるものなのか、意志の動きを抑える為の魔力による妨害なのかは分からない。ただ、『魔力魂の意志』は零れそうなくらい大きな目をさらに見開いて、ノワールを見た。
その目にはしっかりとノワールが映っている。

次の瞬間、ドプンッ…と手が沼に嵌ったかのように『魔力魂の意志』の元へ呑みこまれて行く。

「わっ…」
「姫様っ！！」

抵抗も虚しく徐々に呑みこまれて行き、ノワールの身体はノーイの背から少しずつ浮いていた。
ノーイは成す術なく見ていたが、ふと思い出したように辺りを見渡す。
空気を大きく吸い込むと、あの馬鹿を呼ぼうとした。

「待って、ノーイ…。大丈夫、何もされてないわ…。こうしていると、『魔力魂の意志』のね、想いが伝わって来るの…。そう、寂しかったのね。気付いてもらえないのが、苦しかったのね…」

ノワールの漆黒の瞳は何処か虚ろで、寝ぼけた様な口調だ。どう考えてもおかしい。
そう思っているうちに、呑みこむ力が強まりノワールの身体が完全

に『魔力魂の意志』の元へと吸収された。

「あら、一歩遅かったかしら…。困ったわね～、これからどう来るか…」

「…タイムリミットは後、どれ位です？」

「無茶な事言わないで。我が主だって、無限の魔力を持っている訳じゃないわ。もう限界よ」

少し苛立ったようにヴァルベルがノーイを見た。ノーイも負けじと見つめ返す。

「あと、五分」

目の前に、困った様に笑う青年が一人。

長い黒髪を後ろで束ね、赤い目が不気味に光っている。

「あと、五分だけ。待ってあげる。後はもう、待てない。いや、待たない。

皆の元に帰るんでしょ？なら、出来るよね。ほら、行った行った。

ヴァルベルもお供お願い」

いつもと変わらぬ笑みを浮かべて優真は言った。

仕方なさそうにヴァルベルがノーイの隣に浮かぶ。優真はそれを確認すると、片腕を前へ突き出すと横に広げた。

不意に突風が吹き、目を閉じる。

空気が一瞬にして変わった。暗く、重く、呼吸が苦しくなる。

「ちょっとぉ～しっかりしなさいよ。時間が限られてるのよ？助けたくないの～？」

「煩いっ！…何処です？此処は」

目を開けると、人の姿になっていた。
目の前には巨大な心臓の様な魔力の塊がドクンッドクンッ…と鼓動をしている。
その魔力の塊の中に、ノワールが膝を抱えて眠っている。

「『魔力魂の意志』の中心核かしら。分かりやすく言うならコンピューターのメインコントロール室ってところね。要するに心臓で、要」
「一つ、聞きたい事がある。さっきのは、やはり…」
「えぇ。彼方たちのよく知る人よ？同時に書を統べる王。我が主」
「無理に契約させたのか？卑劣な…」

吐き捨てる様にノーイが言うと、ヴァルベルは呆れたように溜息を吐く。

「あら、人聞きが悪いわね。今回は違うわ、唯の契約じゃない。お互い望んだ事よ。…まぁ、良いわ。さっさと何とかしなさいよ。早くしないと完全に同化して『魔力魂の意志』の一部よ～？触れると問答無用で『魔力魂』に成るからね～」
「…成りません」

少し強張った声色でノーイは言って、『魔力魂の意志』の傍に近寄った。
ヴァルベルは驚いたように目を見張っていたが、目を細めると小悪魔的な微笑みを浮かべ手を振る。

「あっそ。頑張ってねぇ～？」

ノーイは、そっと鼓動を繰り返す魔力の塊に触れる。

そして静かに目を閉じた。

＊＊＊＊

「フレディ、ちょっと下に降りて皆に『魔力魂の意志』に向けての攻撃準備お願いして来て。
猫モドキは、危ないから皆の所に戻ってて」

猫モドキの背の上で棒の様に突っ立っている僕は、傍らでふよふよと浮いているフレディに頼む。
フレディは少し意外そうな表情を浮かべて言った。
ふらつきながらも空中に魔力を固め足場を作ると、そこに立つ。

「…そんなことしたら、当たりますよ？」
「それも仕方ないよ。どちらにせよ、無傷では帰れなさそうだし。
紫の光が空を覆ったら、それが合図だと思って。猫モドキも、お疲れ。無理してその姿で頑張ってくれたんだ。帰ったら鮭の燻製たくさんあげるよ」
「二ア…」

ぽんっ…と白い煙が猫モドキを包み、元の姿へと戻った。
それを抱きかかえると、フレディに持たせる。
直ぐ上では赤い光が点滅を繰り返していた。

『時間停止の陣』もそろそろ限界の様だ。さて、どちらが早いかな？

何時の間にかフレディは消えている。どうやら伝言を伝えに行ってくれた様だ。

「一人になるとさ、中々迫力あるよね。この目。…何で僕ガン見な

のかな?他の所見ようよ?瞬きしようよ…?ドライアイになっちゃうよ…?

……せめて、叫んでも良いから何かしらの反応が欲しいんだけど…。

…結論から言うと、怖いんだよー。一人にしないでー」

『…彼方も、独り?』

誰かの声が聞こえた。直ぐ、後ろから。

正確には斜め上かな。

さて、どうしたものか。

大総統からの指示を仰ぎたいけど、何も言って来ないし。

『私と一緒…』

くすくすと可愛らしい笑い声が耳元で囁かれる。

困ったな。動けない。

ひやりと、後ろから伸びた手が頬に触れた。

背筋が凍る。

『お友達、捕まーえた』

うん。キャッチアンドリリースの良心に基づいて放そうか。

頭上では、一つの大きな目が三日月に歪み、笑みを浮かべていた。

# 第四十三話　動き出した時間と、失われた機会

「君が、『魔力魂の意志』そのものか…。まさか、会いに来てくれるとは思わなかったな」

じんわり…と頬が熱を帯びる。
程無くして、温かな液体が頬を伝い服に染み込んだ。

『皆、アレが私だと思ってるから困っちゃった。どう、可愛いでしょ？皆ね、どうしても復讐したいって言うから『器』をあげたの』
「あれが、『器』ね…。悪趣味だ。それとも芸術センスの問題なのか？…生憎、僕は素人なんで理解出来そうにない」

くすくすと『魔力魂の意志』は笑う。
だが、がっちりと頬を二つの手で挟まれているので振り返れそうになかった。

「にしても、今更現れるなんて。さっきまではあの『器』に居ただろう？」
『だって、あそこに居たら食べられちゃうわ。だから、抜け出して来ちゃった。だから、あれを食べたいならどうぞ？』
「僕に言われてもなぁ。…で、何の用なんだ？単に食われる心配をして出てきた訳じゃないだろう？」

薄く微笑むのが分かった。
頬に触れていた手は、抱きつくように前に組まれる。
案の定、背中に吐息の様な熱を感じた。

『私達、似た者同士だと思わない？誰からも愛されず、またそうしてもらう事に畏怖し、自らの殻に籠り、心を閉ざす…そうして何もかもを忘れ、忘却の日々を過ごしては嘆き悲しみ、自らを傷つける』
「……否定はしない」

溜息に似た吐息を吐きだす。
空を仰ぐ。まだ目立った動きはない。

『だから、お友達に成りましょう？』
「…僕は既に『沈黙の書』の主とお友達なんだ。むやみに友達を作るなとの内気な命令が下ってる」
『別に良いでしょ？彼が友達を作りたがらないのは『器』を壊さない様為の配慮。彼方が私を認めるなら、私達はお友達に成れる。書は燃やされ、代わりに彼方が彼等の『器』になった。それが、彼の『沈黙の書』を統べる古き知恵の悪魔の唯一の願い。彼方は、もう人ではない。朽ちて死ぬことも、美しく散り果てる最後も無縁となってしまった。彼方は本当に独りぼっち。それは私も同じ。けど、どちらもそれを代償に出来る覚悟と願いがあった。…ね？だから私達は同じ。だから、お友達になれる』

「もし、断ると行ったら…？」
『私が彼方を食べちゃう』

声がワントーン低くなる。
…あぁ、本気だ。諦めに似た感情が溜息となり吐き出される。
我が儘な妹をもった兄の気持ちってこういうものなのかな？…違う？

「…けど、安心した。君は友が欲しい、手に入らなければ食う。僕は仲間が側に居てくれれば十分だ。…今はね。だから今僕がすべき事は、あの魔力の塊を食らうのみ。

…本当は君だったんだけどね。お互い、食う事を目的としてるんだ。協力し合うのが得策だと思わない？」

『どうしてそう思うの？』

きゅっと回された手に力が篭る。まるで蛇に締められいる様だ。だが声色からして楽しむかのような、からかうような意地悪な口調である。

「君は先程あそこにいた。なのに今は、こうして僕の隣にいる。食われるのが怖くて、逃げ出すような性格じゃないだろう、君は。口ぶりからして、真っ向から挑むタイプだな。何故、そうならないか？答えは君が言ってる。『独り』だと。君は『魔力魂の意志』。ある感情が集まって、固まって、生まれた感情の集合体。もし、あれが母胎とするなら、君はつい先程生まれ落ち、目覚めたわけだ。しかし、どれ程の力を持とうと巨大な感情が渦巻く塊の中に唯一確定した意志を持つ異端児でしかない。だから追い出された。…違うかい？」

『うふふっ、正解。例え、どれ程巨大な力を持つ者が居ようと、多数の人の前では、いづれ力尽きる。…そんなの、私は嫌。折角手に入れた自分だけのものなのよ。取り上げ、抑え付けるなんて許さない。そんな時、貴方が道を作ってくれた。だから私は抜け出したのよ。私は『魔力魂の意志』。それは間違いじゃない』

「なら、一瞬で良い。内部の動きを止められる？」

くすりっと可愛らしい笑みが聞こえた。

『良いわ。けど、そうしたら確実に殺されるわよ、あなた。頭良いのね。探偵みたいだったわ。演技なんて必要無いと思うけど

？』

拘束が解かれる。
頬に触れると、どろりとした生温い液体が付着した。シャツを見ると黒い染みが出来ている。

溜息を吐く。

「…生きやすい。
人間はね、自分より下位の者には警戒しないんだ。…ほら、よろしくの握手。友達になるんだろ？」
『…えっ？』

懺悔の様にぼそりと言う。
何故、彼女にそんな事を打ち明ける気になったのかはよく分からない。似た者同士だからか？

振り返り、手を差し出す。後には真っ白な少女がほうけた顔で立っている。
ノワールとは対照的な真っ白な少女だ。
髪は短く、くせっ毛なのか所々跳ねている。女の子と言うよりは中性的な顔立ちだ。
まさしく、教会とか、絵画で見る天使そのものだった。
僕が意地悪な笑みを浮かべると、彼女は現実に引き戻されたのように目をしばたかせる。そして微笑んだ。天使の様な清らかでまばゆい笑顔だった。

ぐいっと差し出した腕を引っ張られる。
元々疲労により言うことの聞かない身体は、あっけなく前へ倒れた。
受け止める様にして抱き抱えられる。

そのまま、見つめ合う。
奇妙な時間だ。
その時だけは疲れと無縁でいられた。

頬に両手が添えられ、動けない様にしっかりと挟まれる。
彼女の顔が近付いてきて、唇が重なり合う。

うーん、似たような事が昔にもあったような…？

僅かな痛みを感じ、眉を潜める。
唇が離れ、僕は手の甲で唇を拭う。
どうやら唇の端を噛み切られたらしい。血が滲んでいた。

しかし彼女は悪びれもせずに笑う。
相変わらず、無垢な笑みを浮かべて。

『よろしくね、優真？』
「あぁ、よろしく。ソルト。けど、君は『魔力魂の意志』と呼ぶにはあまりにもちっぽけな存在だ。
だから違うよ」

苦笑しつつも、唇を舐めてみる。

新たな契約は、血の味がした。

＊＊＊＊

一方、魔力魂内部。

「ずっとああだけど、大丈夫なのかしらね？まっ、私には関係ないけど～」

赤い魔力の塊の中に居る少女を抱きかかえる様にして固まったままのノーイをぼんやりと見つめていた。
ふと、真っ暗な空を仰ぐ。そして溜息を吐いた。

「相変わらず、女の子に弱いみたいね～？あーあ…、帰ったら大総統をどう宥めようかしら～？
早々に契約しちゃって…。怒られるわよ～、我が主？彼方の人気は物凄いんだから～。カリスマなのよね。闇のカリスマ。昔から噂とかで聞いていたからどんな子かしらって思ってたけど、人っぽくない人間ってもう…ドストライクなのよ～！！あら…？」

鼓動が止まる。
死んだの？いや、そんなはずはない。それなら動きを止めただけかしら？長くは持たないわね。

辺りは静まり返り、何だか気味が悪かった。
『死の夜』を抱きかかえたままのノーイを引っ張り出す。

『死の夜』を抱きかかえたままのノーイは、やっと意識が戻って来たらしく、辺りを見回した。
突如、『魔力魂の塊』の要である心臓の鼓動が早まった。

「うぅ…。おや？一体、どうなっているんですか？」
「説明する時間はくれないみたいだから、さっさと逃げるわよ」

パキンっと指を鳴らすと、空間が歪み、ブラックホールの様な穴が出来る。

何処からか蝙蝠の大群が飛び交い、穴に入っていく。
すると、一気に穴が広がり、黒い扉が現れた。ギィィィ…という錆びた音を出しながら扉は開く。

「出るわよっ」

腕を掴まれ、引っ張られる。
複数の意志がこちらを睨んでいる。そいつは、自分の真後ろに居て、未練がましく自分を見ている。
きっと錯覚ではない。

扉が閉まる、ほんの一瞬だけ。
ノーイは、今し方自分達の居た場所を振り返る。

沢山の目がこちらを見ていた。血の涙を流しながら。
ギョロリギョロリと目玉を動かす事なく、ただ自分達だけを睨んでいる。

もし、彼等に口があったなら。
発する言葉は一体何であっただろうか？…ふと、そんな事を考える。

それをヴァルベルは見抜いたかのように呟いた。

「あれは、自らの意志がない。ただの未練感情の集まり。口があったってただ呻くだけよ…」
「…けど、仮にそうだとしても、私は彼等に謝るべきなんです…」
「口があっても無くても、意志があろうとなかろうと、それはするべきだったわね。もう、その機会は失われた。二度とないわ」

淡々と言うヴァルベルに、ノーイはただ絶望に似た喪失感に囚われ

ながら、遠ざかっていく暗闇を見つめた。

＊＊＊＊

「…よし、無事に出たみたいだな」

脱出の有無は、上で血相を変えてギョロギョロと瞳を動かす『魔力魂の意志』を見て分かった。

結果はどうであれ、抜け出したことに変わりない。

魔力で作った火の玉を上へ放る。

見事、『魔力魂の意志』の瞳孔（ひとみ）へと命中した。

「よっしゃっ、満点ゲッツ！」

空が一瞬、紫の光に覆われる。

横で拍手を送っていたソルトはにやりと笑う。

『何点狙いで来るかしらね？顔面は満点。腕、足は十点。心臓は千点。胴体は五点…と言ったところかしら？』

「あははっ…笑えない現実だな」

げっそりとしながら僕が言い終わる。空を仰ぐと、『魔力魂の意志』は僕を睨みつける様に見下していた。目は最大にまで見開かれ、今にも飛び出して来そうである。暁の様な、不気味な光を周りに飛び散らせながら。

同時に上からは赤い稲妻、下からは魔力弾の猛攻が襲って来た。

数からして、外す確率の方が低いかなって量。

雪合戦で言う、敵の少なさに対して玉数千個みたいな？
お前に逃げ場ないからーって感じ？
そもそも、僕の事考慮されてるのかな、頼んだの僕だけど。別に、いたぶって欲しい訳じゃないんだけどな。分かってるのかな？それとも、どさくさに紛れて殺れみたいな？後で事故処理で済ますみたいな？

とにかく、映画で見る様な壮大なスケールの攻撃が、今良くも悪くも僕の目の前で繰り広げられていると言う事だ。

「…喜ぶべきところなのか？」
『身の不幸を嘆くべきね』

## 第一章終話　お帰りなさい

頬や、腕に掠り傷が次々と付いて行く。既に脇腹や腕には抉れた様な深い傷があった。
流石の僕も、疲労により一歩も動けないでいる。

『魔力魂の意志』といえば、千をも超えるであろう魔弾の的となり、苦悶の叫びをあげている。
頭上では赤い稲妻が轟き、いつ僕の元へ落ちて来ても不思議ではない。

ギャアァァァァァ……！！！！

一際大きな悲鳴が響く。
先程とは比べ物にならないくらいの声量。そして、心を掻き毟るかのような、聞く者全てを発狂させかねない悲痛な悲鳴だ。

何なら、地上で苦悶の叫び声が聞こえてきた。
よくよく目を凝らして見てみると、主にラグド兵が苦悶の叫びをあげて地にのた打ち回っている。
吉田魔王様やカイン、教官も頭を抱えてしゃがみ込んでいた。

「最終形態ってところかな？それなら、最初からベストを尽くしてほしいよ。疲れてんのに頑張っても逆転なんて無理でしょって、いつも思うんだよね。全く、付き合わされるこっちの身にもなってほしいとおもわない？倒したぞーって舞い上がってる最中さ、見苦しく反撃して来てさ。しかも、意外にしぶといから倒されそうになっ

て、女神とか覚醒とかして倒すんだよ？
…すっごく恥ずかしいよね。舞い上がってた俺ら、何？みたいな。
例えるなら、ラストだと思って、一番狙って全力でダッシュしたけど、実はもう二週くらいあって結局、ビリになるっていう…。…以上、優真君の独り言でしたー」

うん、誰も聞いてねぇ。
酷いな、せめてツッコミ入れてほしかった。

『どうやら、私達には効き目が無いみたいね？私は、元が魔力魂であるから。彼方は…』

意地の悪い笑みを浮かべてソルトは、僕を見た。
正確には、僕の身体に生々しく残る傷口を。

『人間じゃないから、当たり前ね』

腕、脇腹共に深く抉られた傷口。そこからは、ただ黒い血が流れるのみ。
そう。骨も、肉も、臓腑も全て、存在しない。四次元の様に果てしない暗闇が存在するだけ。
つまりは、空っぽなのだ。

「空っぽの器…か」

そう呟いた僕の直ぐ横を何か赤い光の玉が横切って行った。
魔力による魔弾ではない。それは次々と地上から『魔力魂の意志』の元へと吸い込まれて行く。

「『魔力魂』か？…あーあ、強制的に捲き上げてる訳か。悲鳴を聞

いた奴らの命奪って」

『ついでに言うなら、魔力と人の意志。その源である生命は深い関わりがあるわ。魔力そのものが意志を持ち、強姦の様に生命そのものの意志を支配してしまえば、可能の業よ』

下からは悲鳴など、色々な叫びが聞こえては消えて行く。

つまりは、今苦しんでいるカインや教官達も例外ではなく、その危険性があると言う事か。

「はははははっ…。それは、困るなぁ」

僕の表情を見て、ソルトは意地の悪い笑みの様なものを浮かべた。

今、僕はどんな表情をしているのだろう？

『ギャァァァァッ……！！！』

『魔力魂の意志』がもう一度、奇声を発した。

ギョロリと大きな一つ目が僕を見下す。

雷鳴が轟いたかと思うと、赤い稲妻が、僕の直ぐ横に落ちた。

かと思えば、すぐに次の雷が地上に降り注いでいく。

空から槍という例えがあるが、まさにこんな状況だろうか。

下から一際大きな悲鳴が聞こえて途絶えの繰り返し。それを嘲笑うかの様に『魔力魂の意志』は三日月に歪む。

別に、僕が手を下さずともこのまま事が進めば自然消滅を果たすだろう。

だが、それでは色々と困るのだ。

溜息を一つ吐き、前に手を伸ばす。
黒い光の粒子が集まって、杖に変わった。

そう。手を下さずとも、相手は虫の息。だが、それを悠長に待てる程、人は忍耐強くない。
そうなれば、一人残らず魔力魂へと転生するだろう。

だが、こいつを倒すにしても、それは中々骨の折れる事だ。

フレディ達、下級中級の死霊達なら、擦り傷の一つ付けられただけでも上出来だろう。
ヴァルベルの様な大総統お付きの使用人なら、一人二人召喚しておけば片付くだろうが、生憎そんな力は残されていない。

残るは一人。
こうなったら、賭けるしかない。

「孤高の貴方、我が盟約の主よ。古き書の悪魔、貪欲なまでに知恵を求める愚者よ。
楽園（エデン）の鍵を持って、参ります。私は、ソロモン。知恵の王。森羅万象を司る賢者」

興味深そうな表情を浮かべ、ソルトが舐めまわす様に僕を見ている。
その口が、数回動いた。

『死ぬわよ』

動きから察するに、そんなところか。
ふふん、僕を舐めてもらっちゃ困る。一体僕が何度死の淵を垣間見

てきたと思っているんだ。
それにしても、何か期待してるのかな？

「今、その門を開き、新たな罪人に裁きの手発を整えましょう。『終極審判』」

辺りが黒一色に染まる。
誰も見えない。何も感じない。

『どういうこと？知恵の悪魔…書の主を呼んだんじゃないの？』
「今の僕に、そんな力残ってないよ。それに、皆の居る所で大総統何て召喚したら皆お陀仏だって。
…かと言って上級悪魔達を召喚する力もないし、下級悪魔、死霊は呼び出せても手も足も出せないでしょう？」

ソルトは呆れと侮蔑を込めた目で僕を見た。
どうみても僕は、庶民だぞ？所持金僅かなのに、高価な買い物をする人なんて何処にもいないさ。

低コスト、高確率。

その何が悪いと言うんだ。
買えない物は買えないし、召喚出来ないものは出来ない。

『それより、此処は何処なの？魔力魂の意志はどうなったの？』
「それを今から、裁くんだよ」

ザンッ…！と鈍い音が鳴る。
ソルトの両足が切り落とされ、体勢を崩したソルトはそのまま倒れた。

「…これより、罪人に裁きを下す」

漆黒の闇の中、僕の赤い瞳だけが不気味に光る。
ソルトの両脇に死霊が立つ。右にフレディが大鎌を持って立ち、もう一人の死霊がソルトの首に鎌を突き付けていた。

『終極審判』
人は人生が終わると、天国と地獄のどちらかに行く。
だが生きているが、この世の理に反する行いをする者等は行きながらにしてこの『終極審判』を受けなければならない。
つまりは、レッドカードというわけだ。勿論、三回忠告はする。だが、一向に直らない者は強制的に送られるのだ。

えっ、僕も十分反してるだって？
否定はしないけど…。というか、出来ないね。事実だし。

『優真、どういうこと？裁くのは、あの大きな目玉であり私じゃないわ。仮にそうだとしても、私達は血の契約をしてしまっているのよ？』

自覚が無い嘘。彼女は気付いていない。何も知らない。知る必要は多分ない。

「その点については問題ないから、大丈夫。だから君は静かに眠ると良い。可哀想な嘘つきさん」

ザンッ…と鈍い音がして、首が撥ねた。驚愕に歪んだまま、ころころと転がる。

人工知能をご存じだろうか？記憶・推論・判断・学習など、人間の知的機能を代行出来る代物だ。
コンピューターも、これがあるからこそ可能な事で、ありとあらゆる身の回りの電脳器具に使用される。

ゲームにも当然ながら使用される。お気づきだろうか？

此処は『ミケガサキ』。誰かが作り出したゲームの世界。
もしかしたら、元からあるのかもしれないし、それを誰かが悪用したのかもしれない。
だが、何にせよ盛り上げる役がいなければゲームは面白みに欠ける。
また、ストーリがそう安易にならない様に進行役も必要だ。
人工知能の代わりであり進行役。それが、人の意志の塊である『魔力魂』。

本人は知る由もない。神から言い渡された運命とでも言うべきだろうか。
それが自分の意志で行動していると思っていても、実はすでに決まっていた事だったとは。

そういえば、陽一郎さん。転生がどうたら言ってたけど、前の僕はどうだったんだろう？
案外僕も、決められたシナリオ道理の道を歩んでいるのかもしれない。

「随分、あっけない終わりでしたね…。何か、もっとこう…抵抗するかと思いましたよ…」
「そういう風に、決められてたのかもよ？」
「へ…？」

フレディが呆気にとられた顔で僕を見た。
暫く硬直していたが、被りを振るとそうですか…と呟く。

「何だか、疲れたよ…。もう、戻っても平気？」
「えぇ。無事、『魔力魂の意志』…贄は捧げられました。今宵の糧に、大総統も満足することでしょう…。お疲れさまでした…」

パズルのピースの様に、空間が剥がれて行く。
突如、光が弾けて、光の雨が地上に降り注ぐ。身体はいつの間にか元に戻っていた。
下から歓喜の声が上がる。

その声に少し安堵するとともに、身体から力が抜けて、落ちている様な浮遊感に捕らわれた…って、本当に落ちてるよ。あっ、当たり前か。さっきまで空の上に居たんだから。

受け身を取れば何とかなる？いや、高さから無理だな。それ以前に死なないから大丈夫じゃん。
けど、痛いの嫌だし。覚悟を決めて、僕は目を瞑った。

下から皆の声が聞こえて来る。

「全く、世話の焼ける人ですね…」
「ニアッ！」

ボスンッ…と、お世辞にも柔らかいと言えない感触。寧ろ堅い。
おそるおそる目を開けると、青空が広がっている。太陽が僕等を照らしていた。
ぬっと、いつもの姿に戻った猫モドキが僕の顔を舐める。
ノワールが膝枕をして、僕の髪を優しく梳く。

「あー…、助かった。ありがとう」
「今は休んで下さいな。…魔力魂の意志は、もう誰かを怨むことも、嘘を吐く必要もなくなりました。
優真様が救ってくれました。…ありがとうございます、優真様。きっと、彼女は楽になれましたわ」
「…僕は、誰も救ってないよ。けど、ありがとう…」

ノワールは何も言わなかった。ただ、黙って僕の髪を梳いていた。
ゆっくりと高度は下がり、やがて地面に着く。

カイン達が急いで僕等の傍に寄って来た。
地上ではラグド兵が声をあげ、心の底から喜んでいる。中には歌い出す者や、ダンスを踊る者も居た。

「おいおい、大丈夫か…？酷い怪我じゃないか」
その言葉にギクリとする。だって、僕の身体は人間の構造をしていない。傷口を見れば一目瞭然だ。

「怪我と言っても、見た限り骨折と擦り傷だろう。しかし、魔力の過剰消耗は危険だ。早く何処か休める場所を確保しなければな…。よく、頑張った。偉いぞ、優真」

その言葉に、ほっと…息を吐く。
どうやら、『魔力魂の意志』が大総統の糧となった御蔭で、僕の身体も傷が塞がる程度には回復したらしい。

吉田魔王様が笑いながら、僕の頭を撫でる。
皆が笑いながら会話をし、僕の頭をぐしゃぐしゃと撫でながら楽しそうに何かを言う。

あぁ、戻って来たんだ。本当に、僕は戻って来たんだ。
今更のように、そんな感覚が湧いてきた。涙が頬を伝う。
僕が捨てたモノはきっと無駄なんかじゃない。無駄になんかしない。
皆が、驚いた様に僕を見る。そして、一斉に言った。
良く分からないが。
「お帰りなさい」
そうだな、欲を言うとするなら。
良く分からないは、無しで言ってほしかった。
けど、まぁ良いか。皆…いや、ミケガサキらしい答えだから。

## 第一章終話　お帰りなさい（後書き）

更新遅くなりましたすみません。何かこう、無理やり終わらせた感満載ですね。

『新資源騒動編』はそろそろ終わりますが、全体的な話はまだまだ続きます。

お気に入り登録並びに、評価ありがとうございます！これからも頑張りますね。

此処までお読み下さり、どうもありがとうございました。

# 第二章　プロローグ

ミケガサキの秋を感じることなく、冬が訪れる。
気付けば、『新資源騒動』から一ヶ月近く経っていた。

倒壊した国をどうするか途方に暮れていた僕等に、秘密裏にフェラ王国から絶大な支援の元が送られ、
建物の損傷、倒壊は少しずつだが修復されつつある。…流石に城は半倒壊し、修復不可能だが。

だが、それでは困る。
城は言わば国の象徴。国の威厳を示す建造物だ。
無いとその国に何か物理的異変があったことが丸分かりだ。
つまり、他国からしてみれば攻め込みのチャンスってわけ。だが直せないとなると、とても困る。
東京に東京タワーが無いくらいの違和感だ。

何はともあれ、フェラ王国の支援のおかげで何とか外見だけは、元のミケガサキ王国を保っていた。
ラグド王国との対立については何やら協定を結ぶ事で片が付きそうだ。
だから、残るは城と王様と国交問題かな。

ミケガサキ城周辺。
瓦礫に埋もれる半ば倒壊しかけた城を仰ぎみる。
こんなに壊しやがって。全く、何処のどいつだ?…うん、やったの僕だけどさ。
だが、街の被害は僕じゃないからな。…原因は僕かも知れないが。

御蔭でノーイさんや吉田魔王様は設計に大忙し。
ノワールは料理担当として、ミリェニス王国民と戻って来たミケガサキ国民の為に野外炊事に励んでいる。戻って来たミケガサキ市民は、ミケガサキの変わり果てた姿に呆気ていたが、今は母国をより良い国にするべく作業を手伝ってくれている。

まぁ、今回は別に城の状態を見に来たのではない。
生憎僕は不器用だし、作業の邪魔にしかなりそうにない。消費した魔力が戻るまで暫く安静にしろというのが教官からのお達しなのだが、それはとても退屈な事だ。

というわけで、何か無いかと散策中。
何でも噂によれば、すっかり教官に惚れ込んだドMのラグド兵達が、教官の部下になったらしいじゃないか。今の時間帯は丁度瓦礫整理をしている頃合いで、運が良ければお目にかかれる。

「一度でいいから、見てみたいものだよ。本物のドMっ！」
「昼間から何、飛んでもない事口走ってるんだ…。まさか、朝から待機していたわけじゃないよな？随分朝早くから出掛けていたようだが…」
「そりゃ、一応は家族なんだから墓参りくらい行ってあげないと駄目でしょ。まぁ、あの人達にとっては大きなお世話だろうけど。…で、統率者の目途って立ってるの？」

しまったと言わんばかりの表情を浮かべ、カインは気まずそうに首を振った。
あの一件以来、皆何かと僕に気を遣うんだから調子が狂う。心おきなくボケれないじゃないか。

「いや…まだだ。第一、王制も初代勇者が廃止したしな。全く、何

が不満だったんだか…。
普段は間抜けなんだがな、あれは影で活躍するタイプだな。そうでないときは、実力行使で戦争止めたし…何だかんだで凄い奴だったぞ。ちょっとお前に似てるかもな」
「いやいや…僕でも、実力行使で戦争は止められないよ。何それ、必殺仕置き人!?」

そう言えば、初代の話はよく聞くけど、陽一郎さん世代はあんまり…というか全然聞かないな。

「ねぇ、カイン。初代勇者の話はよく聞くけど、二代目勇者の話は全然聞かないんだけど…。
担当じゃなかったの？」
「あぁ…。何でも、二代目勇者は群れるのを好まなかったらしい。女神様をどう説得したのかは知らんが、言い包めるとなると凄い事だな。まさしく勇者だ。代々の女神は全員事案を通したがるから」
「…ちなみに、カイン。女神はどうやって決めてたの？」
「ミケガサキ城の地下に洞窟があり、その奥に湖がある。満月の晩、心音の清らかな者がその泉を覗くと女神の姿が見えるらしい。実際そうして女神は誕生して行った。確かに泉に映る者は並外れた魔力の持ち主。他にも、第六感と言うべきか？俺達には感じることの出来ないものが感じられたり、見えたりしたらしい」
「…城の地下っていうと、今は瓦礫の下ってわけか…。ふーん、第六感ねー…。第一、魔力がそうなんじゃないの？」

急にそっぽを向く僕に、カインは苦笑した。
「あー、そういや、お前第六感あるらしいな。ははっ、だが、心音は清くないから安心しろ」
「あははっ地味に傷つくかな」

適当に足元にあった瓦礫を蹴る。
バヒューン…と鉄砲弾の様に吹っ飛んだ。

「……というか、闇市とかって無事なの？」
「おい、話を濁すな。何だ、今の蹴りは。いくら強化されているとはいえ、前はあそこまで飛ばなかったぞ。まぁいい。闇市は、空間ごと移動する特殊な場所なんだ。無事だろ。また街が元に戻り、何処か人気の少ない狭い路地に現れる筈だ。で、お前の事だから、ただ単にドMを見に来たんじゃないだろう？
…いや、仮にそうだとしても何か用があったと言ってくれ」
「何だ、本当に真に受けたの？冗談だよ、冗談。単なる散策だって。暇つぶしに此処に寄って、確かそう言う噂があったな～って思ったの。つい先程、真っ白な鳩が来てね？伝言を頼まれたわけ。これ、証拠ね」

はいっと僕は、ポケットから例の物を取りだすとカインに渡した。
カインはそれを受け取るやいなや、わなわなと震え始める。

「しまった…。そうか、この季節だからな…」
「どうしたの？何か来訪でもしてくるわけ？」

僕の問いにカインは頷く。
「毎年各国で開かれる…首脳会談なんだが、今年は此処ミケガサキでの主催だった…。
しかも、遠征に出かけている先輩方も帰って来る頃合いだ。本格的にヤバいことになる…」

「つまり、城と統率者を何とかしろってこと？」
「考えても見ろ、女神不在、勇者は馬鹿。魔王は実は偽物で、本物は別人ですなんて、誰が言える？」

「成程。癪に障るのが一か所あったけど、不問にするよ」

最も、本当の勇者が不在で、本物の魔王様は目の前にいるんだけど。
まぁ、とにかく面倒な各国の色濃いメンバーが揃うってわけか。
カイン達の先輩方が来るとなると色々面白い事になりそうだ。いつも通り、面倒な事にもなるんだろうけど。

「ははっ、やっぱりミケガサキは退屈しなくて良いね」

＊＊＊＊

三嘉ヶ崎。

何処までも澄みわたる蒼い空。時に流れる白い雲。
いつもの日常で、普通の毎日だった。

学校のチャイムが鳴る。
私の一日の半分が今、終わった。
荷物を整理し、教室を後にする。仲の良い友達と別れの挨拶をして、昇降口で靴を履き替える。

家に帰れば誰も居ないが、七時になればお父さんが帰って来る。
私はそれまでに宿題をし、お父さんの大好きな料理を作り、帰りを待つのだ。

それが、私の毎日。私の日常。

「えっと…吉田雪さんですよね？」

校門の前に一人。ロングコートを羽織った男性が一人、立っている。
お隣さんの田中陽一郎さんだ。吉田と雪の間に間が生じていたけれど、名前を忘れていたのかしら？
陽一郎さんは、顔から見ても優しい人なんだなぁっていうのが伝わって来る。
つい最近引っ越してきたばっかりだけど、今では、お父さんの飲み仲間で大の仲良し。
けど、由香子さんや二、三個上の拓誠君の姿はあまり見たことが無い。

「どうしたんですか、陽一郎さん。仕事は？拓誠君ならとっくに卒業したじゃありませんか」
「…あぁ、そうだったね。いや、そうじゃなくて、ちょっと頼みがあって…」
「え？」

陽一郎さんから聞いたのは、途方もない話。何の信憑性もない、到底信じられない話だった。
此処では無い、ミケガサキというゲームの世界。それは此処、三嘉ヶ崎にリンクしているということ。

その世界に思いを馳せてみる。
未知の世界。パラレルワールドとは異なる異世界。
何でも、自分達はそこへ行ったことがあり、勇者を務めていたと言うのだ。

「私が失ったもの…」
「そう、選ぶのは君自身だ。それを取り戻したいのなら、僕は惜しみなく協力する。君をミケガサキに連れて行ける。現に、もう一人。既に行っているからね。君もよく知っているんじゃない？

あっ、どうだろう…。けど、会ったことはあるかも…」
「陽一郎さんは、一体、何のためにこんな事を?」
狼狽しながら言う私に、陽一郎さんは少し笑って言う。迷いのない、澄んだ笑みだった。
「そうだなぁ…。恩を仇で返した…ううん、余計な事をしてくれた、お馬鹿な息子への仕返しってところかな?」
何処か楽しそうに陽一郎さんは言った。
腹黒い笑みをチラつかせて。
私の失ったもの。取り戻すか否かは自分次第。
私は、私の答えは…。
「雪、どうしたんだ?さっきからやけにぼんやりして…」
「えっ、あぁ、うん…。お父さん、もし私が長い間家出するって言ったら?」
「今すぐにでも死ねるな。ショック死だ」
そう真顔で言い放つと、お父さんはビールの缶を掴むと一気に飲み干した。
「しかし、そう言うのも何か理由(わけ)あっての事だろう?何でも聞くよ、話してみなさい」
ぽんぽんっと大きくて温かい手が、私の頭を軽く撫でる。
頼もしい、お父さんの手だ。
「あのね、本当に、突拍子もない話なんだけど…」

私は、陽一郎さんから聞いた話を全てお父さんに話した。
お父さんは笑いもせずに、真剣に私の話に耳を傾け、相槌を打つ。
聞き終わると、静かに目を閉じて酒精の混じった溜息を吐いた。

「…陽一郎が、お前に言ったんだな？」
「う、うん…」

真剣なまなざしで、お父さんは私に問う。
そして大きく頷くと、もう一度頭を撫でた。

「雪は、何でお父さんが宅急便屋さんになったか、知っているか？」
「うん。お父さんはサンタさんのお友達で、サンタさんが休暇を取っている間に、皆の夢と荷物を届ける為でしょう？夢のある仕事なんだよって…」
「あ、あぁ…そうだったな。そう説明したかもしれない。けどね、本当は違う。
ただ、逃げたかっただけなんだよ。雪は、自分の失ったものを取り戻すつもりなのかい？
それは、雪にとって本当に大切なものじゃないかもしれない。その先には辛いことだって待っているかもしれない。それでも、取りに行きたいと思うかい？」
「それが、私にとってどれくらい大切なのか、私には分からないわ。けどね、心の何処かで、それを探していた様な…呼んでいた様な気がするの。だから、どんな苦難が待っていたとしても、私はその正体を暴きたい。大切な物を取り戻したい…」

その答えに満足したように、お父さんは笑う。真剣な表情だった。

「なら、雪。行ってきなさい。頑張るんだよ。…お父さんも、頑張るから。逃げないで、立ち向かうから。もう、子供じゃないんだ。

自分の道は、自分で決めるものだ。陽一郎、雪を頼んだぞ」
「僕は送るだけですって。この子の騎士（ナイト）が、ちゃんと守ってくれますよ。…ねぇ、優真君」

何時からいたのか、陽一郎さんが私の後ろに立っていた。
陽一郎さんが指をパキンッ…と鳴らすと、私の足元に魔法陣が浮かび上がる。
真っ白な光が、私を包んだ。

お父さんの姿が、見慣れた部屋が、点滅を繰り返して薄れて行く。

『頑張りなさい。そして、どうか幸せに』

お父さんのそんな声が聞こえた様な気がした。

気付けば辺りは、一変していた。
見慣れない瓦礫ばかりの風景が広がっている。

此処が、ミケガサキ…。
訳もなく涙が溢れて止まらなかった。

知っている、私はこの場所を知っている！
そう思った途端、次々と記憶が溢れだして止まない。

「ついに、来たのね…。久しぶり、ミケガサキ…」

ごしごしと涙を拭う。
そして、城の方へと走り出した。

私の、失ったものを取り戻すために。

## 第二章　プロローグ（後書き）

というわけで、新章突入ーってなわけです。
お気づきの方もいらっしゃると思いますが、一部サブタイトルを変更致しました。
面白くなるのか、というよりこれからどう進んでいくのか私自身全く予想できません。
頑張って更新して行く予定なので、誤字・脱字等ありましたら容赦なくご連絡ください。此処までのご愛読、誠にありがとうございます。引き続き、楽しんで頂けると幸いです。

# 第一話　騎士団の帰還

ミケガサキ城跡地前。

「『復国祭』を行いたい？
…別に構わないけど、各国の首相が集まるの今日なんだよね？」

「…あぁ。流石に隠すにしても何れはボロが出るだろう？何なら、最初から明かしといた方が良い。
幸い、相手の二カ国とは同盟を結んでいる。それを逆手に、国交再確認というわけだ。
終わった後の余興なら別に構わないだろう？」
「成程。しかし、二人かぁ…。案外、寂しいね」
「いや、首相と参謀。騎士隊長の三人だな。二カ国プラス俺等三人だから計九人だ。料理は先に吉田魔王様に作ってもらえば問題ないよな」
「そうだね。全部まるっと解決だ」

そう言って、僕らは新しく設えた城を仰ぎ見る。
かつて、白亜の城と讃えられていた城の面影は何処にもなく、ゴキブリの様に太陽を遮るかの如く黒光りしていた。

白亜の城と言うより、悪魔の城の方がしっくりくる光景である。

いくら辺りが復興の兆しを見せていても、未だ瓦礫処理は残っていた。
それが余計に城を際立たせている。
魔王の手に堕ちたと言われても、何ら不思議ではない光景だ。

端から見れば、何という度の過ぎた嫌がらせ。
間違いなく、確信犯だ。

実際、偽魔王様の本物の城だし。
いや、それ以前に、僕が本物の魔王様か。

凄いな、ミケガサキ王国。勇者と魔王の両方を輩出させたね。
他国を巻き込んだ、傍迷惑な独り芝居だと謳われても文句は言えないぞ。

「…本当に大丈夫なのか？いくら城が無いからと言って、ミリュス国の移動式城を代用して…。
凄い違和感だぞ。城黒いし…」
「ほら、模様がえとか…？ダークな感じに憧れてたんですみたいな」
「何で勇者を誕生させた国が、ダークな感じに憧れるんだ」

「反面教師」
「無理だろ」

そうこう言っている内に、辺りが騒がしくなった。どうやら各国のお偉い様方が到着なさったようだ。
「因みに、僕はどうすれば？」
「そうだなぁ…、まだ指名手配犯だが、万が一の時の為に城内には居てほしいな」

その時、城の厨房裏口からノーイさんが顔を出す。

「おや、こんな所に居たんですか？そろそろ行かなくては出迎えに間に合いませんよ」

「分かった、今行く。じゃな、優真。ちゃんと城内にいるんだぞ」
カインは相槌を打つと、駆け足で去って行った。

とにかく、場内を目立たない様、ふらつけば良いのかな?

「暇なら、城内を見学してはどうです?暫くはこの城だと思いますし」
「それは名案だ。そう言えば、猫モドキとオズさんの姿が見えないけど…」

あぁと少しそっぽを向く様にノーイさんは答える。

「…先程、墓参りに出掛けましたよ」
「あぁ、そうなんだ。それなら良いけど…。それじゃあ、僕行くね」

城内へ向かう僕に、ノーイさんは少し考えた素振りをし、柏手を打つ。

「『復国祭』の事ですが、吉田魔王様が、世界三大珍…」
「チェンジで」
「…の内、一つが出る予定ですが、何が良いですか?」
「グリアン以外の、見た目が普通な物が良いです」

皆様、覚えていらっしゃいますか?
世界三大味の一つ、グリアン。

…真緑のムカデ。

僕には堪えられない。
いくら美味しくても、生理的に無理だ。

「見た目が普通ですか…。料理すれば皆、同じだと思いますけどね…」

僕の異様な迫力にたじろぎながらも、ノーイさんは呟く。

「似て非なる物だよ、ナンセンスだよっ！
あの真緑が、皆同じだと言いたいのかっ！？
いねーよ、あんな色した奴っ！皆違って良いんだよ！十人十色なんだよっ！何だ、アレは！？
青汁パウダーでも塗されましたか？前世は緑黄色野菜か？来世はキュウリなのか！？」

「…来世は、流石に色で決められるものではないと思いますよ？
まぁ、彼方の言い分は分かりましたので、とっとと城内回って来なさい」

まだ言い足りずにいる僕に、ノーイさんは少し呆れた表情を浮かべて溜息を吐く。
半ば強制的に追い出される形で、僕はその場を後にした。

＊＊＊＊

「お待ちしておりました。フェラ王国ソエム国王、並びにラグド王国ジュリア女王陛下」

ミケガサキ城内に緊張が走る。
真っ赤なレッドカーペットを悠然と歩く六人の姿があった。

「見ない顔だな。他の二人は何処だ？」

カインは、緊張した面持ちで案内を勤めた。

「今回はこちらの都合により、女神様、及び騎士長、参謀長はございません。
代わりに、私、カイン・ベリアル、及び各代理人がご同行致します」
「おいおい…、これは何の茶番だ?俺達は、遊びに来ている訳じゃねェんだよ。しかも、見ねェうちに、随分と様変わりしたじゃねェか?」

奇抜なファッションをした年上であろう青年が、野犬の様な鋭い目つきで見てきた。

言えない。
模様交えとか、ダークな感じに憧れてたとか、とても言える雰囲気じゃない。

「中々良いじゃねェか」

良いのか…。

何だか、ノリが優真に似てきた気がする。
気のせいであってほしいが。
…恐らく最近碌に休んでないから仕方がない。

カインはそう割り切ることにし、内心小さな溜息を吐く。

「止しなさいな、グラン。…私の忠犬が無礼を働き、申し訳ないわ。国内を見る限り、酷い内争があったとお見受けするけど、今回はそれを込みでお話下さるのかしら?」

ラグド王国女王陛下、ジュリア・イグネスか。
ラグドは、代々女性が国を統べる。しかし、今回の内争。
主な原因はこちらにあるが、ラグド王国も乗り込んで来ている。
あれがミハエル何とか一人の独断で動いたとは思えない。…要注意だな。

「えぇ、勿論ですとも。遠い所からわざわざお越しくださったんです。
料理を堪能してからでも、遅くはないでしょう?それから時間の許す限りお話しましょう」

一つの大きなドアの前に立ち止まり、取っ手に手を掛ける。
そしてゆっくりと、扉を押した。

＊＊＊＊

「へくしゅんっ…。誰かが、悪口にも似たことを言ったのかな?
それにしても、広い。さぁーて、何処に行こうか」
「影の王…、少しお耳に入れたい事が」

前、後ろと交互に延びる影から、フレディが顔を覗かせる。今日は姿が半透明だ。
そのまま、僕の隣にふよふよと浮かび上がると、後をついて来た。

「ん?どうしたの」
「先程、城内に…」

フレディがそこまで言った時、何かがこちら目掛けて突っ込んできた。

ザスッ…とフレディを貫通して、直ぐ横の壁に突き刺さる。
霊体じゃなかったら、普通に死んでる容赦無い攻撃だ。

「…け、剣？」
「おい、そこのチビ」

まだ若い男の声だ。
アレかな？今日来るって言ってた各国の誰かとか？

にしても、聞きづてならないことを聞いたぞ。
いくら真実でもなぁ、傷付くんだからなっ！どーせ、１６２センチですよーだっ！
男性では最下位だがなぁ、一部の女子には勝ってるんだぞ！大半には負けるがなっ！ドヤっ！

「わー、何処だろう？」
「お前だ。此処で一体何してる？」

僕の後ろから二つの影が伸びる。
がしっ…と頭を掴まれて、そのまま持ち上げられた。

「うわっ…」

僕の頭を大きな手が一掴みにし、身体が宙に浮く。
クレーンゲームの玩具じゃないんだから…。とにかく、首への負担が半端じゃない。

「いててててっ…。首、ギブッ、タンマッ！」
「がははははっ、威勢の良い子供だな。アンナが気に入りそうな子だ」
「ダズラス隊長、そろそろ下ろしてやらないと、本当に首がもげま

すよ」
「ははっ、そうだな」

直ぐに手が離され、地面に尻もちをつく。
睨みつける様に僕の後ろに立つ人物を見上げると、体格の良い大男と、ひょろ長い青年が立っていた。

「君ぃっ！何処の配属だ！？」
「は、配属…？あ、あぁ、新人です。厨房の。城の再建の時に雇用してもらった一般市民です。
今、電気の点検を任されまして…」

よく分からないが、あまり関わらない方がよさそうだと、本能が警鐘を鳴らす。
甲冑といい、見るからに騎士だ。けど、見ない顔だな…。他国の騎士長か？

…というか、この若い方の騎士さんは何をやっているのかな？
さっきから僕の影に触れているけど。

「どうだ？バーズ」
「…読めません。何の情報も読み取れない…」

何、セキュリティチェック？それとも、床暖房でも確かめてるんですか？
この城、最新式の割に床暖無いよみたいな？
そうか、最近の城にも床暖はあるんだね。魔法が存在する国だから、当たり前みたいな感じかな。
貴族の習わしと同じように、城には必ず床暖設置みたいな。

…僕が何で、床暖にこだわってるかだって？単に憧れだよ。悪いかい？
ホットカーペット買った後に、床暖の存在を知りましたが、何か？

「唯の、一般市民というわけでは無い様だな。よし、騎士団に入らないかっ！？
騎士は男のロマンだぞっ。男の肩書きにして勲章が増えたな、良かったじゃないか」

何故、そうなる。何だか、入る前提の話になってるぞ。
まぁ、唯の一般市民じゃないことは認めるけど。
『魔王』だけど、皆の認識は馬鹿な『勇者』。そして『指名手配犯』だ。碌な物が無いよ。
これ以上の肩書は要らない。というより、欲しくない。碌なものじゃない。

「…騎士団、騎士団って、彼方達、一体何ですか？何処の騎士さんなんですか？」

半ば投げやりに聞くと、ダグラスは豪快に笑って僕の頭を撫でた。
横では心外と言わんばかりに口を開けたノーズ青年が立ちつくしている。

「我々は、救世の国を守る誇り高き騎士団。人は皆、『白十字軍（ホワイト・クロス）』と呼ぶ。
自己紹介が遅れたな、若人よ。ミケガサキ白十字軍指揮総官ダグラス・ボコだ。騎士隊長無き今は、代役を務めている。こっちは副補佐官、トーズ・アイ。
しかし、ミケガサキも我々が遠征に出ている五年間で随分様変わりしたもんだなぁっ！がはははははっ」

つまりは、この人が騎士隊長ってわけか。
だが、何も知らないこの人が出て来られてはこっちの予定が狂うというもの。
だが、騎士隊長一人が増えた所で変わらないかもしれない。見た目、馬鹿そうだし。

「…全く、誰のせいで五年間も遠征が行われたと思っているんですか？探すこっちの身にもなって下さい。…おやおや、誰かと思えば新しい勇者殿ではありませんか」

深い青みがかった夜色の髪…まぁ、要するに青っぽい黒髪ね。
それにしても、久しぶりの登場の上に爆弾発言までしたがったよ。
ゼリア参謀長。
ややこしい。非常に、ややこしい。

そして、最も言ってはならない事を暴露する。

「いや、失礼。今は、『国際的指名手配犯』でしたよね？」

場の空気が、一瞬にして凍った。

# 第二話　三大珍味の大奮闘記？

さて、ボケようか、開き直ろうか。それとも素直に認める？いや、弁解という手もあるな。
そう考えていた僕を余所に、ゼリア参謀長が懐から拳銃を取り出す。
その銃口を僕に向けた。

パンッ！

銃声が轟き、僕の直ぐ脇を銃弾が過ぎる。

「はい、分かります。よーいどんの合図ですね？ゼリーさんっ」

僕はとにかく走り出した。
後ろから殺気が、迸っているのを感じる。横ではダグラスが大声で腹を抱えて笑っていた。

あーあ、今日だけは問題を起こさないようにしようって心がけてたのに…。
何これ、僕のせい？まぁ、後半はぼくのせいだけど。
…根本的に悪いのはあいつらと自重という言葉を知らない参謀長のせいだよね？
自業自得だよね、色々な意味で。

「と、とにかく近くの部屋でも転がり込むか！？」
「近くの部屋ですか…。曲がり角の直ぐはどうでしょう？死角なので、意外に見つかりませんよ…」

フレディが申し訳なさそうに言って、曲がり角を指さす。

後ろを振り向くと、騎士の二人が追いかけて来ていた。だが、ゼリーさん…間違えた。
ゼリア参謀長は追ってどころか、銃撃もして来ない。

「小賢しい…」
ゼリア参謀長は青筋を額に浮かべそう呟くと、銃をしまう。
おっ、諦めたかっ？よし、後は二人を撒くだけ……ん？

急に騎士の二人が追うのを止め、自分の大剣や、魔方陣で構成した障壁で背後を守っている。
その視線の先を見てみた。

ボウッ…とゼリア参謀長の前に陣が形成される。陣に触れ、自分を囲むように指を宙に滑らせていく。
すると、一つの陣が二つになり、二つの陣が四つにといった具合に、どんどん増えて行くではないか。

というか、あの動きっ…！！

「何か格闘家っぽくね！？ほら、今にも何か気合球が出そうな雰囲気じゃんっ」
「……えぇ、マジで殺されますよ。それ以上言うと」
「にしても、あの陣。二重構成じゃないみたいだけど？」
「…同じ業を同時に繰り出すには、銃ならば二丁必要でしょう？魔法陣も続け様に繰り出すのは『魔眼』でなければ成しえない業ですよ。普通の人間が陣を形成するには魔力があれば良いって問題じゃないんです。それなりの努力あってのものなんですよ…」
「わーい、僕、天才っ！」
「いきなり人名をゼラチン構成する奴が天才なわけないでしょうに…。

影の王。言っておきますけどあの陣、『連射の陣』と言われてて、彼方の所で言うマシンガンと同じです…」

そういう事は早めに言ってほしい。

途端にズドドドドッ…と銃声に似た音が響き渡り、壁に弾痕を付けて行く。

「がははははっ、ゼリアの奴。相当キレているなっ」

「笑いごとじゃありませんよ。このままじゃ追えないじゃありませんか。どうします？応援を呼びますか？」

うーん、君達は何をしに来たのかな？実は城を壊しに来たとか？ミケガサキの国交を遮断する気か。鎖国願望をお持ちですか、コノヤロー。

咄嗟に、『障壁の陣』で防いではみたが、走って逃げてたら今頃ハチの巣となっていただろう。

未だ眉間に皺を寄せながら、ゼリーさんは低く言う。

えっ、言い直さないのかって？案外気に行ったから、このままで。いいじゃん、三十路であろうオジサンに愛着が湧くニックネームが付いたんだ。

嘆くことじゃない。寧ろ、喜ばしい事だよ？

「…逃げないのか、屑」

「心外だなぁ。僕は馬鹿だ」

「威張れる要素が一つもありませんが…？」

花を持たせるという言葉を知らないのか。

良いじゃないか、こんなところで出しゃばるくらい。…一応主人公

だし。

とにかく此処は逃げるが先決だ。
後でカインとかに合流して、弁解してもらおう。

ということで、犠牲…いや、囮になれ。これから召喚する誰か。
僕はお前の屍を盾にして行くよ。

「案外、外道ですね。影の王…」
「誰だって、自分の命が最優先だ。『召喚』っ」

廊下が白い光に包まれる。
おや、いつもの吉田加齢…ごほんっ、黒い霧が漂ってないな。一体、誰を呼んだのやら。

「あっ、優真君。久し…」
「送・還っ!!」
「悪霊退散と言わんばかりに還しましたね。仮にも義理の父親でしょうに…。それに、あの人…」
「絶対、怒ってるって!無理無理、もっと何かマシな人いない!?」

良く見えなかったが、声でわかった。そして確信した。凄く、怒っていると。
という訳で、もう一度『召喚』を試みる。
頼む、陽一郎さん以外のこの場を打破してくれる人物よ、カモンッ!

一際大きい陣を召喚の陣を形成する。
廊下が今一度白い光に満ち溢れた…かと思えば、瞬時に黒く染まった。

「ちょっ…、ハゲの王…あっ、すみません。噛みました。影の王っ…、陣が大き過ぎますっ！
何を召喚するつもりですかっ…！？」
「僕はまだ、禿げてねぇぇっ！！！…とにかく、陽一郎さん以外の何かっ」
陣の中心から赤い稲妻が迸る。
『ギャアァァ…』
「ぎゃあああああああああっーーーー！！」
いや、確かに打破出来るけど！
打破どころか、新資源まで生産してくれるけどっ！
「…ほら、言わんこっちゃない。折角出てきたんですし、叫ばしてあげましょうよ…」
「人にも成れるけど、人でもねぇだろっ！アレはっ！ってか、何で居るんだよッ！大総統何やってんのっ！？」
「いえ…アレは大総統が美味しく頂きましたよ…。
知らないんですか、大総統に食べられたモノは、手駒に出来るんです…」
ふむふむ、便利な機能だな。流石、知恵の悪魔。
俺の物は俺の物、お前の物は俺の物って胃袋なのか？
「…意味が分かりませんよ」
フレディが静かに溜息を吐く。
「魔力王になれるんじゃね？僕」

「その分、人口は激変しますが…？」
「折角手駒にしたんだし…、この際、人間じゃなくて色々な物を食べさせてみたら？意外に出来るかもよ？」
「鶏じゃないんですから、無理ですって…。
ほら、早く送還しないと、皆『魔力魂』になっちゃいますよ…」

「……『送還』」
「半分本気で『魔力魂』にするつもりでしたね…？」

辺りはまた白い光に包まれ、元の少し薄暗い廊下に戻る。
三人は、完全に僕を敵視していた。
殺気というか、闘争心なのかな？これ。明らかに、やる気満々ってのが、見て取れる。
まぁ、その内の一人は明らかに殺気だけど。

「いや、今のので敵視しない方がおかしいですよ…。とにかく、今は逃げる方が先決でしょう…」
「…三度目の正直とも言うし、後もう一回だけやってもいい？どうせ、もうこっちで誤解解くのは無理そうだし。ほら、案外弁解代わりになるものが来てくれるかもよ？」
「要するに、やりたいならやれば良いじゃないですか…」

「『召喚』っ…！！」

陣は先程の半分。
それをゼリーさん方式に則って、三分割してみた。
つまり、同時に三つ『召喚』してみましょうってこと。
まぁ、陣一つで二人召喚出来たこともあるから、そんなに必要なかったかもしれないが、まぁ良い。

「少し、大きいのでは…？ちゃんと、コントロール出来るんですか…？」
「……気合で」

三つの陣が同時に光った。
この際、人外でも何でも良い。…さぁ、何が来る！？

『……』
『……』
『……』

「おーとっ！全員、無言だっ！ってか、何これ？虫っ！？でかっ！」
「虫だけに、無視ってことじゃないですか…？えぇ、すみません。つまらないですよね…。
というか、全部三大珍味じゃありませんか…」

へー、これが三大珍味ねぇ…。
真っ青なトンボに、真緑のムカデ…あっ、これが噂のグリアンか。
最後は普通だな。巨大ウサギ…？

「前の二つは分かるけど、ウサギは珍味に入るの？ウサギ肉って意外に食べられたりするけど…。珍味とは言わないんじゃ…？それとも、こっちではあまり食べられないとか？」
「あぁ、向こうの兎はサイズが小ぶりでしょう？ミケガサキでもそう言った小ぶり…いや、普通の兎はもちろん居ます。市販で売っている食用兎とか、普通にペットとして飼われていますよ。
この兎は見ての通り巨体で、捕まえるのが難しい割に、肉は左程美味しくはないのです。市販の小ぶり方が余程美味しいと言われていますね…。
だから、食べるのはあの大きく長い耳の皮と、目。食べると、長寿

に成るそうですよ。まぁ、影の王には必要無いかもしれませんが…」
「成程、確かに珍味だ。どんな味がするのか知らないけど。
これ、三体召喚しなくても良かったな…。一体で何とかなりそう。
ウサギなんて、耳が天井突き破ってるし。見てて痛々しいよ。あれじゃ動けないだろ。因みに、この兎は何て名前なの？」

僕は巨大兎を見る。
隣ではグリアンやら、トンボが縦横無尽に飛びまわっていた。
コントロールとか、不可能だろう。もう、良い。自由に動け。そして、その勢いで三人を倒すのだ。

騎士たちは果敢にもそいつらに立ち向かっている。当分は心配しなくて良さそうだ。

「確か、テンマデトドクミミナガ兎でしたよ…」
「そのまんまだなっ！？」
「耳の長さは、そうですねぇ…、彼方のところでいう東京タワーに匹敵するんじゃありませんか？」
「…ということは、この城を余裕で突き破ってるってこと？」
「えぇ。それはまさに、シュール以外の何者でもないでしょうね…。
晴天の下、魔城にそびえる二本の耳…。この国は一体何処へ向かうつもりなのでしょうか…と人々は思うに違いありません…」

とても楽しそうにフレディが笑う。
目は何処か虚空を見ていた。恐らく、そんな城の姿を妄想しているのだろう。

「送還送還送還送還っ！！そういうことは先に言えって！」

取りあえず、ムカデとウサギを送還する。

テンマデトドク…の居た場所を仰ぎみれば、案の定、二本の巨大な耳が突き刺さっていた場所から青空が覗いていた。

うわー、皆にどう説明しようか。
絶対怒られるだろうなー…。

その時僅かな風を感じ、突起に退く。
剣がその横を掠めた。

「おおっと…」
「ちょこまかちょこまかと…。指名手配犯めっ…よくもまぁ、ぬけぬけと我が城に入って来れたものだなっ！」

いや、君達の城じゃないし。ちゃんと、所有関係者に、裏口から入れてもらいましたよ。

鋭い斬撃と、止まぬ銃弾が僕を襲う。
ダグラス隊長の方を見てみれば、巨大トンボと格闘していた。
トンボの方は傷だらけで、目がチカチカと点滅している。

「…影の王、これじゃあキリがありません。とっとと逃げますよ。
幸い、アゼルギスは最速のトンボ。因みに食べる個所は羽ですね…」
「よし、アゼルギス。乗せてー…うわっ」

凄い勢いで襟を掴まれ、身体が宙に浮いたかと思うと、目にも止まらぬ速さで廊下を疾走していく。
例えるなら、ジェットコースターくらいの速さだろうか。

そのまま廊下の曲がり角を突っ切り、一際大きな扉の前に突き進もうとしている。

待て待て待て、そこは一番行ってはマズイ場所じゃあないか？
各国の代表が集まっている部屋じゃないのか？
送還するにも、この勢いだと僕自身が扉を突き破りかねない。

「フレディ、どうするべき？」
「言い忘れてましたが、アイゼルの視力は凄まじく低く、碌に物が見えません…。
音で認識している程度です…。まぁ、良いじゃありませんか。いつもの展開ですよ…？」

そう言っている間に、扉は目前で。

轟音に近い音を立てて扉を突き破る。
そのまま無様に床に転がり、何処の壁かは知らないが、とにかく壁にぶち当たって止まった。

奇妙な物を見る様な、何とも言えない視線が一斉に僕に向けられる。

さて、どうしようか。ボケようか、開き直ろうか。弁解という手もあるけど。
とにかく、何らかのアクションを起こさなければならない気がするが。

その術を僕は知らない。

「えっと…、何て言うか…。ミケガサキへようこそ…お越し下さいました…かな…？」

その時の彼等の心情は如何ほどか。

突如扉を突き破り、床を転げ回った挙句、真っ青な巨大トンボが横たわる傍で、何か照れて、頭を掻きながらも挨拶をされる。

僕だったら、リアクションに困る…かな。

一般市民…もし、それが知り合いとか、親しい人物、またはそれが国交を結ぶ国のもてなしなら…そうだなぁ。

……絶交とか？

# 第三話　修羅場

どうする？
どうしてみる！？

退散か？
退散しかないよねっ！？

残って僕に、何のメリットがあるというのか。
いるだけで恥の上塗り…。ミケガサキのデメリット貢献しそうだ。
現に超貢献してるけどっ。
「彼が噂の勇者か？」

いいえ、『勇者』だと思っていた『魔王』です。

噂の指名手配犯なら間違いないけど。

「噂…とは？」
カインが窺う様に尋ねる。
「…ご存知なくて？
私の命に背いた野犬共の言うことには、四代勇者がそこのマヌケを刺し殺した途端、姿が消えたと…。
つまり、一部を除き、歴代勇者と同様に本来の『役目』を終えたということではないのかしら？」

由香子さんに良く似た性格の女帝…いや、女性は羽根の付いた扇を取り出すと、優雅に扇ぐ。

「…お言葉を返すようですが、仮にそうだとして、そもそも何故ラグドがミケガサキを攻めるのです？
あの日、攻め込んで来た騎手は言いました。
王の命だと。
我が国と結びし、同盟を拒否なさるおつもりで？」

カインの目が据わる。
怒っているのが、一目で分かった。

すげぇな、女帝相手に。
闇討ちされても助けられないぞ？

「…それに、彼が『魔王』だとしても。
彼はミケガサキを救いました。それは紛れも無い事実です。
『魔王』だろうが、馬鹿だろうが、救った事に変わりはない。
彼は…優真は、この国の…このミケガサキの『救世主』だっ！馬鹿だがなっ！」

カインめ、言ってくれるじゃないか。
闇討ち？全身全霊で迎え撃ってやんよっ！

…だが、馬鹿は余計だったな、馬鹿は！

第一、何で二回言う？
大事な所でしたか？
アンダーラインの二重線を引いたって、テストには出ないんだよ？

「がっははは！立ち聞きは趣味ではないが、聞かせてもらったぞ！カインよっ」
突如、扉を蹴破って乱入してきたのは、紛れも無くダグラス騎手隊

長。
少し遅れて二人が駆け付けてきた。
「ダグラス隊長、いつお戻りにっ！？」
「さっきだっ」
カインは目を丸くして驚き、各国の人達も動揺を隠し切れていない。
うーん、何でも良いけど、隊長は理解してくれたみたいだ。
取り敢えず、危機は去ったのかな？
「彼が、この国を救った？」
「はい」
「つまり、彼はミケガサキの英雄だと？」
「…ええぇ」
「なのに、『魔王』？」
「……多分」
カインっー！
声が小さくなってきてるよー！！
回答に自信も無くなってきてるよー！
「…ふむ。そうか。
がははははっ！有り得んっ！」
成程、馬鹿だ！
こいつの頭を信用した僕が馬鹿だった！
元々馬鹿だけどっ！
「第一、証拠は何処だ？

自分が魔王だと証明出来るのかっ！？」
「…なら、ご覧にいれて差し上げましょう」
ラグドの全身マント野郎がぼそりと呟いた。
ズドンッ…と一発。
ハゲ頭…じゃなくて、何かが中心を貫いた感覚。
視線を下げると、剣が胸を貫いている。
痛くないし、何か刺さった程度の違和感なのだが、周りの反応は少し青ざめている様にも見えた。
だが、不思議と血は出ていない。
僕が首を傾げると、フレディが小さく、幻術です…と耳打ちした。
成程、『魔眼』のおかげで中途半端に幻術に掛かっているわけか。
「…というか、陽一郎さんだよね。声」
「声というか、陽一郎さんだよ、優真君」
パサリと被っていたフードをめくり、顔を晒す。
見慣れた顔が現れた。
「…フレディ、何でこの人此処にいるの？
仮にも、元勇者でしょ」
「伝えそびれましたが…、影の王に伝えたかったことは、そのことです…」
「…アリなの？」
「ナシです…。本来なら。つまり、『バグ』が発生しているようで

すね」

『バグ』とは、ゲームの改竄、データミスによる欠陥が引き起こす通常なら有り得ないことが起こる事。
先程言ったように、故意にゲームの改竄をし、『バグ』らせる人もいる。

「何で？」
「…お忘れですか？
影の王は一度死に、その魂は通称『みけがさき』へと飛ばされました。
ゲーム盤から降りた彼方はそれでも『ミケガサキ』へ帰りたいと願った。
だから、我等が大総統が、わざわざ『みけがさき』を改竄して、彼方の『ミケガサキ』へ戻してあげたのでしょう？
向こうの世界を改竄するということは、多かれ少なかれこちらにも非が及ぶと考えるのが妥当です…」
「やっぱり、『バグ』ったか…。うーん、結構深刻に考えた方がいい？」
「今のところは何とも言えませんね…。『バグ』の度合いがどの程度か、測りかねます。
…ですが、元の発生源は、本来『みけがさき』に居る筈の無い人物が居た事でしょうか？」

フレディは静かに陽一郎さんを見た。
大丈夫なのか？この状況。血気盛んな奴らが集まってるけど、修羅場にはならないよね？

「…さっきから話を聞いていれば、『バグ』？『みけがさき』？一体何の事を話してるんだ？」

カインが焦った様に、僕に問う。
周りも、心なしか睨む様に僕を見ている。

「…まぁまぁ、後で話すから落ち着いて。
こんな事を話す為に集まった訳じゃないんだから。
首脳会議なんでしょ？
本題に入ったら？」
「…それもそうね。
さっき、そこの騎士隊長候補が言ったように、私達はお互いに同盟を結んでいる」

舐める様な視線で、ラグドの女王は一同を見回す。
「『新資源』は、ミケガサキが押収し、後に我々同盟国に分けると言っていたけど、野犬達の話では女神は本来分け与えるべき『新資源』を生物兵器に変え、独占していた。
きっと私達が攻め入らなければ、ラグド王国がミケガサキの領土になっていたかもしれないのよ？
先に裏切ったのは、ミケガサキの方じゃないのかしら？」
「そ、それは…」

カインが言い淀む。
まぁ、当たらずとも遠からずって感じだから、言い返せないのも無理ない。

「…それなら、貴女方は何が望みですか？」

トーズさんが言うと、ラグドの女王はそれを待っていたかのように微笑んだ。

「お互いに、守る気が無いのなら、要らないわよね。今まで通り、自らの力で奪う方が、性に合ってると思わない？」
「つまり、戦争をしろと？」
「…人聞きが悪いわね。攻め入られたくなければ、守りを固めれば良いだけの話よ」

この人、由香子さんと同じ守護霊が憑いてる。
間違いない。
それとも、この人自身が由香子さんの生まれ変わりとか？

有り得る。
寧ろ、納得。

「…あの～、フェラの国王様はさっきから黙ってますけど…」

石像の様に眉間に皺を寄せ、目と口を閉ざしたフェラ国王。
お付きの隊長達も、さっきから黙ったままだ。

「あー、優真。放って置いてくれ。多分、寝てる」
「この状況で！？
…まぁ、良いか。平和が一番だよね。
此処は穏便に、話し合うのが一番だ。
つまり、ラグドは『新資源』が欲しいわけだ。
で、良いんだよね、陽一郎さん」
「僕はどうでもいいけどね」

つまりは、『新資源』さえあれば良い。
なら、出せば良い。

「…ということで、『召喚』」

辺りが白く輝く。
そして、黒く染まった。

赤い雷が室内を駆ける。

『ギャアアア…！！！』
「あああああっ！！！」

カインが魔力魂に負けず劣らずの悲鳴と言うか、奇声を上げた。

「な、何でこいつが…」
「国交回復にお一つ、如何なものかと…」
「悪意の塊しか出来ないぞ？」

「…これが、女神が作った生物兵器…」
「流石、優真君。何でもアリだね。
…これはさ、戦闘体勢って受けとって良いんだよね？」
「えー…？」
「そうですね。魔王が国交に傷を付ける為の策でしょう。きっと、こいつが新資源を隠し持っているに違いありません。此処は共闘といきましょう」

あれ？
あれっ！？

何、この状況。
逆効果だった！？

カイン、弁解頼むっ。

僕がカインを見ると、カインも困惑したように辺りを見ている。

「カイン、あなたはどちらの味方なのですか？」

トーズさんが、カインを睨む。

「…えっと、じゃあ、手伝います…」

この裏切り者ー！

どうする？

これ以上魔力消耗するのは面倒だ。

けど、やらなきゃ、やられそうだし…。

けど、この状況を打破してくれる人物が果しているのか？

それこそ、正に英雄だ。

「…影の王、急がないとやられますよ」

「えー…？やっぱ、そうだよね…。はぁ…。

あの人、怒らせるのは今後止めよう…出来るだけ。

『召喚』…」

部屋が白く染まる。

さて、何が出る？

「…あれ？此処は…？」

「ゆ、雪ちゃん…！？」

長い黒髪に、睫毛。

女の子らしい清楚な服装で吉田雪が現れた。

正直、予想外です。
確かに『勇者』だから、打破出来るかもだけど…。

「…驚いたよ、僕でも『勇者』が召喚出来るなんて…」
「…どうやら、二代目が手を回した様ですね。
大総統は一体、何をお考えなのか…」

はぁ…と、フレディが重い溜息を吐く。
苦労人だな、フレディも。あっ、人じゃないか。
苦労霊？

「…ゆ、優真君…？」

雪ちゃんが、驚いた様に目を見開いて僕を見る。
信じられないと言わんばかりに両手で口を覆う。

…こういう仕草が可愛いんだよなぁ。
現代っ子には無い可愛さだよね。

僕の中の現代っ子の挨拶を思い浮かべる。

「あっ、優真じゃん！
マジ、懐かしっ！マジ、ぱねぇわ！」

と、肩を叩きながら言うに違いない。
ヤダー。ロマンが無い。
女子じゃないけどさ、男だって胸ときめく出会いを期待したりするんだよ？

えっ？
…現代っ子にしては古い？そんな挨拶をする子は、今の時代は、いないだって？

何だ、絶滅したのか。
三嘉ヶ崎には、まだ生き残りがいるけど。

何せ、発展と進出には無縁の都市だからね。
向上心が無い。
都会に憧れてるけど、それで終わり。

あー、けど、雪ちゃんがそうならなくて良かったよ。まぁ、吉田さんがさせないか。

「優真君…？本当に、優真君なの…？」

まるで、行方不明の息子が帰って来た時の母親のような、そんな口調だ。

雪ちゃんの温かい手が、頬に触れた。

消して温かいとは言えないその肌を何度か触り、確かめる。
雪ちゃんの目から大粒の涙が溢れ出した。
顔を僕の胸板に埋め、子供の様に泣きじゃくる。

カイン達は、暫く呆気に取られていたが、今は、温かい目で成り行きを見守っている。

何、こいつら！？
僕をどうしたいのさ？

敵にしたいのか、そうでないのか、はっきりしろっての！

困ったな。

この展開は、どうすれば良い？

「…うーん、改めて思うけど、身長が欲しいなぁ」

「そういう事なら、こうすれば良いじゃないですか…」

フレディが、パキンッ…と指を鳴らす。

一瞬、辺りが暗闇に包まれたが、直ぐに元に戻った。

その間に髪と身長が伸び、顔立ちが少しだけ凛々しくなる。

…自分で言うのも何だけどね。

うん、分かってる。

僕、超痛い子。

何故か、一定の書の力を使うと二十五歳の姿になるんだよね。

知恵の悪魔との本契約上の何かなんだろうけど。

では、何て声を掛けようか？

あんまり泣いてると、頬っぺた溶けちゃうぞ？

…いや、幼稚過ぎるな。

俺の胸の中で、好きなだけ泣けよ。

…最早、誰だ？

僕じゃないことは、確かだな。

「…優君の馬鹿っ！馬鹿、馬鹿ぁっ！」

ポカポカと軽い力でぶってくる。

か、可愛いー！

年下の妹を持った気分だ。…けど、ノワールいるしなぁ。

「えっと…、それについては反省してます…」

「本当に？」

「うん。だから、泣き止んで？…吉田さんに怒られちゃうからさ。任意であれ、何であれ、折角、此処に来てくれたんだから、責任持って守らなきゃね。

大分、頼り無いけど…。

…僕の為に戻って来てくれたの？あー…何て言うか、そう、思って、良いのかな…？」

恥ずかしいぃぃー！！！

何か雪ちゃんまで、真っ赤になってるしっ！

「…つくづく思うが、天然タラシだな。あいつ」

「えぇ、最強の口説き魔ですね…。やはり血は争えませんか…。蛙の子は蛙です…」

フレディとカインがぼそぼそと小言を漏らす。

色々な意味で、波乱の展開となりそうだ。

…いつ、ミケガサキに平和が訪れるのかなぁ。

というか皆、首脳会議ってこと忘れてない？

# 第四話　ミケガサキの行方

何故か据わった目付きで、陽一郎さんが前へ出た。

雪ちゃんは意を決した眼差しで、陽一郎さんと対峙する。

な、何だこの雰囲気…。

というか、迫力？

「私、決めました」

一拍置いて、雪ちゃんは言う。

「優君をお嫁にも…」

「あげません」

断るの早っ！

そして、何か昼ドラ展開になってる！

「ケチっ」

「僕がそう簡単に、はいそうですかと言うわけないでしょう？駄目、絶対」

止めよう、不毛な争い。

っていうか雪ちゃん。

仮にもその気なら、義父に当たる人にケチとか言わないのっ！

「つまり、花嫁修行をしろと言う…」
「優真君は黙ってる」
「はい…」

「嫁姑戦争ですね…。大丈夫ですか、影の王」
「今、凄く切実に癒しが欲しい…。猫モドキに会いたい…、戯れたい…」
「どうやら重症ですね…。心中お察しします…」

僕等は揃って溜息を吐く。その時、バタバタと駆け足が聞こえ、部屋に誰かが入って来た。

「ちょっと待って下さいっ！」

ノワールが息を切らしながら、陽一郎さん達に詰め寄る。

あー、また争いが過激になるよ。
誰か止めてー。

「全く…。何を争っているかと思えば、そんなことですか。会議はどうしたのです？」
「ノーイさん、ちょうど良いところに。あの人達止めてくれない？」
『まぁまぁ。たまには良いじゃないか。このところ休む間もなかったのだから。息抜きくらい、させてやりなさい』

ぽんっと吉田魔王様が僕の肩を叩く。
まぁ、この人の言うことも一理あるけど、国の行く末を決めるかもしれない大事な会議を放って置ける理由にはならない。

大体、疑惑を掛けられている真っ最中…。

「あああああっーー！！！」
「どうした！？」
いきなり叫んだ僕に、カインが驚いた様に目を見開きながら聞き返す。
「…すっかり忘れてた。
慣れって恐ろしい」
「だから何がだ？」
「お忘れですか…？カイン・ベリアル。先程までの議題の論点を…」
フレディが短く溜息を吐くと同時に、ノーイさんの顔も蒼白になる。
どうやら、気付いた様だ。…大丈夫かな？お顔真っ白だけど。
「私としたことが、気付かないなんて…。ノーイ・フランクリン、一生の不覚っ…！」
『すまん、ノーイ…。何故そんなにも思い悩むのか心当たりがないのだが…。
この場に居てはまずかったか？』
少し戸惑う様に吉田魔王様はノーイさんに尋ねる。
まずいも何も、存在自体が確信犯だ。
「ご自分のあだ名を思い出して下さい。
はぁ…。また一悶着起こるな、これは…」
『…成程。そう言えば、私が『魔王』だったな。すっかり忘れてた』

あはははは！ミケガサキ、オワタ。
終了のお知らせが僕には聞こえるぜ。

「何処の世界の吉田さんもおっちょこちょいだなぁ。仕事中はしっかりしてるのに何でだろうね？」
「多分、反動だと思います…。家は完全にカカア天下ですよ」
「へぇ…、意外。てっきり亭主関白かと思ってた。
けど、吉田さんの場合上手く行きそうだよね。
案外、亭主関白だけどカカア天下にしようと気遣ったりするかもね？」
「うーん、どうだろう？
お父さんはそう言うけど、どっちもどっちらしいの。…お母さんはドジっ子だけど、お父さんを労おうと家事は頑張ってたらしいし、お父さんはお父さんで、お母さんの失態を影で片付けてたって言ってたから…一応、カカア天下なのかなぁって…」

「「違う…、それは夫婦円満だ…」」

思わず僕と陽一郎さんが呟く。
雪ちゃんは、そうかな？と小首を傾げた。

「優君の家はどっち？」
「あー…、カカオ殿下？いや、カカオ王国かな？」
「…優真君、カカアね。
それじゃあ唯の甘い家庭になっちゃうよ。
そうだなぁ、カカア・マリーアント・ワネットかな…？」
「それ良い線行ってるよ、陽一郎さん。後もう一押し求む」
「カカア付ければ何でも良いって問題じゃありませんよ？二人とも」

そんなことを言い合っていると、カインが咳ばらいをして短い現実

逃避を終わらせた。

「…何でも良いから本題に戻んぞ。予想以上に険悪な雰囲気だ。いい加減に気付け、お前ら」

「あらまぁ…怖いわね、奥様。皆様、更年期かしら？」

「あら、奥様。ご存知なくて？大人というのは格差社会を好み、自らその身を投じるMなのよ？

どうやらその渦中に巻き込まれてしまったようね」

「お前ら…、全世界の大人に謝れ。つーか、お前らも成人してるだろ」

カインが呆れながら、頭を叩いた。

「まさかお前らがゲロるとは思わなかったが、ククク…丁度良い！王、誰から殺れば良いっ！？」

「グラン、お止めなさい。…今回の目的は違うでしょう？

とにかく、ミケガサキが魔王と手を組んでいることが分かれば良いの」

「…アンタ達の目的は何だ？」

トーズさんが静かに聞く。まるで低く威嚇する忠犬の様に。

女王は広げていた扇をパタンと閉じた。それで僕を指す。

その目は勝者が弱者を見下す様な優越感と、小馬鹿にする様な悠然とした笑みが浮かんでいた。

「同盟破棄、並びに盟約の撤廃。

…まさか、文句は無いわよね？魔王となんか誰も手を組みたくはないもの。

悪の手先なんて嫌よ。

もう一度言うわ。異論、無いわね？」

「…しかしっ！」

カインが声を荒げる。
女王はそんなカインを一瞥すると、グランに目配せをした。
グランが動き出す前に、僕は一歩前に出た。

「分かった。承諾する」

すると、足元に大きな黄金の陣が浮かび上がり、光の粉となる。

「うふふっ、聞き分けが良いのは良いことよ。
別にいきなりドンパチやろうとか、そんな美しくないやり方はしないわ。
今まで通り、奪いたい領土を襲う。それで良いじゃない？お互いの為に。それじゃあ精々足掻いてね？小さな魔王様っ！
…陽一郎、帰るわよ」
「それじゃあ、またね。優真君」

陽一郎さんが足元に素早く陣を形成させる。
ラグドの三人の姿はたちまち見えなくなった。

「はぁ…、何かゴメン」
「こうなった以上、仕方ないだろう。寧ろ、被害は最小限に済んだと言っても過言じゃない。
…あいつらが関わると疲れるな。とにかく、お前はアゼルギス片付けろ」
「はーい。アゼルギス、ありがとね。『送還』」

ダグラス騎士隊長はいつの間にか姿を消し、トーズさんは、暫く途

方に暮れていた。

「…こうなったら洗いざらい説明してもらいますからね。覚悟して置いて下さい」

恨めしそうにそう吐き捨てると、部屋を後にする。

何だかんだで、皆良い人だなぁと思わず感嘆してしまう。
責めるべき事、責めるべき人を咎めないのだから。

「…優君、叱られれば良いっていう問題じゃないよ。きっと」

雪ちゃんがひょこっと肩越しから顔を覗かせる。

「皆、優君を信頼してるから。だから、優君の判断に…出した答えに文句なんか言わない。だって、何だかんだで優君が一番ミケガサキの事を考えてるって、分かってるから」

ふふっと女王とは対照的な笑みを浮かべて微笑む。
そんなこと無いよと言ったものの、何となく照れ臭くなって顔を背けた。

うん、絶対無い。
その要素が一つもない。

皆、邪険に扱うもん。
一皮剥けば、アグレッシブな奴らだもん。

そうだ、絶対に無いな。
有り得ない。

「とにかく、さっさと復興しないと始まらないよね。あー、面倒臭い」

よくよく考えれば、問題は山積みになる一方で、何一つ解決していない。

国も壊れたままだし、国民に何と説明しようか。

「取りあえず、女神かな。やっぱり…。国の統率者がいないことにはどうにもなぁ…。問題は国民か。どう説明しよう？」

ぶつぶつと呟く僕の姿を、皆が温かい目で見つめているのも気付かずに。

「おっ！終わったか！なら話は早い！飲むぞ！」

物凄い勢いでダグラス隊長が突っ走って来た。
後ろから教官を含む騎士団の人達が駆けて来る。

「…はぁ、騒がしくなりますね。これからも」
『まぁ、良いじゃないか。これはこれで。さぁ、宴の支度でもするか。腕によりをかけて作ってやろう』

おぉーー！と歓喜の声が上がる。

「騎士団も帰ってきたし、そんなに心配しなくてもやっていけるさ」

カインが背を叩いた。
僕は、咳込みながらも軽く頷く。

「飲んで飲んで、明日の復興に備えるぞー！ガハハハハッ」

…うん、当てにしないでおこう。

## 第四話　ミケガサキの行方（後書き）

今回、パソコンがぶっ壊れまして、携帯での執筆になりました。暫くは投稿に時間が掛かりますが、此処までお読み下さりありがとうございます。次回は多分はっちゃけます！

# 第五話　魔の霊山　前編

冬は、良くも悪くも終わりの季節だ。
人々はまだ見ぬ新たな季節を夢見、この絶冬を忘れようとする。
辺りは静まり返り、まるで自分以外の生命が眠りについてしまったように思えてならない。
今取り残されるのは、少年にとって、とても辛い事だった。
溜め息代わりに吐いた吐息は、直ぐに夜闇に紛れて消えてしまう。
それを嘲笑うかのように木枯らしが吹き抜け、天から降り行く雪氷がその刃を突き立てる。
深夜故に、気温は氷点下に達していた。
建ち並ぶ家々は死に絶えたように暗い影を落とす。
少年は、ぶるりと身を震わすと手を擦り自らの吐息で温めようと試みるも、手は既に寒さで凍傷を起こし、赤く腫れ上がっていた。
一際強い風が吹き抜け、少年の体温を奪っていく。
少年は凍り付いた前髪を払い、一枚しか無い生地の厚い毛布で身体を締め付けるかの様に包み、屋根の縁にしがみつくと窓を覗き込んだ。
部屋は暗く、何の物音もしない。恐らく皆、寝てしまったのだと確信する。

窓も扉も固く閉ざされていた。

少年は夜空を仰ぐ。

自嘲する様に、絶望に引き攣った笑みを浮かべた。

「あはははははっ！

鍵閉めた奴、誰っ！？」

少年の名は、田中優真。

どちらかと言えば青少年だが、身長故に少年と言っても差し支えないだろう。

自称永遠の十七歳。

今作品の主人公である。

…そして。

凍死寸前だった。

＊＊＊＊

ミケガサキの冬は寒い。

海風が囲む様に連なる山々を越えられず、ミケガサキに立ち往生する為、冷気が篭るのだ。

山脈から吹く北風は冷たく日の光が弱いこの季節は、氷点下に達する事も多い。雨が降ることが少ない為、気温が低くとも、雪が降る事は滅多に無かった。
だが、一度降ればある程度は積もり、美しい白銀の世界に変わる。

春は山々が桜で色付くし、夏は……特に無いな。
秋は見事な紅葉が広がる。

…まぁ、田舎ならではの特典なのかな。
確かに綺麗で美しい。

だが。

「…誰が掃除すると思っているんだ、バカッー…わぷっ！」
「愚痴る暇あったら、手を動かせ。にしても、よく降ったな。城の修復が終わったかと思えばこれか」

カインが小さく溜め息を吐く。白い息が浮かんでは消えた。

うーん…、おかしいな？
今、僕が見ているのは幻なのか？

「えーと、僕の目が節穴じゃなければぐぇ！」
「元々、節穴だ。安心しろ」
「いや、安心要素がまるで無い…寧ろ、不安でしかないでぐぉ！？
…じゃなくてっ！カインも遊んでるじゃふぉっ！」

別に、語尾を間抜けさせるのがマイブームな訳じゃ無いからね？

雪球の襲来…いや、猛攻を受けてるだけだから。

カインが生み出す悪意の密度が非常に高いカッチカチの雪球をね。
全部顔面に当たるって、凄いな。プロの野球選手になれるぞ。
…僕、何かした？いや、普通に会話しただけだよね。そして作業を促しただけだよね？
何が気に障ったのかな？
存在か？
僕の存在なのか？

「あー…、丁度良いところに的があったからな。
それ、もう一発。…次は眼球を貰う。そら、新しいお目だ」
「同じ玉同士だからって、代わりにはならないよ！？そんな腹黒い球じゃ失明しかしないから！
…というか、カインに何が起こった！？
捨て台詞が、悪役じゃないか！
もしかして、朝苦手？光駄目な…ぎゃあああっ！」

僕の絶叫がミケガサキに木霊する。

行き交う人々はああ、またかと呆れの混じった微笑を浮かべては通り過ぎて行った。

会議から一週間。
僕が『魔王』だと公表しても、誰も責めなかった。

まぁ、『魔王』らしくない魔王だからね。

目の前に映る真っ青な青空から目を背ける様に瞼を閉じる。
嘆き代わりに、溜め息を一つ。

「…やっぱ、『魔王』足るもの、魔王魔王してなきゃ駄目かな？」

漏れたのはあまりにも小さな独白。

その呟きに答えるかの様に足元の影に波紋が浮かんでは元に戻った。

まるで、呆れたような溜め息の様に。

「思ったんだけど、何で除雪作業なんてやるの？そこまで積もってないよね」

『あぁ、そうか。知らないのか。今、何でも良いから魔法を使いなさい』

吉田魔王様が驚いた様に目を見開いてから、静かに言う。

僕は頷くと、『召喚の陣』を形成させる。

しかし、陣は発動するどころか形成さえしなかった。何度やっても、陣を変えても結果は同じ。

「…この雪のせい？」

「正確には、霊山だな。あそこにそびえ立つ二つの山があるだろう？ミケガサキを連なる山々の中でも一際目立つ。双星山と名付けられていて、初代魔王はあそこの山頂に建つ廃れた神殿に住んでいたという話もある。

双星山を漂う霧も、今なお魔王の独自の霊力の残り香だと言われているな。

丁度あの山の位置が東北。風もあの霊山を通って来るから死の精霊の息吹だとか…。まぁ、東北は鬼門だ。縁起が良くない上に、魔王まで住んでたとなったら、誰も気味悪がって近付かないだろうよ。

実際、雪に限らず、あの山を越えて来る雨雲…つまり雨も魔力を封じる力があるからな」

『まだ、主な原因は解っていないが、恐らくそうだろうと言われている。
私だって研究者。一度で良いから調査してみたいものだ』
「えっ？登らないの？」
「はぁ…。魔法が使えない上に、資源も枯渇し、固形燃料など頼りならないでしょう…？流石の我々もあの上空まで跳べませんよ…。寒いの嫌ですし…」

ノーイさんが嫌そうに首を振った。
口調もフレディっぽくなっているが、触らぬ神に祟り無し。言わないでおこう。

つまり、前人未踏の山というわけか。
確かに登には熟練のアルピニストでも難しい程の傾斜だ。針山っぽいな。

へぇー、ふーん、成程。

「…良いこと思い付いちゃたぐはっ！もうっ、何度も何度も何度も、雪玉投げんなよっ」

お返しと言わんばかりに、雪を掴んで玉にすると思いっ切り投げる。

もちろん、体力テスト以外でボールを投げたことが無いわけで、コントロールは皆無だ。
そんな僕の投げた雪球は、吉田魔王様の顔面に打ち当った。

勿論、子供心に投げた球を笑って許せる程、この三十路の気は長くない。

『馬鹿共、そこに直れ』

いくら霊山の魔力で魔法が封じられようと、『召喚』は可能だな。
故意では無いにしろ、僕は確かに『魔王』を召喚してしまった。
さぁ、次は故意に『勇者』を召喚したいんだけど、誰が止めてくれないかな？

＊＊＊＊

「…で、一体何を思い付いたんですか…？」

魔城の二階奥。
一応、僕の部屋となっている。

辺りが寝静まる頃合いを見計らって、窓から外へと抜け出した。

「『ジャックと豆の木』って話、知ってる？庭に豆を植えたら天まで伸びたって有名なお伽話」
「まさか…それを『召喚』なさるおつもりで…？」

フレディの驚嘆の呟きに、僕は肩を竦めて首を振る。不思議そうにフレディは僕を見た。

「それこそまさかだ。登り切る筋力、体力、自信共に無い。
そこで、僕はある仮説を立てた。そしてそれが起こりうるか吟味したところ、可能だったわけ。除雪もしたけど、深夜からまた雪模様だから今しかない」
「如何なる魔法も、霊山の前では無効となりますよ…？」
「まぁ、見てなって。今に分かるさ。…『召喚』」

魔眼で陣を形成する。
白い輝きの中から現れたのは三大珍味の一匹。いや、一羽か。

「…テンマデトドクミミナガウサギですか…？」

「その通り。図鑑で読んだけど、ミミナガウサギの耳は伸縮可能。そこで、耳を短くしてもらって、僕がそのてっぺんにしがみつく。で、耳を長くしてもらって、霊山の頂上に着いたら棒高跳びみたいにして飛ぶ。ってことで、ゴー」

僕の掛け声と共に耳が伸びる。
パンッと乾いた音と共に、長年溜まっていたストレスを発散するかの如く、物凄い速さで伸びた。

つか、マッハ超えた？

多分、僕の体が普通だったら大変な事になっていただろう。
人には耐えられないよ、この速さ。

お陰で、僅か一分足らずで山頂付近へ。

さて、耳高跳びは成功するんだろうか。
どちらもやったことないんだよね。そもそもやり方知らないし。

「…まっ、何とかなるでしょ」

「一つ言っておきますが、余りに勢いが強すぎると山脈以外の地面に激突する恐れがあるので気をつけて下さいね…？ある種、耳高跳びには違いないでしょうが…、着地後はミンチに華麗なる転生を遂げますね…。大丈夫ですか？震えてますよ…？」

「む、武者震いだからっ！もしくは、ほら、寒いからかな！？はは

ははっ！こ、怖いなんて思ってないよ？…よし、ミミナガウサギ。お願いします」

「同じ哺乳類と言えど、人より知能の劣る生き物に任せちゃうんですね…？その脳みそ、最早、蟹味噌に劣る屑ですよ…」

「あれっ！？聞き間違い？かつて無い暴言を吐かれた気がする！下剋上なの！？カインといい、僕、何かした！？」

「まさか…。最上級の褒め言葉です…」

うん、落ち着こう。ポジティブに考えてみよう。

きっとあれだ。鳥と比べられなかっただけマシだ。

そう言ってる間にも、耳は少しずつ後ろへ下がっていく。

そして、十五度位まで下がったとき、ピタリと止まった。

おっ、何か良いんじゃないか？

フレディが小さく舌打ちしたが、うん、聞かなかったことにしよう。

突如、風が吹き、ぶるりと巨体が震えた。

「ミミナガウサギー、大丈夫ー？」

声が聞こえているかは知らないが…、いや、耳に近いし、聞こえてるか。

とりあえず、声を掛けてみる。

「へ」

「…へ？」

思いも寄らぬ返事に、僕が首を傾げた時だ。

「へくしゅんっ！」

爆音が山に轟く。

耳はくしゃみの衝撃で、一気に九十度にしなり、元に戻った。

「…！！？」

叫ぶ間もなく、僕は隕石の様に一直線に吹っ飛ぶ。

星になってもおかしくないくらいの勢いで。

そのまま目的の山を越え、お隣りの山に激突する。

あー、危なかった。

この山のお陰で、ミンチは免れたよ。

「…いってぇ。しかし、よく無事だったな、僕」

「これから無事で済まなくなりそうですがね…」

僕は無言で、激突した物体に触れる。

温かく柔らかい。毛布の様な毛だ。

恐る恐る振り向く。

そして。

「…変態？」

「…に変わり無いでしょうが、違います。雪男ですよ…。ビッグフットというんでしたか…？」
「都市伝説…じゃないな。カナダだったかの伝説の生き物じゃないか。
えー、此処、日本だよ？何で雪女じゃないの？」
「駄々をこねられても困ります…と言ってる間に、物凄く憤慨しているご様子。逃げるが得策ですね…」

全身を覆う毛布の様な毛が針の様に逆立っている。

僕達は二三歩後ろに下がった。
その背に何か冷たいものが触れる。

「わーい、絶世の美女」
「喜んでる場合じゃありません…。私達の人生が終わりを迎えますよ…？」

そんなこと言われても、進路も退路も塞がれているんだもの。
どーしよーもない。

だが、活路は塞がれてないみたいなんで、強行突破と行こうか。

手を真横に伸ばす。
使い慣れた鎌が現れた。

ん？…鎌？

「…お忘れですか？杖を出したところで、魔法は無効です…」
「成程。…それじゃ、行くとしますか」

僕はふと、考える。
勢いで来たものの、何か目的があるわけじゃない。
第一、帰れるかどうかも怪しい。

あっ、でも初代魔王が住んでいた神殿があるらしいってカインが言ってたよね？
けど、誰も登ったことがないんでしょ？
…そもそも、どっちの山に住んでいたかも分からないし。

……。
……。

…だ、大丈夫。
例え何も無くとも、霊山なんだ。何かしらあるさ。

どっちかの山に神殿があって、もう一つの山には別荘があるかもしれないし。

だって、ほら。
本物か分からないけど、雪男みたいな変態と、雪女みたいな美女が居るくらいだからね？

## 第五話　魔の霊山　前編（後書き）

はっちゃけるとか言っておきながら、殆ど山の話で申し訳ありません。一応後編に続きます

# 第五話　魔の霊山　後編

男の子って、不思議な生き物だと思う。
窓の外。雪球を投げ合う男達を見た。
男の子は不思議だ。
時に優しく、がさつで、不器用。けど、女の子の前だと格好つけたがる。

「どうした？雪。さっきから窓の外ばかり見て」
「えっ、あぁ、ううん。またふざけてるなーって」

アンナさんの問いに曖昧に頷く。
また視線を窓の外に向けらた。

「あら、本当ですわね。男は、いくつになっても子供ですわ」

ノワールは楽しそうに微笑むと、優雅に紅茶を啜る。
ミケガサキに雪が降った。珍しい事ではあるが、こっちでは少し大変なのだ。
魔力が封じられて、魔法が使え無くなる。
だから、少しでも積もれば除雪をするのだ。
まだ日も完全に明けぬ頃、優真君達は除雪作業に駆り出され、私達女の子は暖かい部屋で『女子会』の真っ最中。
世間話に花を咲かせていたところだ。

「じゃあ、そろそろ本題へ移りましょうか！ズバリ、皆さん、好きな人はいますか！？」

メアリさんがずいっと身を乗り出して聞く。

ノワールは盛大に噎せた。

「い、いきなり何を…。それは勿論、優真様ですわ。優しくて、普段は頼りないけど、時に頼りがいあるってところが素敵ですわ」

「ノーイはどうなんだ？昔からのよしみだろう？」

アンナさんが意地悪な笑みを浮かべて問う。

ノワールはあっさり興味ありませんわと返した。

「…あら、残念。アンナ教官はやっぱり、カイン・ベリアルかしら？」

「さぁ、どうだろうな？実は優真狙いかもしれんぞ？」

ニヤリッと不敵な笑みを浮かべて、紅茶を啜るアンナさん。

皆の動きが一瞬にして固まった。

「え、えー！？だ、駄目ですわっ！アンナさんが本気を出したら誰も敵いませんわよ」

「優真君も隅に置けないわねー！あんなに女の子ぽいのにっ！憎いわ、あの子！また今度、女装でもさせちゃいましょう！」

ノワールは涙目でアンナさんに訴えかけ、メアリさんは涙を浮かべて笑う。

…って、え？女装？

「じょ、女装ってどういうことですかっ！？」
「あら、雪ちゃんも優真君狙い？」
「えっ、いや、その…」
「そうだな。さっきからずっと優真を目で追っているしな」
「ほ、ほら、あれですっ！何か危なっかしい感じだし…、母性本能っていうのかなっ？守ってあげたいな～とかっ！」

私がそう言うと、皆はやけに納得した様に頷く。

「…確かに、そうだな」
「えぇ。合ってますわ」
「…にしても、今日は一段とカイン・ベリアルの機嫌が悪いですね？アンナ教官何か言ったんですか？」

優真君、さっきからずっと雪球投げられてる。
しかも、全部顔面ヒット。何か言ってるけど、聞いてもらえないみたい。
…あっ、目に当たった。

メアリさんの問い掛けに、アンナさんは、あぁ…と頷く。

「何でも、優真が全く墓参りにいかないのが不服の様だ。別人にしろ、仮にも母親と兄の姿なんだから、何らかの縁はある。一度で良いから、行ってほしいんだろう。カインには理解出来んのだ。家族を亡くした奴にとって、今の優真の行動が。だが、優真にも彼なりの考えがあるはずだし、私達とは違う境遇だが、だからと言ってその全てが幸せな訳でもないだろう？だから、私は何も言わないよ。きっと、私達が口出し出来る事じゃない…とカインに言ったが、どうやら拗ねた様だな」

ミケガサキに来て、とても明るくなった優真君。
男の子の生き方って、コロコロ変わるものなのかな？
本当に男の子って、不思議な生き物だ。
特に貴方は、人一倍。

窓の向こうで、何故か叱られている優君を見て、私は静かに微笑んだ。

＊＊＊＊

風が吹いて、細かな氷片を運び去っていった。
鼓膜を震わす様な小さな地響きが小刻みに響く。
それは次第に轟音へと変わった。

「ぎゃあああああっ！！」

雪山で最も恐ろしいもの。それは露出…いや、雪男でもなければ雪女でもない。

『自然現象』…即ち、雪崩である。

「自然現象というか、貴方が故意に発生させたんですよね…」
「雪山がこんな繊細だと思わなかったんだっ！
だって、魔王の山だよ？耐久ありそうじゃんっ！」

後ろを振り向けば、白い濁流。
雪の粒が粗い為、速度は何とか走って逃げられるほどだ。

しかし、纏わり付く様に沈み込む雪に足を取られ、走り難い事この上ない。
さらに急な斜面が、先へ進む事を容易に阻む。

「…第一、何で下り坂じゃなくて上りなの。キツイんだけど。体力が限界に達してるんだけど」

そう。
噴水の様に下から雪が押し上げて来るのだ。
流石、魔王の住んでいた山だけある。勇者対策は万全ということか。

「…思ったんだけど、初代勇者はどうやって倒したんだろうね？誰も登れなかったんでしょ？」
「噂では、自力で登ったらしいですよ…。最早、人の域を越してます…。霊長類の最終進化系ですね…」
「おいおい、人の域を越してるどころの騒ぎじゃないな…。霊長類って昔の猿じゃん。いくら原人並みの奴でも、ミケガサキを含む世界の勇者で救世主なんだから、可哀相でしょ」
「一応、人も含むんですよ？最低限の人権は守ってます…。おや、あれが神殿じゃありませんか…？」

フレディが指差す先には、神々が住まうような厳めしい神殿ではなく、豪華な雪の城が建っていた。

「…嘆けば良いのか喜べば良いのか微妙だな。とりあえず、暖房が望めない現状を嘆いてみようか？」
「まっ、神殿なんて建てていたら凍死は確実でしょう…。山小屋よりはマシですね…」

文句を言いながらも、雪の城へと足を踏み入れる。
いつの間にか雪崩は止み、辺りは死んだ様に静まり返っていた。
別世界へ足を踏み入れたかの様な異様な静けさ。

辺りを見回していたフレディがぽつりと呟く。

「どうやら、先程の変態共は城の番人。魔王が城を守らせる為に作った雪人形と言ったところでしょうか？微かながらに、魔力の残滓が残ってますね…。
ですが、我々が手を下すまでも無く、あれは弱り切っていました…。
この城も、時間の問題かもしれません…」
「成程。けど、一つだけ訂正。あの雪人形達は、城の護衛じゃない。
あの場所から此処まで結構時間あるし…」

城の中は思っていたよりも冷え込んでいる。
荒れた様子は無く、時間が止まっているかの様に何一つ変わっていなかった。

内部はそこまで複雑な構造ではなく、寧ろシンプル。長い廊下の奥には王室と思われる大部屋があり、絵に描いた様な氷の美しい装飾で彩られている。

「寒っ…！本当にこんなところに住んでたの！？
明日を迎えられるかも分からないけ寒さだ。冬眠が永眠になるよ」
「影の王、あれを…。床から地下が見えますよ。何かありますね…。
地下に続く階段は何処でしょうか…？」
「一番ベタなのはベッドの下だけどね」

ごそごそとフレディがベッドを退かす。
そして親指を立てた。

「…ビンゴです」
「マジ…？」

氷の階段を下りれば、気温は更に低くなる。
フレディによれば、ベッドは誰かが動かした形跡があったらしい。
つまり、僕らの前に誰かが来ていたようだ。
まぁ、来客なんて初代原人勇者くらいしかいないだろうけど。

「ほぅ…。これは…」

フレディが驚嘆の声を上げる。
階段を下りれば、大広間があり、その中心に王座があった。
上から来る光が、かろうじて中央を照らしている。

その朽ちた王座に座る白骨は、恐らく初代魔王。

「損傷はありませんね…。凍死でしょう…。恐らく、初代勇者が来た時にはもう…」

いくら人離れした魔力の持ち主だろうと一皮剥けば、ゲームが好きな一般市民。勇者しか殺せないという設定（ルール）はない。
…少なくとも、今はまだ。

「雪人形は城の護衛じゃなくて、主の護衛だったんだね。専門家じゃないから違うかもだけど、中学くらいか？」
「少々お待ちを…。ふむ、この硬さ…。味も悪くありません…。どうやら高一のようですね…しかし、学校には行かなかったみたいです。引きこもりですね。そこそこ金のある家庭で、一日中ゲーム三昧。

そして『魔王』になり、死を恐れる余り、この霊山に篭って暮らしていた様ですよ。『勇者』が召喚されたことを知り、万策尽きて選んだ手段がこの様です。
この者の怯えが痛い程伝わって来ますよ…。余程、死が恐ろしかったのですね…」

コリコリと骨を噛みながらフレディが言う。
死喰い人、また死霊は人の亡骸を糧とし、喰らう事によってその記憶を読むことが出来る。

この食事の時だけ、つくづく僕は思う。
フレディも大総統の仲間なんだなぁって。

…いや、別に偏見とかじゃないよ?

「高一なんて、まだまだやりたいことが沢山あっただろうね。なのに、いきなり飛ばされて、『魔王』扱いされたあげくに『勇者』が此処に来たとなれば、どんな死にたがりも諦めが付くし、凍死は寒いけど痛くはないでしょ。少なくとも、刺されて死ぬよりは。
…あれ?これ何?」

丁度、心臓の部分に何か赤い玉がある。
導くかの様に先程から光っているのだ。

「おや、『魔力魂』の結晶ですね…。流石、魔王だけあって、一人でこの大きさとは中々ですよ…」
「やっぱ、大総統に献上した方がいい?」
「お守り代わりに持っていてはどうです…?同じ魔王同士ご利益があるかもしれませんよ…」

フレディから魔力魂の結晶を受け取る。
魔王ユウマは『魔力魂の結晶』を手に入れた！
魔王ユウマは『魔力魂の結晶』を投げた！
割れた！
何か出て来た！
「…って、えええええ！？」
「いや、驚きたいのは私の方なんですけど…。投げますか？普通…」
魔力魂の結晶から出て来たのは、真っ黒の胎児。
成長がまだ十分でなく、目が黒かった。
「いきなり投げたのは悪かった。
『魔力魂』って、魔力の結晶でもあると同時に、意思の塊でもあるでしょ？
だから割らないと、この人の魂が報われないよ。
それにしても、この胎児は一体…」
僕がそう言った時、胎児の目がバチリと開く。
その瞳は赤く、その瞳孔は細かった。
「影の王、耳を塞いで下さいっ…」
フレディが影に戻って行く姿を横目に、耳を塞ぐ。
次の瞬間、『魔力魂の意思』に負けず劣らずの奇声が上がった。

氷に反響し、瞬く間にヒビが入ったかと思えば、轟音をたてて崩れてく。

胎児は一頻り奇声じみた産声を上げると、大きな赤い目を動かし、僕を見た。

氷片が降り注ぐ城の中、白くなりつつある視界が捉えたそれは確かかどうかも怪しいが。

その胎児は、僕を見て笑った気がする。

赤子特有の無垢ではなく、醜悪な笑みが脳裏に焼き付いて離れなかった。

気付いた時には、何故か城の前で倒れていた。

そして今に至る訳。

「…貴方は本当に変なモノに好かれますね…。

しかし、アレは死んだ訳ではありません…。って、大丈夫ですか…？」

「その話は、とりあえず後っ！この状況が大丈夫に見える！？このままじゃ初代の二の舞になるよ！

因みに、魔王が先に死んだ場合、勇者って元の世界に帰れるの？」

「いえ…？どんな理由であれ、使命を果たさなかった事に変わりありませんから二度と帰れませんよ？だから、初代は自分に出来る限りの事をしたのです。魔王が先に死んでいなければ、『資源戦争』終結は不可能だったでしょう…」

フレディの話を聞く限り、勇者の歴史はまだ浅い。

まぁ、陽一郎さんが子供の頃開発・販売したゲームだし、当然か。

僕らがプレイしているのは言わばリメイク版。
対応機種を大幅に増やしただけのソフトだ。
今ではパソコン、携帯、ゲームでも出来る様になり、絶大な支持率を誇る。
しかし会社名、また、それらしき建物を見たことがなかった。
ミケガサキが関連している以上、開発源は間違いなく三嘉ヶ崎っ子による犯行。三嘉ヶ崎以外に会社を設立しても意味がない上に、半田舎育ちの三嘉ヶ崎市民が都会に出て成功するとは考え難い。

「…なんて、何を考えているんだ。違うだろ、今は現状の打破」
「あれ?優真君…。こんな夜中に…大丈夫?」

一階の窓が開き、雪ちゃんが顔を覗かせる。

「言っておくけど、夜ばいじゃないから。単に山登りに行った帰りだからね」
「大丈夫、優君が小心者なのは周囲も既知の事実だよ」
「いや…、何処も大丈夫じゃないし。雪ちゃんに手を出したら吉田さんに殺されるじゃん。一応、恩あるし…、仇で返す事はしたくないの。あーそうじゃなくて…。むー、ツッコミは難しいなぁ」
「あはははっ!冗談だよ、冗談っ!ほら、入らないの?」

お邪魔しますと掛け声をあげ、靴を脱いであがると笑われてしまった。

何だ?雪ちゃんの家は土足主義なのか?
あれ、おかしいな。吉田さんは純日本文化愛好家のはずだけど。
家訓は英国式なのか?

まぁ、僕がやっても紳士にはなれないどころか、悪ガキだ。土足で家内を踏み荒らせみたいな。
…あっ、良い子も悪い子も真似しないでね？

「おーい、優君。どうしたの？ぼけーっとして」
「そんなの、いつもの事だよ。こんな夜中まで起きてるなんて、女の子は結構気にするんじゃないの？
それとも、ホームシック？」
「私、服はこだわるけど肌はこだわらない派なの。
そもそも、オシャレにはあんまり興味ないし。
昔から人形遊びより、野球とかチャンバラとか、そういう遊びが好き。
けど、一人娘だからお父さんの前ではそれらしく振る舞ってたんだよ？
ホームシックとまではいかないけど、ちょっと物思いに耽っていただけ。自分で選んだんだし、悔いのない様に生きたいの」
「凄いね、雪ちゃんは。僕には無理だなぁ、自分の事で精一杯だもん。選んだは良いけど後悔だってしてるし、迷惑もかけてる。どうりでモテない訳だよ。優柔不断だし…って今の、笑うところなんだけど」
「優君、何か疲れてる？その、精神的に。若者特有のフレッシュ感がありませぬぞ」
「第一、その口調の方にフレッシュ感を感じられないんだけど。…二十歳過ぎれば、みずみずしさなんて酸味しか増さないよ。三十路になれば悪臭に変化」

じゃあねと適当に会話を終らせて部屋を後にする。
廊下は完全に冷え切っていたが、外の気温に比べれば可愛いな。
そのまま自分の借り部屋のドアに手を掛ける。

…鍵が掛かっていた。

# 第六話　Ｇｏｉｎｇ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｈｅｌｌ　ａｇａｉｎ

……ッ！

……アッ！

ギュアアアッ…！

悲しく、切実な声が聞こえた。
あやす様にさすっても、止む気配はない。

「…おい、お前の腹はマンドラゴラでも住み着いてるのか？一体、どうしたらそんな悲痛な腹の虫が鳴くんだ」
「だってー、お腹空いたんだから仕方がないじゃん。やっぱ、素人が登山なんてするもんじゃないなぁ」

「「…ほぉ、登山？」」

魔城大広間。
今朝降り積もった雪の除積作業を終え、朝食が出来るまでの間雑談をしていたのだが、あまりの空腹に口が滑った。
カインと教官がその言葉に反応し、僕の方を向く。

…気のせいかな？
寒気と殺気を感じるのは、きっと風邪を引いたからに違いない。

結局、鍵を閉めた犯人は分からず仕舞いだし、この事件は迷宮入りだな。

だが、こっちは中々そうも行かなさそう。

「趣味が登山なもので」
「…ほぉ、初耳だな。人間らしい趣味があったのか。で、何の山に登ったんだ?」

ねぇ、人間らしい趣味って何かなっ!?
むしろ、人間らしくない趣味って何!?

…あれか?
もしかして『魔王』?
何、僕の趣味って『魔王』だと思われてる!?

どんな趣味だよ!?
『魔王』が趣味の人なんて全世界に一人も存在しねーよっ!
つか、『魔王』って職業じゃないの?

…いや、それはそれで問題か。

僕が自問自答しているうちに、吉田魔王様達が朝食を運んできた。
各自、空いている席に好き勝手座るのだが、皆、どうして僕の周りに密集するかな?
ピクニック気分?
食後の運動は集団リンチですか?温かいけど、逃げれないじゃん。
折角、逃げるに最適のポジションを陣取ってたのに。

「あれ?おじさ…ごほっ、オズさんは?」
「おじさんが帰って来ましたよー」
「ニア」

やけに『おじさん』を強調させてオズさんが大広間に姿を現した。

「雪に降られてしまいまして、予定より遅くなってしまいました」

「ニアッ」

猫モドキが勢い良く僕の所へと駆け寄ってきた。

毛は氷の様に冷たくなっている。

ノワール曰く、プラチニオンは寒さに弱いらしく、余りに弱すぎるプラチニオンは冬眠するらしい。

最近姿が見えないと思ったら、オズさんのところにいたのか。

あの部屋、城唯一の暖房があるからな。

オジ…オズさんは『石化の呪い』で、その痛みは寒さで悪化するらしい。

だから暖房の部屋を手配されたのだ。

「遅れてしまいましたね、申し訳ございません」

「いや、今運んできたところだ。…墓参りか？」

「えぇ。誰かさんの代わりに私が毎日行かなければ、寂しいでしょう？」

うわー、ナチュラルに嫌味言ってきたっ！

流石、ミケガサキ版陽一郎っ！腹黒もご健在だ。

…まぁ、言われるのも仕方ないが。

「すみません」

「誰も、君だとは言ってませんよ。女神様方もあなたが来たんじゃ寝苦しいでしょう？…勿論、冗談ですが」

「あー、全くと良いほど正論だから大丈夫です」

野菜スープを啜りながら言うと、ノワールが気を遣ったようにおずおずと尋ねてきた。

「…その、優真様は行かないのですか？」

「うん」

「確かに他人ですが、家族に縁がある人なのでしょう？」

「そだね。でも、違う」

「？」

「家族だけど、そう思われてない。墓参りなんてあの人達にとっては、死ぬより最も酷い屈辱だ。

…流石に、僕もそれを曝す様な事はしたくない。家族だからね。まっ、そう思うくらいの屈辱なら許されるでしょ」

薪の爆ぜる音が響き、外はしんしんと雪が降る。

つまり、誰も喋らない。

…何、この空気。

何なの、この状況。

せめて笑い飛ばしても良いからリアクションがほしかった。

誰かに話題振ってみるか。

「…って事で、どう思う？雪ちゃん！」

「で」

「で？」

まさかの聞き返し！？

僕の話、そんなにつまらなかったのかな？

雪ちゃん、案外えげつないっ。

「で、でー…デートに行こう！」
「別に良いけど、そんな流れあったっけ？顔、赤いけど大丈夫？」

そんなわけで、午後。
雪は止み、太陽が顔を覗かせる。辺りはまだ雪が残り、除雪に追われる人々がちらほら見えた。
木は色とりどりの小さな玉に彩られ、家は飾りが目立つ。
ミケガサキにもクリスマスが存在するのかと感心して見ていた。

「ミケガサキにもクリスマスの風習があるんだね」
「ううん、これは『復興祭』の準備なの。アンナさん達が…あっー！」
「ど、どうしたの？」

いきなり叫んだ雪ちゃんは皆からの視線を受けながらも、手を振って赤くなった顔を隠そうとする。

「えっ、あの、うん！此処は止めよう！除雪の邪魔だしっ！楽しみは取っておかなきゃねっ！優君、行きたいところある！？」
「えー、そうだなぁ。デートで行くような場所じゃないし、かなり物騒だけど…行く？」

あたふたしていた雪ちゃんの動きが一瞬止まった。

やっぱり駄目だよねと思っていると、雪ちゃんの顔がダルマの様に真っ赤に変わる。

「で、デートだと思ってくれてたんだ…」
「ん？何か言った？」

「ううん！それじゃあ行こう！」

何処か嬉しそうに笑う雪ちゃんに首を傾げながらも、手を取ると走り出す。

直後に起こる拍手喝采に送られながら僕達は城下街を後にした。

「流石、優真様…。天然タラシというか、落としのプロですわ」

「素なのか策なのか分からないところが怖いな」

「寧ろ、計算上の行いの方が怖いだろ」

…雪ちゃんが叫んだ理由が、この三人とサプライズ用の雪像を見付けたからなのだが、今の僕が知る由もない。

＊＊＊＊

「うわぁ…！心霊写真、何枚取れるだろっ！？」

前にもそんな台詞を言った気がする。

まぁ、言ってるのは雪ちゃんだけど。

やって来たのは『闇市』。実に半年ぶりになるのが、やはり何一つ変わっていなかった。

「雪ちゃん、此処来るの初めて？」

いや、通い詰める方がおかしいか。

「うん。ミケガサキにもこんな場所があるんだねー。異国に迷いこんだみたい！…切り裂きジャックの街って、きっとこんな感じだよね。お父さんにも送ってあげよっ」

嬉しそうに携帯のカメラで撮りまくる雪ちゃん。
僕も吉田魔王様とノワールを撮らせてもらって、吉田さんに送った気がする。
陽一郎さんにも送りたかったけど、あの人機械音痴だからな。通話も最近やっと出来る様になった程だ。

「優君は何で此処に来たことがあるの？」
「『勇者の形見』を探してて、それで此処にあるっていうから来た。それで、前の勇者が雪ちゃんだって知ったんだよ。そういえば、吉田魔王様とノワールを『召喚』したのも此処だな。何か懐かしいね。…あの時ばかりは、大量出血で死ぬかと思ったよ」

懐かしむ様に言う僕に、雪ちゃんが驚いて尋ねる。

「…戦ったの？」
「うん。ハゲと」
「ハゲ！？」

その時の僕は、遠い目で雪ちゃんに語っていたらしいかった。
どうやら、密かにトラウマになっていたようだ。
自業自得だけど、死にかけたことに変わりないし。

「へぇ…、大変だったね。けど、『魔王』って召喚出来るんだ…」
「まだ『魔眼』に慣れてなくて、手動で陣描いてた頃だったなぁ。けど、吉田魔王様は本当の『魔王』じゃないし…」
「けど、優君は私を『召喚』してくれたじゃない。
私も魔法は少しなら使えるけど、『召喚』は全然だったなぁ。だから、優君は本当に凄いと思う。

だって、『召喚』はお互いの意思が通じなきゃ出来ないから」

そもそも、『召喚』とは任意の相手を呼び出す陣なのだ。

如何なる才を持った魔術師も、居もしない彼女やテレビで見ただけ、名前を知っているだけの大統領を呼び出す事は出来ない。

なら、知り合いなら良いのかという問題じゃない。

『召喚』とは言わば、風に乗って微かに聞こえてる声に近い。

『召喚』においての基本にして、最も根本的な部分。

言わば、『共感』。

または共有だろう。

いくら上手な演奏家であっても、気持ちがなければ客は心は動かされないし、同じ気持ちを共感できなければ、心は繋がらない。

呼び声に応える気がなければ、『召喚』は不可能。

「優君って、何かほっとけないよね。優君の場合、才能っていうか、本質って感じ」

「吉田魔王様もノワールもいい人だから、割と召喚しやすいんじゃない？…本当に何で魔王なんだろうね？もっと他にあると思うんだけど。あれだったら、ハゲの方が迫力あったよ。…まぁ、僕としては、アフロが良かったな」

「あははっ！私、リーゼントがいい！悪っぽい髪型の人、三嘉ヶ崎にはいないからね。岸辺君くらいかな？未成年の白髪染め」

「いやいや、飲酒じゃないし、自由でしょ。岸辺曰く自毛らしいし。…あっ、パンチパーマとかも一度で良いからお目にかかりたいと思わない？」

「うん！大仏の写真と刑事ドラマでしか見たことないもんっ」

「大仏って、あれ、パンチパーマなの!?マジで!?」

年頃の若者の盛り上がる話題が悪っぽい髪型なのはどうかと思うが、良しとしよう。

話題提供したの僕だし。

「…ところで、雪ちゃん。勇者の剣見掛けないけど、ちゃんと持ってる?」

「それが、あの騒動以来見当たらないんだ。多分、優君を刺してそのまま置きっぱなし」

冷たい風が僕らの間を通り抜ける。

その時、複数の足音がこちらへ向かってきた。反射的に僕等は近くの物陰に身を潜める。

「兄貴ィ、本当ですかぃ?勇者の剣が『闘犬場(コロシアム)』の優勝賞品って話は?」

「あぁ、闇市の噂に嘘はねぇよ。だが、何でもあの争い後、無差別の領土争いが起こってるって言うじゃねぇか。もしかしたら、次は闇市を狙うんじゃないかっていう噂もある。

此処だけの話…、ルールが変わったらしい…。しかも最終決戦は、『魔王』が相手らしいぜっ!勇者の剣に魔王の首、一石二鳥で俺もミケガサキの英雄だ!」

話題が著しく変わりながらも、足音は遠ざかって行った。

雪ちゃんと二人で顔を見合わせる。

「「…大変だ」」

同時に呟いた言葉は、同じ響きを含んでいた。

「雪ちゃん、見たっ！？あの髪型っ！本家っ！絶対本家だ、あの人！」

「うんうんっ！見事なトサカ頭だったね！写真撮れば良かった…」

「見事な七色っ！少年の日の淡い夢と思い出を鮮明に髪色で表してたよっ！子分は赤だったから、あと六人はいるよね」

最早、心霊写真より髪型優先の若者なんて、絶滅希望種に認定されそうだ。

都会に出れば飽きるほどいるだろうが、広くて狭い三嘉ヶ崎住民に知れ渡ったら末の代までからかわれる。そんな末裔にまで継げられる羞恥など一生関わりたくない。

「第一、僕は此処に居るけど、誰かがガセネタ流してるのかな？」

「…じゃあ、一緒に出ようよ。勇者の剣もあるしそれに、あの人達がまた見れるよ！」

『勇者の剣』より、髪型優先か。

…確かに勇者だよ、この子は。

「どうする？アンナ」

ひっそりと二人の後をつけていたカインは、後ろを振り向き、問う。

「ミケガサキの将来がとても不安だな。

…まぁ、それはいいとして、私達は観客席の方で待機しよう。あの二人なら優勝は難しくないだろうが…色々と不安だ」

「何を仕出かすか予測出来ませんものね。…それに、何かと物騒な

噂も広がっているようですし…」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1488w/

馬鹿勇者は世界を救う？〜パラレルワールドだと思っていた世界が実は異世界

2011年12月24日09時49分発行